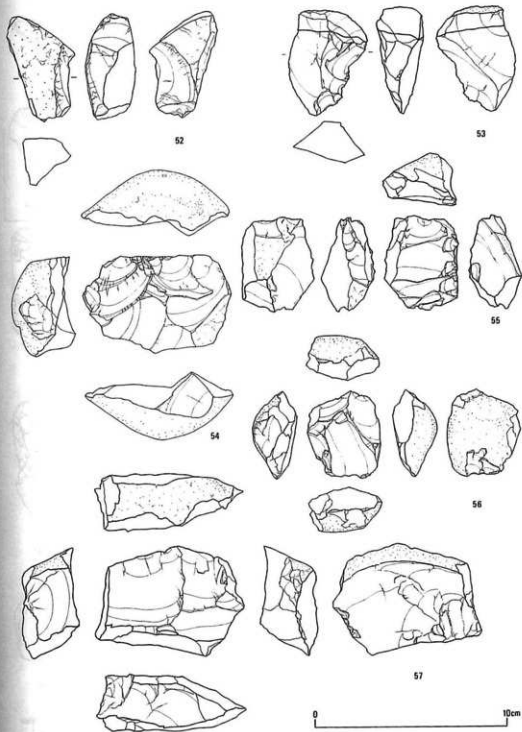
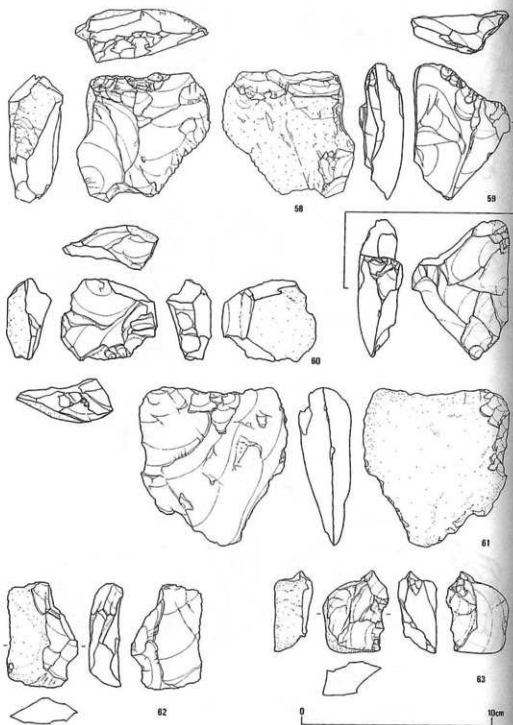


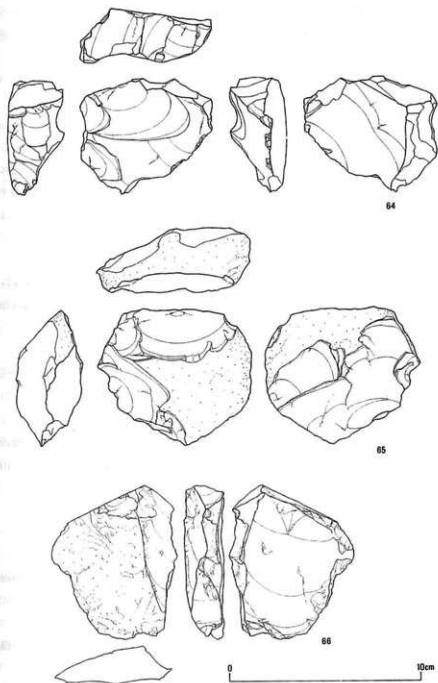
第198圖 K2に属する石核（Aa類）



第199圖 K2に属する石核(A4類)



第200図 K2に属する石核（A₄類：58～61，B類：62～63）



第201図 K2に属する石核(B類)

ているが、53のように横長剥片を取ろうとして失敗したと考えられるものも含まれている。本類中には、作業面を素材の木口面に設定した例はない。多くが腹面に該当するようである。

B類(第200図62～第201図) 剥片素材の石核から長幅比1:1.5以上の横長剥片を剥がしている一群である。5点発見されたに留まる。

後述するように63は瀬戸内技法との関係から翼状剥片石核と考えられるが、他はいずれも企画性に乏しいものである。点数が少ないために、打面他の集計は省略する。

石核を五つに分けて説明してきたが、次に全体を通して相互に比較検討してみよう。石核の主体となるのは数量的にはA₂類であるが、他にもかなりの点数を含んでいる。そこでこれらの類型間の関係を技術的に検討してみると、一応分類して説明はしているものの、相互に独立性が強調されるような排他的な関係にはないことがわかる。すでに説明した打面の特徴や第45表に示した平均目的剥片剥離痕数その他の属性から、A₁類が最も技術的な手順としては安定した内容を示している。しかしながらA₂類との違いは相互の根本的な差を示唆するほどのものではなく、一つの変異幅の中で捉え得るものである。また、このように変異幅の大きい、換言するならば技術基盤が強固でないだけに、A₃・A₄類のような平均目的剥片剥離痕数からすると無駄の多い技術も許容されるのではあるまいか。後述するが、同一個体中に複数類型の石核が含まれていることから、このことが推測できる。A₁～A₄類を含めた石核を、同時に残し得るような包含力に富む技術基盤の存在を考えておきたい。

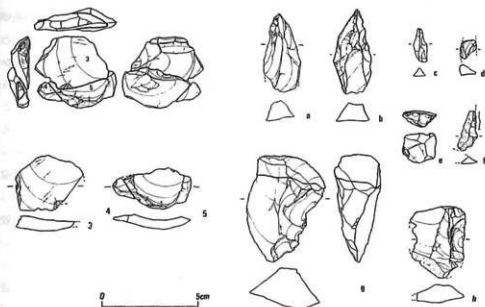
B類については、多くはやはりA類を残す技術の中で解消し得ると考えられるが53・62・63の3点はこの他である。これらは隣接するグリッドで、同じ第3ブロック中から発見されている。第3ブロックは、石器組成からも他の石器群とは編年的な差が指摘されており、ここに含まれる横長剥片を目的とする一群は、技術的には差があるものと推定される。実際の技術工程上は、63で差が確認されているのみである。

(山下)

第3節 個別別資料と 剥片剥離技術

本節では個別別資料中の特に接合資料を主たる分析の対象とし、剥片剥離の技術的側面を検討してみたい。資料が多いため、中央区出土の個体に限って分析する(第50表)。ナイフ形石器は、二次加工があまりに細かいため尖頭器関係の項で見たような二次加工の在り方については検討を加えない。接合資料の剥離工程を説明するに当たっての留意点は、尖頭器文化の場合と同じである。

<K 2-3 F①>(第202図) 53点で構成される。Ⅱ種接合を2例含むため、資料数は56点となる。ナイフ形石器2点、RF 2点、石核2点を含む。接合資料がほとんどない貧弱な個体であるが、ナイフ形石器の2点が国府型との関連を問われる資料であるため、説明を加えた。



第202図 個別資料K2-3 F①(番号は接合順序, アルファベットは非接合資料)

A・B・C 3群の接合資料があるが、B群3資料2点の接合が、最もまともな例である。

B群

1→③ F13A63(B)+ロ+④③ F18A32(B)+⑤③ F18A36(B)

③の背面の剥離痕は、腹面と同じ方向からの打撃で生じているが、所謂底面は残さない。また、打面側にも瀬戸内技法で多用される山形調整の痕跡は残さない。打面は少なくとも三方向からの剥離によって、結果的に山形になっているに過ぎない。③を取るときの打点は、山形の稜線部から5mmほどはずれている。

ロ)では、③の剥離痕を打面に④+⑤の打面調整を施すかの如き剥離を、石核背面側で行っている。剥離痕から判断すると、ロ)の剥片も⑤や④+⑤と大差ない大きさのようである。③、④+⑤の打面を真上から見た時、③からロ)へは5mmほど打点が横に振れている。

④+⑤は、③を取った時の打面の残りとしてロ)の剥離痕によって生じた山形部分の稜線上への加撃によって得られている。ロ)からの打点の振れは約8mmであるが、③との関係で見るとわずかに3mmほど移動するのみである。わずかに2点の接合例であるが打点の振れは少ないようである。④+⑤でも石核底面らしい部分は明瞭でない。

瀬戸内技法との関連で接合資料を見てみたが、あまりに貧弱であるため個体を構成する他の資料も合わせて考えてみよう。

1点ある石核gは剥片を素材とするが、1~2cm四方の横長剥片をわずかに剥がしているのみで、瀬戸内技法との直接的な関連を窺うことはできない。

剥片類では、本個体が節理面の多い粗質の石材でできているため、完形に復するものがほと

んどない。あえて言及するならば、接合資料として示した2点を代表に、やや幅広い例が多いようである。しかし接合資料を除きいずれの場合も底面が不明瞭で、背面の剥離方向は腹面と異なり、さらに礫表を持つものが多いということで、目的剥片の粹を出す可能性が強い。しかし調整剥片としても、やはり瀬戸内技法に伴うものとはいささか異なるようである。

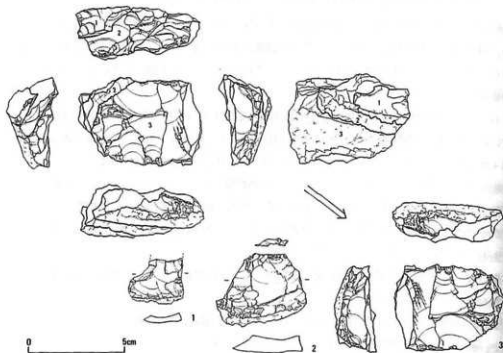
以上から、ナイフ形石器に関する限り国府型とされても良いような資料であるが、少なくとも背景となる瀬戸内技法との構造的連続性を第一義とするのであれば、似て非なるものと考えなければならないであろう。しかし接合資料の④+⑤やナイフ形石器の素材のような比較的整った横長の剥片もあり、これらの直接の石核が未発見であることを考えれば、瀬戸内技法に近似する技術の存在までも完全に否定するものではない。

<K2-3 F⑥>(第203図) 12点で構成される。2組のⅡ種接合を含んでおり、資料数は14点となる。石核を1点含む。3点がⅠ種接合している。

イ→①3 F14A47(B)→ロ→②3 F14A46(B)+ハ+ニ+③3 F19A9(D)

イ)すでに目的剥片剥離が相当に進行しており、遺跡に持ち込まれた段階で全体の殆どは消費していたと思われる。持ち込まれた当初は単設打面であったと思われる。①~②は大きな打面調整剥片である。わずかに側面調整を行うがほぼ連続して剥がしたようである。ここで作出された打面から、ハ)で少なくとも2点以上の目的剥片を得ている。180°打面を転移し、ニ)では新たな打面作出の後2枚以上の剥片を取っている。③は残核である。

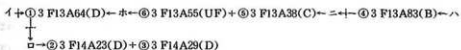
本個体は、同じブロック中出土しながら3 F①から一転して、縦長剥片を剥離した典型例の一



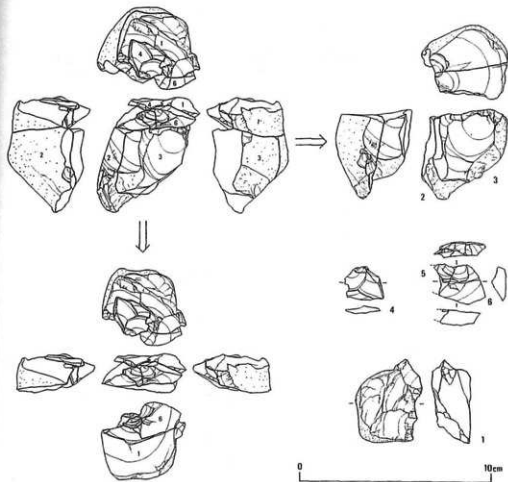
第203図 個別別資料K2-3 F⑥

つである。打面の側面の大まかな調整と打面転移が認められる。技術的に安定し整った剥片が取れたために遺跡外に持ち出したのか、残された資料中に目的剥片らしきものはほとんどない。

<K2-3 F⑦>(第204図) 4点で構成される。Ⅱ種接合を2組4点含むため、資料数は6点になる。石核を3点含む。全点が接合する。



イ)少なくとも2枚の大型剥片を取る。後の剥片は、前の剥離痕を打面として、石核を輪切りにするような板状剥片を取る。①の剥離痕を打面に、ロ)2枚以上の四角い剥片を取る。大きさは長さ2.5×幅2.5×長さ1cm位であろうか。②+③は残核である。ハ)以下は、①の板状剥片を石核としての剥片剥離工程である。ハ)では、すでに1枚の剥片剥離と荒い打面調整を施している。この打面調整の一環として④を取る。④他を打面に、ニ)1~2枚の小さな横



第204図 個体別資料K2-3 F⑦

長剥片を取り、続いて④+⑥を剥がす。さらに、正面右端で作業面の調整を行った段階で、①の石核が放棄されている。

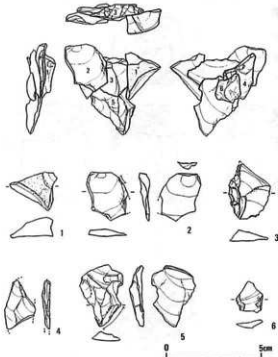
さて、本資料は第Ⅲ工程を欠き、全体に作りが小さいものの、瀬戸内技法第Ⅰ・第Ⅱ工程(松藤1976, 1983)と酷似した内容を見せている。イ)~③までが第Ⅰ工程、ハ)~ホ)・④が第Ⅱ工程に該当するかと考えられる。

第Ⅰ工程では模式的に示されたものと比較する時、いくつかの違いが認められる。一つは、ほぼ交互に盤状剥片が取られてはいるが、剥離角が90°に近い。真正なものであれば120°以上の角度で剥がされることが多い。二つには、盤状剥片剥離が石核の周囲を巡るように行われている。この二つのために、本個体に認められる第Ⅰ工程は、チョッピング・ツール状の石核を残すのではなく、やや縦長の剥片を取ったような石核を残す。交互剥離の一方が打面再生剥離、他方が作業面での目的剥片剥離にも見えるのである。

第Ⅱ工程では、第Ⅰ工程との関係で最初の剥片は稜線の高いものとなろう。打面調整は荒いながらも頻繁に行い、山形に整えることを意図しているようである。「翼状剥片」剥離に当っては、山形の稜線部周辺を加撃している。ほぼ一線上を後退する打点は、最大9mmほどの振れが認められる。

事更に模式的な瀬戸内技法との比較を行ったが、やはり基本的には非常に近い相様を示している。第Ⅰ工程の盤状剥片の剥離角を除くと、大旨瀬戸内技法のバリエーションのなかで捉え得ると考えられる。

<K 2-3 F ⑥>(第205図) 10点で構成される。Ⅱ種接合を1組含むため資料数は11点になる。ナイフ形石器とRFを1点ずつ含む。ともに1組ある接合資料に含まれる。



第205図 個体別資料K 2-3 F ⑥

① 3 F14A19(B)→イ→② 3 F13A37(UF)→③ 3 F14A36(Kn)→ロ→④ 3 F13A 6 (RF)+

⑤ 3 F18A17(UF)→⑥ 3 F13A40(B)

①は確実を持つ剥片であるが、あまりに断片であるために工程等を把握することが難しい。イ)では約4cmの整った剥片を取っている。続いて②・③の剥片をとる。いずれも長幅比が1:1位の不定形剥片と思われる。②の打面を延長してみると、③のナイフ形石器は7mmほど素材の打面側をブランティングで取り除いていることがわかる。ロ)でいびつな小剥片を剥がす。

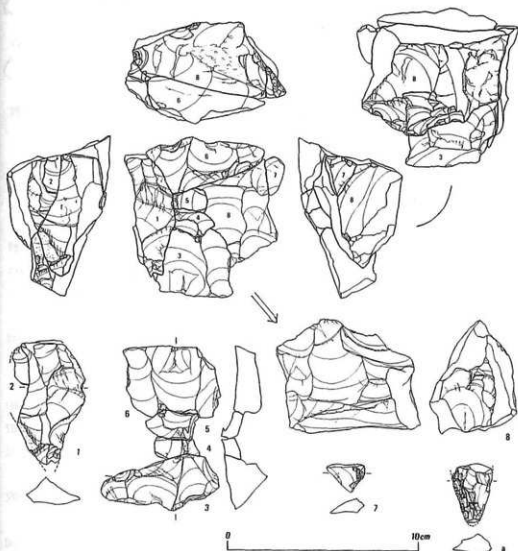
④+⑤は長さ5cmの縦長剥片で破損との前後関係はわからないが④はRFに加工されている。

⑥はいびつな剥片の小片である。

剥片剥離工程全体との関係は今一つ不明瞭であるが、不定形剥片の剥離とナイフ形石器の加工程度を知ることができる。打面の更新・転移は認められない。

<K2-2 G④>(第206図) 59点で構成される。II種接合が2組6点あるので、資料数は63点となる。尖頭器3点と石核1点を含む。構成点数は多いが、小片が多いため接合数は少ない。

1→①2 G17A6(UF)+②2 G18A42(B)+ロー→③2 G18A49(UF)+④2 G18A251(B)+
⑤2 G13A73(B)+⑥2 G13A199(B)+ハ→⑦2 G18A136(D)
⑧2 G18A327(B)



第206図 個体別資料K2-2 G④

イ)非接合資料も含めて、個体中に礫表の残る資料が皆無であるところから、遺跡に持ち込まれた段階ですでに剥離工程もかなり進行していたと判断される。ただし接合資料に断片的に認められる大きな剥離痕を積極的に評価するならば、本来の個体が大きく分割され荒い調整を施された可能性も保留しておく必要がある。以前の打面とは逆方向から①+②の6.5cmほどもある剥片を取る。ロ)ですぐに180°打面を移し、①+②以前と同じ所から1枚の整った剥片を取る。続いて③+④+⑤+⑥の剥片を取る。この剥片は9×6cmほどもあるが、形態的に歪が激しく4つに破損している。同じ打面から2枚以上の剥片を得た後、その剥離痕を打面としこれまでの打面から剥片を取ろうとしている(ハ)。いずれも失敗剥離に終わっている。状況的にはこれらの剥離は打面調整と考えられなくもないが、剥離後の凹凸が激しく調整を目的とする作業とは思えない。これらの工程とは脈絡を見せずに⑦が剥がれている。意図的と言うよりも、石核の突出部が折れたようにも見える。最後に⑧が残される。

接合資料以外で、本個体中にはポイントフレイクも数点含んでおり、素材生産と同時にその加工も行われていたと考えられる。

目的剥片と思われる資料は、ほとんど残されていない。

<K2-2G④>(第207図) 13点で構成される。Ⅱ種接合を2組4点含むため、資料数は15点となる。RFと石核を1点ずつ含む。接合資料は2組ある。A群のみを示す。

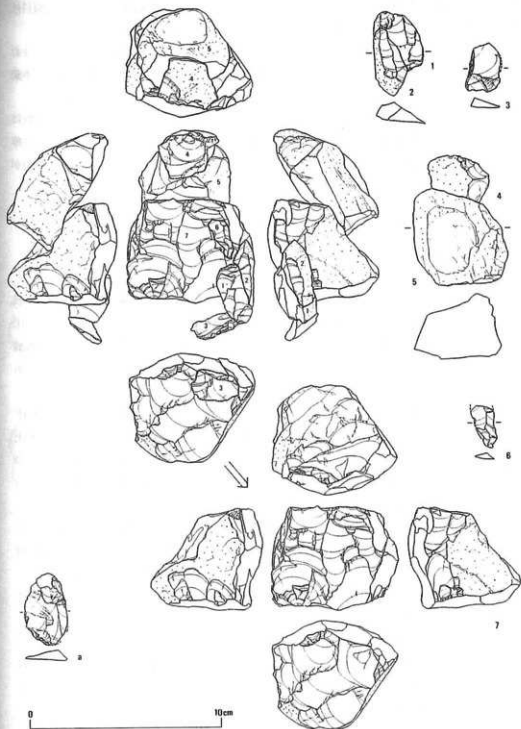
A群



原石は長径11~13cm位あったと考えられる。④+⑥が厚手の帽子状剥片であるため、イ)個体の最初期のものから残っていると考えられなくはないが、原形を推定復原しそこから得られたであろう資料数と遺存資料を比較すると、後者が極端に少ないように感じる。④+⑥はむしろ新たに作出された打面と考え、本遺跡に至るまでにかなり工程も進行していたと解したい。数枚の剥片に続いて同じ打面から①+②を取る。③は①+②他の打面調整のようであるが、剥離痕からの判断では③に続いて3~4枚の比較的大きな剥片を取っており、打面調整とは考え難い。むしろ①+②以前の作業面と打面を入れ換えて、③以下で剥離作業を行ったロ)と考えられる。一方これらと直接の前後関係はわからないが、石核で①~ロ)と逆の端部が、④+⑤の礫表を持つ厚手の剥片で大きく截ちおとされている。ここを打面にしてハ)数枚の剥片を取る。⑥はこれらと一連のものである。⑥と前後してニ)で打面の再生が行われ、ホ)で2枚以上の小剥片を取る。⑦は残核である。

本個体から得られた剥片は、多くがやや縦に長い整った形態のようである。発掘による回収率を考慮しても、半数以上の剥片が持ち去られていると考えられる。

<K2-2H①> 14点で構成される。接合資料を欠くが、3点のナイフ形石器(第142図25・第145図75・79)を含んでいるので触れておく。14点中9点に礫表が残っており、全体と



第207図 個体別資料K2-2G④

しては剥片剥離工程初期に当ると思われる。残る5点のうちナイフ形石器を除くと、2点は比較的整った剥片の破片である。資料が少ないため、剥片の一般的形態は捉えられない。

完成したナイフ形石器を3点も含むにも関わらず、工程初期の剥片群以外はほとんど含まれないという偏った内容を持っている。ナイフ形石器の素材を含む主たる剥片剥離作業は、本遺跡以外で行われたと考えざるを得ない

<K 2-2 H②>(第208図) 22点で構成される。Ⅱ種接合例が3組7点あり、資料数は26点となる。ナイフ形石器3点、スクレイパー1点、石核2点を含む。2点の石核はともに厚手の剥片の一部に加撃したもので、個体の中心となる石核は遺存していない。3組の接合例があるが、A・B群を説明した後で全体を概観する。

A群

イ→①2 H20A13(D)+②2 H20A14(UF)+③2 H20A72(B)

B群

④2 H15A3(B)+⑤3 H16A132(Sc)→⑥3 H21A104(UF)
 ↳⑦2 H20A10(B)

A群 イ)本個体は、大型の礫表を持つ剥片を2点含んでおり、剥片剥離の早い工程から残されていると思われる。①+②+③もその一つである。背面からの力で3つに破損した後、①ではその割れ面からの加撃で、2.5×1 cm位の小剥片を剥がしている。彫器とするには剥離痕が大きすぎるようである。感覚的には認めにくいだが、技術的には石核とせざるを得ない例であろう。

B群 A群との関係は定かでない。④+⑤の背面から「数回の剥離が階段状になり、石核下半部が肥厚してしまった。下方からの剥離の試みも打撃角度が不適当で失敗に終わった。再度上方から強い打撃を加えたところ④+⑤をうまく取ることができた。」ことが読みとれる。その結果この剥片は、上半が華者で下半が頑丈になってしまい、偶然にか半分に分れてしまった。この一方を利用したのが⑥のスクレイパーである。続いて⑥・⑦の剥片を取っている。

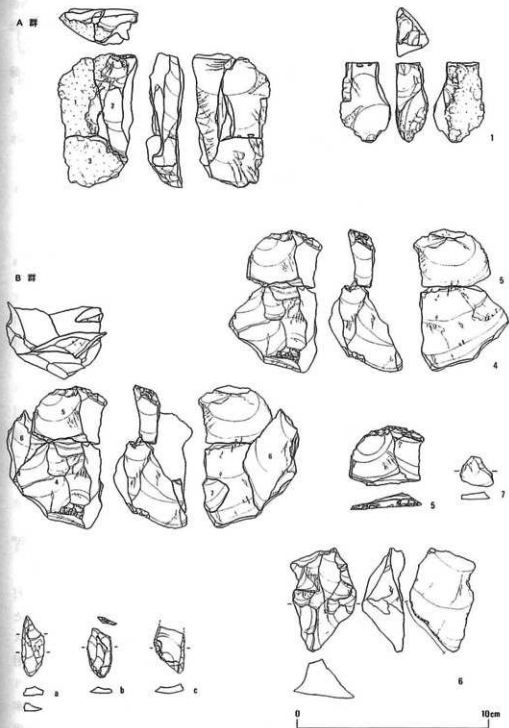
ナイフ形石器を除くと、スクレイパーも含め本個体中にも目的剥片と思われるものは皆無である。整った剥片の多くが持ち去られ調整剥片が残されていると思われる。また、A・B接合群を中心に背面の剥離痕を観察すると、幅3 cm、長さ4~5 cm位の剥片を取っている例が多い。厚さの推定は難しいが、3点も製作されているナイフ形石器の素材としては、概して繊細さに欠けるという印象が強い。

個体としては、剥片剥離工程の前半を示していると考えられる。

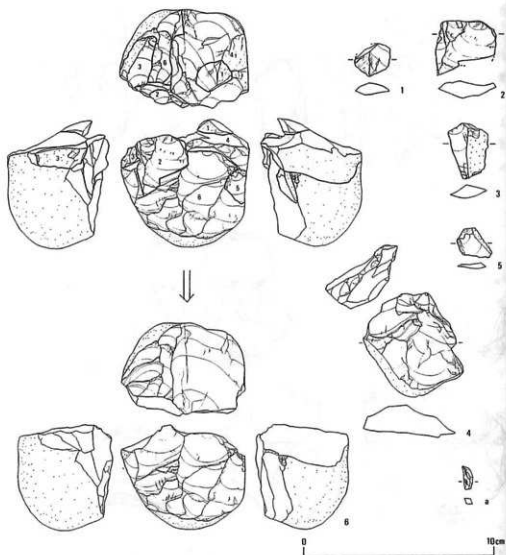
<K 2-2 H⑥>(第209図) 16点で構成される。Ⅱ種接合が1組あり資料数は18点になる。ナイフ形石器の微小片1点と石核1点を含む。接合は2組あるが、一方がⅡ種接合であるため、A群のみ説明する。

A群

イ→①2 H25A68(B)→ロ→②2 H25A13(B)+③2 H25A108(B)→ニ→④2 H25A28(B)→ホ
 ↳⑥2 H25A37(B)→へ→⑥2 H25A54(D)



第208図 個体別資料K2-2 H②



第209図 個別別資料K2-2H⑥

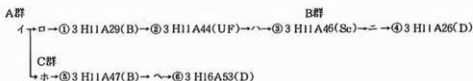
4) 石核の半分位を消費した状態で遺跡に持ち込まれる。①の前に7×4.5cm位の巨大な打面再生剥片が取られ、数枚の縦長剥片が取られている。①・ロ)と打面調整が施され、②とともにハ)で2枚以上の目的剥片が取られる。③～④・ホ)は、再び打面調整を行う。④は5×4.5cm位の大型で打面再生に近い役割を負っている。これらの剥離痕を打面に、⑤・ヘ)の目的剥片群が剥がされる。ヘ)では少なくとも3枚の剥片が取られている。⑥は残核である。

本個体は、打面調整・再生と目的剥片剥離が截然と行われている稀な例である。しかしながら、打面側で剥がされた調整剥片の方が、若干幅広・厚手ではあるが正面側の剥離痕から推定される目的剥片も、格別に縦長・優美であるというわけではなさそうである。目的剥片も長幅比1.5:1前後のやや縦長という印象である。石核に奥行きがあり、打面側からでも目的剥片

の剥離が可能な条件を持っている所から、整った剥片が得られたならばどちらで剥がされた剥片でも利用するという側面も多分にあったかと考えられる。

目的剥片のほとんどが遺存しないが、本個体は大きな攪乱に接して分布するため、正当な評価は難しい。

<K2-3 H④>(第210図) 8点で構成される。スクレイパー1点と石核2点を含む。2点の接合資料が3群(A~C群)含まれるが、石材に特徴的な模様があるため相互の関係がわかる。



最初に、イ)母岩を節理面で2分割する。A群：一方の石核から、ロ)節理面を打面として2枚以上の離表を持つ剥片を取る。続いて、打面転移もなく①~ニ)までの工程を行う。ハ)では数枚の整った剥片を取ったと考えられる。これを狭んで、A群からB群へと移る。ニ)では、やはり2~3枚の整った剥片を取っている。③はスクレイパーに加工されている。④は石核である。

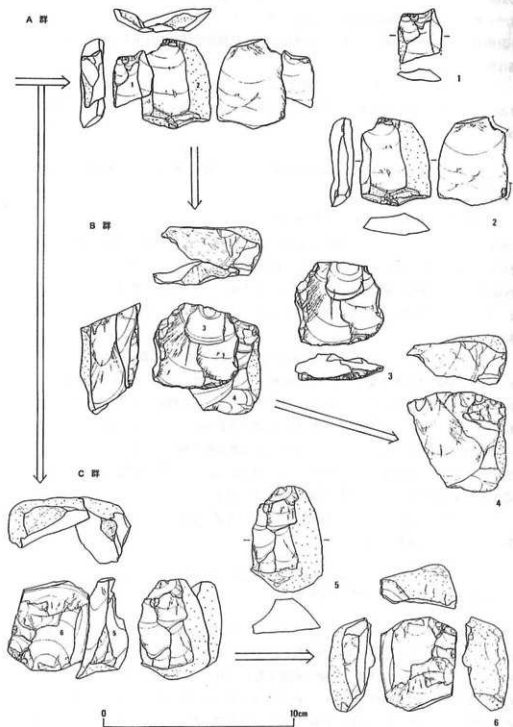
C群はイ)で分割された、他方の個体を単位とする接合である。⑤の縦長剥片の前にすでにホ)5枚以上の整った剥片を取っている。⑤に続いて、⑥までの間にヘ)4~5枚の整った剥片を取る。⑥は残核であるが、これにのみずっと打面であった節理面以外から施された剥離の跡がある。剥片剥離工程の最後になってのみ、打面の移動があったと考えられる。

本個体では節理面を打面としながらも、ほとんど石核調整を施していない。それにもかかわらず長幅比が1.5:1以内の不定形剥片が安定して供給されたようで、10点以上の整った剥片が遺跡外に持ち出されている。工程の初期のみを欠く個体である。

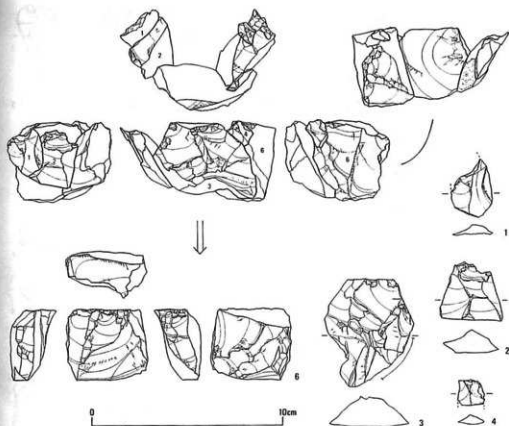
<K2-3 H⑥>(第211図) 19点で構成される。RFと石核を各1点含む。2組の接合群中6点が接合するA群のみ示す。



イ)個体中離表を残すのは1点のみである点から、ある程度剥離が進行した段階で遺跡に持ち込まれたと考えられる。①・②はほぼ連続して同じ打面から剥がされている。共に不整形な四角い剥片である。ロ)では何枚かの剥片剥離と若干の打面の移動があったようであるが、資料が僅少であるために不明瞭である。③は①・②とは45°程打面を違えている。ハ)でも何枚か剥片を取っているようだが詳細はわからない。あまり整った剥片ではないようである。④は石核に対する打面の位置という意味では⑤と同じであるが、剥離が大いに進行しているために、全く異なる打面を用意したようである。これと平行して⑥を取るが打面はそれまでと180°近く



第 210 図 個体別資料 K 2—3 H④



第211図 個体別資料K2-3H⑤

異なっている。これに続いてニ)で数点の小型縦長剥片を取り、⑥の石核が残される。

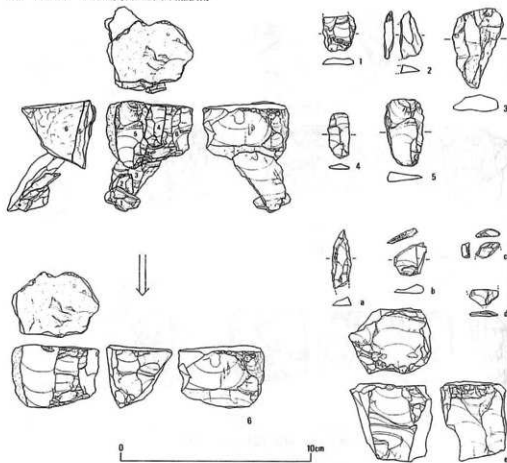
本個体では、イ)の段階で奥行きが8 cmもあった石核が、最後には⑥の1.5 cmまで薄くなっている。この間に10点以上の剥片が取られているはずであるが、残るものはわずかで目的剥片らしいものは全くない。非接合資料中に1点の整った剥片を留めるのみである。打面転移は認められるが、法則性は窺えない。

＜K2-3H⑦＞(第212図) 38点で構成される。ナイフ形石器3点、RF 3点、石核2点を含む。凝灰岩製である。6点が接合する。

イ)ロ→①3 HI2A27(RF)→ハ→②3 HI2A8 (Kn)→ニ→③表A24(B)
 ↳ホ→④3 HI2A22(B)→⑤3 HI2A71(B)→ヘ→⑥3 HI2A73(D)

イ)で節理面を利用して、個体を少なくとも2つ以上に分割する。したがってロ)とホ)以下は、異なる個体である。ロ)の段階で、すでに工程は相当進行している。分割面を打面としている。①～③まで、同じ打面から連続的に縦長剥片を剥がしている。①はRFに②はナイフ形石器になっている。ハ)・ニ)では数枚ずつの剥片を取っている。③は石核と接合していないが、形態観察からは母岩中の非接合の石核がロ)～⑥と関係する可能性は十分にある。

ホ)以下の個体でも、すでに相当工程が進行している。少なく見積っても10枚以上の剥片



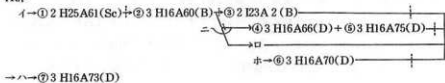
第212図 個体別資料K 2-3 H①

が取られている。④・⑤(に続いてへ)では1枚の小剥片が剥がされる。⑥は残核である。こちらの場合も終始節理面か自然面を打面としており、調整剥離は全く施さない。

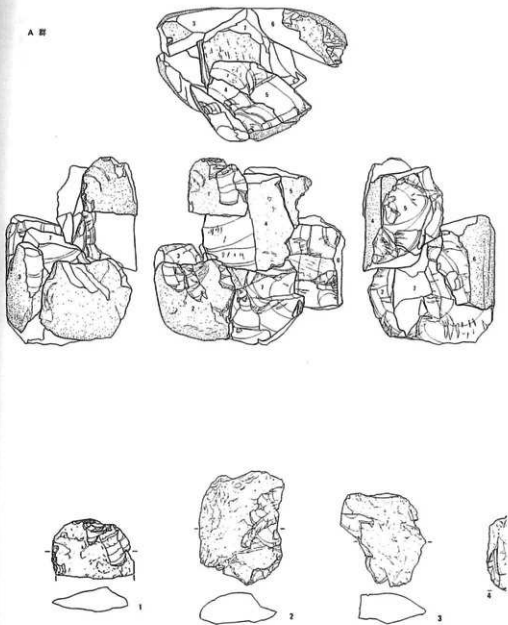
個体全体としては、両設打面であるが各種の調整は施さない。また著しい特徴として、取られた剥片の繊細さを挙げることができる。剥離痕からすると、剥片の多くが長幅比1.5:1以上の縦長である上に、遺存資料では厚さがほとんど5mm以下と薄い。本個体中にナイフ形石器やR Fが多いことと関連する、独特の技術なのであろうか。剥片の持ち出しは確実に認められるもの、数量については不明瞭である。

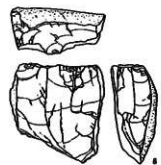
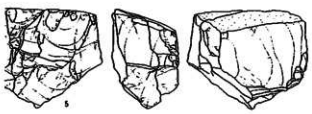
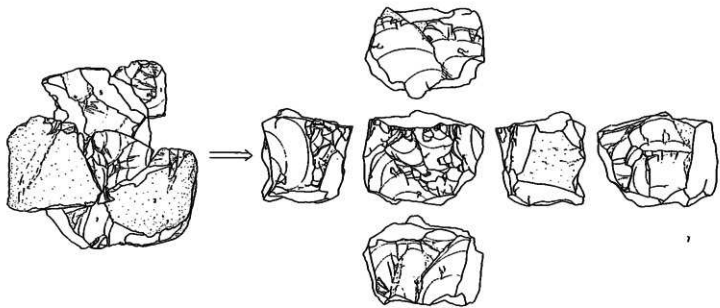
<K 2-3 H①>(第213図) 10点で構成される。II種接合の石核を含むため、資料数は11点である。スクレイパー1点と石核3点を含む。2組の接合群中A群のみを示す。6点の接合資料である。

A群



A 群





■ 固体资料K2-3H②

イ)長径14~15cm位の原石を用い、初期の工程から残っている。最初に作られた打面から①の大型剥片を取る。これは大きく礫表を残すにもかかわらずスクレイパーになっている。90°打面を移し、②の剥片を取る。さらに90°打面を移し、③は②の剥離面を打面として剥がされる。④+⑤は③と180°異なる礫表を打面とする。④+⑤は厚手で石核に転用され、ニ)2枚以上の貝殻状剥片を取っている。これらと並行して、ロ)全体の荒い調整(?)剥離が行われる。⑥もその一環と考えることもできる。⑦以外と接合しないため、詳細はわからない。⑥は節理面で割れた板状剥片であるが、ホ)その腹面から3枚以上の縦長剥片を取っており、石核として利用している。このような大型剥片を全体にわたって剥がす工程を終えて、ハ)で小さな剥片数枚を取っているのであろうか。④~⑥、ロ)との正確な前後関係はわからない。残核が⑦として残されるが、すでに見て来たように、石器素材としての剥片はほとんど取られていない。

本個体は、大型剥片を石核に転用するというよりも、むしろ積極的に剥片素材の石核を作り出す技術があるかの観を与える。大型剥片の残核たる⑦は、まだ十分な大きさを有すると考えられるにもかかわらず、ほとんど石器製作を意図するような剥片を取っていないこともこうした推測を助長している。一方で④+⑤と⑥では、不整形ながら小型の剥離痕を残している。個体を全体として見てみると、無駄が多く必ずしもこうした技術が有効に作用しているとは考えられないが、その存在に留意する必要がある。この中でも頻繁な打面の転移が認められるが、規則性には問題がある。大型剥片類の持ち出しは認められるものの、あまり多くはないようである。この点も、技術的な未熟さを感じさせる所以であろう。

<K2-3 H④> 23点で構成される。ナイフ形石器2点と石核1点を含む。A・B・Cの接合群を持つが、B・C群についての説明する。3群の前後関係等は不明であるが、一応A・B・Cの順と仮定しておく。

B群



C群



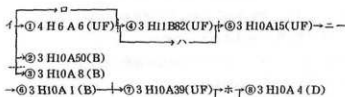
B群 イ)平面形が四角い剥片を取っており、④もその一環である。ロ)では大型剥片1枚と中型剥片を2枚以上取る。続いて⑤を取る。⑥は大型のためか石核として利用されている。ハ)以下は石核としての⑤に接合するものである。ハ)では、すでに小さな剥離痕が2~3枚施されており、ほとんど同じ打点から⑥が剥がされる。ハ)・⑥から3cmほど離れた所で、⑦・ニ)が取られる。

C群 ③以降の資料の背面には整った縦長の剥離痕が残っており、ホ)整った縦長剥片を連続的に取る工程にあると思われる。②は若干幅広であるが、③~⑥はいずれも整った縦長剥片である。へ)では1枚の縦長剥片を取っている。

B・C群は、取っている剥片の形態に大きな隔たりがあるが、B群の資料の大きさと取られ

た剥片の規面性の弱さを理由に、C群より早い工程にあると判断した。とは言え、ナイフ形石器の素材も含め、一連の工程とはなかなか理解し難い個体である。いずれの場合も打面調整は施さない。個体としての欠落が多く、打面転移・資料の持ち出し等については判断が難しい。

<K2-3 H ㉔>(第214図) 14点で構成される。ナイフ形石器と石核を1点づつ含む。8点が接合している。

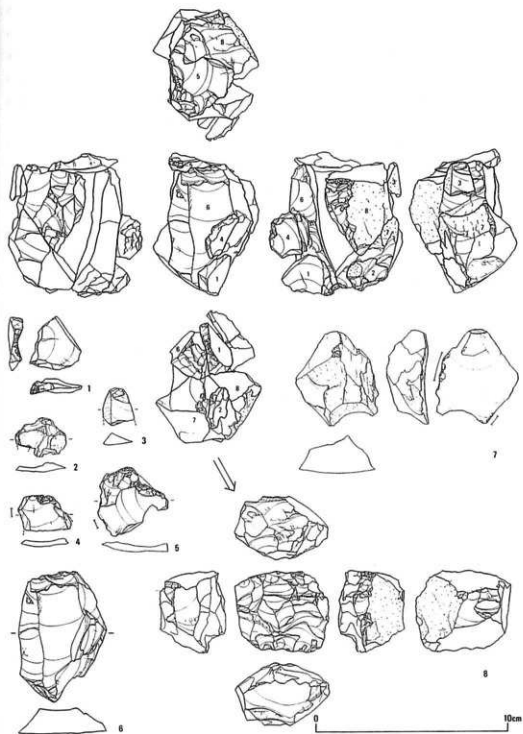


イ)すでに最も初期の工程は終了し、大型の目的剥片を取る直前の工程から始まる。①・②はかつての打面とも思える所から取られた小剥片で、ロ)並行して何枚かの同様な剥片を剥がしている。③は石核背面の調整と考えられるが、他の資料との前後関係はわからない。①・ロ)に続いて、打面を90°移し④・ハ)の体部調整を施す。再び打面を90°移し、①・②・ロ)とは反対の打面に⑤の調整剥離を加える。⑤の剥離痕を打面に、ニ)・⑥の大型で整った剥片を取る。ニ)は④・ハ)で体部調整を加えられた部分から取られており、クレスティッドフレイク風であろうと思われる。⑦では、①・②・ロ)側で打面の再生を行っている。⑦の段階で、ようやく両設打面石核としての体裁を整えたことになる。ホ)・ヘ)では、上・下の打面を利用し、各々で数枚ずつの小型剥片を取っている。ヘ)の下設打面では、2回以上の荒い打面調整が行われている。この段階で得られる剥片は、最大長4cm止まりと小型である。⑧の石核は、最も整った両設打面石核の一つである。

本個体は、剥片剥離工程のほとんどを残しており、多くの注目される点がある。3点について述べる。一つは、工程初期においては長さ7cm前後の大型剥片を取っているにもかかわらず、最後には4cm位になってしまっている点である。いずれもこの工程の中では目的剥片と捉えられるが、大きさに関する要求にはかなり幅があるようである。ただし、この一見緩やかな制約の中でも、小ささに関しては石器の調整加工と密接な関係を持っており、意識された限界があったと考えておく必要がある。本個体ではそれが4cm位に現われていると考えられる。

第二には、すでに触れたように、両設打面石核が残されている場合でも、剥離工程当初から打面の配置が意識されている訳ではない可能性のある点である。本個体では⑦に至ってようやく打面の配置が完成するのであり、工程的には中期に当たると言える。その後は比較的小型の剥片しか取られていない。

第三点は、持ち出された資料の多さである。他の個体でも述べてきたように、本個体でも少なくとも10点前後の剥片が持ち去られている。しかもそれらの多くが剥離工程中期に石核正面から取られたもので、目的剥片と考えられるものである。これが直接に剥片の「使用率」とでも呼べるとするならば、かなり高い比率を考えておく必要がある。



第214図 翻体別資料K2-3H㊦

この他、本個体では調整打面と非調整打面が並用されている。もっとも、調整打面とは言っても細部調整は施されず、数cmの大きな剥離が加えられるのみである。

以上15の個体について個別に説明してきたが、全体では個体数が非常に多いにもかかわらず、剥片剥離工程を復元できるほどに接合する例はほとんどない。したがって個体別資料の検討を経て復元された剥片剥離技術も、石核・剥片等の分析を通して推定されるものを大きく変更するものではない。以下、説明できなかった個体も含めて、(A類)縦長剥片を得ようとする技術と(B類)横長剥片を得ようとする技術に大別してまとめを行う。

A類 縦長剥片剥離技術

A類は、さらに推定される工程途中の技術的な差によって、A₁～A₄類に分けられる。

A₁・A₂類はともに大きな母岩が分割される工程を含むもので、A₁類は塊としての分割された素材を利用するもの、A₂類はどちらかと言えば厚手の剥片を利用するものである。この二者は、一つの母岩から生じることもあり、必ずしも明確に識別できるものではない。A₃・A₄類は、これらに対し一母岩一石核という対応が認められると考えられるグループである。

A₁類(K2-3H④, 3H⑦, 3H⑩個体) A₂類も含めて、本類に使用される自然礫は非常に大きい。ほぼ原石を知ることができるK2-2H⑥・3H⑩を見ると、前者で長径10cm以上、後者では15×13×10cmにも達する。ほぼ乳児の頭大の河原石を利用している。この個体を複数に分割し、その分割面や自然面、さらには新しい剥離面を打面にして剥片を得る。打面の調整・再生はほとんど行わない。接合資料に限れば、打面の転移も稀である。体部調整もほとんど認められない。

目的剥片は二種類認められるようである。一つはK2-3H⑦に代表される小型で整った縦長剥片である。同個体中に接合例があるように、このような剥片はナイフ形石器との関係が強い素材であろう。もう一つは、K2-3H④を代表に、縦長ではあるが幅が広く厚みもある頑丈な剥片である。これも同個体中に接合例があるように、スクレイパー他の繊細さよりも頑丈さが求められる石器に利用されると考えられる。接合例が少ないために、このいずれに対応する技術がより卓越するかは判断が難しい。残核の比較では前者がより整った円柱状を、後者は全く定型化しないように思われるが、これも接合例の不足から十分な検証は行われていない。

A₂類(K2-3H⑩個体) 接合資料として原石近くにまで復元し得るものは、例示した1資料に留まるが、他に剥片素材の石核は大量に発見されている。K2-3H⑩個体のように、原石が全体として大型剥片供給用に利用される例はむしろ稀で、A₁やA₄類と組み合わせられた工程の中で随時石核用の大型剥片が得られたと考えられる。このような判断をするとすれば、A₂類はA₁・A₃・A₄類の様に原石の状態から技術工程が開始されるのではなく、大型剥片が得られた段階から始まると考えなければならなくなり、他とは分類規程が異なることになる。

大型剥片には決った形状はなく、長径3～10cm位までのものが使われている。大型であるだけに剥片剥離工程の初期に得られる剥片が選ばれるようで、剥片の背面には広く自然面を留め

る例が多い。打面はかつての剥離面や自然面がそのまま利用されており、特別に作出されることはほとんどない。打面の調整や再生・転移、体部調整もあり例がない。作業面も、剥片の木口や腹面・背面といずれの場合もあり、一定の傾向は見出せない。目的剥片は、この作業面の設定によって縦長からほぼ円形にまで変化する。いずれの場合も大型剥片を素材とはしても、体積が小さいだけにほとんど剥片を取っていない。剥離剥片数は1～5点位であるが1～3点の例が圧倒的に多い。残核は、作業面が木口面にある場合には彫器と似た形態になり、背面や腹面にある場合には、性格不明のRFと混同することが多かった。いずれの場合も、二次剥離面の規模の大きさを規準に石核と彫器・RFを区分した。

本類の剥片剥離技術は、非常に無駄が多いように思われる。本類によって残されたと思われる石核は、数の上では最も多いが、一石核当たりの目的剥片生産量では、おそらくA₁・A₃類の1/2位に留まるであろう。

A₃類(K2-3F⑥, 2G④, 3H⑤個体) 本類は、一つの母岩から除々に剥片を剥がして行き、最後に一つの石核を残す一群である。原石の大きさは、K2-2G④や3H⑤から長径10～13cm位の河原石と考えられる。A₁とそれほど大きな違いはない。打面は、当初原石の長軸の一端に設定されるが、打面の大きな調整や再生・転移という経緯を経て両設打面へと移行する。打面の細調整は認められない。体部調整は行われるようである。目的剥片には、工程当初の大型で整った縦長剥片から、最終段階の小型寸詰まりのものまで含まれている。

本類は、基本的要素・手順としては砂川刃器技法(戸沢1974)に似ている。しかしながら最も整った工程をふむ3H⑤個体からも看取されるように打面の設定と作業面の関係が、打面の再生や転移という手順を経て微妙に変化しており、砂川刃器技法の様に固定されてはいない。また、何よりも砂川刃器技法では目的とする剥片が石刃であるのに対し、A₃類では石刃と比較すると概して幅広の剥片を取っているようである。幅広の剥片の中からさらに精選された一部がナイフ形石器になっている。

A₄類(K2-2H⑥個体) 本類は、原石近くまで復原できる例が第3層中にしか認められない(K3-2D⑤)ため、第2b層中に本類が含まれるという確証はない。しかしながらここで示したK2-2H⑥も含め、本類を最もバリエーションに富む、換言するならば確固たる手順を踏まない技術として位置付けておきたい。視点をえてみるならば、A₃やA₁類の一部さえも本類の一変異型の範疇で捉えられるものであろう。A₃類は第2b層のナイフ形石器群全体の編年・地域性との関係で、「砂川型刃器技法」が大きく関与してくると考え、殊更に設定したものである。

本類も基本的に一個体が一つの石核に収斂する技術である。原石にはやはり長径10cm以上のものを用い、打面を頻繁に移しながら剥片剥離を行う。打面調整は基本的には行わないが、打面側で荒い剥片剥離を行うものもある(K2-2H⑥)。これを打面調整と呼ぶかどうか意見の分れる所であろう。また、他の石核のみの資料から判断して、打面調整の行われた例もあるかと思われる。打面の再生・体部調整も行われる例が多い。しかしながら、やはり手順を追っ

てと言うよりは任意に行い、またそれに関連して打面も移動するようである。体部調整と打面の作出が混然一体となっているように思われる。目的剥片は、他と同じで寸結まりの縦長剥片のようである。接合例が多くないために、剥離痕も含めてそのように判断される。最後に残される石核は、複数の打面を持つ例もあれば、単設のものも含まれる。したがって石核のみからは、A₂類を除き他の3者の識別は難しいことになる。

B類 横長剥片剥離技術

本類も、瀬戸内技法と思われるB₁類と、そうした確固たる技術的背景を持たないB₂類に分けられる。

B₁類(K2-3F⑦個体) すでに具体的に示す中で技術的検討は経ている。その中で特に問題となるのは、第I工程における盤状剥片の剥離角度である。技法的には、この角度が130°前後と大きいために第II工程の最初から整った翼状剥片が取れるということで、重要な位置を占めている。ところがK2-3F⑦では、この角度が90°近く、第I工程から第II工程への移行はあまりスムーズではない。したがって、この点を強調すれば瀬戸内技法としての認定が揺らぐことになる。しかし他の個々の局面におけるわずかな違いをも含めて捨象すれば、全体としては瀬戸内技法の変異幅の中で捉え得る技術と考えられる。

B₂類(K2-3F①個体) 具体的な接合例として示せる資料はほとんどないが、残核中には横長剥片を剥がした痕跡を持つものがある。石器の中にも横長剥片を素材とする例が散見されるので、体系的には思われぬが横長剥片が剥がされることもあったと考えられる。これらはA₂・B₁類と同様、大型剥片を素材として剥片剥離を行っている。作業面は一定せず各種の調整もほとんど施さない。1石核当たりの剥片生産量も僅少である。

この剥離技術は企画性に乏しく、意図的に横長剥片を剥離しようとした例は僅かのようにある。遺跡内の各所にこの技術の存在を示す資料が分布するが、けして主体的位置を占めることはない。

さて、五つに分類して技術的特徴を述べてきたが、これらはB₁類を除いて、周辺他地域と比較した場合、いずれも確固たる技術の手順を持つものではないようである。いづれもバリエーションに富み、相互に線を引き出すことが難しい。このことは、結果である目的剥片の形態にも反映しているように思える。各技術類型から生産される剥片には明瞭な違いを見出すことが難しい。いづれの類型でも長幅比1.5:1からほぼ四角い剥片まで、ややずんぐりしたものを得ている。そうした中から比較的細長く薄い剥片を選んでナイフ形石器に、ずんぐりと整った剥片をスクレイパーに利用しているようである。二次加工のある石器では、ナイフ形石器が中心的位置を占めることが明瞭であるだけに、その素材生産が第一義的に剥片剥離技術を規定していると考えがちであるが、本遺跡の実態は必ずしもそうした相関を示してはいないようである。むしろ汎用素材としての幅広い縦長剥片を得る過程で任意に意図する石器に適する素材を抜き出して加工を加えているようである。

しかしそのような中でも、K2-3F①や2H①・②、3H⑦のように、まとまってナイフ

形石器が残されている個体もあることから、ある程度ナイフ形石器生産用の個体が意識されていた可能性はある。もっとも、これらに技術的な共通性は認められていない。さらに本遺跡の個体には目的剥片のほとんどが持ち出されている例が多いため、それらがナイフ形石器に加工されているとすれば、このような可能性は低いものとなる。

技術の相互の関係では、A₂・B₂類が単独では成立し難く、他と同一個体中で共存する例が多い。特にB₂では目的性が汲み難く、A類と共存する例もある。A₂類は3H^⑨個体に示したように、A₁との親和度が高いようである。A₁・A₃・A₄類では、A₃類が両設打面ではあるものの、A₁・A₄類にも似た例が認められ、残核のみからは相互の判別が難しい。このため遺跡内での技術的な優占度は判断し難いが、敢えて言うならば、この三者の中ではA₃類が最も例数が少ないようである。B₁類も例示した個体に留まる。

遺跡内の分布では、後述する第3ブロック(第4節1項参照)に著しい特徴が認められる。他の全てのブロックではA類を主体に、稀にB₂類を伴う程度に過ぎないのに対し、第3ブロックのみはB₁類を含むのみならず、他にもB₂類が卓越している。ここに分布するB₂類のみは、他のように目的性の乏しいものではなく安定して横長剥片を生産しているようである。ナイフ形石器の分布でも触れたが、その素材を生産する技術でも本ブロックは特異な存在と言える。(山下)

第4節 石器の分布

1. ブロックの設定

第2b層中におけるナイフ形石器文化期の石器群は、分布の上から見るとA区からE区までの北群、F区からI区までの中央群、J区からK区までの南群に大別できる(別添第3図)。本報告では中央群の分布状況についてのみ見て行きたい。

中央群は巨視的に見ると、石器が集中的に分布する領域と極めて散漫に分布する領域とがかなり明瞭に分かれている。石器が集中的に分布する領域を詳しく見ると、数多くの石器が極めて密に分布する地点と数十点の石器が小さなまとまりを形成する地点、及びそれらの周辺部とによって構成されていることがわかる。一方、石器が散漫に分布する領域では、わずかな石器がゆるやかにまとまる地点と単独分布とでも呼べるような状況を示す地点とがある。まず石器が一定の範囲にまとまっている地点を「ブロック」として捉え、中央群の石器群の分布内容を見てみよう(別添第16図第49表)。

第1ブロック(K2-1)

2F15, 3F11・16区に分布する。長軸2.3m, 短軸0.5m, 面積0.3m²ほどの広がりを持つ極めて小型のブロックである。石器組成はUF2点, 剥片3点の計5点で、規模・内容とも貧弱なものである。

408 第4節 石器の分布

第2ブロック(K2-2)

3 F16・17区に分布する。長軸2.7m, 短軸1.3m程の楕円形を呈し, 1.9㎡ほどの広がりを持つ。ナイフ形石器1点, R F1点, U F1点, 剥片4点, 砕片1点の計8点で構成されている。

第3ブロック(K2-3)

3 F13・14・17・18区に分布する。長軸7.8m, 短軸5.9mのはほぼ円形を呈し, 39.5㎡ほどの面積を持つ。石器はブロック全面に一樣に分布するものではなく, 3 F13・18区に剥片・砕片・石核などが密集する中心部(核)を持ち, その周囲はやや散漫に分布する。石器組成はナイフ形石器5点, R F4点, U F27点, 礫石類1点, 剥片120点, 砕片28点, 石核11点の計196点で構成されている。砕片の中にはナイフ形石器の製作に際して生じるブランディングチップが2点含まれている。

第4ブロック(K2-4)

1 G10・2 G6・11区に分布する。長軸4.5m, 短軸3.0m程のはほぼ円形を呈し, 9.0㎡ほどの面積を持つ。全体的にはまばらな分布を示し, 集中部を持たない。尖頭器1点, ナイフ形石器1点, 彫器1点, U F3点, 剥片14点の計20点により構成される。

第5ブロック(K2-5)

2 G12・13・17・18区に分布する。長軸9.7m, 短軸5.2mの不整形を呈し, 面積は37.0㎡を測る。ただ2 G17区西北部は攪乱を受けており, 本ブロック西北部も削られている。ブロック全面に剥片・砕片が多く, 極めて密に分布している。石器組成は尖頭器12点, ナイフ形石器5点, R F1点, U F28点, 台石1点, 打器2点, 剥片358点, 砕片412点, 石核12点の計831点によって構成されている。ブロックの分布の形状は, 中央区西半に分布する尖頭器文化期のものに類似する。ただし本ブロックは縦長剥片剥離技術を中心とする技術構造であり, また二側縁加工のナイフ形石器が共存するなどの点で尖頭器文化期のものとは異なる。剥片・砕片が多いため, ツールの出現率は5.90%と低い。また石核の占める割合も極めて低い。

第6ブロック(K2-6)

2 G14・18・19・24区に分布する。長軸6.7m, 短軸4.7mほどの楕円形を呈し, 15.7㎡の広がりを持つ。第5ブロックに接するが, 砕片が極めて少なく, また分布上の核をもたない点で対照的である。ナイフ形石器2点, R F2点, U F7点, 礫石類5点, 剥片29点, 砕片2点, 石核1点の計18点で構成されている。礫石類の多いのが目につくが, 4点は同一個体が熱破砕したものである。

第7ブロック(K2-7)

2 G20・24・25区に分布する。長軸5.5m, 短軸1.4mほどの長楕円形を呈し, 6.0㎡の広がりを持つ。石器組成はR F1点, U F2点, 剥片6点の計9点である。第6ブロックと第8ブロックの間を埋めるように分布する。

第8ブロック(K2-8)

2 G20・25, 3 G16・21区に分布する。径4.5mほどのほぼ円形を呈し, 10.6㎡の広がりを持

つ。全体にまばらな分布状況で核を持たない。ただ土壌の水洗選別により3G16区を中心に微細な破片がまとまって検出されており(第6節参照)、若干の石器製作作業痕跡を持つ。石器組成はナイフ形石器3点、RF2点、UF3点、敲石類3点、剥片21点、石核2点の計34点であり、トールの出現率は32.35%と比較的高い。

第9ブロック(K2-9)

2G24・25区に分布する。長軸2.2m、短軸0.5mの楕円形を呈し、0.6㎡の面積を持つ。RF1点、UF1点、敲石類1点、剥片3点の計6点が小さくまとまる。

第10ブロック(K2-10)

2G21・22・23、2H1・2・3区に分布する。長軸12.0m、短軸7.0mほどの不整楕円形を呈し、51.3㎡の広がりを持つ。石器総数が87点と比較的多く、分布の広がりも大きい。破片が極めて少なく分布上の核を持たない。水洗選別では2H1・2区境界付近で破片が得られたが、分布範囲が狭く、数量も少ない。なお2H1区及び2G22区の一部には攪乱溝が認められたが、平面分布状況を見る限り石器群の大幅な移動、欠落等はないものと思われる。石器組成は尖頭器1点、ナイフ形石器2点、UF21点、敲石類4点、台石1点、剥片51点、石核7点より構成されている。UFや礫石器類が多い割にはナイフ形石器が少ない。

第11ブロック(K2-11)

3G20・25、4G16区に分布する。長軸3.9m、短軸1.9mほどの楕円形を呈し、3.8㎡の広がりを持つ。小型で散漫な分布状況を示すブロックだが、破片を2点含む。周囲には他にブロックがなく、単独で存在する。石器組成はRF1点、UF1点、剥片5点、破片2点、石核1点の計10点で構成されている。

第12ブロック(K2-12)

1H10、2H6・11区に分布する。長軸4.3m、短軸2.7mほどの不整円形を呈し、7.2㎡の広がりを持つ。極めて希薄な分布状況で、ブロックの中央部は空白となっている。石器組成は彫器1点、UF1点、敲石類1点、剥片6点、石器総数9点と小規模なものである。

第13ブロック(K2-13)

2H7・12・13区に分布する。長軸5.7m、短軸3.0mの楕円形で、11.0㎡の広がりを持つ。分布の広がり第14・15・16ブロックに類似するが、石器総数は9点と少ない。ブロック東側の2H13区に5点の石器がまとまり、西側ではかなり希薄になっている。ブロック西北部には攪乱溝が走っているために分布が散漫であることも考えられるが、攪乱を受けていない周囲の状況を見ると、もともと石器群が少なかったのではないかと思われる。石器組成はナイフ形石器1点、UF2点、剥片6点である。

第14ブロック(K2-14)

2H9・10・13・14・15区に分布する。長軸6.5m、短軸4.1mほどの不整楕円形で、19.7㎡の面積を持つ。全体的に一様な分布状況を示しており、核を持たない。石器総数は44点とブロックの中では中程度の規模を持つが、破片は2点しか含まれていない。ブロックの外縁部に4点

410 第4節 石器の分布

のナイフ形石器が分布する。石器組成はナイフ形石器4点、UF4点、礫石類3点、剥片30点、砕片2点、石核1点である。

第15ブロック (K2-15)

2H13・18・19区に分布する。長軸6.5m、短軸3.8mほどの楕円形を呈し、14.2㎡の広がりを持つ。東西2ヶ所に分布のまとまりがあり、あるいは二つのブロックに分離した方が良くかも知れないが、2H19区を中心として小型の攪乱溝が数条走っており、その影響を一部受けたためにブロック中央部に石器群が少ないのかも知れない。また規模の面では隣接する第14ブロックに近いものの、土壌の水洗選別では微細な砕片が比較的多くまとまって得られている。個別別資料の内容も考慮すると、ブロックの規模があまり大きくないわりには石器製作作業が頻繁に行われていたことが窺われる。石器組成は尖頭器1点、ナイフ形石器2点、UF7点、礫石類1点、剥片51点、砕片5点、石核4点の計71点で構成されている。石核が少ないことが注意される。

第16ブロック (K2-16)

2H15、3H6・7・11区に分布する。長軸7.2m、短軸4.3mの楕円形を呈し、18.0㎡の広がりを持つ。石器群がブロック全面に一樣に分布する。第17ブロックに近接するが、個別別資料の共有関係では、むしろ第19ブロックとの関連の方が強い。土壌の水洗選別ではブロック南部(3H11区)で砕片がまとまって検出されている。本ブロック中央部やや東寄りに南北に攪乱溝が1条走っているが、周囲の状況から見ると、もともと攪乱溝の部分にはほとんど石器群が分布していなかったと思われる。石器組成はナイフ形石器1点、RF1点、UF3点、剥片24点、砕片4点、石核3点の計36点で構成されている。

第17ブロック (K2-17)

2H15・20・25、3H11・12・13・16・17・18・21、2I5、3I1区に分布する。長軸17.0m、短軸6.5mほどの規模で、本来は楕円形を呈していたと思われるが、後世の攪乱のため鏡形に残されている。攪乱部を推定復原すると、約50㎡の広がりを持っていたと考えられる。石器群の分布を見ると、一見3H16区の中央部を南北に走る空白帯によって二つのブロックに分けられそうであるが、この空白帯は別添第2図で示す通り攪乱溝と一致している。また空白帯を挟んで東西の接合が頻繁であること、石器群が集中的に分布する中央部に空白帯があることなどを考慮すると、少なくともこの空白帯がブロックの境界にはならないものと判断される。また、本ブロックの南東側(3H16・17・18区南半、2I区東半、3I5区東半)は大きく削られ、本来のブロックの形状や内容が損われている。したがって、かなりの石器群が欠落していたり、複数のブロックが一つの大型ブロックに見えてしまう可能性があるなど問題点も多い。ただし発掘時の所見では、検出された石器群の平面的な位相関係はあまり変わっていないと思われたため、一括して分析することにした。分布状況を詳しく見てみると、砕片が密集する分布上の核が数ヶ所認められる。2H20・25区の西半部に1ヶ所、2H20・25区東半部から3H11・16・21区西半部にかけて南北に並んで3ヶ所、3H11・12・13区南半部から3H16・17・

18区北半部にかけて東西に並んで2ヶ所、計6ヶ所の碎片を中心とした核を持つ。また石核も碎片の集中分布域に近接して4ヶ所ほどのまとまりを形成しており、石器製作作業の痕跡がそのまま残されている。石器組成は尖頭器5点、ナイフ形石器16点、スクレイパー5点、RF13点、UF80点、敲石類8点、台石1点、剥片708点、碎片304点、石核44点の計1,184点で構成されている。

第18ブロック (K2-18)

3H8・9・14区に分布する。長軸4.5m、短軸4.0mほどのほぼ円形を呈し、10.0㎡の広がりを持つ。分布上の核はなく、総数31点の石器群が比較的一様に分布する。第17ブロックとの間には南北に攪乱溝が走っているが、やや離れているため直接本ブロックに影響ないものと思われる。石器組成はナイフ形石器2点、UF3点、敲石類2点、剥片22点、碎片1点、石核1点で構成されている。土壌の水洗選別では若干の碎片が得られている。

第19ブロック (K2-19)

3H4・5・10、4H1・2・6・7・8・11区に分布する。径10.0mほどの円形を呈し、63.2㎡の広がりを持つ。ブロック西寄りに剥片・碎片・石核などにより構成される分布上の核を持つ。土壌の水洗選別でも核のある地点より微細な碎片がまとまって検出されている。東に向って緩やかに下がる斜面に位置し、また削平を受けた痕跡があり、ブロックの中でも垂直分布が上部に位置する石器群がある程度失われているようである。石器組成はナイフ形石器4点、スクレイパー2点、RF2点、UF17点、敲石類4点、剥片86点、碎片13点、石核18点の計146点で構成されている。石器総数の中で石核の占める割合が高い。

第20ブロック (K2-20)

3H20、4H16・17区に分布する。長軸5.6m、短軸2.6mほどの長楕円形を呈し、4.2㎡の広がりを持つ。ただし、4H16・17区中央以南は大きく削り取られており、実際には石器群の分布がさらに南に広がっていた可能性がある。ツールは1点も含まれず、石核が3点検出されている。石器組成は剥片6点、碎片1点、石核3点の計10点で構成されている。

第21ブロック (K2-21)

2I11区に分布する。長軸1.2m、短軸1.0mほどのほぼ円形で、0.6㎡の広がりを持つ極めて小型のブロックである。UF2点、剥片3点、碎片1点の計6点で構成されている。

第22ブロック (K2-22)

2I9・10・15区に分布する。長軸6.7m、短軸4.6mほどの楕円形を呈し、面積は24.2㎡を測る。ブロック北側の第17ブロックに接する付近に全体の%の石器群が集中する。碎片は9点検出されており、他の同規模のブロックに較べて多いが、このうち8点はブロック北側にまとまっている。第17ブロックとの間に攪乱の痕跡があり、あるいは本ブロックと第17ブロックとが繋がっていたのかも知れない。石器組成はナイフ形石器2点、UF4点、剥片19点、碎片9点の計34点で構成されている。

第23ブロック

2E25, 3E6, 21区に位置し、長軸4.0m、短軸1.5m、面積4㎡の楕円形の範囲にUF1点、剥片7点の計8点が分布する。中央群内のナイフ形石器群、尖頭器石器群いずれのブロック群とも離れて単独で存在し、また、石器の形態的屬性によっても時期を明確にし得ない。ただ、本ブロックの西側に5mほど離れて位置する第10号土坑内に尖頭器製作の際に生じる微細なポイントフレイク類がまとまって含まれていたこと、今回の報告範囲外ではあるが、10mほど北の2E4・5・9・10区に位置するブロック内にもポイントフレイクが含まれていたことを考えると、第IIブロック群のように尖頭器に少量のナイフ形石器が伴う石器群が北に広がりを持つ可能性がある。したがってここでは本ブロックを第IIブロック群に近い時期の石器群として捉えておく。

以上概観してきた23ヶ所のブロックは、その分布の形状により次のように分類できる。

A類：分布の中心部に剥片・砕片・石核などにより構成される集中部(核)を持つもの。核があまり大きくなく、核の周囲に一定量の石器群が分布するもの(1)とブロック全体が核のように密集するもの(2)とに細分される。

B類：全体に一律な分布を示すもの。ツールがそろっており、その出現率も高いが砕片は極めて少ない。石器総数が30～60点ほどの範囲にある。

C類：まばらな分布を示すもの。ツールの出現率が高いものの各器種がそろってはいない。石器総数が10点以下のものが大半で、いずれも小規模である。

各ブロックは視覚的に見た石器群のまとまりの中で最小単位として認識されるものである。しかし、その場での行動内容は石器群の内容と表裏一体の関係で、幾つかのパターンがあると思われる。ブロックを三類型に分けた意図も、石器群の分布から人間活動のパターンを導くための単位として、より有効に活用するために他ならない。後節で行う分析も基本的にはブロック類型に基づくものとする。

さて、以上のように分布上のまとまりとしてブロックに含まれるもの以外に中央群全体では5名弱の、いずれのブロックにも属していない石器群がある。ひと口にブロック外とは言っても、ブロックに近接しつつも視覚的にブロックに組み込めない、いわばブロックの周辺部的なもの、ブロックとは距離的に隔たった空間にまばらに分布するものがある。前者をブロック周辺部、後者を散漫分布域と呼びたい。

ブロック周辺部のものは、先述した第1～3, 5～10, 14～20・22ブロックの周囲に分布する。石器組成はナイフ形石器4点、UF11点、敲石類3点、剥片23点、砕片4点、石核3点の計48点で構成されている。

散漫分布域についての詳細は後述するが、全体での石器組成は尖頭器1点、ナイフ形石器7点、スクレイパー5点、RF2点、UF17点、敲石類5点、打器1点、剥片43点、砕片4点、石核6点の計91点で構成されている。

ブロック群と散漫分布域

今まで説明してきた23ヶ所のブロック、ブロック周辺部及び散漫分布域の石器群は巨視的に見ると複数のブロックとブロック周辺部によって形成される4ヶ所のブロック群と9ヶ所の散漫分布域(単独ブロックを含む)とに分けられる。なお、ブロックの周辺部はまとめてブロック群内の周辺部(以下ブロック群周辺部とする)として扱う。

第Iブロック群は第1・2・3ブロック及びその周辺部によって構成される。ブロックの類型はA₁類1ヶ所とC類2ヶ所で比較的小規模なものである。長軸15m、短軸9mほどの楕円形の空間で、面積はおよそ200㎡である。石器組成はナイフ形石器6点、RF5点、UF30点、敲石類1点、剥片125点、砕片30点、石核12点の計209点である。

第IIブロック群は第5・6・7・8・9・10ブロック及びその周辺部により構成されている。ブロックの類型は、A₂類1ヶ所、B類3ヶ所、C類2ヶ所である。長軸30m、短軸15m、面積300㎡ほどの楕円形の空間的広がりを持つ。石器組成は尖頭器13点、ナイフ形石器12点、RF7点、UF65点、敲石類14点、台石2点、打器2点、剥片477点、砕片415点、石核24点の計1,031点である。

第IIIブロック群は第14・15・16・17・22ブロック及びその周辺部により構成される。ブロックの類型はA₁類1ヶ所、B類4ヶ所である。第17ブロックが削られているため、分布の規模が正確に捉えられないが、長軸28m、短軸15~17m、面積350㎡ほどの楕円形の空間と思われる。石器組成は尖頭器6点、ナイフ形石器25点、スクレイパー5点、RF14点、UF103点、敲石類12点、台石1点、剥片841点、砕片324点、石核52点の計1,383点で構成されている。ブロック数は第IIブロック群より少ないものの、石器総数は最大である。

第IVブロック群は第18・19・20ブロック及びその周辺部により構成される。ブロックの類型はA₁類1ヶ所、B類1ヶ所、C類1ヶ所である。長軸17.5m、短軸14m、面積200㎡ほどのほぼ円形の空間である。石器組成はナイフ形石器10点、スクレイパー2点、RF2点、UF21点、敲石類8点、剥片118点、砕片17点、石核22点の計200点構成されている。

散漫分布域については、一定範囲の機能空間という意味で単独ブロックを含めて考える場合とブロック群周辺部のように、散漫な石器群だけを取り扱う場合がある。前者では散漫分布域A、後者では散漫分布域aと表記方法を変えて区別する。

散漫分布域aは2F区南東部、2G区北部に広がる。長軸18m、短軸8m、面積70㎡の空間である。石器組成はRF1点、UF2点、敲石類1点、剥片3点、砕片1点の計8点である。

散漫分布域bは1G区東南寄りに分布する。長軸17m、短軸7m、面積100㎡ほどの楕円形の空間である。石器組成は尖頭器1点、UF1点、剥片4点、石核2点の計8点で構成されている。

散漫分布域cは3G区北端部に分布する。長さ7mほどの直線上にナイフ形石器1点、UF1点、剥片2点の計4点が並んでいる。面積は7㎡ほどである。

散漫分布域dは4F区に分布する。長軸14m、短軸8m、面積70㎡ほどの楕円形の空間であ

414 第4節 石器の分布

る。石器組成はUF 2点、礫石類 2点、剥片 3点、砕片 1点、石核 2点の計10点により構成されている。

散漫分布域 e は 3 G 区東半部、4 G 区、5 G 区西端部、4 H 北端部に分布する。長軸35m、短軸26m、面積560㎡ほどのほぼ円形を呈す。ただし、この広い空間全域に石器群がまばらに分布するのではなく、次の5ヶ所のまとまりがある。散漫分布域 e1 は 4 G 1 区にあり、径0.7 m ほどの円形の中に剥片 3 点が分布する。散漫分布域 e2 は 3 G 20・23・24・25、4 G 16 区に分布する。第11ブロックの周辺部で長軸12.0m、短軸4.0mほどの長楕円形の中にUF 1点、剥片 4点、石核 1点の計6点がある。散漫分布域 e3 は 4 G 6・11 区に分布する。長軸5.0m、短軸3.0 m ほどの楕円形を呈し、スクレイパー 3 点、RF 1 点、剥片 2 点の計 6 点がゆるやかにまとまる。散漫分布域 e4 は 4 G 8・9・14・15・19・20、5 G 11 区に分布する。長軸13.0m、短軸8.0mほどの楕円形を呈す。石器組成はナイフ形石器 2 点、UF 5 点、礫石類 1 点、剥片 6 点、砕片 1 点の計15点により構成されている。散漫分布域 e5 は 4 G 24・25、4 H 3・4・5・9・10 区に分布する。長軸9.0m、短軸8.0mほどの楕円形に近い。石器組成はスクレイパー 1 点、UF 2 点、礫石類 1 点、剥片 2 点の計 6 点で構成されている。全体ではナイフ形石器 2 点、スクレイパー 4 点、RF 1 点、UF 8 点、礫石類 2 点、剥片 17 点、砕片 1 点、石核 1 点の計 36 点で、ツールの出現率が47.22%と非常に高く、また各器種がそろっている。

散漫分布域 f は 1 H 区、2 H 区西半に分布する。長軸22m、短軸13mほどの空間である。第12・13ブロック以外は全体的にまばらに分布する。石器組成はナイフ形石器 3 点、UF 2 点、剥片 6 点、砕片 1 点の計12点で構成されている。

散漫分布域 g は 3 H 25、4 H 13・18・24 区に分布する。底辺 5 m、高さ 9 m ほどの三角形の空間にスクレイパー 1 点、剥片 3 点が極めてまばらに分布する。本領域はかなり削平を受けているため、本来の状況はもっと石器群が多かったかも知れない。

散漫分布域 h は 1 I 区、2 I 区西端部に分布する。長軸14m、短軸 5 m ほどの長楕円形を呈する空間である。石器組成はナイフ形石器 1 点、剥片 5 点、石核 1 点の計 7 点で構成されている。

散漫分布域 i は 2 E 区南西部に位置する。長軸 9 m、短軸 2 m ほどの長楕円形の空間である。2 E 21 区に打器 1 点、2 E 23 区に UF 1 点が分布する。

以上説明を行ってきた各散漫分布域は、石器総数は少ないもののツールの出現率が高く、石器製作作業を伴わずに石器が使用された場と見ることができる。この場合、一定期間を本道跡で生活した人々が中央群内の他のブロックで製作した石器を持ち込んで使用した空間ということが考えられるが、他には本領域に移動してきた人々が石器製作作業を行う前に再び去って行った一次的な滞在空間であったと考えることもできる。個体の分析を通して検討したい。

(島立)

2. 器種別分布

1) 尖頭器

尖頭器は中央群の中に万遍なく分布するのではなく、2G、2H、3H区内の5ブロック及び散漫分布域に限って分布する(別添第17図)。その内訳は第4ブロックに1点、第5ブロック12点、第10ブロック1点、第15ブロック1点、第17ブロック5点、散漫分布域b1点であり、第5ブロックに全体の60%が集中する。

まず尖頭器を調整加工の在り方によって分類し、それぞれの分布状況を見てみよう。分類は両面加工、片面加工、周辺加工の3種類である。全体での数量は、両面加工7点(35.00%)、片面加工6点(25.00%)、周辺加工4点(20.00%)、不明4点(20.00%)で、本石器群の尖頭器は両面加工を中心とし、それに片面加工、周辺加工が加わって構成されていることがわかる。

これをブロック毎に見てみると、第4ブロックは周辺加工1点、第5ブロックは両面加工3点、片面加工4点、周辺加工1点、不明4点、第10ブロックでは片面加工1点、散漫分布域bは片面加工1点である。第4・5・10ブロック、散漫分布域bは第IIブロック群及びその関連ブロックで、片面加工や周辺加工のものが比較的まとまっている。第15ブロックは両面加工1点、第17ブロックでは両面加工3点、周辺加工2点である。この2ブロックは第IIIブロック群で、両面加工のものが多し。ブロックあるいはブロック群を単位とすると、尖頭器の調整加工の在り方には、ある程度偏りがある。これはブロックの機能の違いというよりは、むしろ製作者集団の好味や癖で、時期の違いと思われる。

次に尖頭器の破損状況を分布と結び付けて検討してみよう。破損分類はナイフ形石器と同じ基準である。これをブロックの類型を単位として整理すると、A₁及びA₂類ブロックではA類2点(11.76%)、Bb類1点(5.88%)、Ca類6点(35.29%)、Cb類6点(35.29%)、不明2点(11.76%)で、破損度合の大きいC類が70%以上を占めている。一方、B類ブロックではBa類1点、Cb類1点、またC類ブロックではBa類1点で、B、C類ブロックは数量が少ないため、分布の傾向が導き出せなかった。A₁・A₂類ブロックに多いC類についてであるが、尖頭器は遺跡外での狩猟で使用されたと想定されるため、遺跡内の、特に石器製作空間にある小破片は製作途上に生じたものと思われる。特に第5ブロックでは尖頭器と同一個体の資料がまとまっており、これを裏付けている。

2) ナイフ形石器

ナイフ形石器は15ヶ所のブロックに51点、ブロック外に11点が分布する。先述したブロックの類型毎に見てみると、A₁類ブロック25点(40.32%)、A₂類ブロックに5点(8.06%)、B類ブロック18点(29.03%)、C類ブロック3点(4.84%)、ブロック外11点(17.74%)という内訳になる。ブロック類型毎の石器総数はA₁類1,526点(51.29%)、A₂類831点(27.91%)、B類385点(12.93%)、C類100点(3.33%)、ブロック外139点(4.53%)であり、ナイフ形石器の分布状況と比較してみると、A₂類はナイフ形石器が少なくB類、ブロック外は

ナイフ形石器が多いと言える。

次にどのような領域にどのような状況でナイフ形石器が遺存しているかを見てみよう。

まずナイフ形石器の破損状況を残存部位に従って以下のように分類する(第215図)。

A類; 完形およびこれに準ずるもの。

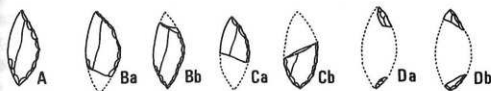
B類; 復原してみると、全体の%以上が残存すると判断できるもの。先端部を持つもの(a)と持たないもの(b)とに細分する。

C類; 復原してみると、全体の%以下が残存すると判断できるもの。B類と同様に細分する。

第46表はブロックの類型とナイフ形石器の破損状況との関係を示したものである。全体での破損状況はA類20点(32.26%), Ba類13点(20.97%), Bb類6点(9.68%), Ca類12点(19.35%), Cb類11点(17.74%)である。まとめると、A類20点(32.26%), B類19点(30.65%), C類23点(37.10%)となる(別添第18図)。この比率を基準とすると、A類ブロックにおける破損状況は基準内容と一致するが、B類ブロックではB類が少なく、C類が多いという偏りがある。破損品が多く、中でも破損度合の大きいものがまとまっているわけである。C類ブロックではナイフ形石器が3点しか検出されていないため、その傾向はつかめない。ブロック外ではB類が多く、C類が少ないというB類ブロックとは逆の結果が出た。

さて、ここでナイフ形石器が使用され、破損した状況を考えてみよう。全体の%以上が残存するB類は、使用され破損した場所にそのまま遺棄される場合と共に、再加工、再利用のために他の場所へ持ち出された可能性も十分に考えられる。一方、全体の%以下が残存するC類は破損した場にそのまま遺棄された場合の方が多かったのではないかと思われる。そう考えると、少なくとも破損形態C類の多いB類ブロックは、他の場所より高い頻度でナイフ形石器が使用され、破損した場所ということになる。これを遺棄ではなく、廃棄(意図的に持ち込んで捨てた)とする考え方もあるが、B類ブロックに含まれるナイフ形石器の%を占める完形品A類の解釈に苦しむ。仮に廃棄行為があったとすれば、砕片などが多く集積するA類ブロックの方であろう。一方ブロック外はB類が多く、他の場所で破損した本体の方を持ち込んだようである。

次にナイフ形石器の形態別の分布状況を見てみよう(別添第19図)。中央群全体では形態A 1が16点(25.81%), A 2が1点(1.61%), A 3が4点(6.45%), Bが10点(16.13%), Cが10点(16.13%), Eが2点(3.23%), 不明19点(30.65%)という内訳である。第47表はブロック毎にナイフ形石器の形態組成を示したものである。これをブロック群を単位として見てみると、第Iブロック群では一側縁加工の形態Bが中心である。中には国府型ナイフ形石器に類似するものも含まれている。他には形態A 3が若干加わる。一方、第II, IIIブロック群では、いずれも二側縁加工の形態A 1が組成の中心になっている。ただ第IIIブロック群では部分加工の形態Cが形態A 1と同数伴っている。第IVブロック群では各形態が少しずつそろって存在しており、形態の偏りは見られない。以上ブロック群を単位とすると、ナイフ形石器の形態組成は一定の差異が認められる。ナイフ形石器の形態差は若干の機能、用途の違いと思われるが、ブロック群毎の形態組成の差異は、従来の南関東地方を中心とする茂呂系ナイフ形石器



第215図 ナイフ形石器の破損形態分類

第46表 ブロック・ブロック群別ナイフ形石器破損状況

	A	Ba	Bb	B	Ca	Cb	C	計
第2ブロック		1		1				1
3	2	2	1	3				5
4					1		1	1
5		2		2	1	2	3	5
6	1					1	1	2
8	1				2		2	3
10	1		1	1				2
13		1		1				1
14			1	1		3	3	4
15	2							2
16						1	1	1
17	7	1	2	3	4	2	6	16
18		1		1	1		1	2
19	2	1		1	1		1	4
22					1	1	2	2
第IVブロック群 周辺部	1	2		2	1		1	4
散漫分布域 c						1	1	1
e	1	1		1				2
f	2	1		1				3
h			1	1				2
計	20 32.26	13 20.97	6 9.68	19 30.65	12 19.35	11 17.74	23 37.10	62
A類ブロック	11 36.67	6 20.00	3 5.00	9 30.00	6 20.00	4 13.33	10 33.33	30
B類ブロック	5 27.78	1 5.56	2 11.11	3 16.67	4 22.22	6 33.33	10 55.56	18
C類ブロック		2 66.67		2 66.67	1 33.33		1 33.33	3
ブロック外	4 36.36	4 36.36	1 9.09	5 45.45	1 9.09	1 9.09	2 18.18	11
計	16 31.37	9 17.65	5 9.80	14 27.45	11 21.57	10 19.61	21 41.18	51

上段：実数，下段：％

第47表 ナイフ形石器ブロック別形態組成

ブロック	A ₁	A ₂	A ₃	A	B	C	D	E	不明	計
2			1	(1)						1
3			1	(1)	4					5
4								1		1
5	2			(2)				1	2	5
6	1			(1)					1	2
8					1				2	3
10			1	(1)					1	2
13					1					1
14					1	1			2	4
15						2				2
16									1	1
17	6			(6)	1	4			5	16
18		1		(1)					1	2
19					1	1		1	1	4
22	1			(1)					1	2
第IVブロック群 周辺部	1		1	(2)	1	1				4
散漫分布域C									1	1
E	2			(2)						2
F	3			(3)						3
H						1				1
計	16 25.81	1 1.61	4 6.45	(21) (33.87)	10 16.13	10 16.13	0	2 3.23	19 30.65	62
第Iブロック群			2 33.33	(2) (33.33)	4 66.67					6
II	3 25.00		1 8.33	(4) (33.33)	1 8.33			1 8.33	6 50.00	12
III	7 28.00			(7) (28.00)	2 8.00	7 28.00			9 36.00	25
IV	1 10.00	1 10.00	1 10.00	(3) (30.00)	2 20.00	2 20.00		1 10.00	2 20.00	10

の研究成果をみると、時間的差異として捉えられる。したがって尖頭器の共伴関係も考え合せると、一側縁加工を中心とし尖頭器を含まない第Iブロック群が最も古く、二側縁加工を中心としながらも尖頭器が主体となる第IIブロック群が最も新しい。第III、IVブロック群は、ナイフ形石器や尖頭器からはその前後関係が不明だが、いずれも第Iブロック群から第IIブロック群へと移り変わる過程の中に位置付けられるだろう。ブロック外あるいは単独ブロックのナイフ形石器は、形態組成を把握できないため明確ではないが、加工のしっかりした二側縁加工のものが多く含まれる点から考えると、第III、IVブロック群とはほぼ同じ時期ではないかと考えられる。

3) スクレイパー

中央群にはスクレイパー12点が分布する(別添第17図)。スクレイパーは第17ブロックに5

点、第19ブロックに2点、散漫分布域e3に3点、散漫分布域e5, gに1点ずつ分布する。巨視的に見ると、中央群東側に集中していることがわかる。また分布の特徴として、石器総数が多く、工作空間的なA1類ブロックと、それとは全く対照的に石器群が極めてまばらに分布する散漫分布域に限って認められる。特に中央群東端の散漫分布域e, gに全体の40%以上がまわっており、スクレイパーの使用と密接な関わりを持った特殊な機能空間であったことが想定される。

4) 彫器

彫器は第4, 12ブロックに1点ずつ計2点が分布する(別添第17図)。この2ヶ所のブロックは、いずれも石器総数の少ないC類ブロックで、また、先のスクレイパーとは逆に中央群西側に分布する。スクレイパーとは相互に負の関係にあるようだが、数量が少ないため詳細は不明である。(烏立)

5) 蔽石類・台石

蔽石類(蔽石, 局部磨製礫, 槌石)は、合計52点分布している(別添第17図)。これらの出土位置を石器ブロックとの関わりで検討することは、蔽石類自体の用途をはじめ、集落内における場の機能を考える際に重要な示唆を与えてくれる。

蔽石(I a, II~V類), 局部磨製礫(VI類), 槌石(I b, VII a, VII b類)のそれぞれに分けて、分布状況を観察しておきたい。

まず、各器種ごとの内訳を列記する。蔽石37点(71.2%), 局部磨製礫4点(7.7%), 槌石10点(19.2%)である。そしてブロック内に分布するものは合計33点で、この内訳は蔽石25点(75.8%), 局部磨製礫2点(6.1%), 槌石6点(18.2%)となる。これに対しブロック外のもは合計18点で、蔽石12点(66.7%), 局部磨製礫2点(11.1%), 槌石4点(22.2%)の内訳である。ブロック外の資料がほぼ1/3の割合を占める。

ここで中央区に限定して、詳しく分布状況を見て行きたい。中央区には23カ所のブロックが存在している。これらのうち11ブロックから蔽石類の分布が認められる。北から順にみっていくと、第3ブロックには、槌石(VII a類)が1点分布する。遺物分布の密集域に入っていると言える。

第6ブロックは、蔽石(I a類)を5点有する。遺物分布の散漫なブロックながら、1点の蔽石はこの中心部に位置している。他の4点は、中心部から外れた周縁部に分布する。なお、本ブロックの外になるが、北側に近接して局部磨製礫(VI類)が1点出土している。

第8ブロックには、蔽石(I a類)が3点分布している。これらはすべてブロックの中心部から外れた北側に位置する。

第9ブロックは小ブロックで、資料点数はわずか5点である。蔽石(I a類)を1点含み、これはブロックの外縁部に入るものと言える。

第10ブロックは東西に細長く広がる。蔽石(I a類)を1点、槌石(VII a類)を3点(互いに接合)含む。ブロックの中心部に近いが、I a類の蔽石は遺物分布の途切れたいわゆる密集

域の外縁部に位置している。

第12ブロックは、Ia類の礫石を1点有する。資料点数がわずか7点の小ブロックであり、礫石を含む全ての遺物がブロック外縁部に属する。

第14ブロックには、局部磨製礫1点と礫石(Ia類)が2点分布している。局部磨製礫は比較的ブロックの中心部に、一方、礫石は中心からは離れているのがわかる。

第15ブロックには、礫石(Ia類)が1点分布する。ブロックの中心部分に入るが、2ヶ所の遺物密集部の間の谷間のような所で、疎らな遺物分布域内に当たっている。

第17ブロックは、擾乱地区を含む広い範囲をもつ。礫石(Ia類)7点、槌石(Wa類)1点が分布する。これらはブロックの周辺部分に位置しており、遺物の密集部からはことごとく離脱しているのが観察される。

第18ブロックには礫石(Ia類)が2点分布する。全体的に資料が疎らに散在するブロックであり、密集域はない。2点の礫石のうち1点は中心部に分布し、もう1点は北側のやや中心部から外れた周縁部に位置していると言える。

第19ブロックには、礫石(Ia類)3点と、局部磨製礫1点が分布する。礫石のうちの1点が密集箇所ではないが、比較的ブロックの中心部に入っている。その他はすべて中心から4m以上も離れたブロック周縁部に位置しているのが観察される。なお、本ブロックの南東部に近接して、さらに礫石(Ia類)が2点分布している。

礫石の多くをブロック内外における位置関係で観察した結果、以上のごとくブロック内の遺物密集域に入るものは皆無に近いというのが実情である。このことは、石器ブロック内が礫石の機能空間ではないことを端的に示唆している。

局部磨製礫及び槌石については、点数が少なく明瞭な分布傾向を捉めない。しかしながら第1・14ブロックで見られるように、ブロック中心部に分布する傾向を明確にし得るならば、石器製作空間とのつながりがよりはっきりしてこよう。

台石は合計3点出土している。いずれもブロックに含まれるが、特に2G13区のはブロック中心部の遺物密集域に分布する。この第5ブロックには礫石類は分布しない。2G22区及び2H15区の台石は、いずれもブロック中心部から離れているが、礫石類とも距離をおいている。

2G22区の台石がIa類の礫石(別添第17図)に最も近く、約1.4mの距離にある。しかしながらセット関係として捉えるには問題が残る。(黒坪)

6) 打 器

打器は散漫分布域iと第5ブロックに分布する(別添第17図)。散漫分布域iの1点は中央区石器群全体の分布の外れにあり、石器の性格そのものとも相俟って評価が難しい。第5ブロックの1点は、半分は割れて出土している。第5ブロックは石器製作の色あいが強いが、打器はその北西縁の石器分布が途切れる所に分布する。散漫分布域iの資料も含めて、石器集中部の外にあるべき性格を備えているのであろうか。

7) RF

RFは11ヶ所のブロックに29点、散漫分布域に2点があり、ブロック周辺部には全く分布していない(別添第17図)。ブロック別に見てみると、第17ブロックに13点、第3ブロックに4点がまとまって分布する他は、第2・5・7・9・11・16ブロックに各1点、第6・8・19ブロックに2点ずつ含まれており、各ブロックのRFの実数は比較的一定している。他に散漫分布域aに1点、散漫分布域cに1点分布する。

ブロックの類型を単位として整理すると、A₁・A₂類ブロック20点(64.52%)、B類ブロック4点(12.90%)、C類ブロック5点(16.13%)、ブロック外2点(6.45%)となる。石器総数の多いA₁・A₂類ブロックに集中しているが、石器総数と較べてみると、必ずしも正比例の関係ではなく、B・C類ブロックあるいはブロック外にも全体の5強が分布している。

8) UF

ツールの中では最も多いもので、ブロック内に220点、ブロック外に28点が分布する(別添第20図)。ブロック毎に組成比を求めてみると0~40%の範囲にあり、平均すると14.45%(標準偏差8.96)となる。第20ブロックで0点の他はいずれのブロックにも多かれ少なかれ含まれ、剥片、砕片と共に石器群を構成する中核である。したがって、その分布も石器群の数に比例した関係となることが予想される。

まずブロック群毎に見てみよう。第Iブロック群30点(13.70%)、第IIブロック群65点(29.68%)、第IIIブロック群103点(47.03%)、第IVブロック群21点(9.59%)という内訳で、各ブロック群の石器総数と比較すると、第I・IIブロック群でやや少ないものの、石器総数に比例している。したがって、ブロック群毎のUFの含まれ方に違いはないと言える。それでは、場の機能と関わりをもつブロックの類型毎に集計してみよう。A₁・A₂類ブロック152点(61.04%)、B類ブロック52点(20.88%)、C類ブロック17点(6.83%)、ブロック周辺部11点(4.42%)、散漫分布域17点(6.83%)という内訳である。ブロック類型毎の石器総数の配分比との差を求めてみると、A₁・A₂類ブロック-18.17、B類ブロック+7.95、C類ブロック+3.50、ブロック周辺部+2.91、散漫分布域+3.81で、工作空間的色彩の強いA₁・A₂類ブロックで少なく、ナイフ形石器の分析では石器の使用空間的色彩の強いB類ブロックに偏在するということがわかった。もちろん実数そのものではA₁・A₂ブロックが圧倒的に多く、石器の製作から道具全体の製作に関わりを持っていたことが想定されるし、また、その他の場所でも多様な機能を発揮したものと思われる。現在の研究では、まだUFの使用痕の差違を体系的にまとめあげ、それぞれの機能を推定することは困難であるが、UFが使用された結果認識できるツールであることを考えると、ナイフ形石器など加工されたツールとは異なり、遺棄のされ方の違いが機能の違いに結びつくのかも知れない。その点で、A₁・A₂類ブロック内に遺棄されたUFとそれ以外のブロック、あるいはブロック外のUFとは、見かけ上同じであっても全く別の使われ方の結果、出来たと考えることができる。UFの使用痕と分布との関係を探る

必要があるかと考える。

9) 剥片

剥片は中央区全域に分布している(別添第21図)。剥片とひと口に言っても様々なツールや石核の素材,あるいはそのまま使用する目的的なものと,目的とする剥片やツールを製作する過程で副次的に生じるものがある。したがって,各ツールの素材の形状を推定したりUFの属性をまとめることなどにより,どのような属性をもつ剥片が目的的なものであるのかを想定することができるはずである。また石核の側面調整や打面形成の際に生じる剥片は,目的とするものを有効に得るための準備のために剥離される性格のもので,少なくとも製作者の頭の中では目的とするものを得ようとする意識は調整剥片そのものに対してはあまりなかったように思われる。ところが実際には調整剥片を利用したツール類がある程度認められる。またナイフ形石器,スクレイパー,RFの素材はそれぞれかなり属性が異なっており,形状から目的剥片を規定することも容易でない。石器素材の許容範囲が広く,また結果的に使えれば調整剥片をも利用するといった比較的ルーズなものだったのかも知れない。そこで目的剥片が規定できず,本項でも剥片を一括して分布状況を述べることにする。

まず剥片と認定したものは中央群に1,648点ある。他の石器をも含めると全石器群は2,981点であるから,55.28%を占めていることになる。このうちブロック内に含まれているものは全石器群2,842点の内1,582点(55.67%),ブロック周辺部では全石器群48点の内23点(47.92%),散漫分布域では全石器群91点の内43点(47.25%)という内訳となる。ブロック内において最も剥片の占める割合が高いという結果を得た。これをブロック類型毎に見ると,A類ブロックでは53.97%,B類ブロック64.16%,C類ブロック62.63%で,石器製作作業を行っているA類ブロックにおける剥片の占める割合が最も低かった。これはA類ブロックには多量の砕片が含まれているため,剥片の占める割合が相対的に低下したものである。

次にブロック,ブロック周辺部,散漫分布域毎の剥片の占める量を見てみよう(第48表,第216図)。A類ブロックは第5ブロックの43.08%から第3ブロックの61.22%の範囲に分布する。平均55.75%,標準偏差は7.36%である。B類ブロックは第22ブロックの55.88%から第15ブロックの71.83%の範囲に分布する。比較的よくまとまっており,平均64.29%,標準偏差5.55%である。C類ブロックは第2・9・11・21ブロックの50.00%から第23ブロックの87.50%までの範囲に分布する。平均61.19%,標準偏差11.26%となる。ブロック周辺部では,第Iブロック群周辺部の25.00%から第IIIブロック群周辺部の64.29%までの範囲で,平均45.31%,標準偏差15.69%である。散漫分布域ではiの0%からhの74.43%までの広い範囲にあり,平均44.20%,標準偏差20.34%である。ブロック内ではA類ブロックが低く,B類ブロックが高いという傾向にあり,C類ブロックが両者の中間にくる。ブロック周辺部はバラツキが大きいため傾向が捉えにくい,剥片の占める割合があまり高くはならない。散漫分布域ではさらにバラツキが大きいが,ブロック群周辺部に似たような傾向である。

特に結論めいたことは出しにくい,どこにでもある剥片ではブロックの類型,あるいはブ

第48表 領域別剥片占有表

	剥片 点	石器総数 点	剥片 組成比%	(A)剥片 占有率%	(B)全石器 占有率%	(A)-(B) %	剥片×1.80 点
第1ブロック	3	5	60.00	0.19	0.18	+0.01	5.4
2	4	8	50.00	0.25	0.28	-0.03	7.2
3	120	196	61.22	7.59	6.90	+0.69	216.0
4	14	20	70.00	0.89	0.70	+0.19	25.2
5	358	831	43.08	22.64	29.25	-6.61	644.4
6	29	48	60.42	1.83	1.69	+0.14	52.2
7	6	9	66.67	0.38	0.32	+0.06	10.8
8	21	34	61.76	1.33	1.20	+0.13	37.8
9	3	6	50.00	0.19	0.21	-0.02	5.4
10	51	87	58.62	3.23	3.06	+0.17	91.8
11	5	10	50.00	0.32	0.35	-0.03	9.0
12	6	9	66.67	0.38	0.32	+0.06	10.8
13	6	9	66.67	0.38	0.32	+0.06	10.8
14	30	44	68.18	1.90	1.55	+0.35	54.0
15	51	71	71.83	3.23	2.50	+0.73	91.8
16	24	36	66.67	1.52	1.27	+0.25	43.2
17	708	1,184	59.80	44.78	41.68	+3.10	1274.4
18	22	31	70.97	1.39	1.09	+0.30	39.6
19	86	146	58.90	5.44	5.14	+0.30	154.8
20	6	10	55.56	0.32	0.32	0	9.0
21	3	6	50.00	0.19	0.21	-0.02	5.4
22	19	34	55.88	1.20	1.20	0	34.2
23	7	8	87.50	0.44	0.28	+0.16	12.6
計	1,582	2,842	-	100.01	100.02	-0.01	2845.8
平均値	68.74	123.52	61.32	4.35	4.35	0.58	123.73
標準偏差	154.89	281.59	9.45	9.80	9.91	1.43	278.80
A類ブロック	1,272	2,357	-	80.45	82.97	-2.52	2289.6
平均値	318.00	589.25	55.75	20.11	20.74	2.68	572.40
標準偏差	248.36	436.83	7.36	15.71	15.38	2.51	447.05
B類ブロック	247	385	-	15.63	13.56	+2.07	444.6
平均値	30.88	48.13	64.29	1.95	1.70	0.26	55.58
標準偏差	12.14	19.01	5.55	0.77	0.67	0.21	21.85
C類ブロック	62	99	-	3.93	3.49	+0.44	111.6
平均値	5.64	9.00	61.19	0.36	0.32	0.06	10.15
標準偏差	2.96	3.79	11.26	0.19	0.13	0.06	5.33
第Iブロック群 周辺部	1	5	25.00	4.17	10.20	-6.03	2.04*
II	9	16	56.25	37.50	32.65	+4.85	18.36
III	9	14	64.29	37.50	28.57	+8.93	18.36
IV	4	13	35.71	20.83	28.57	-7.74	10.20
計	23	48	-	100.00	99.99	+0.01	48.99
平均値	6.00	12.25	45.31	25.00	25.00	6.89	12.24
標準偏差	3.32	4.26	15.69	13.82	8.70	1.56	6.77

	剥片 点	石器総数 点	剥片 組成比%	(A)剥片 占有率%	(B)全石器 占有率%	(A)-(B) %	剥片×1.80 点
散漫分布域 a	3	8	37.50	7.14	8.70	-1.56	6.57**
b	4	8	50.00	9.52	8.70	+0.82	8.76
c	2	4	50.00	4.76	4.35	+0.41	4.38
d	3	12	25.00	7.14	13.04	-5.90	6.57
e	17	36	47.22	40.48	39.13	+1.35	37.23
f	6	12	50.00	14.29	13.04	+1.25	13.14
g	2	3	66.67	4.76	3.26	+1.50	4.38
h	5	7	71.43	11.90	7.61	+4.29	10.95
i	0	2	0	0	2.17	-2.17	0
計	42	92	-	99.99	100.00	-0.01	91.98
平均値	4.67	10.22	44.20	11.11	11.11	2.14	10.22
標準偏差	4.67	9.72	20.34	11.11	10.56	1.69	10.22

* 剥片×2.04 ** 剥片×2.19

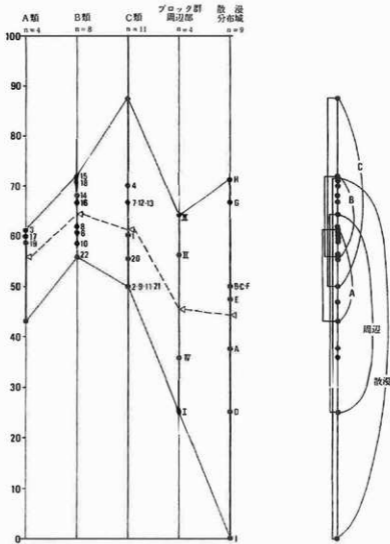
ロック外毎にその含まれ方を見てみると一定のまとまりを持ち、相互には異なっているという結果が得られた。各剥片の属性を加味した上で分布の違いを見ることができれば、それぞれの遺棄のされ方の違いなど細かな結論もできたであろうが、遺物が多量にある上、目的剥片を規定するような属性が捉えにくいということもあり、以上のような粗い分析しか行えなかった。

10) 砕片

砕片はブロック内に785点、ブロック周辺部に4点、散漫分布域に4点が分布しており、ブロック内に99%が集中する(別添第22図)。ブロック別で見ると、第5ブロック412点、第17ブロック304点、第3ブロック28点、第19ブロック13点とA₁・A₂類ブロックに著しく集中しており、その他では第22ブロック9点、第15ブロック5点、第16ブロック4点、第6・11・14ブロック各2点、第2・18・20・21ブロック各1点となる。集中度の高い第5・17・3・19ブロック内での砕片の分布状況を見てみると、その大半は石器群が特に密集する核に集まっている。換言すれば、砕片によって核が形成されているという状況である。人為的に動かされることがほとんどないと思われる砕片の集中部はそこで石器製作作業が展開されたと考えられる。特に第5ブロックでは尖頭器がまとめて検出されており、その製作に当たって、副次的に多量の砕片が生じたと思われる。一方、砕片があまり多くはない他の10ヶ所のブロックについては、石器の二次加工、あるいは特定の数個体についての剥片剥離作業に伴うものであろう。したがって、砕片は石器製作作業の頻度に合わせて生じ、その分布も石器総数の多い所に集中的にあるということになる。

11) 石核

石核は、ほとんど剥片が剥離されておらず、原石に近いものを含めると、ブロック内に108点、ブロック周辺部に3点、散漫分布域に6点が分布する(別添第22図)。砕片と同様、石器製作作業と密接に関わるため、A₁・A₂類ブロックに85点(72.62%)が集中し、若干の石器



第216図 領域別剥片組成率

製作作業を行っているB類ブロックに19点(16.24%)、C類ブロック4点(3.42%)、ブロック周辺部3点(2.56%)、散漫分布域6点(5.13%)という内訳となる。ただ、石器製作作業とはほとんど関わりのないC類ブロック及びブロック外に1割強が分布している。

石核の細かな分布状況を見てみると、第3・19ブロックでは、剥片や碎片などにより構成される核の部分を取り囲むように疎らに分布する。一方第17ブロックでは広いブロック内に4ヶ所ほど石核の集中部が碎片の集中部に重なるように形成されている。他のブロックについても上記のいずれかの在り方を示す場合が多く、石器群の集中部にまとまる傾向がある。

12) 受熱剥片

受熱剥片の認定については、火熱による特徴的な割れ(サーマルフラクチャー)及び著しい色調の変化(赤化、黒灰色化)を基準として肉眼観察によって行った。石器が火熱を受けた要

因は、炉の周辺にあったものが偶発的に焼けたと思われるため、その分布を検討することにより集落の中で最も中心的な機能を果たしていた炉の位置を推定できる可能性がある。これに自然に包含され、直接人間の手によって移動されていない砂岩の小円礫で受熱したものや炭化物粒の分布も参考にして考えてみたい。

別添第23図は受熱石器の分布状況を示したものである。これを見ると、受熱石器が集中的に分布する領域は2G13~14, 17~19, 2H15, 20, 25, 3H11~12, 16~18, 21, 2I5区で、他の領域では若干数が散見されるだけである。以上の領域は第5・6・17ブロック内に含まれており、広い中央区全体の中で受熱石器が限られた特定ブロック内に集中していることがわかる。特に第5・17ブロックはそれぞれ51点, 99点とその数量が極めて多い。ただ、受熱剥片の分布状況をさらに詳しく見てみると、両ブロックともブロック全面にほぼ万遍なく分布しており、その分布範囲は第5ブロックで長軸7m, 短軸3m, 第17ブロックでも長軸9m, 短軸4mほどの楕円形の広がりを持っており、小さくまとまっている。今、ここで炉の大きさを仮に径1~2m程度と考えた場合、受熱石器の分布範囲は想定される炉の大きさよりかなり大きなものになってしまうのである。一つの炉の大きさが長軸で7~9mもあるとは考え難く、例えば何回かにわたって少しずつ炉を移設していったか、一時的に複数の炉があったか、あるいは受熱石器そのものが受熱後に移動し拡散したといったことが考えられる。そのいずれであるかは容易に決め難いが、生活の中心となる炉の位置は固定的であることが想定されるし、また石器製作空間全面を被うほど幾つもの炉が同時に併存して使用されていたとも思われないため、受熱石器は何らかの要因で平面的に多少移動したのではなからうか。したがって、第5・6・17ブロック付近に炉があったことは確かではあろうが、炉の位置を点として、あるいは小さな面として捉えることはできなかった。

(島立)

3. ブロックの石器組成

1) ブロック別石器組成

石器群の分布状況をまとめるにあたり、ブロックの器種組成を検討し、ブロックの性格を考察してみたい。

第49表はブロック別の器種組成を表わしたものである。先にブロックを分布の形状より分類した。同時にそれはブロック内の石器総数とも関連を持つものであった。ここでは各類型内同志のブロックが機能的側面、形成要因に関して等質であるか否かという問題をブロックを構成する石器の器種組成を通して検討してみよう。

A類ブロックは第3・5・17・19ブロックの4ヶ所があり、それぞれの石器総数は第3ブロック196点, 第5ブロック831点, 第17ブロック1,184点, 第19ブロック146点と格差が見られ、各器種の数量も石器総数に比例している。まずツールの占める割合を見てみると、第3ブロック18.88%, 第5ブロック5.90%, 第17ブロック10.81%, 第19ブロック19.86%と、それぞれ比較的低い値を示している。これは、A類ブロックにおいて石器製作作業を集中的に行った

ため、剥片、砕片、残核など製品以外のものが副次的に生産され、相対的に製品の占める割合が低下したというわけである。特にA類ブロックが他の類型のブロックと著しく異なる点は、砕片がまとまって分布することである。砕片自体の割合は、第3ブロック14.29%、第5ブロック49.58%、第17ブロック25.68%、第19ブロック8.90%とブロック間のバラツキが大きく、また第19ブロックではそれほど高い値を示しているというわけでもない。しかし、実数で他の類型においては1点から数点なのに対し、第19ブロックは13点とまとまっており、顕著な差として認識できる。したがってA類ブロックの最も大きな特徴は副次生産物が集中していることである。

次に各器種を加工の施された定型石器(ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、彫器、RF)とUF、礫石器(礫石、礫石、台石、局部磨製礫、打器)、副次生産物(剥片、砕片、石核)の4群に大別して、それぞれの割合を検討してみたい(第49表、第217図)³⁾。何度もくり返すように副次生産物が極めて多く、全体の8割から9割を占めている。ツールの中ではUFが最も多く、平均8.89%ほどである。逆に礫石器は平均1.09%とわずしか含まれていない。A類ブロックにおける石器製作作業以外の活動を見るためにツールだけを取り出し、その構成比を検討してみても、UFが平均61.75%と群を抜いて高く、定型石器の平均30.89%がこれに次ぎ、礫石器は平均7.36%と低い。少なくとも石器の集中する所では礫石器を伴う活動があまり活発ではなかったことが想定される。

B類ブロックは第6・8・10・14・15・16・18・22ブロックの8ヶ所で、石器総数は第18ブロックの31点から第10ブロックの87点までの範囲にある。ツールの占める割合は第16ブロックの13.89%から第6・10ブロックの33.33%までとブロック間でバラツキが認められるが、平均24.20%(標準偏差7.59)と全体的にA類ブロックよりも高いことがわかる。副次生産物では剥片の占める割合にあまり変化がないものの、砕片が散発的にしか認められない点で異なっている。各器種を4群に分けてみると、定型石器の平均が7.21%、UFの平均12.03%、礫石器4.96%、副次生産物75.80%で、ツール類、特に礫石器の占める割合が高くなっている(第217図)。ツールだけの構成比を見ても、B類ブロックは定型石器30.79%、UF51.62%、礫石器17.59%で、A類ブロックとは定型石器がほぼ同じ割合であるものの、UFは少なく礫石器が多い。一方各器種の実数を再び見てみると、ナイフ形石器が1点から4点までの範囲で、常に含まれている。また、UFや礫石器も比較的安定した状態で存在する。したがって、B類ブロックは、ナイフ形石器、UF、礫石器を中核とし、これらに6・7割の副次生産物が伴うという一定のパターンをとっていたことがわかる。

C類ブロックは第1・2・4・7・9・11・12・13・20・21・23ブロックの計11ヶ所で、石器総数は第4ブロックが20点とやや多いものの、他は5点から10点までとかなり少ない。ツールの占める割合は第20ブロックで0%だが、他は第23ブロックの12.50%から第9ブロックの50.00%までの範囲にあり、平均すると29.32%(標準偏差13.15)とA・B類ブロックよりも高い。ツール及び副次生産物の割合を詳しく見てみると、定型石器は平均8.64%(標準偏差

第49表 領域別石器組成表

ブロック	尖頭器	ナイフ 形石器	スクレ イバー	彫器	RF	UF	打器	燧石類	合石	剥片	砕片	石核	計
1						2(40)				3(60)			5
2		1(12.5)			1(12.5)	1(12.5)				4(50)	1(12.5)		8
3		5(2.6)			4(2.0)	27(13.8)		1(0.5)		120(61.2)	28(14.3)	11(5.6)	196
4	1(5)	1(5)		1(5)		3(15)				14(70)			20
5	12(1.4)	5(0.6)			1(0.1)	28(3.4)	2(0.2)		1(0.1)	358(43)	412(49.6)	12(1.4)	831
6		2(4.2)			2(4.2)	7(14.6)		5(10.4)		29(60.4)	2(4.2)	1(2.1)	48
7					1(11.1)	2(22.2)				6(66.7)			9
8		3(8.8)			2(5.9)	3(8.8)		3(8.8)		21(61.8)		2(5.9)	34
9					1(16.7)	1(16.7)		1(16.7)		3(50)			6
10	1(1.1)	2(2.3)				21(24.1)		4(4.6)	1(1.1)	51(58.6)		7(8.0)	87
11					1(10)	1(10)				5(50)	2(20)	1(10)	10
12				1(11.1)		1(11.1)		1(11.1)		6(66.7)			9
13		1(11.1)				2(22.2)				6(66.7)			9
14		4(9.1)				4(9.1)		3(6.8)		30(68.2)	2(4.5)	1(2.3)	44
15	1(1.4)	2(2.8)				7(9.9)		1(1.4)		51(71.8)	5(7.0)	4(5.6)	71
16		1(2.8)			1(2.8)	3(8.3)				24(66.7)	4(11.1)	3(8.3)	36
17	5(0.4)	16(1.4)	5(0.4)		13(1.1)	80(6.8)		8(0.7)	1(0.1)	708(59.8)	304(25.7)	44(3.7)	1,184
18		2(6.5)				3(9.7)		2(6.5)		22(71)	1(3.2)	1(3.2)	31
19		4(2.7)	2(1.4)		2(1.4)	17(11.6)		4(2.7)		86(58.9)	13(8.9)	18(12.3)	146
20										6(55.6)	1(11.1)	3(33.3)	10
21						2(33.3)				3(50)	1(16.7)		6
22		2(5.9)				4(11.8)				19(55.9)	9(26.5)		34
23						1(12.5)				7(87.5)			8
計	20	51	7	2	29	220	2	33	3	1,582	785	108	2,842

ブロック類型	定製石器	UF	礫石器	副次生産物	計
ブロック周辺部					
I		2(40.0) (100)		3(60.0)	5 2
II		3(18.8) (75.0)	1(6.3) (25.0)	12(75.0)	16 4
III		5(35.7) (100)		9(64.3)	14 5
IV	4(28.6) (57.1)	1(7.1) (14.3)	2(14.3) (28.6)	6(50.0)	13 7
計	4(8.2) (22.2)	11(22.5) (61.1)	3(6.1) (16.7)	30(63.3)	48 18

ブロック群	定製石器	UF	礫石器	副次生産物	計
I	11(5.3) (26.2)	30(14.4) (71.4)	1(0.5) (2.4)	167(79.9)	209 42
II	32(3.1) (27.8)	65(6.3) (56.5)	18(1.8) (15.7)	916(88.9)	1,031 115
III	50(3.6) (30.1)	103(7.5) (62.1)	13(0.9) (7.8)	1,217(88.0)	1,383 166
IV	14(7.0) (32.6)	21(10.5) (48.8)	8(4.0) (18.6)	157(78.5)	200 43
計	107(3.8) (29.2)	219(7.8) (59.8)	40(1.4) (10.9)	2,457(87.0)	2,823 366

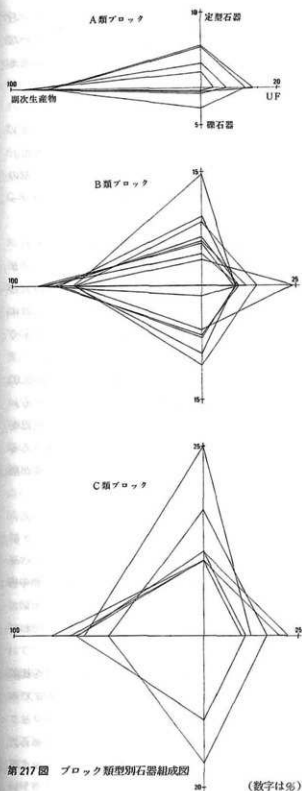
散漫分布域	定製石器	UF	礫石器	副次生産物	計
a	1(12.5) (25.0)	2(25.0) (50.0)	1(12.5) (25.0)	4(50.0)	8 4
b	1(12.5) (50.0)	1(12.5) (50.0)		6(75.0)	8 2
c	1(25.0) (50.0)	1(25.0) (50.0)		2(50.0)	4 2
d		2(20.0) (50.0)	2(20.0) (50.0)	6(60.0)	10 4
e	7(19.4) (41.2)	8(22.2) (47.1)	2(5.6) (11.8)	19(52.8)	36 17
f	3(25.0) (60.0)	2(16.7) (40.0)		7(58.3)	12 5
g	1(25.0) (100)			3(75.0)	4 1
h	1(14.3) (100)			6(85.7)	7 1
i		1(50.0) (50.0)	1(50.0) (50.0)		2 2
計	15(16.5) (39.5)	17(18.7) (44.7)	6(6.6) (15.8)	53(58.2)	91 38

ブロック類型	ブロック	定型石器	UF	礫石器	副次生産物	計
A	3	11(5.6) (28.2)	27(13.8) (69.2)	1(0.5) (2.6)	157(80.1)	196 39
	5	18(2.2) (36.7)	28(3.4) (57.1)	3(0.4) (6.1)	782(94.1)	831 49
	17	39(3.4) (31.0)	80(6.8) (62.0)	9(0.8) (7.0)	1,056(89.1)	1,184 128
	19	8(5.5) (27.6)	17(11.6) (58.6)	4(2.7) (13.8)	117(80.1)	146 29
B	6	4(8.3) (25.0)	7(14.6) (43.8)	5(10.4) (31.3)	32(66.7)	48 16
	8	5(14.7) (45.5)	3(8.8) (27.3)	3(8.8) (27.3)	23(67.7)	34 11
	10	3(3.5) (10.3)	21(24.1) (72.4)	5(5.8) (17.2)	58(66.7)	87 29
	14	4(9.1) (36.4)	4(9.1) (36.4)	3(6.8) (27.3)	33(75.0)	44 11
	15	3(4.2) (27.3)	7(9.9) (63.6)	1(1.4) (9.1)	60(84.5)	71 11
	16	2(5.6) (40.0)	3(8.3) (60.0)		31(86.1)	36 5
	18	2(6.5) (28.6)	3(9.7) (42.9)	2(6.5) (28.6)	24(77.4)	31 7
	22	2(5.9) (33.3)	4(11.8) (66.7)		28(82.4)	34 6
C	1		2(40.0) (100)		3(60.0)	5 2
	2	2(25.0) (66.7)	1(12.5) (33.3)		5(62.5)	8 3
	4	2(10.0) (33.3)	4(20.0) (66.7)		14(70.0)	20 6
	7	1(11.1) (33.3)	2(22.2) (66.7)		6(66.7)	9 3
	9	1(16.7) (33.3)	1(16.7) (33.3)	1(16.7) (33.3)	3(50.0)	6 3
	11	1(10.0) (50.0)	1(10.0) (50.0)		8(80.0)	10 2
	12	1(11.1) (33.3)	1(11.1) (33.3)	1(11.1) (33.3)	6(66.7)	9 3
	13	1(11.1) (33.3)	2(22.2) (66.7)		6(66.7)	9 2
	20				10(100)	10 0
	21		2(33.3) (100)		4(66.7)	6 2
	23		1(12.5) (100)		7(87.5)	8 1
計		110(3.9) (29.8)	221(7.8) (59.9)	38(1.3) (10.3)	2,473(87.0)	2,842 369

	定型石器	UF	礫石器	副次生産物
A類ブロック平均値	19.25(4.16) (30.89)	38.00(8.89) (61.75)	4.25(1.09) (7.36)	528.00(85.86)
A類ブロック標準偏差	12.52(1.45) (3.61)	24.63(4.08) (4.67)	2.95(0.96) (4.06)	403.07(6.01)
B類ブロック平均値	3.13(7.21) (30.79)	6.50(12.03) (51.62)	2.38(4.96) (17.59)	36.13(75.80)
B類ブロック標準偏差	1.05(3.34) (10.04)	5.70(4.95) (15.16)	1.87(3.76) (12.17)	13.63(7.59)
C類ブロック平均値	0.82(8.64) (25.76)	1.55(18.23) (59.09)	0.18(2.53) (6.06)	6.45(70.61)
C類ブロック標準偏差	0.72(7.70) (21.75)	0.99(10.68) (31.27)	0.39(5.49) (12.86)	3.00(13.15)
全ブロック平均値	4.83(7.36) (28.40)	9.61(14.45) (56.96)	1.65(3.12) (10.30)	107.48(75.07)
全ブロック標準偏差	8.53(5.93) (16.43)	17.08(8.96) (23.82)	2.28(4.64) (12.73)	256.38(11.79)
ブロック周辺部平均値	1.00(7.14) (14.29)	2.75(25.40) (72.32)	0.75(5.14) (13.39)	7.75(62.32)
ブロック周辺部標準偏差	1.73(12.37) (24.74)	1.48(13.20) (35.03)	0.83(5.87) (13.45)	3.27(8.97)
散漫分布域平均値	1.67(15.78) (47.35)	1.89(19.04) (37.45)	0.67(9.78) (15.20)	5.78(55.39)
散漫分布域標準偏差	2.05(10.61) (34.54)	2.28(14.20) (20.25)	0.82(15.73) (20.24)	5.18(22.59)

7.70), UF 18.23%(標準偏差10.68), 礫石器2.53%(標準偏差5.49), 副次生産物70.61%(標準偏差13.15)である。定型石器, UFともA・B類ブロックの平均値を上まわるが, 実際に4群全てが含まれているブロックは, 第9・12ブロックの2ヶ所にすぎず, 他の9ヶ所のブロックではツールのいずれか(あるいは全て)が欠けており, 安定した器種構成を示してはいない(第217図)。ツールだけの構成比では, 平均すると定型石器24.76%, UF 59.09%, 礫石器6.06%となり, A・B類ブロックに比べて定型石器の値が低く, また礫石器についてもB類ブロックを下回っている。各ツールの関係は, UF, 定型石器, 礫石器の順で他と変わりはないものの, ツールを全く含まないブロックがあることからわかるように, 全体的にツールを伴う場合を含めた諸活動が低調だったようである。

以上を簡単にまとめてみよう。まず全てのブロックでUFを伴う活動が最も活発であったと言う共通性を持つ。しかし, A類ブロックは副次生産物が多量にあるという点から明らかのように, 石器製作作業が主体的活動で, A類ブロック内に含まれている定型石器もその一端として製作されており, 使用後に遺棄されたものは比較的少なかったのではないと思われる。さらに比較的まとまって検出されているUFについても, A類ブロックにおいて剥片剥離作業, 二次加工から着柄することによって道具として完成させるまでの作業を行う工作空間として考えれば, スムーズに解釈できることであろう。



一方B類ブロックでは礫石器の占める割合が他の類型のブロックに比べて高いという際立った特徴がある。またナイフ形石器、UFなども一定量を必ず保有し、それに加えて若干の石器製作作業を行っていた痕跡を持つなど、極めて斉一性の高い様相を呈している。また器種別分布のナイフ形石器の項で触れたように、破損状況を最も明確に捉え得るナイフ形石器について検討した結果、他の類型のブロックとは異なった現象として、全体の殆どが破損度合のひどいもので、しかも大半は搬入品であることがわかった。したがって、その破損は製作過程で生じる性格のものではなく、B類ブロックに持ち込まれて使用された結果生じたものと判断される。UF、礫石類も使用によって初めて認識できる性格のものであることを考えると、B類ブロックとは、まず石器を持ち込んで使用し、不足があれば部分的にそれを補いつつ、破損品、不用物を遺棄した結果、形成された場であるとの解釈が成り立つ。

C類ブロックは各器種とも極めて散漫に分布しており、一定の共通性を持たない。各ブロック内の定形石器の含まれ方はまちまちで、ナイフ形石器、彫器、RFのいずれかが1～2点あるにすぎない。UFは比較的安定して含まれてはいるものの、やはり1～2点ずつくらいである。礫石類も少なく、また石器製作作業が

展開された痕跡も全くといってよいほど認められない。したがって、人々が移動してきて、石器製作作業を行う以前に再び去っていった短期居住地であったか石器の使用をほとんど伴わない場であったか、あるいは継続的に利用されることのなかった空間であったなどの解釈が考えられる。

2) ブロック群及び散漫分布域別石器組成

第Ⅰブロック群内における石器群の内訳は、定型石器11点(5.26%)、UF30点(14.35%)、礫石器1点(0.48%)、副次生産物167点(79.90%)である。定型石器はナイフ形石器6点、RF5点の2種類だけだが、このRFの占める割合は全体の2.39%で、4ヶ所のブロック群の中で最も高い。逆に礫石器はわずかに1点しか含まれていない。器種構成が最も単純なブロック群である。

第Ⅱブロック群は定型石器32点(3.10%)、UF65点(6.30%)、礫石器18点(1.75%)、副次生産物916点(88.85%)である。定型石器の内訳はナイフ形石器12点、尖頭器13点、RF7点、ナイフ形石器と尖頭器がほぼ同数ずつ含まれている。礫石器では礫石類が計14点、台石、打器がそれぞれ2点ずつで、器種構成が豊富である。副次生産物は砕片が415点と非常に多い。尖頭器の製作の際に生じたものが多いようである。石核が24点(2.33%)とあまり多くない点を見ても、多量の砕片が剥片剥離作業の過程で生じたものではないことがわかる。

第Ⅲブロック群は石器総数が1,383点と最大のブロック群で、その内訳は定型石器50点(3.62%)、UF103点(7.45%)、礫石器13点(0.94%)、副次生産物1,217点(88.00%)である。定型石器はナイフ形石器25点、尖頭器6点、スクレイパー5点、RF14点、ナイフ形石器を主体とし、少量の尖頭器が伴う在り方で、第Ⅱブロック群とは異なっている。礫石器類もそろっており、全体的に豊富な器種構成である。一方で剥片、砕片、石核も多く、剥片剥離作業が頻繁に行われていたことが窺える。

第Ⅳブロック群は定型石器14点(7.00%)、UF21点(10.50%)、礫石器8点(4.00%)、副次生産物157点(78.50%)で構成されている。定型石器や礫石器の占める割合がブロック群の中で最も高い。定型石器はナイフ形石器10点、スクレイパー2点、RF2点、スクレイパーを持つ点で第Ⅲブロック群と通じるが、尖頭器を含まない点で異なっている。副次生産物の中では砕片が8.50%と低いにもかかわらず、石核が1.00%もあり、両者の関係がアンバランスである。本ブロック群一帯は削平を受けているため、軽いため上位に遊離した砕片が失われたのかも知れない。

以上をまとめる意味で、4ヶ所のブロック群における定型石器、UF、礫石器の割合を比較してみよう。まず定型石器は第Ⅰブロック群の26.19%から第Ⅳブロック群の32.56%までの範囲にあり、比較的まとまっている。平均すると3割程度を占めている。UFは第Ⅳブロック群が最も少なく48.84%、第Ⅰブロック群が最も多くて71.43%あり、20%以上の開きがある。平均すると6割程度となるが前後1割ずつくらいのバラツキがある。礫石器は第Ⅰブロック群の2.38%から第Ⅳブロック群の18.60%まで開きがある。第Ⅰブロック群の値が非常に小さい。

平均すると1割強である。ブロック群の規模は第I、IVブロック群と第II、IIIブロック群の2群に分けることができる。特にツールの量は第Iブロック群42点、第IVブロック群43点では同じだが、UFと礫石器の関係はかなり異なっている。時間的な差異と共に、活動内容が若干異なっていたことが想定される。一方第IIブロック群と第IIIブロック群は、石器の器種組成の面で時間的差異が想定されるものの、極めて多量の副次生産物を含むA類ブロックを中心に数ヶ所のB、C類ブロックなどを伴って構成されているという共通性もあり、等質の構成原理が器種組成の面にも反映されていると思われる。

次に散漫分布域の器種組成を検討したい。ここでは各散漫分布域に隣接する単独の小規模なC類ブロックも含めた形で述べることにする(第49表)。

まず各散漫分布域を個別に見てみよう。散漫分布域aは定型石器としてはRFが1点(12.50%)のみでこれにUF2点(25.00%)、礫石器1点(12.50%)、副次生産物4点(50.00%)が加わる。副次生産物は剥片2点、碎片1点である。散漫分布域bは第4ブロックを含む領域で定型石器4点(14.29%)、UF4点(14.29%)、副次生産物20点(71.43%)である。定型石器はナイフ形石器1点、尖頭器2点に中央群全体でも2点しか含まれていない彫器1点加わっている。ツールの出現率は28.57%と散漫分布域内では高い方ではないが、定型石器の器種構成種は多い。散漫分布域cは定型石器1点(25.00%)、UF1点(25.00%)、副次生産物2点(50.00%)と小規模なものである。定型石器はナイフ形石器、副次生産物は剥片で、計4点が分布する。散漫分布域dはUF2点(20.00%)、礫石器2点(20.00%)、副次生産物6点(60.00%)で、ツールの占める割合が高い。また8ヶ所の散漫分布域での合計が7点の礫石器の半ほどが本領域に分布している。副次生産物の中には石核が2点含まれている。散漫分布域eは5ヶ所の小領域と1ヶ所の小ブロックに分けられるが、全てをまとめると、定型石器8点(17.02%)、UF9点(19.15%)、礫石器2点(4.26%)、副次生産物28点(59.57%)で構成される。定型石器はナイフ形石器2点、RF2点に加えて、中央群では数の少ないスクレイパーが4点まとまっている。副次生産物は剥片23点、碎片3点、石核2点で、また本領域西端部の3G24区周辺では水洗選別により微細な碎片がまとまって検出されていることなどから、若干の石器製作作業が行われていたのかも知れない。散漫分布域fは、第12、13ブロックを含む領域で、定型石器5点(16.67%)、UF5点(16.67%)、礫石器1点(3.33%)、副次生産物19点(63.33%)で構成されている。定型石器はナイフ形石器4点に加えて彫器が1点検出されている。副次生産物は1点の碎片の他は剥片である。本領域内においては、水洗選別による微細な碎片が希薄に分布する。散漫分布域gは定型石器1点(25.00%)、副次生産物3点(75.00%)で構成されている。定型石器はスクレイパーである。散漫分布域hは第21ブロックを含んでおり定型石器1点(7.69%)、UF2点(15.38%)、副次生産物10点(76.92%)である。定型石器はナイフ形石器、副次生産物は全て剥片である。散漫分布域iは第23ブロックを含みUF2点(20.00%)、礫石器1点(10.00%)、副次生産物7点(70.00%)である。副次生産物は剥片である。

まとめてみると、定型石器は散漫分布域d・Iの0%から散漫分布域gの33.33%までの範囲にあり、平均13.52%(標準偏差10.44)である。比率、実数ともにバラツキが大きい。UFは散漫分布域gの0%から散漫分布域aの50.00%までの範囲にあり、平均20.05%(標準偏差7.94)である。ブロック群あるいは類型別のブロックと同様、定型石器よりUFの方が多かった。礫石器は散漫分布域d, E, F, Iに限って認められる。平均すると4.18%(標準偏差6.33)である。副次生産物は剥片が多く、また形状の整った目的剥片が含まれており、ブロック内のものであるような副次的なものではないと思われるが、ブロックなどと較べる際の便宜上のもので使う。この副次生産物は散漫分布域cの50.00%から散漫分布域Hの76.92%までの範囲にあり、平均は63.53%(標準偏差8.15)と比較的よくまとまっている。ツールだけの割合をとると、散漫分布域全体での平均は、定型石器37.51%、UF49.20%、礫石器13.29%となり、定型石器の多い点が注目される。この散漫分布域は先にC類ブロックの項で記したことと同様な解釈が成り立つと思う。つまり、新たにこの地にやって来た人々は、恐らく幾つかの定型石器と剥片、それに分割したり、作業が途中まで進行した石核を持っていたであろう。石器が消費されて不足すれば、それを補充する形で石器の生産を始めるのであろうが、居住期間が短かければその必要がなく、A類ブロックのような石器集中部を形成することもないと思われる。ただしA・B類ブロックとは全く異なった機能空間としての役割を果たしと解釈することも可能である。いずれの解釈をとるかは容易に決めることができないが、まとめて他の要素を含めてより合理的に説明のつく方をとりたいと思う。(島立)

第5節 個体別資料の検討と分布

1. 個体別資料の外観的特徴

中央区第2b層出土のナイフ形石器群に属する資料は合計2,999点である。このうち個体識別できたのは、接合によるもの326点、非接合のもの741点の合計1,067点である。接合率10.9%、個体識別率35.6%である。微小すぎるため個体識別の困難な破片を除くと、接合率14.8%、個体識別率48.4%となる。

この他、遺跡への明確な搬入品である単独個体は54点2.0%含まれている。

以下、代表的な17例について、個体別資料の外観的な特徴を記す。

個体別資料番号K2-3F①

石材は頁岩である。全体的に黄白色である。多孔質部分と多孔質ではない部分も見られるが、全体的にザラザラした手触りを受ける。多孔質部分が極度に軟質化した部分もある。

個体別資料番号K2-3F⑤

石材は頁岩である。全体の色はうすい灰色である。直線あるいは若干曲線気味の亀裂がある。この亀裂が節理面として現れるのであるが、あまり顕著ではない。全体的に光沢感がある。石

質は緻密である。

個体別資料番号K2-2G④

石材は、頁岩である。全体の色は、うすい灰黄色である。疎らではあるが黄白色のシミ状の斑点がある。節理が発達しており、節理面には灰色ないし黄褐色を呈した膠着物が附着している。

個体別資料番号K2-2G⑤

石材は頁岩である。全体の色はうすい灰黄色である。うすい灰色の血管状の模様が部分的に見られる。手触りが、きわめて泥っぽく非常に軟質である。

個体別資料番号K2-2G⑥

石材は頁岩である。全体の色は灰黄色である。全体に灰色を呈した細線や比較的太い線が網目状、あるいは帯状に連なる。部分的ではあるが塊状に砂岩物質が残存する。節理面は、ザラザラの状態を呈している。

個体別資料番号K2-2G⑦

石材は頁岩である。全体の色は灰黄色であるが、若干茶系色が濃い色をしている。自然面が受熱の影響で黒ずんでいる。

個体別資料番号K2-2H①

石材は頁岩である。全体の色は灰黄色である。一部に、2mm程度の灰色を呈した帯状の模様と、5~6mmの極く薄い灰白色の帯状の模様がある。薄い帯状の模様と、黄色味が濃くなった部分が交互に現れ、縞模様を呈している部分がある。節理面は灰白色のフラットな面と若干ザラザラした面がある。

個体別資料番号K2-2H②

石材は頁岩である。全体の色は赤味を帯びた黄白色である。全体に細かな気泡が見られる。部分的に細かな気泡が集中している。節理が若干ある。石質は全体的に軟質であるが部分的に軟質度高まる。

個体別資料番号K2-2H③

全体の色はうすい灰黄色である。極く細い黄白色の線が見られる。節理面は、白灰色の極く薄い泥状の物質が残存する。全体的に軟質であり、自然面も爪でキズがつく程度である。

個体別資料番号K2-2H④

全体の色はうすい灰黄色である。一部受熱の影響か、暗灰色ないし黄褐色を帯びている。節理が若干発達しており、剥離面においてそれが線となって現れているのが特徴である。節理面は、比較的フラットで、細かな凸凹面を呈している。

個体別資料番号K2-2H⑤

全体の色は灰黄色である。細い青灰色の縞模様がある。細かな節理が著しく縦横に走り剥離面にも細かなヒビ状になって現れている。節理面は、すべすべした面と、ザラザラな面と両面をもっている。

個別別資料番号K 2-2 H③

石材は頁岩である。全体の色は、灰白色から灰黄色である。細かな気泡が目立つ。部分的に白色ないし黄白色の帯状の模様がある。節理はあまり発達していないが、その面は、黄褐色及び灰白色の膠着物が付着しており、ザラザラな面となっている。

個別別資料番号K 2-3 H④

石材は頁岩である。全体の色は灰黄色である。灰黄色が著しく濃くなって帯状を呈している部分がある。又、細い灰黄色の直線的で帯状の線が2・3条ないし5・6条交互に現れ、横縞模様を呈しているのが特徴である。

個別別資料番号K 2-3 H⑤

石材は頁岩である。全体の色はうすい灰黄色である。黄白色の極細い横縞と数mmほどの横縞が交互に現れ、帯状、あるいは墨を流したような模様を呈している。部分的ではあるが、ゴマ塩のような細粒が集中している。節理は比較的発達しており、フラット面と凹凸が著しくかつ、泥状を呈している。

個別別資料番号K 2-3 H⑥

石材は頁岩である。全体の色は黄白色である。大きな気泡もあるが、1mm程度の気泡が主体的に散在するのが特徴である。節理はあまり発達していない。石質は硬質である。

個別別資料番号K 2-3 H⑦

石材は頁岩である。全体の色は、灰黄色が著しい部分と黄白色が著しい部分とがある。淡灰色の線が太くなったりして帯状に連なる。淡灰色の細い線が血管状に現れている。節理は比較的発達しており、節理面には黒色の膠着物が付着しており、剥離面において黒色の真直な線となって現れている。

個別別資料番号K 2-3 H⑧

石材は頁岩である。全体の色はうすい灰黄色である。節理が著しく、その節理面はゆるやかな凹凸面とフラット面とからなる。石質は比較的硬質である。 (徳 永)

2. 個別別資料の分類と その分布

まず個別別資料がどのような在り方を示しているのかを考えてみよう。各個体は石器製作作業において、原石から残核に至る全ての段階の資料を持つものや、一部の段階に限って持つものなど、遺存する内容が異なっている。そこで、石器製作作業の工程については、原石の粗割り、石核調整から初期の剥片剥離作業までの段階(初期段階)、本格的な剥片剥離作業の段階(中期段階)、最終的な剥片剥離作業から残核となり作業が完結する段階(終末期段階)の三段階に便宜上区分した。もちろん作業は一連のものとして継続的になされる場合が多く、一遺跡でなされた個体に対する作業は、前半(初期+中期)のもの、後半(中期+終末期)のもの及び全工程(初期+中期+終末期)といった内容を持つ。また剥片を素材とした小型の石核に

第50表 中央区第2b層ナイフ形石器文化に属する個体別資料一覧表

個体No	石質	資料 総数点	個体 類型	石器 点数	非資料 接合数	接合 資料数	石 器 組 成*										剥離 工程	剥離技術	関係ブロック	挿図No
							Kn	Pt	Sc	Gr	RF	UF	他	B	C	D				
K2-2E②	頁	3	—	3	1	2					1	2				?	A	K2-23・外		
K2-3F①	頁	55	E	53	46	9			2	4	41	4	2	初+中	B ₂			K2-3	202	
K2-3F②	頁	11	E	10	5	6	1				3	4	2	1	初	A ₁ , B ₂		K2-3		
K2-3F③	頁	3	F	3	1	2						2	1	片	B ₂			K2-3		
K2-3F④	頁	4	(B)	4	2	2			1	1				(中)	—			K2-3		
K2-3F⑤	頁	14	A	12	7	7						13	1	中+末	A ₃			K2-2・3	203	
K2-3F⑥	頁	3	—	2	0	3					2	1		?	—			K2-3		
K2-3F⑦	頁	6	A	4	0	6					1	1	1	3	中+末	B ₁		K2-3	204	
K2-3F⑧	頁	4	B	3	2	2					1	3		中	—			K2-3		
K2-3F⑨	頁	11	B	10	5	6	1			1	2	7		中	A			K2-3	205	
K2-3F⑩	頁	4	A	4	1	3						1	1	2	末	A ₁ , B ₂		K2-3		
K2-3F⑪	凝	2	C?	2	2	0					1	1		入	A			K2-3・K3-3		
K2-3F⑫	頁	3	C?	3	3	0					2	1		入	A			K2-1・K3-1		
K2-1G①	頁	2	A	2	2	0								1	末	A ₄		外		
K2-2G①	頁	2	—	2	0	2				1		1		?	A ₂			K2-7・8		
K2-2G②	頁	4	—	1	0	4						4		敲石	—			K2-6		
K2-2G③	頁	3	(B)	3	1	2								(中)	A			K2-7・9・外		
K2-2G④	頁	21	B	19	7	14				1	3	15	2	中	A, B ₂			K2-8		
K2-2G⑤	頁	6	B	6	4	2					3	3		中	A ₃			K2-6・9		
K2-2G⑥	凝	3	—	3	3	0						3		?	A			K2-6・7		
K2-2G⑦	頁	2	F	2	2	0						1		片	A ₂			K2-10		
K2-2G⑧	頁	4	C	3	1	3				2		2		入(RF)	—			K2-6		
K2-2G⑨	頁	2	—	1	0	2							2	?	—			K2-5		
K2-2G⑩	頁	40	A	37	32	8	2				1	34	3	中+末	A			K2-5・外		
K2-2G⑪	頁	63	A	59	55	8			3			4	52	3	1	中+末	A ₃		K2-5・10	206

個体No	石質	資料 総数点	個体 類型	石器 点数	非資料 接合数	接合 資料数	接合			石 器 組 成*					剥離 工程	剥離技術	関係ブロック	押印No
							Kn	Pt	Sc	Gr	RF	UF	他	B				
K2-2 G㉔	頁	30	A	28	20	10	1	1		1	2	22	1	2	中+末	A	P-4a・K2-5 ・K2-10	207
K2-2 G㉕	砂	4	D	4	4	0						3		1	全	A	K2-4・6	
K2-2 G㉖	頁	15	A	13	6	9				1	1	12		1	中+末	A ₃	P-4a・K2-5・ P散 ₂	
K2-2 G㉗	頁	47	C	46	45	2					3	35	9		P	—	K2-5	
K2-2 G㉘	頁	7	—	6	5	2		3				3		1	?	—	K2-5・散 b	
K2-2 G㉙	頁	18	B	18	18	0						17	1		中+P	—	K2-5・6	
K2-2 G㉚	頁	2	—	2	2	0							1	1	?	A ₂	K2-5	
K2-2 G㉛	頁	2	—	2	2	0				1	1				?	—	K2-5	
K2-2 G㉜	頁	41	D	37	26	15	1				7	31	1	1	全	A ₄	K2-5	
K2-2 G㉝	頁	2	A	2	2	0						1		1	末	A ₄	K2-5	
K2-3 G㉞	凝	3	C	3	3	0	3								入	—	K2-8	
K2-4 G㉟	凝	3	—	3	3	0						3			?	—	外	
K2-4 G㊱	頁	2	C	2	2	0		1		1					入	—	外	
K2-5 G㊲	凝	2	—	1	0	2						2			?	—	外	
K2-2 H㊳	頁	14	E	14	14	0	3				2	9			初+中	A	K2-15・16 K2-17	
K2-2 H㊴	頁	26	E	22	17	9	3	1			3	16	1	2	初+中	A ₃ +	K2-14・15 K2-16・17	
K2-2 H㊵	凝	35	A	35	30	5				1	2	30		2	中+末	A	K2-13・15 K2-16・17	
K2-2 H㊶	頁	2	—	2	0	2						1		1	?	A ₁	K2-17	
K2-2 H㊷	頁	3	F	3	3	0					1		1	1	片	A ₂	K2-17	
K2-2 H㊸	頁	18	A	16	10	8	1				1	15		1	中+末	A ₄	K2-17	
K2-2 H㊹	凝	2	A	2	2	0						1		1	末	A	K2-17	
K2-2 H㊺	頁	19	D	19	15	4	1				4	12		2	全	A ₁ , A ₂	K2-15・17	
K2-2 H㊻	珪	3	C	3	3	0						3			入	—	K2-10	
K2-2 H㊼	頁	13	A	13	9	4	2				2	8		1	中+末	A	K2-13・14 K2-15・17	
K2-2 H㊽	頁	2	F	2	2	0					1			1	片+入	A ₁ , B ₂	K2-10	
K2-2 H㊾	頁	11	A	10	7	4					6	2		3	中+末	A ₁	K2-10	
K2-2 H㊿	頁	2	—	1	0	2						2			?	—	K2-10	
K2-2 H㊿	頁	2	—	1	0	2						2			?	—	K2-12・13	

K2-2H⑥	頁	6	A	6	4	2			5	1	末	A	K2-15			
K2-2H⑦	頁	4	(B)	4	2	2		1	3		(中)	—	K2-10			
K2-2H⑧	頁	18	E	17	13	5	2	1	14	1	初+中	B ₂	K2-17			
K2-2H⑨	頁	2	C	2	2	0			2		入	—	K2-10			
K2-2H⑩	頁	2	—	1	0	2			2		?	—	K2-12			
K2-2H⑪	頁	3	A	2	1	2			1	2	中+末	A ₁	K2-15・16			
K2-2H⑫	頁	2	—	2	2	0			1	1	?	A ₂	K2-17			
K2-2H⑬	頁	5	—	5	3	2			5		?	A	外・K2-10			
K2-2H⑭	頁	2	(B)	2	2	0			2		(中)	—	K2-14・17			
K2-3H①	頁	5	B	5	0	5		1	4		中	A	K2-18			
K2-3H②	頁	3	—	3	3	0			1	1	1	?	A	K2-19		
K2-3H③	頁	12	A	12	9	3		1	8	2	1	末	A	K2-17		
K2-3H④	頁	8	A	8	2	6	1	1	4	2	2	中+末	A ₁	K2-17	210	
K2-3H⑤	頁	19	A	19	11	8		1	4	1	1	中+末	A	K2-17	211	
K2-3H⑥	頁	2	—	2	2	0			2		?	—	K2-17			
K2-3H⑦	頁	38	A	38	32	6	3	3	2	26	2	2	中+末	A ₁	K2-17・外	212
K2-3H⑧	頁	11	—	4	1	10			11			焼付割	—	K2-17		
K2-3H⑨	頁	2	—	1	0	2			1	1	焼付割	—	K2-17			
K2-3H⑩	頁	9	E	9	7	2	1		7	1	初+中	A ₂ +	K2-18・外			
K2-3H⑪	頁	3	—	3	1	2			3		?	—	K2-17			
K2-3H⑫	頁	8	A	7	3	5	1		3	2	2	中+末	A ₄	K2-17		
K2-3H⑬	頁	14	A	14	14	0	1		11	2	2	中+末	A ₁	K2-17・外		
K2-3H⑭	頁	3	C	1	0	3			2	1		入	—	K2-17		
K2-3H⑮	頁	11	D	10	2	9		1	1	5	4	全	A ₃	K2-17・外	213	
K2-3H⑯	頁	18	E	16	14	4			14	4	初+中	A ₁ , B ₂	K2-15・17			
K2-3H⑰	下巴	10	(B)	10	10	0			8	2	?	+P	—	K2-15・17		
K2-3H⑱	頁	7	—	6	1	6			7		焼付割	—	K2-17			
K2-3H⑲	頁	4	—	4	2	2		1	1	1	?	—	K2-17			
K2-3H⑳	頁	23	B	23	13	10	2		7	13	1	中	A ₂ , B ₂	K2-17・外		
K2-3H㉑	頁	6	B	5	4	2		1	3	2		中	A	K2-17		

個体No	石質	資料 総点数	個体 類型	石器 点数	非資料 接合 点数	接合 資料数	石 器 組 成*							剥離 工程	剥離技術	関係ブロック	挿入No
							Kn	Pt	Sc	Gr	RF	UF	他				
K2-3 H㉑	頁	14	D	14	6	8	1				5	7	1	全	A ₃	K2-17・19	214
K2-3 H㉒	頁	5	A	5	1	4				1	3	1	中+末	A ₄	K2-17・19		
K2-3 H㉓	頁	16	D	14	10	6				3	11	2	全	A ₁	K2-16・17 K2-18・19		
K2-3 H㉔	頁	6	A	5	4	2						2	中+末	A ₁	K2-19		
K2-3 H㉕	頁	3	E	3	0	3				1	2		初	—	K2-17		
K2-3 H㉖	頁	5	E	5	3	2			2		3		初	—	K2-17		
K2-3 H㉗	頁	11	E	10	9	2				1	10		初+中	A	K2-17		
K2-3 H㉘	頁	2	—	2	2	0					2		?	A	K2-17・19		
K2-3 H㉙	頁	2	—	2	2	0					2		?	A	K2-15・17		
K2-3 H㉚	頁	7	—	7	7	0			1		5	1	?	A ₂ ?	K2-16・19		
K2-3 H㉛	頁	2	(E)	2	2	0				1	1		(初)	A	K2-17		
K2-3 H㉜	頁	3	—	3	3	0					2	1	?	—	K2-19		
K2-3 H㉝	頁	2	—	2	2	0					1	1	?	—	K2-17		
K2-3 H㉞	頁	3	(B)	3	3	0					1	2	(中)	—	K2-17		
K2-3 H㉟	頁	2	C	2	0	2			1	1			入	A	K3-11・K2-16		
K2-3 H㊱	頁	2	—	2	2	0					2		?	—	K2-17		
K2-3 H㊲	頁	2	—	2	2	0					2		?	—	K2-17・外		
K2-4 H㊳	頁	7	A	6	5	2	1				3	3	末	A ₁	K2-19		
K2-4 H㊴	頁	2	E	2	2	0					2		初	—	K2-20		
K2-4 H㊵	頁	3	A	2	0	3						3	末	A ₁	K2-20		
K2-4 H㊶	頁	4	(B)	4	4	0				1	3		(中)	—	K2-11・19		
K2-4 H㊷	頁	8	B	7	6	2	1				1	6	中	A	K2-18・19		
K2-4 H㊸	頁	3	(A)	3	3	0					2	1	(末)	A	K2-19		
K2-4 H㊹	頁	4	E	3	1	3					4		初	A	K2-19		
K2-4 H㊺	頁	3	B	3	3	0					3		中	A	K2-19		
K2-4 H㊻	頁	2	(F)	1	0	2						2	(片)	A ₂	K2-19		
K2-4 H㊼	頁	2	—	1	0	2				1	1		?	—	外		
K2-4 H㊽	頁	3	(B)	3	3	0					2	1	(中)	A	K2-16・19		

対し、若干の剥片剥離作業を行ったものがある。一原石全体から見ればごく一部の作業内容しか示していないが、石核を単位とする資料群とすれば作業は完結していることになる。最も中心的な石核が伴っていれば一原石全体の消費の流れの中では無視し得るが、単独で存在する場合には取り扱いにくいものである。このため剥片素材石核については、全く個別の工程として分離した。以上、単一段階、複数段階及び剥片素材石核工程で、計7類型に区分した。

一方、どの作業段階に製作されたかは別として、各個体は石器製作作業が展開されたことを示すものと、遺跡外や遺跡内の他のブロックで製作された道具、目的剥片などが搬入されたことを示すものがある。これについては、次のように分類した。

1a類：石核、剥片、砕片、ツールなど多様な器種を持ち、その場で石器製作作業が展開され、完了したことを示すもの。

1b類：剥片、砕片、ツールをもち、1a類と同様、その場所で石器製作作業が展開されたことを示しているが、石核が他のブロックあるいは遺跡外に持ち出されており、作業が完了してはいないもの。

2a類：剥片、ツールあるいは一部砕片を持つが数量が極めて少なく、他のブロック、遺跡外で製作され持ち込まれたものである。ただ目的剥片を搬入し、二次加工を施してツールにした場合、この類に含めて考えるものとする。

2b類：石核だけからなる個体。他の場所で剥片剥離作業が行われた後、恐らく作業を継続する目的で持ち込まれたもの。

以上のように分類した個体内容の類型と先に示した剥片剥離工程の段階区分を合わせることで、個体別資料の在り方は明瞭になるものと思われる。そこで次のような5種類のモデルを設定した。

A類：剥片剥離作業の前半は遺跡外あるいは他のブロックでなされたが、その後石核が搬入され、引き続き剥片剥離作業が展開され完了したもの。終末期1a類、中期+終末期1a類が対応する。

B類：剥片剥離作業の前半は遺跡外あるいは他のブロックで展開され、その後石核が搬入された。剥片剥離作業が継続されるが、完了する以前に再び石核が持ち出されたもの。中期1b類が対応する。

C類：遺跡外あるいは他のブロックで製作された剥片やツール、石核(作業を伴わないもの)が搬入されたもの。全ての製作工程段階の2a, 2b類が対応する。

K2-21①	頁	2	—	2	2	0	1	1	?	—	外
K2-21②	玉	6	E	6	4	2	4	1	1	初+中	K2-21・外
K2-21③	頁	35	B	35	32	3	4	25	6	中	K2-17・外
K2-21④	版	2	—	2	2	0	4	1	?	?	K2-22・外

※Kn：ナイフ形石器, Pt：尖頭器, Sc：スクレイパー, Gr：彫器。

D類；本道跡内あるいはそのブロックで原石が用意され、剥片剥離作業が開始され、完了したもの。初期+中期+終末期1a類が対応する。

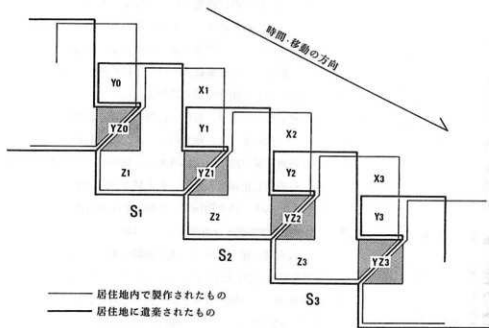
E類；本道跡内あるいはそのブロックで原石が用意され、剥片剥離作業が開始されたが完了してはならず、石核が搬出されたもの。初期1b類、初期+中期1b類が対応する。

F類；剥片素材の石核及びそれから剥離された資料である。石核が存在することで初めて認識し得る工程で1a類のようなのだが、原石の中心的な石核がないため意味合いが異なり、一般分類外のものである。

第218図は上記のモデルと矢島国雄氏が提示した「石器製作と道跡群の関係の模式図」(矢島1977)とを検討して作成したものである。XnはSnで製作されたが、道跡外空間での使用により失われたものである。ZnはSnで原石が用意され、石器製作作業が展開された個体を示す。ただし、作業が完了していない場合、YZnとして次の移動地へ運び去られる。Yn-1はSn-1(すなわちSnの前の居住地)で製作された製品で、単独個体としての在り方を示す。YZn-1はSn-1で石器製作作業の前半がなされた後、その石核がSnに持ち込まれ、後半の作業が展開された個体である(ただし、一部のものは作業が完了せず、さらにYZnとしてSn+1に搬出される)。したがって、SnにはYn-1 + YZn-1 + Znが遺棄される(第218図中の太線内の部分)。一方、Snで製作したものは、YZn-1 + Zn + Xn + Yn + YZnということになる。

1) ブロック別個体類型

第51表はブロック毎に個体総数、個体類型別の個体数を表わしたものである。各ブロック毎



第218図 個体のモデルと居住地の関係

第51表-1 ブロック別個体モデル(1)

ブ ッ ク	個 体 数	個 体 別 資 料 数	石 器 總 数	識 別 率 %	A	B	C	D	E	F	不 焼
1	1	1	5				1				
	5.00	1*	5*	20.00			5.00				
2	4	4	8				4				
	7.00	4	7	57.14			7.00				
3	16	120	196		3	3	6		2	1	1
	24.29	110	167	65.87	4.55	4.55	9.11		3.04	1.52	1.52
4	1	3	20						1		
	6.67	3	20	15.00					6.67		
5	12	259	831		5	1	2	1			3
	20.54	243	416	58.41	8.56	1.71	3.42	1.71			5.14
6	7	15	48				5				1
	19.13	15	41	36.59		2.73	13.67				2.73
7	4	4	9				4				
	9.00	4	9	44.44			9.00				
8	3	25	34			1	2				
	3.72	25	31	80.65		1.24	2.48				
9	2	3	6				2				
	3.33	3	5	60.00			3.33				
10	15	37	87		1	1	9			2	1
	33.24	37	82	45.12	2.22	2.22	19.95			4.43	2.22
11	1	1	10				1				
	8.00	1	8	12.50			8.00				
12	2	3	9				1				1
	5.33	3	8	37.50			2.67				2.67
13	3	3	9				3				
	9.00	3	9	33.33			9.00				
14	3	15	44		1		1		1		
	7.80	15	39	38.46	2.60		2.60		2.60		
15	11	26	71		2		8		1		
	27.50	26	65	40.00	5.00		20.00		2.5		
16	8	21	36				6		1		1
	12.19	21	32	65.63			9.14		1.52		1.52
17	43	280	1,184		7	4	15	2	5		7
	142.95	262	871	30.08	23.27	13.30	49.87	6.65	16.62		23.27
18	4	15	31			1	2		1		
	7.47	15	28	53.57		1.87	3.73		1.87		
19	23	66	146		3	4	10	1	1	1	3
	46.36	64	129	49.61	6.05	8.06	20.16	2.02	2.02	2.02	6.05
20	2	5	10		1				1		
	3.60	5	9	55.56	1.80				1.80		
21	1	2	6						1		
	5.00	1	5	20.00					5.00		
22	3	3	34				3				
	25.00	3	25	12.00			25.00				

ブロック	個体数	個体別資料数	石器総数	識別率%	A	B	C	D	E	F	不	焼
23	1	1	8				1					
	8.00	1	8	12.50			8.00					
II 周	5	5	16				5					
	14.00	5	14	35.71			14.00					
III 周	4	5	14				4					
	11.20	5	14	35.71			11.20					
IV 周	1	2	13				1					
	4.50	2	9	22.22			4.50					
a	1	1	8				1					
	6.00	1	6	16.67			6.00					
b	2	2	8		1	1						
	8.00	2	8	25.00	4.00	4.00						
c	1	1	4				1					
	4.00	1	4	25.00			4.00					
d	3	3	10				3					
	7.00	3	7	42.86			7.00					
e	9	14	36				7				2	
	21.21	14	33	42.42			16.50				4.71	
f	1	1	12				1					
	11.00	1	11	9.09			11.00					
g	2	2	4				2					
	4.00	2	4	50.00			4.00					
h	2	5	7				1		1			
	2.80	5	7	71.43			1.40		1.40			
A類 **	58.54				10.61	6.91	20.64	2.60	5.42	0.89	8.99	2.49
ブロック	49.73				7.45	4.32	17.92	2.46	6.56	0.90	8.42	4.32
B類	17.01				1.23	1.01	12.07	0	1.06	0.55	0.81	0
ブロック	10.11				1.75	1.08	8.33	0	1.11	1.47	1.09	0
C類	6.32				0.15	0.25	4.73	0	1.21	0	0.24	0
ブロック	1.99				0.46	0.78	3.52	0	2.26	0	0.77	0
周辺部	7.55				0	0	7.55	0	0	0	0	0
	5.44				0	0	5.44	0	0	0	0	0
散漫分布域	7.11				0	0.44	5.99	0	0.16	0	0.52	0
	5.82				0	1.26	4.78	0	0.44	0	1.48	0

(上段:実数 下段:修正値,ただし*は上段より砕片・礫石を除いたもの)

** 上段修正個体数の平均値 下段標準偏差

に上段が実数,下段が修正値である。この修正値とは、仮にブロック内の全ての石器群が個体識別できた場合に想定される期待値である。先述したように、個体の識別率は中央群全体で38.95%とあまり高い値ではない。また、ブロック毎に見ても第22ブロックの12.00%から第8ブロックの80.65%までと、かなりのバラツキがある。つまりブロックあるいはブロック群毎に、どのような個体がどの位含まれているかを分析するためには、それぞれの個体識別率を考慮した上で、個体数を修正する必要がある。実際問題として、個体の帰属が決定できなかった石器群がある程度存在する場合、たとえ個体実数を求めても、他の遺跡とは直接比較できず、

第51表-2 ブロック別個体モデル(2)

ブロック(類型)	個体数	A	B	C	D	E	F
個体数20個以上							
17 (A)	142.95	○	○	○	○	○	
19 (A)	46.36	○	○	○	△	△	△
10 (B)	33.24	△	△	○			○
15 (B)	27.50	○		○		△	
22 (B)	25.00			○			
3 (A)	24.29	○	○	○		○	△
5 (A)	20.54	○	△	○	△		
個体数10個以上20個未満							
6 (B)	19.13		△	○			
16 (B)	12.19			○			
個体数10個未満							
7 (C)	9.00			○			
13 (C)	9.00			○			
11 (C)	8.00			○			
23 (C)	8.00			○			
14 (B)	7.80	△		△		△	
18 (B)	7.47		△	○		△	
2 (C)	7.00			○			
4 (C)	6.67					○	
12 (C)	5.33			△			
1 (C)	5.00			○			
21 (C)	5.00					○	
8 (B)	3.72		△	△			
9 (C)	3.33			○			
20 (C)	3.60	△					△

○3個以上, △3個未満

また集団規模の推定などにも影響してくるはずである。そこで一定の基準を設定するにあたり、全ての石器群を個体識別できたと仮定した場合の数値が最も有効であると思うに至った。

まず個体識別作業の困難な破片を全て分析対象外とした後、ブロック及びブロック群毎に石器総数と個体別資料数から個体識別率を算出する。次に各類型の個体数をそれぞれの個体識別率で除し、修正値を算出した。

すなわち

修正個体数=

$$\frac{\text{個体別資料}}{\text{石器総数}} \times \text{個体実数}$$

となる。通常、個体識別率とする場合は、100倍し、パーセントで表示する。

ブロック毎に含まれている

個体の内容を検討したい。まず各ブロックの個体総数は、第17ブロックの142.95個を最高に、第9ブロックの3.33個までかなりバラツキがある(第51-1表)。これを多い順に並べたものが第51-2表である。便宜上、個体数20個以上のもの、10個以上20個未満のもの、10個未満のもの3群に分けてみると、個体数20個以上のブロックは第22ブロックを除くと石器製作作業の展開されたA、B、D、E、F類個体を適宜含んでいることがわかる。一方、個体数10個未満のブロックでは、製品として持ち込まれたC類個体を中心に構成されている。個体数の多いブロックでは集中的に石器製作作業が展開され、個体数の少ないブロックには製品が持ち込まれていることが想定される。

ブロックの類型と個体数、個体の内容との関係を見ると、A類ブロックは個体が多く、また石器製作作業の痕跡を持つ個体を中心に構成されている。一方、C類ブロックでは個体数が少なく、また石器製作作業の痕跡を全く持たないC類個体が主体である。B類ブロックは両者の中間的様相を呈しており、個体数は10個未満3ヶ所、10個以上20個未満2ヶ所、20個以上3ヶ所である。個体の内容はC類個体を中心しつつもA、B、E類個体などを少しずつ含んでお

り、部分的に石器製作作業を行ったことが窺える。

以上をまとめる意味で、ブロック類型毎に各個体類型数を集計した。

A類ブロックでは個体数の平均58.54個(標準偏差49.73)で、その内訳はA類個体平均10.61個、B類個体平均6.91個、C類個体平均20.64個、D類個体平均2.60個、E類個体平均5.42個、F類個体平均0.89個、不明個体平均8.99個となる。これに焼けて割れたものが平均2.49個加わる。使用途中の石核(A類個体+B類個体)17.52個と製品となった個体(C類個体)20.64個及び石核用素材の剥片0.89個が搬入され、これに本ブロックで用意した原石(D類個体+E類個体)8.02個を加えて石器製作作業が展開された。12.33個の石核は、作業が完了する前に次の居住地へ持ち出されている(B類個体+E類個体)という状況になる。

B類ブロックでは個体数の平均が17.01個(標準偏差10.11)で、内訳はA類個体平均1.23個、B類個体平均1.01個、C類個体平均12.07個、E類個体平均1.06個、F類個体平均0.55個、不明個体平均0.81個である。まず平均2.24個の使用途中の石核と製品となった個体12.07個及び石核素材用剥片0.55個が持ち込まれる。新たに用意した1.06個の原石を加え、3.85個の個体について石器製作作業が行われた。その後、2.07個の石核が作業の完結しないまま、ブロック外あるいは遺跡外へと持ち出された。A類ブロックと較べてみると、C類個体(搬入された製品)の数は大差ないが、その他の石器製作作業に関わりをもつ個体の数は格段に少ないことがわかる。

C類ブロックでは個体数の平均が6.32個(標準偏差1.99)で、内訳はA類個体平均0.15個、B類個体平均0.25個、C類個体平均4.73個、E類個体平均1.21個、不明個体平均0.24個、D・F類個体0個である。大半がC類ブロック以外の場所で製作された製品が搬入されたものであり、石器製作作業の痕跡は、11ブロック中3ブロックで認められるにすぎない。

2) ブロック群別個体類型

ブロック群を単位として、各個体類型の在り方を見たいと思う(第52表)。

第Iブロック群では19個体が識別され、124点の個体別資料を得た。石器総数は209点であり、それぞれ破片を除外して計算すると個体識別率は64.04%である。先の方法で修正すると、個体数は29.67個となる。その内訳はA類個体4.68個、B類個体4.68個、C類個体14.05個、D類個体0個、E類個体3.12個、F類個体1.56個、不明1.56個である。本ブロック群では、先の居住地で石器製作作業の前半を行った使用途中の石核9.36個と、遺跡外で製作された製品14.05個体及び石核材用の剥片1.56個体が持ち込まれている。新たに用意した原石3.12個と合わせて、14.04個の石核(個体)に対して石器製作作業が展開された。その後、作業の完了していない7.80個の石核を次の居住地へ持ち出しているという状況が窺える。

それでは14.04個の石核(個体)からどれ位の石器が生産され、消費されたのだろうか。この点を少し考えてみよう。

まず基礎作業として、石器総数から分析対象外の破片を除去すると178点である。一方、本ブロックで石器製作作業の展開されたA、B、E、F類個体に含まれている個体別資料のうち

第52表 ブロック群別個体モデル組成

	個体数	個資 体料別数	石器 総数	識別 率(%)	A	B	C	D	E	F	不明	焼 け 割	製作 個体 (個)	製資 料 作数(点)	製作 工程 (個)	1単 工 位 程数(点)
第Iブロック群 礫石器・ 砕片を除く	19	124	209		3	3	9		2	1	1		9	112		11.33
修正値	29.67	—	—	64.04	4.68	4.68	14.05		3.12	1.56	1.56		14.05	159.26	17.69	9.00
第IIブロック群 礫石器・ 砕片を除く	38	348	1,031		6	5	19	1		2	5		14	256		19.33
修正値	68.45	—	—	55.52	10.81	9.01	34.22	1.80		3.60	9.01		25.22	432.29	34.82	12.41
第Iブロック群 の倍数					2.31	1.93	2.44	—	0	2.31						
第IIIブロック群 礫石器・ 砕片を除く	63	459	1,383		13	4	21	3	8	1	10	3	29	380		49.33
修正値	149.43	—	—	42.16	30.83	9.49	49.81	7.12	18.98	2.37	23.72	7.12	68.78	858.62	117.00	7.34
第Iブロック群 の倍数					6.59	2.03	3.55	—	6.08	1.52						
第IVブロック群 礫石器・ 砕片を除く	27	88	200		4	5	10	1	3	1	3		14	68		17.33
修正値	54.94	—	—	49.14	8.14	10.17	20.35	2.03	6.10	2.03	6.10		28.49	134.30	35.26	3.81
第Iブロック群 の倍数					1.74	2.17	1.45	—	1.96	1.30						

破片以外のものは102点である。ここで、実際には個体識別の行えなかった石器群が76点含まれているため、全ての資料が個別別資料に組み込まれたと仮定した時に想定される値に修正する必要がある。それには次のような方法を採用した。まず個別別資料は124点、このうち破片が10点含まれているため個別別資料中で分析対象とする値は114点である。個別別資料中で製作個体に関わるものから破片を除くと102点であるため、製作資料は89.47%となる。また非個別別資料を含めた178点の89.47%は159.26点で、これが本ブロック群内で製作された石器群の数となる。

次に狩猟などによって失われた石器群の数量を検討する手掛りを考えてみたい。

個体の分析の初めに、原石から残核に至るまでの作業工程を三段階に大別した。目的とする剥片類は、その中期段階に最も多く生産されたことが想定されるが、敢えて各工程段階の目的剥片及び非目的剥片の合計は大差ないものと仮定する(仮定1)。次に製作された剥片及び製品は、移動に伴って搬出されるわけだが、各個体で一作業段階あたりに製作されたものの内、移動に伴う搬出量は比較的一定であったと仮定する(仮定2)。仮定1・2共に個々の資料から反証することが可能なのは十分承知しているが、1ブロック群内の個体群を平均化させることで、個別の特長、差違が減少していくのではないかと思う。目的としては、ブロック群を単位として、一作業段階あたりに製作された石器群の中で、ブロック群内に遺棄された数を求め、仮定1及び2に基づいて、使用により失われたものの大小関係を比較することにある。それが居住期間の長短にも関わってくると考えるからである。

第1ブロック群の中で石器製作作業の行なわれたA, B, D, E, F類個体の合計は、実数で9個、その内訳は初期段階1, 中期段階3, 終末期段階1, 初期+中期段階1, 中期+終末期段階2, 剥片素材石核1である。剥片素材石核による作業量が極めて少ないため、他の1/2として計算し、作業段階数は計11.33となる。これを先の方法で修正すると17.69作業段階となる。先に本ブロック群内で製作された石器群は159.26点と算出したことから、本ブロック群内で1個体の一作業段階あたりに製作され、しかも遺棄されたものは9.00点ということになる(159.26 + 17.69 = 9.00)。

さて、ブロック群内で1個体一作業段階あたり製作された石器数を x 、移動に伴って搬出された石器数を y 、そのまま遺棄された石器数を z と置くと、使用によって欠落した石器数 P は、

$$P = x - y - z$$

という式で現される。先に仮定1及び2によって、 x と y は一定としたため、上記の式で P を規定するものは z 、すなわち製作された後、そのまま遺棄されたものということになる。 $x - y$ を定数 k に置き換えると、一作業段階あたりに製作されたものの中で消費されたものは、 $k - z$ で現されるわけである。第1ブロック群内で一作業段階あたりに製作され、そのまま残されたものは9.00点という値を得ているため、第1ブロック群の消費量は $P = k - 9.00$ (k :定数)となる。他のブロック群及び他の遺跡のものと比較することにより、居住期間あるいは別の要因での石器消費量の大小を考えられるのではあるまいか。

第IIブロック群では38個の個体が識別され、348点の個体別資料を得た。ただし砕片を除くと332点となる。一方第IIブロック群の石器総数は1,031点、砕片を除くと598点である。したがって個体の識別率は55.52%となる。先の方法で修正すると個体数は68.45個で、その内訳はA類個体10.81個、B類個体9.01個、C類個体34.22個、D類個体1.80個、E類個体0個、F類個体3.60個、不明9.01個である。それぞれの数量を第Iブロック群のものと比べてみるとA類個体2.31倍、B類個体1.93倍、C類個体2.44倍、D類個体不定、E類個体0倍、F類個体2.31倍で、D類を除いて平均すると1.80倍(標準偏差0.92)である。個体から見ると第IIブロック群は第Iブロック群の0.9~2.7倍程度の規模を持つと言える。本ブロック群の個体の在り方は、19.82個の使用途中の石核と34.22個体の製品及び3.60個体の石核素材用の剥片が持ち込まれる。新たに用意された1.80個の原石と共に25.22個の個体に対して石器製作作業が展開された。この段階で製作され、そのまま遺棄された石器群が432.29(実数256)点あり、全体の72.29%を占める。石器製作作業の完了した個体が16.21個で、残りの9.01個の個体は作業が完了せず、石核が次の居住地へ持ち去られている。

第Iブロック群で示した石器群の消費量を求めてみよう。本ブロック群で石器製作作業が展開された個体は実数で14個、その内訳は中期段階5、終末期段階1、中期+終末期5、全工程1、剥片素材石核2である。したがって、作業段階の合計は19.33となる。これを修正すると34.82作業段階という値が得られる。本ブロック内で製作され、そのまま遺棄された石器群は432.29点だから、一作業段階あたり12.41点となる。以上より本ブロック群で製作され、遺跡外で使用されたために欠落したものは、 $P II = k - 12.41$ となる。第Iブロック群と比較すると、本ブロック群の方が遺棄された量が多く、遺跡外に持ち出されて使用された石器が少ないということになる。ただ、本ブロック群では尖頭器を製作しており、第Iブロック群の石器群より不要となる剥片(ポイントフレイク)が多いと思われる。したがって、両者の石器製作技術に差があるため単純に比較することはできない。それでも、両者の遺棄の量に大きな違いはなかった。

第IIIブロック群では63個の個体が識別され459点の個体別資料を得た。砕片を除くと441点である。一方石器総数は1,383点、砕片を除くと1,046点である。したがって、個体の識別率は42.16%となる。各個体類型を修正すると、個体総数149.43個、その内訳はA類個体30.83個、B類個体9.49個、C類個体49.81個、D類個体7.12個、E類個体18.98個、F類個体2.37個、類型不明の個体23.72個、焼け割れの個体7.12個である。数量が極めて多く、第Iブロック群と各類型の個体数を比較してみると、A類個体6.59倍、B類個体2.03倍、C類個体3.55倍、D類個体不定、E類個体6.08倍、F類個体1.52倍で、平均すると3.95倍(標準偏差2.06)となる。大まかに言えば、第IIIブロック群の個体は第Iブロック群の個体の2倍から6倍くらいまでの規模ということになる。本ブロック群の個体の在り方は、40.32個の使用途中の石核と49.81個体の製品及び2.37個体の石核用素材の剥片が搬入される。もちろん一時的にはなく、複数回の移動に伴って、累積的になったのであろう。これに本ブロック群内で新たに26.10個

の原石が用意され、計68.79個の石核について石器製作作業が展開された。ただ、28.47個の石核は作業が完了せず、次の居住地へと持ち出されている。ここで製作され、遺棄された石器群は、個体別資料より見て、実数で362点(ただし破片は除く)、修正すると858.62点となり、全体の82.09%を占めている。

次に石器の消費について見てみよう。本ブロック内で石器製作作業の展開された個体は実数で29個、その内訳は初期段階3、中期段階4、終末期段階3、初期+中期段階5、中期+終末期段階10、全工程3、剥片素材石核1である。作業段階の合計は49.33となる。これを個体識別率との関係で修正すると117.00段階となり、858.62点の石器群が製作、遺棄されていることから、一作業段階あたりでは7.34点の石器群が製作後、遺棄された計算になる。したがって、第Ⅲブロック群の石器群の中で、遺跡外で消費され、欠落したものは $PⅢ = k - 7.34$ となる。この値をそのまま用いると、第Ⅰ、Ⅱブロック群より消費量が多いことになる($PⅡ < PⅠ < PⅢ$)。ただし、石器群の分布の項で触れた通り、本ブロック群内の幾つかのブロックは、後世の擾乱のため、一部の資料が失われている。その点を考慮すると、本来的には第Ⅰ、Ⅱブロック群の分析によって得られた数値に近いのではないかと想定される。

第Ⅳブロック群では27個の個体が識別され、88点の個体別資料を得た。破片を除くと86点である。一方、石器総数は200点、破片を除くと175点であり、個体識別率は49.10%となる。個体数は、修正すると54.94個、その内訳はA類個体8.14個、B類個体10.17個、C類個体20.35個、D類個体2.03個、E類個体6.10個、F類個体2.03個、類型不明の個体6.10個である。本ブロック群内の個体の在り方は、まず作業の前半部を他の場所で行った18.31個の石核と20.35個体の製品、2.03個体の石核用素材の剥片とが搬入される。本ブロック群で新たに用意した個体(石核)8.13個が加えられ、28.47個の石核について石器製作作業が展開された。この段階で134.30点(実数66点)の石器群が製作され、ブロック群内に残された。14.24個の石核は作業が完了する以前に、次の居住地へ運び去られた。

本ブロック群内で生活していた期間に遺跡外で消費された石器群を考えてみよう。ブロック群内で石器製作作業の展開された個体は実数で14個、その内訳は初期段階2、中期段階5、終末期段階3、初期+中期段階1、中期+終末期段階1、全工程1、剥片素材石核1である。作業段階の合計は17.33で、個体識別率との関係で修正すると35.26作業段階となる。先に記した通り、ブロック群内で製作され、その後遺棄された石器群は134.30個であるため、一作業段階あたりでは3.81点となる。したがって、一作業段階あたり製作された石器群のうち遺跡外で消費されたものは、 $PⅣ = k - 3.81$ となる。他のブロック群に較べてかなり低い値を示すのは、第Ⅲブロック群以上に擾乱(削平)を受けているため、後世に失われたものが多いためであろう。第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲブロック群の消費状況に大差がない点を考えれば、本ブロック群とその他のブロック群との差は当時の人々による活動量の差ではなく、後世の擾乱によって引き起こされた差なのかも知れない。この点については、今後周辺遺跡の分析を行うことにより明らかになるものと思う。

3. 個別別資料から見た ブロック間の関係

1) 個別別資料の個別分布

ここでは各ブロック群内に分布する個体の中で資料としてまとまっているもの(10点以上)及び複数ブロック間にわたっているものの分布状況とその内容を概観してみる。ブロックとブロック群外の領域とで共有される個体については分布の中心となるブロック群に含めたが、ブロック群相互の共有関係を示すものは終わりにまとめて記した。したがって基本的には同一ブロック群内に属する個体について、まず提示する(第50表、別添第24図)。

第1ブロック群

K2-3F①(第219図)

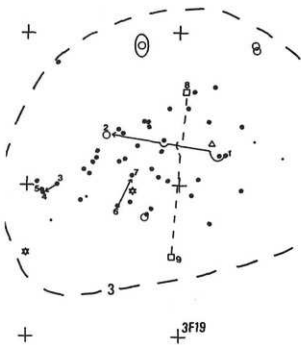
第3ブロック内にナイフ形石器2点、RF2点、UF4点、剥片41点、砕片4点、石核2点の計55点が含まれる。第3ブロック全域に分布し、特にブロックの核に集中する。砕片2点はナイフ形石器の製作時に生じるブランティングチップである。これらは同一個体の分布の外縁部に位置している。剥片は小型で自然面の付着しているものが多い。接合資料は9点あるが、4組に分かれる。本ブロック内で原石が用意され、石器製作作業が展開された。剥片素材の石核があり、複数の石核に対して作業がなされたことが窺えるが、個体の中心となる石核は作業が完了する以前に搬出されている。

K2-3F②(第220図)

第2ブロックに剥片1点、第3ブロックに剥片12点、石核1点が分布する。第3ブロック内ではブロック東半部に多い。接合資料が7点あり、3組に分かれ、うち2組は剥片のⅡ種接合である。初期段階を示す部分は認められず、本格的な剥片剥離作業から残核に至るまでの資料として認識できる。ただ、資料が少なく、かなりのものが持ち出されている。第2ブロックへも製品が持ち出されていると考えられる。

K2-3F③

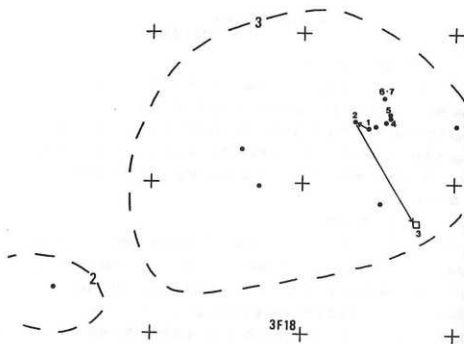
第3ブロックの核を中心に分布し、



△:尖頭器 ☆:ナイフ形石器 ○:その他のツール
●:剥片 ・:砕片 □:石核

枠内で囲った資料は表面採集資料(以下同じ)

第219図 個別別資料K2-3F①分布図



第220図 個別別資料K2-3 F⑥分布図

ナイフ形石器1点，RF1点，UF2点，剥片7点の計11点で構成される。ナイフ形石器，RF，剥片2点が1組にまとまって接合しており，集中的に石器の製作を行っていたようである。初期及び終末期段階の資料がなく，初期作業終了後に本ブロック内に石核が持ち込まれて作業が展開され，終末期以前に再び持ち出されたと思われる。

第IIブロック群

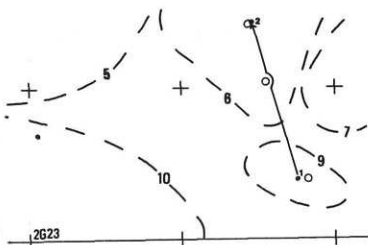
K2-2 G④

第8ブロック内のRF1点，UF3点，剥片15点，石核2点の計21点により構成される。ブロック全域に分布する形をとるが，逆に言えば，第8ブロック自体が本個体を中心に形成されている。14点が5組に分かれて接合するが，それを見ると原石を分割した後，複数の石核に対して剥片剥離作業を行っていたことがわかる。ただし個体の分割から初期段階を第8ブロック内で行った痕跡はなく，また個体の中心的な石核は持ち出されている。したがって，複数の石核を持つ中期段階の資料として認識できる。第8ブロック内の64%が本個体であり，B類ブロックにおける特定個体の消費の一例と言える。

K2-2 G⑤ (第221図)

第6ブロックにUF2点，剥片1点，第9ブロックにUF1点，剥片1点，第10ブロックに剥片1点が分布する。第6ブロックの打面再生剥片と第9ブロックの縦長剥片が接合する。部分的に自然面の付着したものが多いが，本石器群の技術工程を見ると必ずしも自然面の付着す

る剥片が初期段階に限って得られるというものでもない。目的剥片と思われる形状の剥片を生産していることから中期段階の資料と判断した。第6ブロックが作業の中心場所と思われ、また同一個体の分布範囲が広いことから人為的な移動を想定せざるを得ないが、資料が少ないため詳細は不明である。



第221図 個別別資料K2-2G⑥分布図

K2-2G⑥

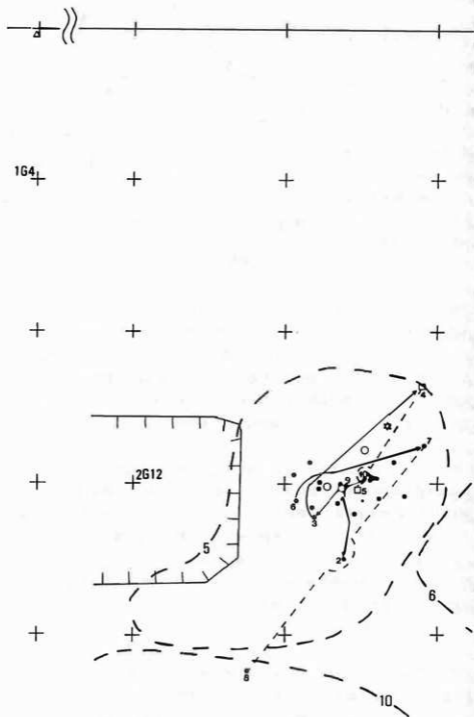
第5ブロックにナイフ形石器2点、UF1点、剥片34点、石核2点の計39点、第IIブロック群周辺部に石核1点が分布する。第5ブロック内ではブロックの中心部やや北寄りに本個体が集中する。第IIブロック群周辺部の石核は、他の同一個体の資料とは4m近く離れて単独で分布する。接合資料は8点で3組に分かれるが、1組はII種接合の石核を含めた4点である。全体的に形状が不定で小型の剥片が多く、5点ほどは火熱を受けている。中期から終末期段階までの工程を示す資料であり、石核の破損により作業を停止している。

K2-2G⑦

第5ブロックに尖頭器2点、UF4点、剥片52点、砕片3点、石核1点の計62点、第10ブロックに尖頭器1点が分布する。特に第5ブロック内では2G13・18区境界付近のブロックの核に径4mほどの範囲で集中する。第10ブロックの尖頭器は他の同一個体の資料とは7mも離れており、第5ブロックで作られたものが持ち運ばれたと解される。接合資料は8点で剥片、石核により構成される。全体的には小型の不定形剥片が多く、また尖頭器も含んでいるが、縦長剥片、同石核もある。初期段階が欠落しているが、中期段階以降は終末期段階まで本ブロック内で素材生産が行われ、合わせて二次加工もなされた。

K2-2G⑧ (第222図)

第5ブロックにナイフ形石器1点、RF1点、UF2点、剥片21点、砕片1点、石核2点の計28点、第10ブロックに剥片1点、1G4区に尖頭器1点が分布する。第5ブロックの核の部分に集中し、4mほど離れて1点が第10ブロックに位置する。また1G4区には同一個体の分布の中心から15mほど離れて尖頭器が1点あるが、ここは尖頭器石器群P-4aブロックと重なる。第IIブロック群は、ナイフ形石器群として取扱ったが、尖頭器石器群北群と同時期の可能性はある。接合資料は3組10点で、第5ブロックと第10ブロックとの間に接合関係がある。た

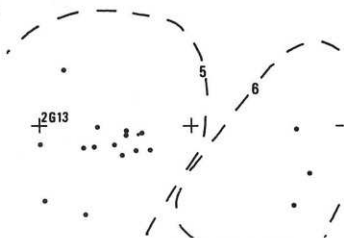


第 222 図 個体別資料 K 2 - 2 G ㊸ 分布図

だし、剥片のⅡ種接合である。石器群は全体的に小型の剥片・砕片の破損品が多く、目的なものも極めて少ない。10点は火熱を受けている。中期から終末期段階にかけての資料である。

K2-2G⑩(第223図)

第5ブロックに剥片14点、砕片1点の計15点、第6ブロックに剥片3点が分布する。同一個体の分布は、第5ブロック内では2G18区北半を中心に径3mの範囲に小さくまとまりを持ち、ブロック中央部やや東寄りに位置する。第6ブロック内ではブロック東側の部分に3点がまばらに分布する。両ブロックの二つのまとまりの間は3m以上離れており、両者が一連の分布を示すものではない。第5ブロック内のものがポイントフレイク群で、第6ブロックのものが中期段階の剥片剥離工程の内容を持つことから、第5ブロックでは素材の生産から尖頭器の製作が行われ、第6ブロックに剥片が持ち込まれたのか、あるいは他の場所で作った剥片をそれぞれのブロックに持ち込み、第5ブロックの方では尖頭器に加工したといった可能性が考えられる。ただし、製品自体は欠落している。



第223図 個別別資料K2-2G⑩分布図

りの間は3m以上離れており、両者が一連の分布を示すものではない。第5ブロック内のものがポイントフレイク群で、第6ブロックのものが中期段階の剥片剥離工程の内容を持つことから、第5ブロックでは素材の生産から尖頭器の製作が行われ、第6ブロックに剥片が持ち込まれたのか、あるいは他の場所で作った剥片をそれぞれのブロックに持ち込み、第5ブロックの方では尖頭器に加工したといった可能性が考えられる。ただし、製品自体は欠落している。

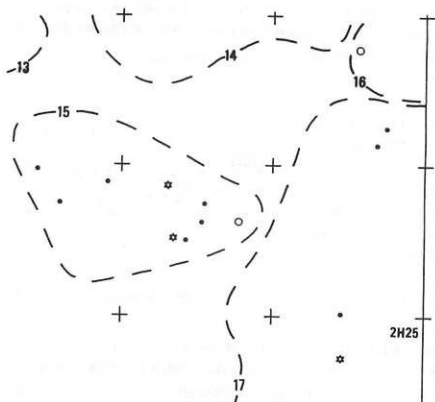
K2-2G⑪

第5ブロックに分布し、ナイフ形石器1点、UF7点、剥片31点、砕片1点、石核1点の計41点で構成される。第5ブロック中央やや西側に、径3mほどの範囲でまとまるが、ナイフ形石器は同一個体の分布の中心からはずれた所に位置する。接合資料は15点あり、5組に分かれる。自然面の付着した剥片が目立ち、初期段階の資料が含まれていることがわかる。全体的に小型不定形の剥片が多く、目的剥片と思われるものはほとんどない。原石の中心的な残核まであり、全工程の資料として捉えられる。

第Ⅲブロック群

K2-2H①(第224図)

第15ブロックにナイフ形石器2点、UF1点、剥片6点、第16ブロックにUF1点、第17ブロックにナイフ形石器1点、剥片3点が含まれる。同一個体の分布について見ると、第15ブロック内ではブロック中央部に東西に長く分布する。一方、第16・17ブロック内ではブロック西側に散漫に分布する状況が認められる。接合資料はないが、全体的に自然面の付着したものが多く、初期から中期段階にかけての資料と思われる。第15・17ブロック内の資料に質的な差はないが第17ブロックの分布は極めて散漫で製作作業の痕跡を留めてはいない。



第224図 個別別資料K2-2H①分布図

K2-2H②

第14ブロックにナイフ形石器1点、剥片4点、第15ブロックにUF1点、第16ブロックに剥片1点、第17ブロックにナイフ形石器2点、スクレイパー1点、UF2点、剥片11点、砕片1点、石核2点が分布する。第14ブロック内ではブロックの中心部にナイフ形石器を含めて5点の石器群がまとまる。第15ブロックではブロックの中心にUFが1点、第16ブロック内ではブロック南端部に剥片がある。第17ブロックには最も多くの資料が含まれるが、大半はブロック西北部から中央部にかけてまとまり、ナイフ形石器1点、UF1点だけが同一個体の分布の中心からはずれる。基本的に第14・17ブロックの2ヶ所にまとまりを持ち、それぞれで製作作業が行われたと考えられる。ただ、第14ブロックには資料が少ないため、作業内容を明らかにし得ない。接合資料は3組9点あり、8点が第17ブロック、1点が第16ブロックにある。ただ、第16ブロックと第17ブロックとが相互に近接し、第16ブロックの資料がブロック南端に位置することから、第16ブロックに含まれている1点の剥片については意図的な搬入ではなく、偶発的に飛び散った可能性が高い。自然面の付着した剥片から打面再生剥片まで認められ、初期から中期段階にかけての工程内容を持つ一群である。素材の形状が異なるナイフ形石器とスクレイパーが同一個体から製作されている。

K2-2H③

第13ブロック東端部に剥片1点、第15ブロック西半部のブロックの核に剥片1点、第16ブロック西端部に剥片2点、第17ブロックにRF1点、UF2点、剥片26点、石核2点が含まれる。第17ブロックでは資料の大半がブロック南半部の核に長軸6m、短軸4mほどの楕円形を呈して分布するが、UF1点、剥片素材の石核1点が分布の中心から大きく離れ、ブロック東半部の核に位置する。接合資料はRF、石核を含む5点2組だが、全て第17ブロック内のものである。中期段階以降の資料で打面調整をくり返ししながら目的剥片の剥離を行ったようだが、残されたものは小型不定形の剥片が多く、かなり多くのものが持ち出されている。第17ブロックで製作作業が行われ、他のブロックに搬入されたと思われるが、第13・16ブロックの剥片はあまり形状の整ったものではない。

K2-2H④

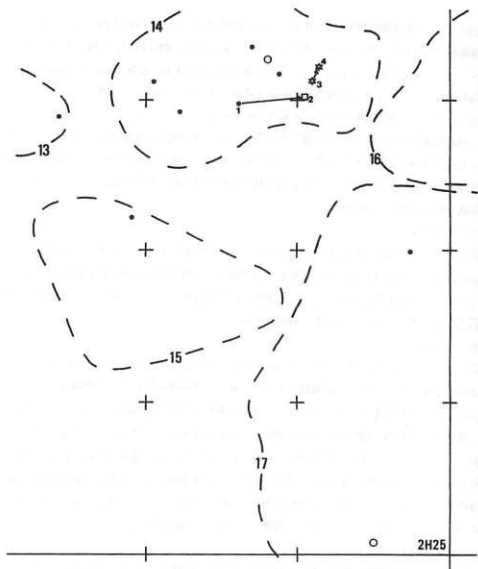
第17ブロック西南部の核に集中的に分布し、ナイフ形石器1点、UF1点、剥片15点、石核1点の計18点で構成される。接合資料は8点2組で、うち1組は石核、打面再生剥片を含む一組である。整った剥片はわずかで、目的剥片は持ち出されているようである。作業半ばの石核が搬入され、残核に至るまで作業を継続している。

K2-2H⑤

第15ブロックに石核1点、第17ブロックにナイフ形石器1点、UF4点、剥片12点、石核1点が分布する。第17ブロックの資料は大半がブロック西南部の核にあたる2H20・25区に集中するが、ナイフ形石器1点が若干はずれ、さらに剥片1点が分布の中心から5mほど離れている。第15ブロックでは剥離作業の痕跡が認められないにもかかわらず石核1点が単独で存在し、第17ブロックの同一個体の分布の中心からは7mも離れている。資料は全面が自然面に被れた剥片から残核まで含まれ、第17ブロックで原石からの作業が始まり、本格的な剥片剥離を経て、作業が完了している。ただ厚手いびつな剥片や剥片の小片が多く、目的剥片はほとんど残されていない。なお4点ほど火熱を受けた痕跡を持つものが認められる。

K2-2H⑥(第225図)

第13ブロック東端部に剥片1点、第14ブロックにナイフ形石器2点、UF1点、剥片5点、石核1点、第15ブロック北端部に剥片1点、第17ブロックにUF1点、剥片1点があり、同一個体の分布範囲が広い。特に第14ブロックではブロック中央部に長軸4m、短軸1.5mほどの楕円形の範囲に9点の資料が分布する。第13・16ブロック(各1点)及び第17ブロック(2点)の資料と第14ブロックの同一個体の分布の中心とは、それぞれ3m、3m、5m、12mの距離をもち、人為的な搬入が想定される。接合資料は4点2組あり、うち1組はナイフ形石器同志の1種接合であり、連続的に剥離した剥片からナイフ形石器を製作している。自然面に被れたものではなく、剥片の小片が多い。第14ブロックに初期段階終了後の石核が持ち込まれ、終末期段階まで石器製作作業が展開された。その過程で製作されたものが第13・15・17ブロックに持ち込まれているが、いずれの資料も形状の整ったものではない。



第225図 個別別資料K2-2Hの分布図

K2-2H

第17ブロックに分布し、ナイフ形石器2点、UF1点、剥片14点、石核1点の計18点で構成される。全体にブロックの南半部に集中しており、その中心にある第6号土坑には剥片2点、石核1点が入っている。剥片1点だけがブロック東半部にあり、他の資料から離れている。剥片素材の石核から横長剥片を剥離する技術内容を示す資料が主体を占め、想定される原石の大部分が欠落している。ただし、残された石核からは剥離し得ない剥片が含まれていることから、個体の分割から初期・中期段階の作業が別になされていたと思われる。個体の中心となる石核、目的剥片などは持ち出されている。ナイフ形石器はⅡ種接合しているが、加工が完全ではなく、

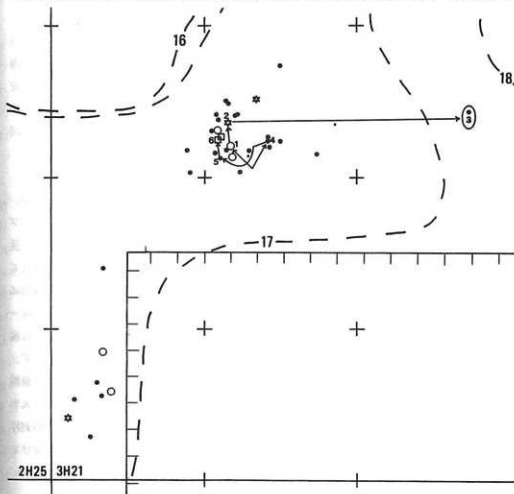
加工中に折損して放棄した未成品のようである。

K2-3H⑦ (第226図)

第17ブロックに分布し、ナイフ形石器3点、RF3点、UF2点、剥片26点、砕片2点、石核2点の計38点で構成される。ブロック東半部の核にあたる3H11・12区とブロック南半部の3H21区の2ヶ所に同一個体のまとまりをもち、両地点で製作作業が行われたと思われる。ただし、前者の資料の方が圧倒的に多い。接合資料からは分割された2個の石核それぞれに対して、並行した作業過程が想定されるが、原石を分割して石核とする初期段階を示す資料が認められず、他の場所で分割した2個の石核を持ち込んでいると思われる。小型不定形の剥片が多いものの、中には形状の整った縦長剥片も含まれており、中期から終末期段階の資料と見ることができる。

K2-3H⑧

第17ブロックにナイフ形石器1点、剥片10点、石核1点、散漫分布域gに剥片1点が分布す



第226図 個体別資料K2-3H⑦分布図

る。第17ブロック内ではブロック東半部の核に当たる3H17区西北部に径3mほどの範囲で集中する。接合資料はないが、目的剥片、調整剥片、残核が残されており、剥離工程中期及び終末期段階の資料と思われる。第17ブロックで製作された剥片が散漫分布域gに持ち運ばれている。

K2-3H⑨

第17ブロックにスクレイパー1点、UF1点、剥片4点、石核4点の計8点が、ブロック外(分析対象区域外)の2I23区に剥片1点が単独で分布する。第17ブロックのものは、ブロックほぼ中央の3H16区を中心に、その北側の3H11区にかけてまとまりを持つが、スクレイパーが1点西南側の2H25区に分布する。接合資料は9点あり、スクレイパーも含まれている。作業は原石の自然面を剥ぎ取りつつ分割し、それぞれを石核の素材とする。スクレイパーの素材もこの段階の大型厚手の剥片である。その後、本格的な剥片剥離作業を経て最終段階に至っており、原石から残核までの全工程を示す資料が残されている。2I23区に単独で分布する剥片は全面が自然面に被れたもので、石器か石核の素材かも知れない。

K2-3H⑩

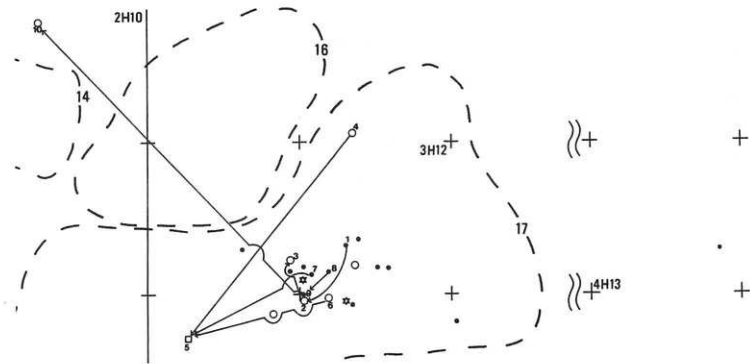
第15ブロックに剥片2点、第17ブロックに剥片6点、砕片2点が分布する。第17ブロック内ではブロック中央部に5点がまとまり、やや離れて西側に2点、分布の中心から9m離れて南半に1点が分布しており、あまり分布にまとまりがない。「下呂石」と呼ばれるガラス質の安山岩で、小型の剥片を主体とする。中には尖頭器の調整剥片も含んでいる。第17ブロック内の第6号土坑よりガラス質安山岩製の小型両面加工の尖頭器先端部が出土しており、あるいは同一個体かも知れない。

K2-3H⑪(第227図)

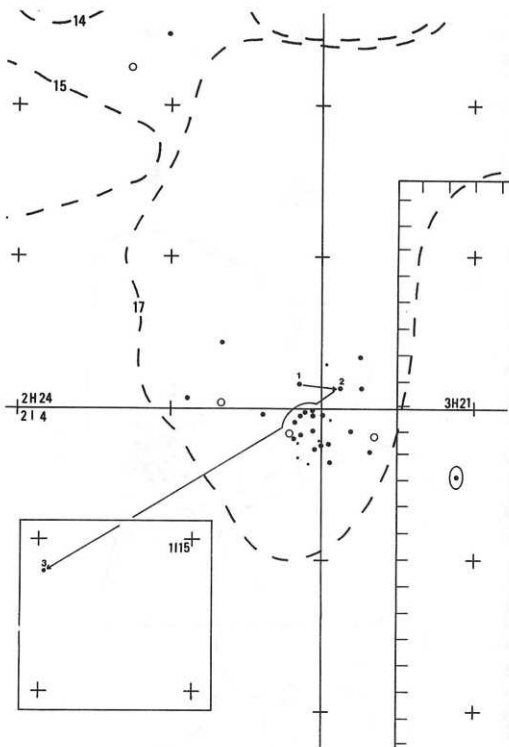
第17ブロックにナイフ形石器2点、UF6点、剥片12点、石核1点の計21点が分布する他、第Ⅲブロック群周辺部(2H10区)にUF1点、散漫分布域gに剥片1点が含まれる。第17ブロックではブロック中央部からやや東側にかけての3H11・12・16・17区境界付近を中心に長軸3.5m、短軸2mほどの楕円形状に石器群がまとまる。石核は分布の中心から2.5mほど離れている他、UFが1点第17ブロック北端に位置する。第Ⅲブロック群周辺部のものは接合資料に含まれているが、分布の中心からは10mも離れている。また散漫分布域gの剥片は、他の同一個体の分布の中心から25m離れている。接合資料は10点3組で、うち1点には剥片素材の石核を含んでいる。自然面に被れた剥片を若干含むが初期段階の工程内容を明確に示してはならず、また主体的な作業内容を持つ残核も見られない。したがって第17ブロックでは中期段階の資料によって構成されると判断した。目的剥片を剥離した痕跡を残すものの、残された剥片は大半が小型不整形のものである。第Ⅲブロック群周辺部や散漫分布域gで見られるように目的剥片の多くは他の地点で使用されたり、移動と共に持ち出されたのであろう。1点は火熱を受けている。

K2-2I③(第228図)

第17ブロックにUF3点、剥片23点、砕片6点の計32点が、第Ⅲブロック群周辺部にUF1



第 227 図 個別別資料 K2-3 H@分布図



第 228 図 個別別資料 K 2 - 2 1 ③ 分布図

点、剥片1点、散漫分布域hに剥片1点が分布する。第17ブロック内ではブロック南端近くの215、311区に集中しており、1点は第6号土坑に入っていた。第IIIブロック群周辺部のUF、剥片は第14・15・16・17ブロックの間にはさまれた空間に位置し、同一個体の分布の中心からは10m離れている。また散漫分布域hの剥片は分布の中心から25m離れて接合関係にある。資料は中期段階の内容を示す一群である。

第IVブロック群

K2-3H②

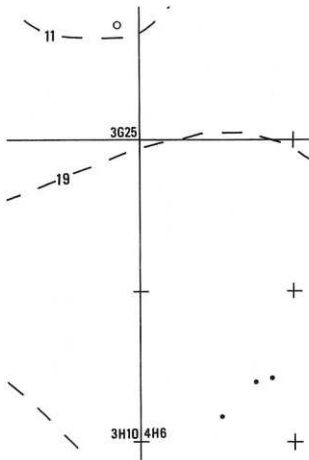
第18ブロックに剥片6点、石核1点、第IVブロック群周辺部にナイフ形石器1点、剥片1点が分布する。第18ブロック内の資料は特にまとまらず、散漫な分布状況を示す。ナイフ形石器は第18ブロックの北側(3H9区)に若干離れて位置するためブロックの周辺部としたが、同一個体の分布状況から見れば、ブロック内に取り込んだ方が良いかも知れない。一方、第IVブロック群周辺部の剥片は6mの距離を持って第18ブロックの石核と接合する。剥片素材の石核や自然面の付着した剥片、縦長剥片などがあり、初期から中期段階にかけての資料と考えられる。

K2-4H④(第229図)

第11ブロックにRF1点、第19ブロックの東南部に剥片3点が分布する。両者は10mほどの距離がある。第19ブロック内の剥片はいずれも小型不定形のものであるが、資料数が少ないため第19ブロックで製作されたものか否かは明らかでない。ただ、少なくとも第11ブロックのRFは搬入品である。

K2-4H⑤

第18ブロックにナイフ形石器1点、UF1点、第19ブロックに剥片6点が分布する。第19ブロック内のは、ブロック東半部に散漫な分布状況を示す。第18ブロックの資料とは相互に7mほど離れており、両者が同一個体の分布において連続するのではない。自然面に被れた剥片が目立ち、また微細な砕片もあることから、第19ブ



第229図 個体別資料K2-4H④分布図

ロックで石器製作作業が展開されたことがわかる。しかし大型の剥片はなく、自然面の付着する剥片はあるものの初期段階の工程内容は認め難い。中期段階に限って第19ブロック内で製作作業が行われ、ナイフ形石器、UF(の素材)が第18ブロックに持ち込まれたと解される。

第Ⅲブロック群と第Ⅳブロック群とで共有される個体

K 2-3 H㊦ (第230図)

第17ブロックにUF 2点, 第19ブロックにナイフ形石器 1点, UF 3点, 剥片 7点, 石核 1点が分布する。第19ブロック内ではブロック西半部の核を中心に分布し, UF 1点がはずれる他は径2.5mほどの範囲におさまる。第17ブロック内ではブロック中央部及び南半部にUFが1点ずつ含まれる。特に中央部の1点は第19ブロック内の資料と16m離れて接合する。接合資料は8点が1組にまとまる。石核調整剥片, 打面調整剥片, 目的剥片, 残核から成るが, この接合資料を見ると, 目的剥片の多くが欠落していることがわかる。第17ブロックに位置するUFは石核の側面調整剥片を利用したものだが, 連続的に数枚剥離されたものの1つで, 石核の移動ではなく, 製品の持ち出しであることは明白である。資料は全工程が残されている。

K 2-3 H㊧ (第231図)

第16ブロックにUF 1点, 剥片 1点, 第18・19ブロックに剥片が1点ずつ含まれる他, 第17ブロックにUF 2点, 剥片 8点, 石核 2点が分布する。最も中心的な第17ブロック内ではブロック中央部の3 H16区から17区にかけて小規模なまとまりを形成するが, ブロック南半や東半部にも散漫に分布する。第16ブロックの2点の資料は, 共にブロック南端部, 第17ブロックに接して位置する。第17ブロック内に取り込んで考える必要があるのかも知れないが, 分布の中心からははずれている。他に第18・19ブロックの中心部にそれぞれ1点ずつの資料が含まれる。接合資料は6点1組で, これに他の資料を加えて考えると初期段階から終末期段階まで一通りそろっていることになる。第17ブロックで製作作業がなされ, 主に初期段階の剥片が第16・18・19ブロックに搬入されたものと考えられる。

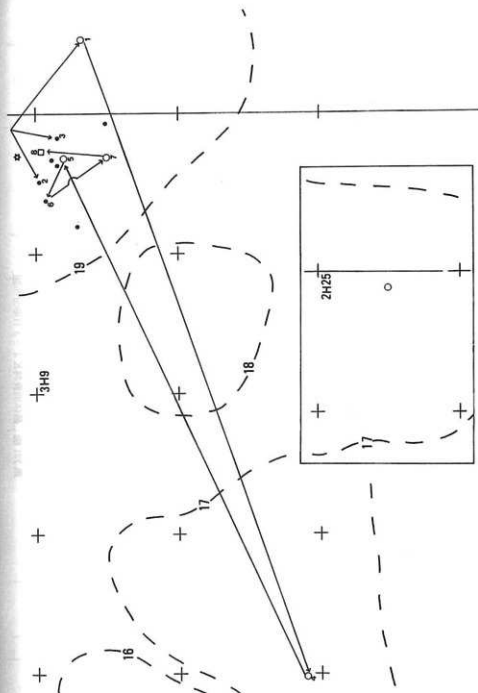
K 2-3 H㊨ (第232図)

第16ブロックに剥片 4点, 第19ブロックにRF 1点, 剥片 1点, 石核 1点が分布する。第16ブロック内では小型の剥片が径3mほどの範囲にゆるやかなまとまりを持つ。一方第19ブロックではRF, 小型の剥片, 石核がブロック西半の核に分布する。いずれのブロックでも石器製作作業を行ったと考えられるが, 資料数が少ないため工程内容を明らかにし得ない。ただ, 剥片素材の石核以外に個体の中心的な石核が存在しないため, 終末期段階はない。

複数ブロックにわたって共有関係をもつ個体を実数のまま用いてブロック間の関係を表わすと, 第233図のようになる。

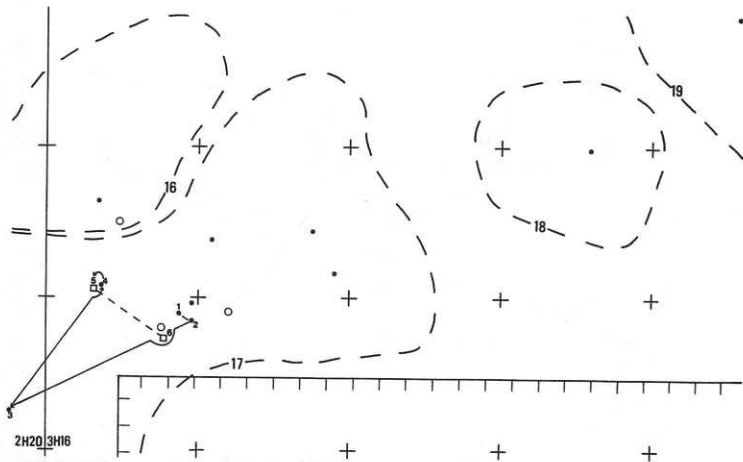
2) ブロック間の関係

前項では中央群にある主な個別資料の分布状況を見てきた。本項ではそれらをまとめるにあたり, ブロック間の結びつきを数量化したい。まず基礎作業として, 各ブロックの個体数を実数のまま用い, 他のブロックと相対的にどのくらいの個体について共有関係があるのかを算

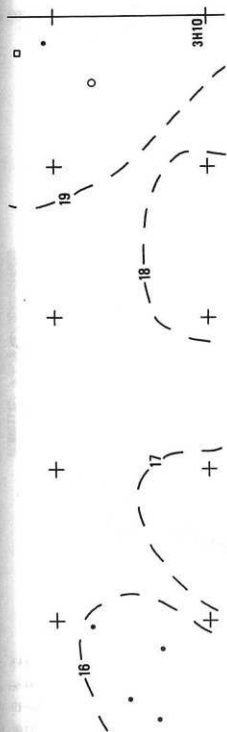


第230図 個別別資料K2-3 Hの分布図

出する。例えば、aブロックには5個体あり、そのうち1個体についてbブロックと共有関係があれば、aに対するbの関連の大きさを $\frac{1}{5}(=0.2)$ と表わす。これは5個体(分母)のうち1個体(分子)が関連するためである。したがって、bブロックの方に10個体あり、そのうち



第231図 個体別資料K2-3 Hの分布図

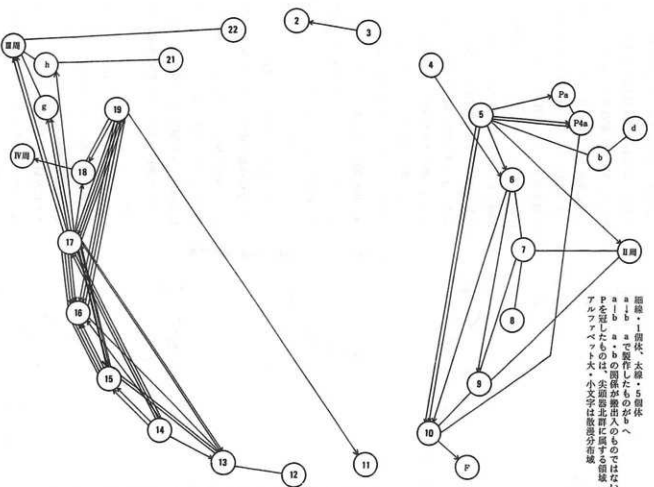


第232図 個体別資料K2-3 H@分布図

1個体についてaブロックと共有関係をもつならば、bに対するaは $\frac{1}{5}(=0.1)$ である。ただし、仮に同じ個体がさらにcブロックとも共有関係をもつ場合は、aに対するb及びcは共に $\frac{1}{5} = \frac{1}{10}(=0.1)$ とする。またbに対するa、cも同様に $\frac{1}{5} / 10 = 1 / 20(=0.05)$ である。分子が小さくなった理由は、関連をもつ相手が二つになったために、一方に対する結びつきが相対的に半減したからである。各ブロック間の結びつきの強弱を調べる場合、単に共有関係にある個体の数だけで行うと、例えばaブロックとbブロック間で1個体、cブロックとdブロック間でも1個体の共有関係があるが、a・bブロックに比べてc・dブロックの方が全体的に個体数が多い時でも、aとb、cとdの結びつきは同じということになってしまう。そこで、各ブロックにとって、それぞれ関連を持つブロックが全個体数の中で、どの位の比率で関わっているのかを検討するために、上記のような方法をとった。以上のようにブロックの個体数を分母、共有関係のある個体数を分子として表した数値をブロックの相対強度(第53表)と呼ぶ。

次にaブロックに対するbブロックとbブロックに対するaブロックの値、つまり互いの相対強度を操作して、aブロックとbブロックとは互いにどの位の結びつきであるのかを算出する。これをブロック間の相互強度と呼ぶ。相互強度は、aブロックに対するbブロックの相対強度を α 、bブロックに対するaブロックの相対強度を β とすると、 $\sqrt{\alpha\beta}$ で表わされる数値とする。

第54表、第234図は各ブロック間の相互強度を表わしたものである。便宜上0.2以上と



細線・1個体、太線・5個体
 a・b aで製作したものか、
 a・b a・bの関係が難出入のものではない場合
 Pを置したものは、尖頭部北群に属する領域
 アルファベット大・小文字は散発分布域

第233図 ブロック間の個体共有関係図

結びつきが強いもの、0.1以下と弱いもの及びその中間とに分けてみると、相互強度の大きいものは、第4-6ブロック、第5ブロック-散発分布域b、第7-8ブロック、第11-19ブロック、第12-13ブロック、第14-15ブロック、第15-16ブロック、第15-17ブロック、第16-19ブロック、第18ブロック-第IVブロック群周辺部、第21ブロック-散発分布域bなどの計11組である。隣接するブロック同志での結びつきが強い傾向にあるが、第16-19ブロックのように

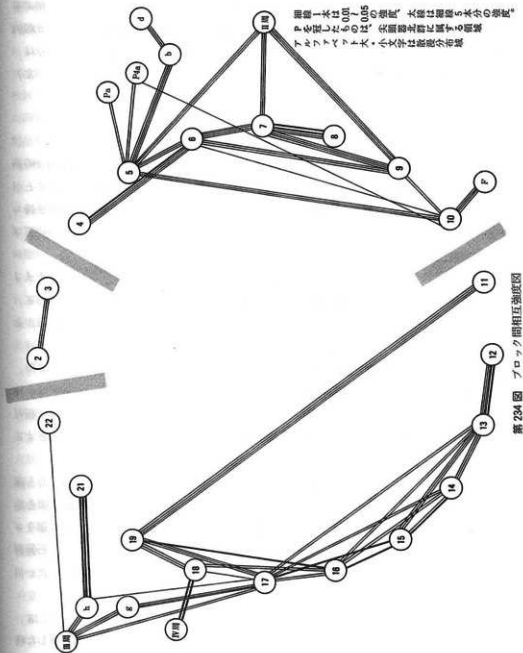
第53表 ブロック間相対強度(K2)

上 左	2	3	4	5	6	7	8	9	10	II	b	f	P4a	P散a	11	12	13	14	15	16	17	18	19	21	22	III	IV	g	h	d		
2	0.06	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
3	0.25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
4	-	-	-	0.14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
5	-	-	-	0.14	-	-	-	-	0.10	0.20	0.50	-	0.05	0.25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
6	-	-	1.00	0.08	0.25	-	0.25	0.03	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
7	-	-	-	-	0.14	0.67	0.25	-	0.10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
8	-	-	-	-	-	-	0.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
9	-	-	-	-	0.07	0.13	-	-	0.03	0.10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
10	-	-	-	0.13	0.07	-	-	0.25	-	-	0.50	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
II	-	-	-	0.08	-	0.13	-	0.25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
b	-	-	-	0.08	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.03		
f	-	-	-	-	-	-	-	-	0.07	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
P4a	-	-	-	0.08	-	-	-	-	0.03	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
P散a	-	-	-	0.04	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.04	-	-	-	-	-	-	-		
12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.50	0.11	0.06	0.04	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.11	0.15	0.04	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.22	0.56	0.27	0.13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
16	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.11	0.11	0.20	0.03	0.08	0.14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.22	0.22	0.50	0.19	0.08	0.14	-	0.25	-	-	-	-	-	-	-	-	
18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.04	0.01	0.06	-	-	0.06	-	-	-	1.00	-	-	-	-	-	
19	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.42	0.08	0.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.00	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
III	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.02	-	-	0.03	-	-	-	-	-	-	
IV	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.25	-	-	-	-	-	-	-	-	-
g	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.03	-	-	-	-	-	-	-	-	-
h	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

例：第2ブロックに対する第3ブロックの値は0.25、第3ブロックに対する第2ブロックの値は0.06

第54表 ブロック間相互強度

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	II	b	f	P4a	P散a	11	12	13	14	15	16	17	18	19	21	22	III	IV	g	h	d	
2																															
3	0.12																														
4																															
5																															
6			0.37	0.11																											
7					0.19																										
8						0.58																									
9						0.13	0.18																								
10				0.11	0.05			0.09																							
II				0.13		0.11		0.16																							
b				0.20																											
f									0.19																						
P4a				0.06					0.02																						
P散a				0.10																											
11																															
12																															
13															0.41																
14															0.11																
15															0.11	0.29															
16															0.07	0.07	0.23														
17															0.07	0.07	0.25	0.08													
18																		0.06	0.03												
19															0.20				0.24	0.11	0.14										
21																															
22																															
III																					0.07										
IV																						0.50									
g																						0.15									
h																						0.05									
d											0.12												0.71								



第234図 ブロック間相互強度図

細線一本は0.01、0.05の単位、太線は細線より其分の幾何
 PやPaなどは0.01、0.05の単位、太線は細線より其分の幾何
 PやPaなどは0.01、0.05の単位、太線は細線より其分の幾何
 アルファベット大・小文字は散漫分布域

異なったブロック群の間で結びつきが強い場合や逆に同じブロック群内でも弱い場合などがある。

個体の共有関係をもって、ブロック群や単独に分布するブロックの関係を整理してみると、第2-3ブロックによるまとまり、第4-10ブロック、第IIブロック群周辺部、及び散漫分布域b, d, f, 尖頭器北群P-4aブロック・散漫分布域Paによるまとまり、第11-19, 21,

22ブロックⅢ、Ⅳブロック群周辺部及び散漫分布域g、hのまとまりの3群になる。特に第11～22ブロックのまとまりには、第Ⅲブロック群、第Ⅳブロック群などの単位があり、比較的近接した時間内にそれぞれが存在したということがわかる。後述するが、三つのまとまりは、それぞれ数度の移動の結果、累積的に形成されたものではないかと考えられる。(島立)

4. 石器群の分布より 見た集落景観

個別別資料の共有関係により、分布の上から設定したブロック群内の各ブロックは同一時期に形成された石器群であることが検証できた。また、視覚的にはブロック群には組込むことができず、単独ブロックとしてしか認識し得なかったものについても、ブロック群と関連を持つことが明らかとなった。ここではまず個別別資料の分析を通して得られたデータに基づいてブロック群の統廃合を行い、ユニットの設定を行いたい。

第2b層の23ヶ所のブロック及び周辺の石器群は大きく三時期に分けられる。これらはナイフ形石器の形態組成、尖頭器の共伴の在り方、剥片剥離技術など石器群の各個別要素について、型式差を認識し得るほどの比較的大きな時間差があり、通常の編年的な区分と判断される。そこで各石器群を第Ⅰ期から第Ⅲ期までに区分し、時期毎に石器群の分布を見てみよう。

第Ⅰ期は第Ⅰブロック群の石器群が相当し、第1・2・3ブロックにより編成される。また、これに第Ⅰブロック群周辺部の領域が加わる。第Ⅰブロックと第2・3ブロックの間には具体的なつながりは見出せない。第2・3ブロック間においても共有関係をもつのは1個体で相互強度0.12である。A類ブロック1、C類ブロック2の組合せで、最小単位の1ユニットとすることができる。他のブロック群とは異なりB類ブロックを欠く。

石器群の面から見た施設及び特定空間についての情報を見てみよう。施設は受熱剥片から認識される火処(炉)である。しかし本石器群には受熱剥片が全くないため、炉の位置は明らかではない。一方散石類の位置より想定される調理空間はどうであろうか。本石器群では第3ブロック内の石器集中部に散石が1点だけ伴っており、特に領域区分をする根拠はない。石器群の内容及び分布状況より複数の単位を抽出し得る属性がなく、一居住時間内に形成された一世帯を反映したものと思われる。

第Ⅱ期石器群の領域は、第Ⅲ・Ⅳブロック群及び第11～13、21ブロック、散漫分布域f、g、hである。これらの諸領域は互いに個体の共有関係によって結ばれており、比較的近接した時間内に形成されたことがわかる。しかし、石器総数が極めて多く、広範囲にわたる領域全てが集落として同一時間内に形成されたとは考え難い。そこで、こうした問題について、集落を構成する基本単位であるユニットの設定を行い、集落景観を考えたい。

まず視覚的に設定したブロック群を仮の単位とする。本来は個体の共有関係に基づいて各領域間の関連状況を考察すべきなのであるが、全体的に複数領域にわたって共有される個体数があまり多くないため、諸領域の位置関係を重視せざるを得なかった。

第Ⅲブロック群内の個体の共有関係を見ると、第14-15ブロック間(0.29)、第15-16ブロック間(0.23)、第15-17ブロック間(0.25)において、相互強度が高い値を示す。第14-17の4ブロックは、相互に緊密な関係をもった一群として捉えることが可能である。それでは、各ブロックは相互にどのような意味において関連を持つのであろうか。この点を個体共有のもつ意味を検討することによって考えたい。個体の共有関係は、石核群が複数の製作者(世帯)によって共同管理されたために、複数ブロックで別々に剥片剥離作業が行われた結果生じた、あるいは製品の一部を譲渡する行為があったために生じたと解釈されることがある。しかし、石器の製作作業は先土器時代においてはほとんど誰にでも等しく行い得た個別労働であると思われるため、一石核は基本的に一製作者(世帯)によって消費され、その製品も製作者(世帯)に使用されたと考えた方が妥当であるように思われる。したがって、領域間相互の個体の共有とは主に石器製作空間と使用空間とが異なっていたために生じたものと判断される。この場合、同一時間に両作業空間が機能していた場合と両作業空間が時間的に併存せず、製作後に製品を保持したまま移動し、再び同じ集落に戻ってきた時には以前とは別の空間に占居した場合が想定される。また、いずれの状況下でも言えることだが、併存した複数世帯が共同作業を行う中で、本来別の世帯の個別活動領域に製品を遺棄した場合も考えられる。第Ⅲブロック群内の個体の共有関係も上記の想定を踏まえた上で評価しなければならない。

第14-16ブロックなどのB類ブロックは、先述した通り石器総数が30-60点ほどの中規模なブロックで、A類ブロックやブロック外(遺跡外)で製作した製品を持ち込み、石器の使用を中心とした活動を行った場である。また道具の不足を補充するかのよう特定の数個体に関して、石器製作作業が行われている。器種組成もナイフ形石器、UF、敵石類を中心に、安定した状況と言える。このような要素を拾いあげてみると、B類ブロックは相互に極めて斉一性が高く、またその内容から一定期間の生活における個別活動の反映と捉え得る。集落内で同一行動を同一空間で行っていたとすれば、恐らく一世帯は一居住時間内に、1ヶ所のB類ブロックを形成したと考えられる。そこで集落構成、世帯を考える上で、B類ブロックが中心的な役割を持つことになる。

また、B類ブロックは石器製作作業の中心的な空間であるA類ブロックと関連して初めて成り立つもので、相互補完的である。

以上のような様々な状況の下で、B類ブロック相互の個体の共有について解釈を加えてみよう。まず、共有関係にある個体の動きを見ると、第14ブロックで製作されたものが第15、16ブロックに持ち込まれている。第15ブロックで製作されたものは第16ブロックに持ち込まれている。しかし第16ブロックで製作されたものは第14、15いずれのブロックにも持ち出されていない。製品の移動は第14→15・16、第15→16と一方向に限られている。したがって、第14-16ブロックが同一時間に併存したというよりは、それぞれが若干の時間差をもっていたと解する方が妥当である。

A・B類ブロックの分析を行ってきたが、C類ブロックや散漫分布域もA・Bブロックと関

連をもつことからそれぞれ何等かの関連を持った空間と考えられる。第Ⅲブロック群と何等かの形で関連する領域は、第12, 13, 21ブロック及び散漫分布域 f, hである。ただし第14ブロックが第13ブロックと関連する他は、B類ブロックと周辺領域とは個体の共有関係を持たない。厳密なユニット設定は行い得なかった。

第Ⅳブロック群では第18ブロック(B類)と第19ブロック(A類)とが個体の共有関係を持つ。分布位置より第20ブロックも同一時間に形成されたと思われる。第18, 19ブロックは第Ⅰブロック群と同様、比較的短期間に形成された一世帯によるユニットと考えられる。

第Ⅲ, Ⅳブロック群の関係については、個体の共有関係によれば第16-18ブロック間(0.06), 第16-19ブロック間(0.24), 第17-18ブロック間(0.03), 第17-19ブロック間(0.11)で認められる。特に第16-19ブロック間の相互強度が高い値を示す。個体の動きを見ると、第16, 18ブロックには第17, 19ブロックで製作されたものが搬入されている他、第17, 19ブロックは相互に製品の行き来がある。第16, 18ブロック間相互では製品の行き来はない。したがって、第Ⅲブロック群内の第14-16ブロックの関係とは異なり、第16-19ブロックは二つのA・B類ブロックのセットが同一時間に併存したものと判断される。また、第11ブロックが第19ブロックと個体の共有関係を持ち、第20ブロックも分布位置より第18, 19ブロックとの関連が想定されることから、少なくとも第11, 16-20ブロックは同一時間に併存した1単位で、第16-17ブロックを中心とするユニットと第18-19ブロックに第11, 20ブロックを加えたユニットが抽出される。

第Ⅱ期石器群全体では、第14-17ブロック、第15-17ブロック、第16-17ブロック、第18-19ブロックをそれぞれ中核とする4ヶ所のユニットが設定される。また個体の共有関係は不明確であるが、同じB類ブロックであることから第22ブロックも第17ブロックと結びついて1ユニットを形成すると思われる。各ユニットはA・B類ブロックだけで構成されているわけではない。第18-19ブロックを中心とするユニットには第11, 20ブロックが含まれるし、他のユニットについても周辺の単独ブロックや散漫分布域と関連をもち、複数の異なる機能空間の複合体となって1ユニットを構成していたと考えられる。ただ、第Ⅲブロック群内のユニットは、第14-17ブロックを中心とするユニットが第12, 13ブロックと結びつきを持つ他は、B類ブロックと周辺領域との個体の共有関係がないため明らかにし得ない。

ユニット相互の関係は、第14-16ブロックと第17ブロックによる3ユニットが相互に若干の時間差をもち、一世帯が第14, 15, 16ブロックの順でB類ブロックを形成し、第17ブロックは数度の居住の中でくり返し使用された空間だったのであろう。また、第14-16ブロックは次々に移動していったと言うよりは、それぞれの移動の間には別の遺跡を介在させた方が良いと思われる。先土器時代人が一定地域内を移動して生活していたことを前提とするならば、直線的移動よりは回帰的移動の方が合理的である。狩猟民は水飲場、けもの道、周囲の地形などを完全に把握していなければならず、次から次へと未知の地へ足を運ぶことは、かなりの危険をもっていたであろう。また、直線的移動ならば、磐田原台地周辺の遺跡数はかなり多くなるはずであるが、それも期待し得ない。回帰移動を行っていたと解釈し、各ユニットは一世帯が数

度の居住毎に形成したものと考えたい。一方、第18-19ブロックを中心とするユニットは第Ⅲブロック群内のユニットとは別の世帯によって形成されたもので、第16-17ブロックを中心としたユニットと時間的に併存したと思われる。第22-17ブロックを中心とするユニットは、他との関連は不明である。以上、第Ⅲブロック群内に4ユニット、第Ⅳブロック群内で1ユニットが設定され、各ブロック群は基本的に一世帯ずつによって形成されたものと捉えた。

次に受熱剥片及び礫石類の分布位置を分析し、ユニット区分の参考をしたい。受熱剥片は第17ブロック内に104点、第19ブロック内に1点分布する。第17ブロック内では石器群の集中する核に分布するものの、複数の核が存在するために、受熱剥片のみを取り出してその分布状況を見ると、別添第23図のように特定の小領域にまとまることはない。したがって、第17ブロック内に火処があった可能性はかなり高いものの、火処を炉という点として把握するには至らなかった。一方、第19ブロック内ではわずか1点だけで、評価を下すことはできない。同じA類ブロックではあっても、受熱剥片の分布数が全く異なっており、相互が必ずしも等質な状況ではない。

礫石類は第14ブロックに3点、第15ブロックに1点、第17ブロックに8点、第18ブロックに2点、第19ブロックに4点、第Ⅳブロック周辺部に2点が分布する。A・B類ブロック内に比較的多く分布しており、C類ブロックには存在しない。また、散漫分布域eに2点分布する。礫石類が植物性食料の調理用具で、使用空間もしくはそこに近接した位置に遺棄されたと仮定すると、様々な位置においてその行為がなされたことになる。しかし、礫石類が一世帯において多量に消費する性格のものではないと思われるため、礫石類の数とその分布位置がある種の単位性を示すと考えられる。また、各ブロックの礫石類の数と石器総数とは正の相関関係を示さない点も興味ある事実で、石器総数の多いA類ブロック内では相対的に礫石類を使用する活動が他の活動に比べて低調だったと考えられる。逆に石器総数の少ないB類ブロックに礫石類が存在すること自体に大きな意味がありそうであり、ナイフ形石器の破損品が多いことも含めてB類ブロック内における個別活動の多様性を反映していると考えられる。以上の点から先に設定したユニット区分について、矛盾を生じせしめる要素はないものと判断される。

第Ⅲ期の石器群は調整加工にバラエティをもつ多様な尖頭器群に二側縁加工のナイフ形石器が少量伴うもので、第Ⅱブロック群、第4ブロック及び散漫分布域fがこれにあたる。また、第23ブロック周辺には微細なポイントフレイク類を多量に含む土坑があり、第Ⅲ期の石器群が第Ⅱブロック群から北へ広がりを持つと考えられる。さらに、当初尖頭器石器群北群として分析を進めてきた一群も、尖頭器の形態組成、剥片剥離技術などについて、第Ⅱブロック群の内容との類似性が指摘でき、第Ⅲ期の石器群に含めて考えることにした。

まず、第Ⅱブロック群内の各ブロック相互の関連度合を検討したい。ブロック間の相互強度を見ると第7-8ブロック間の0.58が高い値を示すものとして目につく。他には第6-7ブロック間の0.19、第7-9ブロック間の0.18、第6-9ブロック間の0.13、第5-6ブロック間、第5-10ブロック間の0.11が中程度、第9-10ブロック間の0.09、第6-10ブロック間の0.05

が低い値である、ブロック相互の結びつきは、ブロック間毎に強弱がある。

第Ⅱブロック群周辺部は第5、7、9ブロックと、それぞれ0.13、0.11、0.16で関連している。したがって、第6～9ブロックが個体の共有関係における構造体の中核的存在であり、これに第5、10ブロックがゆるやかに結びついて全体が構成される。第Ⅲ、Ⅳブロック群とは異なり、A類ブロックである第5ブロックが個体の共有関係の中心とはなっていない。個体の動きは第5ブロックで製作されたものが第6、10ブロックに搬入されている他、第6ブロックで製作されたものが第9、10ブロックに持ち込まれている。他のブロック間相互の関係は不明である。また、全体的に個体数が極めて少ないため、第Ⅲブロック群内における分析で示したようにB類ブロック相互の関連を積極的に評価することはできない。

次にブロック群外の各領域とブロック群との関連を見ると、第4ブロックが第6ブロックと相互強度0.37で結びつく他、散漫分布域fが第10ブロックと0.19で関連する。散漫分布域fの中央に位置する第12・13ブロックは第Ⅲブロック群と関連をもつが、本領域の北側は第Ⅱブロック群とつながりがある。一方、尖頭器石器群北群と第Ⅱブロック群とは2個体の共有関係を持っているが、相互に密接に結びついているとは言い難い。そこで、ユニットを設定する際の分析対象は分布の位置関係を重視して第Ⅱブロック群及びその周辺領域と尖頭器石器群北群とは分けて考えてよいと判断される。

個体の共有関係によって得られたデータに基づいて第Ⅱブロック群及び周辺領域の関連を整理すると、第4・6・7・8・9ブロックが比較的強く結びつき、これに第5・10ブロック、第Ⅱブロック群周辺部、散漫分布域fがゆるやかに関連する。

以上のような状況に対して、どのようにユニットを設定し、解釈を加えれば良いだろうか。第Ⅲ・Ⅳブロック群において、ユニット区分の手掛りとなったB類ブロック(第6・8・10ブロック)を見ると、器種組成の面では比較的等質で、類似した活動の反映と見てとれる。しかし、石器群の規模の面では第6・8ブロックは類似するものの、第10ブロックは他の2倍ほどもある。また、個体については第8ブロックの場合、石器群の大半が特定個体に帰属し、搬入品が少ない。しかし、第6・10ブロックは大量の搬入品に若干の製作個体加わるものである。B類ブロックは相互に独立的で、また個体構成も異なっている。

A類ブロックである第5ブロックの内容を見ると、尖頭器を集中して製作していることがわかるが、一方B・C類ブロックでは製作していないことがわかる。尖頭器が狩猟用具であるとするならば、遺跡外で消費される器種はA類ブロックで製作されたことになる。また、A類ブロックは石器総数が極めて多く、一世代が一居住時間内において形成したとは考え難い。そこで、A類ブロックを複数世帯の共有の場と仮定し、遺跡外で消費される狩猟用具の製作作業を中心に行った工作空間と考えてみた。一方、B類ブロックでは遺跡内で消費される、より個別活動用の器種を製作し、使用していたとすれば、A類ブロックとの関連は見かけ上薄くなり、第5ブロックの独立性に対する一つの説明となる。さらに、B類ブロックについて、石器の器種構成より見て活動内容が相互に近似していると推察されるにもかかわらず、個体構成が異な

る点も、各B類ブロック内における個体の個別消費の強化と見てとれる。

したがって、第5ブロックを共同利用の場としてブロック群の中心的な工作空間と位置付け、周囲のB類ブロックを等質の単位性を反映するものとして捉えた。一方、C類ブロックについては、第4・7・9ブロックがB類ブロックである第6ブロックと個体の共有関係を持ち、また第7ブロックは第8ブロックと関連するが第10ブロックはC類ブロックと関連しない。ただ、第10ブロックは空間的に広く、石器総数も多いため、分布の上では1ブロックとしてしか認識し得ないものの、第6・8ブロック及び周辺のC類ブロックを包括した領域と同等のものである可能性を持つ。そこで、第5ブロックを中核とし、第6・8ブロックを中心としたユニットと第10ブロックより抽出されるユニットの2群を認識し得た。ここで第8ブロックは搬入品が極めて少ないという例外的な個体の在り方が問題となる。他のB類ブロックは本遺跡に移動してくる前の居住地で製作し、携帯してきた製品が一定量伴っている。そうした搬入石器群がないことは、移動中もしくは移動直後における諸活動を行い得ないのではないかという疑問が生じる。また、ブロックを構成する石器群の大半が特定個体に帰属するという状況は、他に道具類を確保しつつ、しかも手ぶらの状態で本ブロックに至り、生活を開始したかのようである。それならば、空間的に隔った所から移動してきたというよりは、むしろごく近接した、第IIブロック群内のいずれかの世帯が活動場所を変え、特定個体について石器製作作業を行ったと考える方が自然であると思う。第7ブロックと関連を持つことから、ここでは、第6ブロックを中心としたユニットと関連したと考えたい。個体の動きから第6ブロックを中心としたユニットから第10ブロックを中心としたユニットへと時間的に異なる可能性があり、その場合、両ユニットは一世帯が残したものであり、第5ブロックも共同作業場ではなく、同一世帯が数度利用した場ということになる。しかし個体数が少ないため、両ユニットの関連は確定的なものではなく、異なる二世帯が同一時間に形成したという可能性も残しておきたい。

次に尖頭器石器群北群を検討しよう。本石器群はPIブロック群と散漫分布域Paが相当し、PIブロック群内はA類ブロック1、B類ブロック3、C類ブロック1で構成される。PIブロック群内の石器群は尖頭器45点、ナイフ形石器3点、スクレイパー1点、RF10点、UF88点、敵石類7点、台石2点、剥片523点、砕片275点、石核13点の計967点となる。ツールは147点で、石器群の中でツールの占める割合は15.57%で、南群に較べるとかなり高い。

器種組成については、第4節で述べた通り、A類ブロックとB類ブロックとの間に質的な差は認められなかった。いずれのタイプのブロックにおいても、まとまったポイントフレイクの存在により尖頭器の製作作業が想定され、これにUFを一定量含む点で共通する。両者の差は、その場で展開された石器製作作業の量によって生じたものと考えざるを得ない。しかし、1ヶ所あるC類ブロックだけはポイントフレイク類、砕片を含まず、石器製作作業の痕跡を留めていない。器種組成の面では、C類ブロックだけが異質なものとと言える。

ブロック相互の関係については、個体の共有関係の数量的な在り方から、P-1・2・3ブロックとP-4a、4bブロックの2群に分かれる可能性が指摘できた。ここで問題となるのは、

前者(1群)はB類ブロック2, C類ブロック1で石器総数が154点であるのに対し, 後者(2群)はA類ブロック1, B類ブロック1で, 石器総数は790点もあり, ブロック構成及び規模の面で等質ではないということである。両群それぞれの器種構成は, 1群は尖頭器12点(7.79%), R F 4点(2.60%), U F 14点(9.09%), 蔽石類1点(0.65%), 剥片95点(61.69%), 砕片27点(17.53%), 石核1点(0.65%)の計154点で, ツールの占める割合は20.12%となる。2群は尖頭器29点(3.67%), ナイフ形石器3点(0.38%), スクレイバー1点(0.13%), R F 5点(0.63%), U F 70点(8.86%), 蔽石類6点(0.76%), 台石2点(0.25%), 剥片418点(52.91%), 砕片245点(31.01%), 石核11点(1.39%)の計790点で, ツールの占める割合は14.68%となる。スクレイバー, 台石, ナイフ形石器の有無について両群は異なり, また, ツールの占める割合も1群の方が大きい。しかし, それが有意差とし得るほど大きな差とは思われない。器種構成の面では1群と2群は比較的類似した状況で, 量的な関係が異なっているものと考えられる。

個体数は1群10個, 個別別資料数81点(うち砕片2点), 2群21個, 256点(うち砕片5点)で, 仮に全ての石器群が個体識別されたとすれば, 個体数は1群15.8個, 2群45.9個と修正され, 3倍ほど異なる。いずれにも素材の生産から尖頭器の製作まで一貫して行った個体と遺跡外で製作した素材剥片を持ち込み, 尖頭器を製作した個体, 製品を搬入した個体とが含まれている。

受熱石器は, 個別別資料に含まれるものが7個体68点, 個別別資料に含まれないものが25点の計93点ある。ブロック別に見ると, P-1ブロック4点, P-2ブロック5点, P-4aブロック79点, P-4bブロック3点で, この他, 散漫分布域aに2点が分布する。P-4aブロックに集中するが, その分布状況は, 長軸9m, 短軸6mほどの楕円形の範囲に比較的万遍なく分布しており, 炉の位置を示唆するような密集した在り方ではない。それ以外の3ブロックでも, 受熱石器が小さくまとまって分布するという傾向は捉え難い。しかし, P-3ブロックを除く各ブロックに受熱石器が含まれ, また受熱石器がブロック内の石器群の集中部に多いという点から, 各ブロック内に火処があった可能性が高い。各ブロック内に生活の中心となる火処があるとすれば, 各ブロックが独立性の強い単位と見ることもできるかも知れない。

蔽石類の分布については, P-3ブロック1点, P-4aブロック3点, P-4bブロック3点でP-1・2ブロックには含まれていない。蔽石類の機能が植物性食料の調理具とするならば, 各単位集団が欠かさず保有しているものであり, また遺跡内(集落内)における食生活の中心領域に遺棄されている可能性が高いものと思われる。P-3・4bブロック内では石器の分布が疎な外縁部に, またP-4aブロックでも5点中4点がブロックの外縁部周辺に位置し, 石器製作作業の中心領域とはズレていることがわかる。ただ, 全てのブロックに遺棄されているというわけではないため, 蔽石類の分布から集団の単位を把握することができなかった。特に本石器群を1群, 2群に分けると, 1群に1点, 2群に7点となり, 比率の上では類似するものの, 実数の面でアンバランスなものとなった。

以上、個別的要素を見ると、1群と2群とは、器種構成の面から異なった作業空間として認識することはできず、比較的同じ作業を通して形成されたブロックのまとまりとして捉え得る。しかしブロック構成、規模の面ではかなりの差異も認められるということがわかった。これを居住期間の長短という形で捉えるべきなのか、あるいは隣接するナイフ形石器群第IIブロック群のように、1群、2群というまとめ方を行わず、A類ブロックは共同利用の場、B類ブロックは個別的な場として捉えるべきなのか、判断材料を欠く。いずれの場合でも複数ユニットの存在が想定されるものの、ユニットを明確に設定するには至らなかった。(島立)

第6節 水洗選別による 微細遺物の検討

1. 資 料

本検討の目的・方法・処理等は、第V章第6節とほとんど同じであるために、再論はしない。ただし、尖頭器群については分析資料が192と限定されていた点を反省し、ここでは計949資料とできるだけ広範囲をカバーすることに努めた。その結果、石器分布の密な区域は言うに及ばず、全く分布の認められない所からも広く資料を採取した。資料採取範囲は2・3G、2・3H区の東西40m、南北32m、1,280㎡とした。

2. 分析結果

礫全点(第235図) 自然礫は合計22,809点発見されており、1区画の平均では24点になる。第V章第6節で触れたように、本資料採取域は高台に当たるために、1区画当りの自然礫含有量は1F・1G区の約半分である。それでも資料採取域が広いために多い区画と少ない区画の隔たりは大きく、2H25-pでは166点も含まれていたのに対し、10点以下の所も数十区画に上る。全体を概観した所ではほぼ均等に含まれているように見えるが、さらに詳細に見てみると2H18~25、3H16・21区といった南縁部で若干増加する傾向が認められる。この区域は第17ブロックと一部重複はするが、必ずしも十分な対応関係は示していない。考古学資料としての解釈は困難である。全域にはほぼ均質に礫を含みつつも微妙な多少の違いがあり、南縁部でのみその差が顕著に現れたに過ぎないと考えられる。

赤化砂岩(第236図) 赤化砂岩は合計568点検出されており、2万点以上に上る全礫のわずかに2.5%を占めるに過ぎない。尖頭器群の4%よりもさらに比率が下がっているが、これはナイフ形石器群の場合には遺物集中部以外からも広範囲に資料を採取しているためと考えられる。

尖頭器群の場合と同様、赤化砂岩では分布の疎密を明確に捉えることができる。それによると、尖頭器群ほど強い集中部はなく、3G14区、3G20区、2H1区、2H2区北半、2H20~3H16区にやや強い集中部が認められる。他はいずれも弱い集中部で、それらがゆるくまとまって「弱い集中部群」を形成するかの観を呈する。「弱い集中部群」は、先のやや強い集中

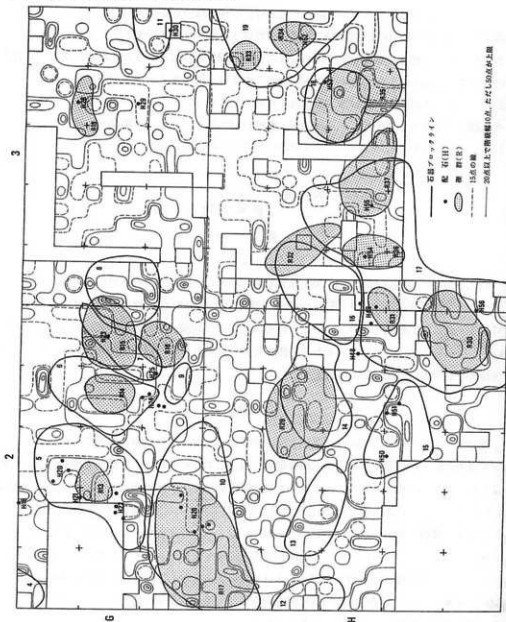
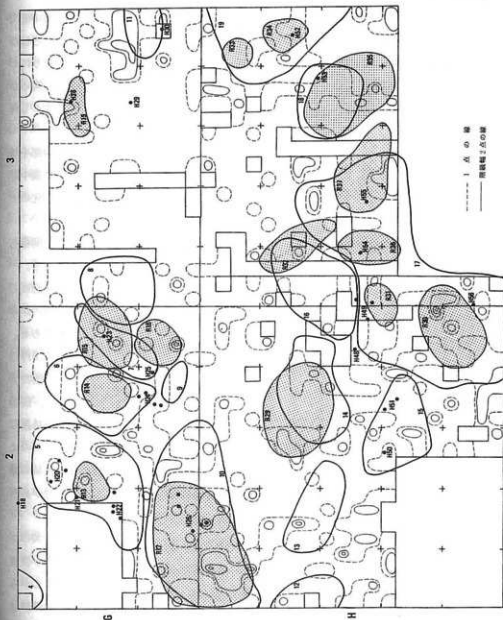


図 236 確定点分布等量線図

部をも取り込んで、2 G 18区から南西に2 H 1区まで(以下2 G 集中部群)、3 G 区東集中部群、2 H 区南半から3 H 区にかけて(以下2 H・3 H 集中部群)の三群に大きく別けることができる。これら三群はまた、石器の分布から設定されたブロック群にもほぼ対応しているため、以下各集中部群毎にさらに詳細な分布の検討を行いたい。

2 G 集中部群には、2 H 1区・2 H 2区北半以外にも、2 G 18-g・kや2 G 23-e・f・j他のわずかな集中部が点々と認められる。また、この集中部から東方にも3 G 16・21区に至るまでこのようなわずかな集中部が断続している。その中で2 G 25-jのみは1区画から5点



第236図 赤化砂岩分布等量線図

の赤化砂岩が検出されており、広がりには認められないものやや強い集中部とも考えられる。

これら2G集中部群の広がり、全体として第IIブロック群にはほぼ完全に重複しており、これらを残した人々の活動の結果と考えてまちがいなからう。しかし赤化砂岩の分布がわずかであるだけに、それぞれの弱い集中部に対しどれ程強く各ブロックとの対応を考察することができるかという点になると、多くの点で評価の後退を余儀無くされる。集中部群全体に弱い集中部が散在するために、必ずしも全てをブロックや礫群・配石との対応の下に理解することができないのである。具体的に見てみよう。

第5ブロックには5ヶ所の集中部が認められるが、ほぼ全体に点在する。やや強い集中部である2 G18-g・kはブロック東縁部に位置する。第13礫群の東に当るが、重複することはない。第20・21配石、第13礫群には2～3点の赤化砂岩がほぼ重複して分布するが、あまりにわずかであるために評価は難しい。本ブロックでは、結局2 G18-g・kを火処と見なし得るか否かであるが、尖頭器群と同様に受熱石器と分布が異なる上に集中度が弱いため今すこし保留しておきたい。

第6・7・8ブロックも状況は第5ブロックと近似する。それぞれ1～2の弱い集中部を持つが、いずれも火処と確定できる程に強いものではない。また、第9ブロックには弱い集中部さえ重複しない。第14・15・16礫群でも、1～3の弱い集中部が重複する。第16礫群が先の2 G25-j集中部と重なっている。

この他、ここでは尖頭器群には見られなかった土坑が検出されているため、それとの関係も検討しておこう。当該域には、第4・9号土坑がそれぞれ第16・15礫群の縁辺に位置する。一部重複するようにして第4号土坑には2 G25-j、第9号土坑には3 G16-e集中部が認められる。いずれの場合も資料採取区画の半分近くは土坑と重なっており、赤化砂岩が土坑内から出土したもののなか外からのものかは、こうした遺構の同時性を検討する上でも重要である。そこで土坑の覆土中にどれ位赤化砂岩が含まれるかを調べてみると、第4号土坑では6,017点中153点、第9号土坑では4,429点中104点であり、それぞれの赤化率は2.54、2.35と他の土坑に較べて0.5～1%高い値を示している。また、赤化砂岩は覆土全体に含まれており、底面あるいは上半に偏るような在り方は示していない。このことから判断すると、本来土坑に接してあった赤化砂岩のまとまりが、後に土坑内に流入したと考えることができよう。もしこのように土坑に近接した赤化砂岩を、少量ではあっても火処の痕跡と措定し得るならば、土坑の機能的側面と合わせて近接する遺物・遺構群の本質をさらに生き生きと描き出せる可能性がある。

第10ブロックには2 H1区と2 H2区の二つのやや強い集中部が含まれる。これらは共にブロック南半に位置し、相互に2 mほど隔たっている。ブロックの最も石器が密に分布する位置は両者の間やや北寄りにあり、あたかも赤化砂岩の位置を意識しているかに見える。ここからは受熱石器は1点発見されたのみである。二つの集中部は第17礫群とも重複する。この礫群はゆるやかなまとまりを見せるものであるが、2 H1区の集中部はその南西隅に、2 H2区のものも南東隅にあっている。赤化砂岩は二つの集中部に分かれるのに対し礫群は一つで、しかも接合関係からも礫群の中心が特定できないために、これらの関係は定かでない。また2 H2区の集中部は、第26配石と一部重なりながらその南に展開する。以上、本ブロックには二ヶ所の火処があったと考えられる。すでに述べたように、ここでも受熱石器と赤化砂岩の分布の間に齟齬が認められた点を留意しておきたい。

3 G区東集中部群には3 G14区と20区に二つのやや強い集中部がある他は、極めて稀な分布を示すにすぎない。この範囲は石器分布からは散漫分布域eとして識別されており、本来石器

の分布が非常に少ない区域である。しかし少ないながらも3 G20区集中部のすぐ南には第11ブロックが設定されている。構成石器点数の少ないブロックではあるが、すぐ南に接して第30配石、西方に3 mほど隔てて第29配石を伴っている。赤化砂岩の集中部は、丁度石器分布と第29配石の間北寄りに位置する。一つの模式的な遺構構成を示すかに見える。

3 G14区集中部に接しては、南方に第19礫群と第28配石がある。石器は完全に欠落する。配石は礫群の中央に位置する。他の石器群から隔たってこのような構成を示す例が未検出であるため、全体を概観した後に再論したい。

2 H・3 H集中部群は2 G集中部群に似た分布状態を示す。石器群の第Ⅲブロック群にはほぼ重なった分布をしているが、第17ブロック以外にはあまり顕著な集中部はない。ブロック毎に見てみよう。

第12・13・16ブロックは石器の非常に少ない小規模なものである。それぞれ北端に一ヶ所の弱い集中部を持つ。第13ブロックのものは、赤化砂岩4点で構成されており、広がりか認められないために小規模と判断されるが、一区画当りの点数としては決して少なくはない。火処が極限され後世の擾乱がほとんどないとすれば、その存在を推定し得る資料とも考えられる。

第14・15ブロックは数十点の石器からなる中規模のものである。第14ブロックには第29礫群と第7号土坑が、第15ブロックには第50・51配石が伴う。第14ブロックでは、中央南半に2ヶ所の弱い赤化砂岩の集中部があるが、第8ブロック・第16礫群の場合のように土坑に接することはない。石器分布の特に稀薄な部分に位置するだけに、弱い集中部ではあるが意味あるデータのように思われる。

第15ブロックには北縁・南縁・東端の3ヶ所の弱い集中部が認められる。これらは2区画が連続していたり3点の赤化砂岩から成るなど、他に較べるとやや強い集中部である。これら3ヶ所も石器分布とは微妙に位置が異なっており、石器群の分布が切れる部分に接して発見されている。配石が石器分布の最も密な部分に位置する事とは好対照をなしている。第14ブロックと同様に、注目すべきデータである。

第17ブロックには、細かく数え上げると9ヶ所に上る集中部が認められるが、2 H20-p・3 H16-m・3 H21-a、3 H17-d・3 H18-a・bの2ヶ所を除くと、いずれも小規模である。石器分布との関係では、2ヶ所の強い集中部も含めてほとんどが重複した分布をしている。わずかに3 H7-o・p集中部が、ブロック外縁部において特に石器分布の稀薄な部分に位置する位である。他の石器ブロックで認められた石器と赤化砂岩の互譲関係は、ここではあまり顕著でない。互譲関係という点では、本ブロックについて特に明瞭に認められる事例として、ブロックに接してすぐ外縁部に比較的強い赤化砂岩の集中部のあることが指摘できる。2 H24区南縁部と3 H8-i・j・nの2ヶ所がそれぞれである。ブロックからは外れるが接しており、第17ブロックとの関連で捉えられるべきものと考えられる。そうであるとすれば、本ブロックには石器との互譲関係が認められる集中部とそうでないものの二つの分布型があると言える。

受熱石器と赤化砂岩は、部分的に重複分布する。受熱石器が2 H20・25区境から3 H16・21

区に集中するため、この周辺の赤化砂岩の集中部とのみは重複関係にある。非常に限定された重複であり、多くは異なる分布を示している。

礫群との相関も弱い、2ヶ所のやや強い集中部はいずれも礫群の縁辺あるいは接する位置にある。2H20・25, 3H16・21区に広がる第30礫群は集中度の低いもので、赤化砂岩はその中心部から東縁に分布する。3H13区を中心とする第37礫群は最も集中度の高いもので、この場合は南側に接して赤化砂岩が分布する。

配石とも特別な関係は認められない。

土坑では、第6号土坑の東北側と西側に接して赤化砂岩の弱い集中が認められる。本土坑内出土の5,938点の自然礫の赤化率は1.40%と、先の第4・9号土坑ほどの高い値は示さない。しかし本土坑は本章第1節4項に述べたように、一旦放棄されれば埋没した状態でその上面が火処として利用された可能性があり、土坑周辺の赤化砂岩・受熱石器がその時に生成したものであるとすれば、必ずしも土坑内の礫の赤化率に十分に反映しなくてもよいと考える。したがって、一見すると資料の分布状態は第4・9号土坑のそれと似たように思われるが、本土坑の場合は全く異なる意味を有していると考えられる。

第17号ブロックは、石器の質・量においても特異な存在であったが、赤化砂岩の在り方でも極めてバリエーションに富む内容を持っていた。これらの変異は、第6号土坑をめぐる遺物分布に暗示される、ブロックの累積的形成に由来している可能性が大きいと考える。個々の状況を詳細に解説することはしないが、異なる機能的側面を持つ各種遺構が、微妙に位置を移しながら累積する過剰で生じる見かけ上の変異と考えられる。

3H区東半は石器分布では第IVブロック群に属し第18・19ブロックが展開するが、わずかに赤化砂岩が認められるのみで特別な傾向は把握できない。ただ資料採取域の南東隅にあるやや強い集中域が、第18・19・20ブロックに囲まれながらもいずれの分布域にも属さない点は注目される。石器分布と赤化砂岩の互換関係を示す好例であろう。

さて全体を検討した結果、赤化砂岩の分布には石器との関係において強い負の相関が認められるらしいことがわかった。いずれの赤化砂岩集中部も2～4点位の弱い集中であるため、こうした傾向の信頼性もそれほど強いものではないかも知れないが、多くの石器ブロックに通有の現象であることを積極的に評価したい。先に保留した第5ブロックに伴う2G18-g・k集中部も、石器集中部の南縁に接した遺物空白部に位置しており、他と同様に火処としての立地を充たしていると考えたい。3G14区集中部はどうであろうか。これは石器との位置関係が不明であるために、上述の傾向を判断材料とする訳には行かない。しかし、隣接して石器が未発見ではあるが、配石・礫群とは接しており、ある遺構群の分布域に含まれることは認めてもよいであろう。そこで、赤化砂岩の集中部としては比較的安定していることも合わせて、これら遺構を伴う諸活動の一環として、火の使用もあったと想定しておきたい。3G14区以外にも、赤化砂岩2点のみで形成される集中域は石器ブロック外に数多く点在するが、それらは集中の程度が低い上に、全く他の遺構を伴わないためにここでは評価を控えておく。

以上をまとめると、赤化砂岩の集中として捉えられる火処は、基本的には石器ブロックの縁辺から隣接する位置にあると考えることができる。また特殊な例として、3 G14区の様に石器群からは隔たるが、ある遺構群の一部として組み込まれるものもある。このような在り方を本質として、他方では第17ブロックに認められたような、現象としての石器と赤化砂岩の重複分布例もある。これらは前述した様に、同じ場所が微妙に位置を変えながら累積的に利用された結果を物語っていると解したい。1ブロック当りの赤化砂岩集中部の数は、やはり資料そのものの認定の問題もあり、必ずしも火処の実数を示すものとは考え難い。当座の理解としては、各ブロック1ヶ所を基本とし、赤化砂岩集中部の強弱・数・ブロックの規模等を勘案しながら実数を推定して行きたいと考える。

炭化物(第237図) 炭化物は総数2,565点と、それほど量は多くない。1区画平均では3点にも満たない。全体では10点未満の区画が圧倒的に多いが、一方で2 G22-f・g, 3 G25-d, 2 H24, 3 H15-i など30~50点も出土した所もある。赤化砂岩ほど石器ブロックとの対応関係はよくなさそうである。赤化砂岩・石器・礫群との分布関係を中心に見てみよう。

赤化砂岩とはほとんどの場合分布位置を違えるが、その多くは1~数m以内の距離にある。わずかに重複すると言い得るのは、2 H24区のみであろう。これも厳密には一部が重複するに留まるが、赤化砂岩の場合も炭化物の場合も回収資料数が少ない中で比較的強い集中部同志であるため、部分的重複にも意味があろうかと考えられる。

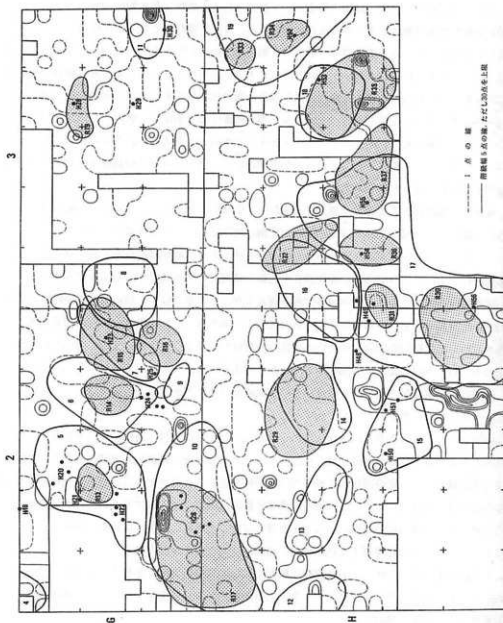
石器との位置関係でもやはり微妙な違いが認められる。大きく見ると第17ブロック中のみにはやや多いようにも思われるが、わずかである。

礫群でも、それほど著しい重複は認められない。わずかに第17・35礫群にのみ部分的に伴うものと考えられる。第17礫群では2 G22-f・g・h集中部が礫群の北東隅に位置している。また第35礫群では、東西両縁辺にやや強い集中部を認めることができる。しかし同様に炭化物集中部が伴うとは言っても、第17礫群が非常に散漫な礫群であるのに対し第35礫群は密集度の高い例である。他の13の礫群にはほとんど伴わないことを考えると、これら二例がむしろ特殊であって、本来的には礫群と炭化物集中の相関は低いものと判断される。

炭化物集中部は、全体としては資料点数が少ない中で強い集中部を形成する所から意味ある集中と考えたいが、他のいずれのデータとも有効に結びついて来なかった。尖頭器群の水洗選別結果とも共通する傾向である。

石器(第238図) 石器は合計900点検出された。1区画平均では1点弱であるが、集中部では10~20点以上検出される区画もある。集中部は大旨石器ブロックと一致しており、石器ブロックの分布状況をより補強する傾向にある。また検出石器には細石刃・ポイントフレイク・ブランティングチップ・受熱石器なども含まれており、質的にもブロックの内容を補っている。石器ブロック毎に概観した後、こうした範囲に入らない例について見てみよう。

第5ブロックでは、そのほぼ中央に2ヶ所の強い集中部が認められる。その中にはポイントフレイクも少なからず含まれており、通常の調査法で得られた結果と完全に一致する。



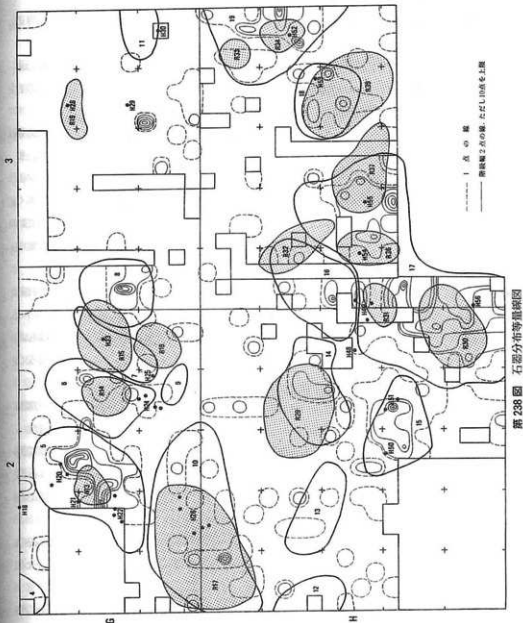
第237図 炭化物分布等集積図

第6ブロックでは、東縁に沿ってわずかな集中部があるが内容的に貧弱である。

第7・9ブロックは集中部を欠く。

第8ブロックでは中央部に強い集中部が認められる。ブランティングチップの存在が判明したが、他の微細遺物の性格は定かでない。本ブロックは石器の製作痕跡は乏しいと判断されていたが、水洗によって微細遺物をかなり含むことがわかった。

第10ブロックでも、石器分布に重なって最大1区画7点の微細遺物が検出されている。ブロックの範囲は広いが、石器製作域は限定されていた可能性がある。なお、ここでの検出遺物には



第238図 石器分布等量線図

2点の黒曜石碎片が含まれている。

第11・12・13ブロックからは1～2点の微細遺物が検出されているに留まる。先の第7・9ブロックとともに、本章第4節1項でC類ブロックとされたもので、これらにおける石器製作作業の不活発さを明瞭に示している。

第14・15ブロックとも、ほぼ中央部で石器分布に重なって微細遺物も検出されている。ポイントチップとブランディングチップが含まれており、尖頭器とナイフ形石器の細調整を行ったことが窺われる。特に第15ブロックからは、下呂石の剥片・ポイントチップが検出されている。

下呂石製の尖頭器が第6号土坑中から出土しており、第17ブロックでも2H25、3H21区周辺との繋りが考えられる。

第16ブロックでは、中心やや南寄りからまとまった資料が検出されている。通常の発掘で示される石器集中部とはわずかに位置を違える。資料採取レベルに達する浅い攪乱の存在による、分布上の重みである可能性が高い。微細遺物の性格は不明瞭である。

第17ブロックにも多くの比較的浅い攪乱溝が分布していたが、微細遺物の分布は通常の発掘資料のそれとはほぼ完全に重複している。2～3ヶ所の集中分布域を認めることができよう。そのうち、2H20・25、3H16・21区を占める集中部からは、ポイントチップ、ブランディングチップが検出されており、尖頭器・ナイフ形石器の調整加工の存在が知られる。石材でも多くの黒曜石と若干の下呂石を含んでいる。黒曜石と下呂石ではポイントチップが主体を占めているが、本ブロックからは黒曜石製の部分加工尖頭器が1点出土している。3H12・17区の集中部からは性格の明瞭な微細遺物は未検出である。

第18・19ブロックには、集中部が複数認められる。通常の石器分布と重なるものと、ずれるものがある。第18ブロックは、ブロックの規模・性格的には第14・15ブロックと通じるものであるが、やや分布傾向を異にする。攪乱溝との関係で、単なる見かけ上の差である可能性もある。第19ブロックは大きなブロックの一部についてのみ資料採取が行われており全容を知ることとはできないが、多量の微細遺物が検出されている。

これら石器ブロックと重複する例以外に、3G24-a区のように通常の発掘段階では全く意識されなかった遺物空白域で、多量の微細遺物が検出される場合もある。周辺には1.5mほど隔たって第29配石が分布するのみである。微細遺物が検出されて周囲の状況を再考する時、初めて第11ブロックの西方への延長が想起されるのである。そうであるとすれば、第11ブロックは石器製作行為を含むという意味から、構成石器数は少ないながらも第14・15ブロック等と同質とも考えられる。微細遺物中にはブランディングチップが含まれている。

2G12-e、2G13-aからは細石刃が発見されている。第4・5ブロック間の遺物分布の谷間に分布している。第5・10ブロック等でも数点の細石刃が検出されており、これらと一連の資料かと考えられる。

受熱石器は2H25-hで3点検出されたに留まるが、通常の発掘資料中からは100点ほど検出されている。それらの分布は他の石器分布と一致する場合が多く、ほぼ完全にブロック内にある。具体的には第5・17ブロックにはそれぞれ50点以上の受熱石器が含まれており、ブロック内では石器分布の最も稠密な部分に中心がある。その他では第6ブロックに5点、第7・10ブロックに各1点、ブロック外に2点分布する。この結果から見ると、大規模で石器量の多いブロックには受熱石器も多いが、小規模なブロックにはほとんどないという傾向が把握できる。しかもこの傾向は単純に石器量に比例している訳ではなく、石器の量以上に極端な形で有無が識別される。したがって、こうした違いはブロックの性格の本質的な差の表徴と考えられるのである。

3. まとめ

以上の分析結果を、集落構成要素の抽出という視点からまとめてみたい。分析資料として特に有効と考えられたのは、第V章第7節で示したようにここでも赤化砂岩と石器であった。両者の分布を通して、本分析域内にある15の石器ブロックを基本とする単位の有効性・範囲を検討した後、火処の数・特記すべきをそれら単位の性格について触れる。

石器ブロックの数は第5～19の計15である。これらに水洗選別資料が加わった結果、三つの問題点が生じた様に思う。一つは第9ブロックの処置である。わずかに7点の石器を含むに留まっており、赤化砂岩他の付加される可能性のある要素も全て欠落している。そのような性格の単位も存在し得るかも知れないが、あまりに断片的に過ぎるためここでは有効な分析単位としての位置を保ち得ないと考えたい。二つは第11ブロックである。これについては先に触れたが、ブロックの西縁から西4mほどの位置に微細遺物の集中部が検出されたことから、ブロック西南方に分布する数点の石器も含めて、ブロックの範囲をもう少し広くとることができるかと考える。三つは石器ブロックとは関わらない、3G14区遺構群である。多くの場合、分析単位の基本要素として石器の有無を重視しがちであるが、3G14区周辺からは完全に石器が欠落する。ところがその一方で、遺構と考え得る要素である礫群・配石・赤化砂岩の集中部の三つを具えている。第9ブロックとは逆に、遺構群構成の充実からこれら一つの分析単位と考えておきたい。

さて以上から、分析単位は合計15になる。それぞれに赤化砂岩集中部の在り方から火処の数と位置を推定しておこう。基本的には赤化砂岩集中部の数に整合することになるが、一部石器ブロックの規模等によって評価が変動している。結果は第5ブロック：1<。ブロック東縁部。他の赤化砂岩集中部は弱すぎる。第6・7・8ブロック：各1。ブロック北半。いずれも集中部は弱い。第10ブロック：2<。ブロック南半。二つの集中部は強いが、他にも弱い集中部がある。第11ブロック：1<。ブロック北縁。南に接する集中部を評価すれば2つになる。第12・13ブロック：各1。ブロック北端。12は弱く、13は強い集中部。第14・15ブロック：各2<。位置不定。ともにブロック内及び周辺部に複数の集中部を持つ。第16ブロック：1<。位置不定。弱い集中部のみであるが、ブロック規模から考えて1<と判断。第17ブロック：5<。位置不定。ブロック内、周辺部に4ヶ所の強い集中部がある他、弱い集中部も散在。第18ブロック：1。位置不定。ブロック内、周辺部に弱い集中部が散在。第19ブロック：1<。位置不定。ブロック内、周辺部に弱い集中部が散在するが、ブロックの大部分が分析域の外。3G14区遺構群：2<。強い集中部が2ヶ所以上有。となる。

特記すべきブロックの性格としては、第8・11の2ヶ所で石器製作の痕跡を検出し得た点がある。いずれも通常の発掘では看取できなかった性格が付加されたことになる。また、第17ブロックに火処の数が多く、加えて他のブロックのように石器と赤化砂岩が互換関係を示さない点も、このブロックをめぐる特性を考える上で有効であろう。(山下)

第7節 小 結

第2b層出土のナイフ形石器群は、大きく三つの時期に分けられた。古いと考えられる順に第Iブロック群→第Ⅲ・Ⅳブロック群→第IIブロック群である。さらに分析の進んだ結果、第IIブロック群は尖頭器北群ともほぼ同じ時期と考えられるに至った。そこでこれらを古い順にK2第1期→K2第II期→K2第III期とし、これに従って以下の記述を進めることにしたい。

1. 石器群と技術基盤

第I期に属する石器は合計218点である。二次加工ある石器にはナイフ形石器・彫器・RFなどがあるが、それほど多くはない。最も特徴的なのはナイフ形石器であり、第I期の指標的役割を負っている。すなわち、6点のナイフ形石器のうち2点は明らかに横長、しかも国府型ナイフ形石器の特徴を示している。他は縦長剥片を素材とはするが、視点によっては切外型ナイフ形石器と見える例も含んでいる。切外型ナイフ形石器と考えられる資料は石材でも特徴的であり、瑪瑙質のものを使用している。

剥片剥離技術はこのような石器組成をよく反映している。すなわち全体としてはやや縦長(1.5:1前後)の剥片を取ろうとする技術が卓越しつつも、一方で瀬戸内技法の強い影響をも示している。相方の技術基盤は合成されて折衷的なものになるのではなく、全く別系列の技術が並存するという様相を見せている。

第II期の資料は1686点の石器からなる。第I期と同様ナイフ形石器が中心の道具構成を示すが、新たに小型木葉形の尖頭器を組成に加えるようになる。尖頭器の出土は第Ⅲブロック群に限られる。ナイフ形石器では二側縁加工の茂呂型が主体となる。瀬戸内的な様相は完全に消失する。

技術的には、第I期の縦長剥片を取る技術のみが発展継承されたかの感がある。原材には円礫やそれを分割したもの・厚手大型の剥片等を利用し、頻りに打面を移動しながら長幅比1.5:1より幅広の縦長剥片を取っている。ナイフ形石器の形態からは砂川型刃器技法の存在が予想されたが、取られた剥片の形状は言うに及ばず技術的な手順にもほとんど類似性は認められなかった。

また、素材と主たる製品であるナイフ形石器との対応関係もあまり認められなかった。本道跡の強い特徴として、目的剥片と考えられるような整った剥片がほとんど欠落(搬出)している。このためナイフ形石器と照合すべき剥片資料に偏りがあったとも考えられるが、その点に留意しつつ観察してもやはりここに見られる剥片剥離技術が第一義的にナイフ形石器によって規制されているとは考えられない。むしろ汎用素材であるやや幅広の縦長剥片を供給する中で、適宜より細長いものはナイフ形石器に、幅広・厚手の頑丈なものはスクレイパーにと使い分け

を行ったと考えられる。

第Ⅲ期の資料は2070点で、石器群の主体がナイフ形石器から尖頭器へと移る。ナイフ形石器には依然として茂呂型のものが多いが、ブランチングの位置・形状ともに崩れたものも増えてくる。尖頭器では、第Ⅱ期には安定していた両面加工品がほとんど認められなくなり、片面・周辺・部分加工品を含み技術的なバリエーションが豊かになる。

技術的には主体は第Ⅱ期の延長線上にあると考えられるが、必ずしも明瞭ではない。しかし尖頭器もほとんど全てが剥片を素材としており、一方では伝統的な4~7cm位の剥片を目的としつつも、他方では長さ10cm以上の剥片を目的としたものもあるようである。後者に該当する石核は発見されていたが、搬入素材の中にそうした大型剥片が散見される所から、そのような技術の存在が推定できる。

さて、第Ⅰ期から第Ⅲ期にかけて石器組成や技術ではかなり明瞭な変遷を辿ることができたが、それらと不可分であるはずの集落構造にはどのような変化が現れるのであろうか。次には、時期を追って遺構・遺物の分布からユニットを設定し、集落の構造と景観の解明を試みてみたい。

2. ユニットの設定と集落景観

1) ユニットの設定

本文中では説明の都合から資料群を遺構と遺物に分け、それぞれにユニットの設定と解釈を試みてきた。しかし一度集落像の復原という立場に立つならばそれらは統合されて然るべきものであり、一体となってはじめて集落を構成する単位の指示者たり得る。そこでこれまで個別に分析されてきた遺構・遺物を統合し、個別に抽出されたユニットの再検討を行いたい。然る後に時期を追っての集落景観・構造の変遷について考えてみたい。なお、ここで尖頭器北群についても取り扱うものとする。

本遺跡におけるブロック・礫群・配石等統合の基準は、基本的に相互がいかに近接して分布しているかにある。すでに見てきたように、本遺跡ではそれほど頻繁なブロック間・礫群間等の接合関係が認められないために、一部を除いて接合を集落の構成単位を抽出する基準とは為し得なかった。

さて、第239図には遺跡を構成する各種遺構の分布図を一括して図化した。これを参考に、各節の分析結果を念頭に置きながら遺構群のグルーピングを行い、ユニットを設定したい。

まず、K2第Ⅰ期には3F区南半を中心に遺構の集中する場所がある。ここには第Ⅰブロック群と第一礫群群が部分的に重複しながら広がっており、両者が複合した波及効果によって、さらに周辺の第13・27配石をも合わせて一つの集中部と考えることができる。(第55表)。面積は約220㎡になる。これを第1ユニットとする。

次にK2第Ⅱ期として、台地縁に当る4F区南半から4G区にかけて礫群・配石が著しく集中する部分がある。これらは第二礫群群としてまとめられたものである。この部分には石器の

第55表 第2b層ナイフ形石器文化(K2)ユニット別属性表

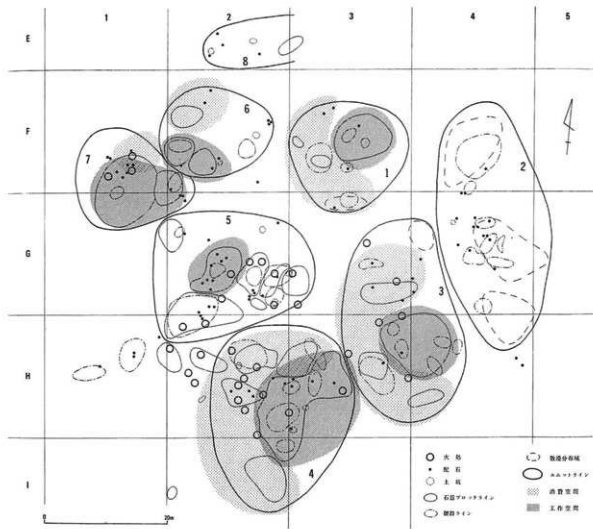
時期	ユニット№	性 格	石器ブロック			礫群	配石	土坑	赤化砂岩 集 中 部	受熱石器	面積 (㎡)
			A類	B類	C類						
I	1	世 帯	1	2	5	4	—	?	1	220	
	2	調理・儀式的			9	10	—	?	—	240	
II	3	世 帯	1	1	2	7	8	—	5<	1	370
	4	世 帯	1	4	7	7	3	7<	100<	400	
III	5	世 帯 ?	1	3	3	6	10	3	10<	50<	240
	6	世 帯		2	1	3	5	1	?	10<	200
	7	世 帯	1	1		2	5	—	3<	50<	200
	8	世帯の一部			1	1	3	1	?	—	50<

分布があまり認められず、わずかに散漫分布域d・e4・e5が重なるのみである。礫群・配石の圧倒的な多さとは好対照を成している。集中分布域は台地縁にそって南北に長く伸びており、約240㎡の広がりを持つ。これを第2ユニットとする。

第2ユニットの南西部には、隣接して3G・4G・3H・4H区にまたがる集中部がある。ここには第IVブロック群・第11ブロック・第五礫群群・第19礫群としてまとめられたものが複合している。配石は北半に集中しており8基ある。西縁に6ヶ所ほどの赤化砂岩集中部が認められる。約370㎡の広がりを持つ。これを第3ユニットとする。これに関連する所として散漫分布域gが考えられる。

このすぐ西に接する集中部は、第IIIブロック群と第四礫群群との複合である。これに、本文中では取り扱えなかった南区出土の2I5区礫群を加えて第4ユニットとする。配石7基と土坑3基を伴う。少なくとも7～8ヶ所以上の赤化砂岩集中部が、また、本ユニットに関連する所として、第12・13・21ブロック、散漫分布域f・h、第27・28礫群が考えられる。ユニットの広さは約400㎡である。

第4ユニットの北に位置する第5ユニットは第III期に属する。第IIブロック群と第三礫群群の複合したものを中核とする。他に10基の配石と3基の土坑、10ヶ所以上の赤化砂岩集中部を伴う。本ユニットは、石器ブロックでも礫群でも問題を内包している。第III期は一応尖頭器を主体とする内容を示すとしたが、石器ブロック中でこうした傾向を顕著に示すのは第5ブロックのみである。同様に、礫群でも第13礫群についてのみ尖頭器群との間に強い共通性が指摘されている。また第10ブロックと第17礫群も接合関係等から尖頭器との繋がりを認めることができる。この4遺構を除くと、他はどちらかといえばナイフ形石器文化の伝統を色濃く残している。このような事から考えると、本ユニットは見かけ上の近接した立地に反して、内容的には第II期に属するグループと第III期に属するグループに分離されるべきものとも考えられる。両者を繋ぐ接合・個体別資料の共有は、近接した立地が生み出した資料分布上の見せかけと考えることもできるのである。ここでは両者を分離する確固たる根拠にも欠けるため一括して第5ユニットとして取り扱うが、他のユニットと同列に考えることは難しい。上記の様な問題を含んだユニットである点に留意しておきたい。



第229図 第26号ナイフ形石器群集落概念図

次に、第Ⅲ期の典型である尖頭器北群について考えてみたい。同じ第Ⅲ期にあって、第5ユニットと尖頭器北群の遺構群の構成内容には大きな差がある。この差はまた、第Ⅰ・Ⅱ期に属する第1・3・4ユニットとの差でもある。すなわち、本章第4・5節で述べて来たように、第1・3・4ユニットは単にブロック群が近接して分布するのみならず、そこには中核となるA類ブロックとそれを取りまくB・Cブロックによって構成されるという強い共通性と統合原理が働いていた。ところが第V章第4・5節で検討したように、尖頭器北群についてはそうした統合することによって別の新たな評価を生ぜしめるようなブロック・ブロック群構成は示していない。第Ⅰ・Ⅱ期と似て尖頭器北群にもA・B類ブロックは存在するが、その内容には著しい差が認められる。第Ⅰ・Ⅱ期においては、形状の差を示すものとして設定されたA・B類ブロックが、質的にも副次生産物の多寡を示していることがわかった。ところが尖頭器北群におけるA・B類ブロックは形状の差こそ示しているが、質的には差が認められないことが判明している。したがって、A・B類の差は単に等質なもの累積の差を示すにすぎないという評価に結びついてくる。このことはまた、各石器ブロックが基本的には独立した単位として扱い得ることを示唆していると考えられる。第Ⅰ・Ⅱ期においては、複数ブロックに補完的な関係を認めることで単一ユニットが設定し得たのに対し、第Ⅲ期では個々のブロックの独立性の中にユニットが読み取れると考えられるのである。

ところが、一方ではこれらの各ブロック間にも個体の共有関係の強弱により二つの群も認められている。問題はこの二つの異なるレベルに設定し得るユニットの関係の解釈と言うことになってこよう。ここで再び当時の集落設営が周期的な回帰性に基いているとする立場に立つならば、個体の共有によりグルーピングされた1(P-1・2・3ブロック)・2(P-4a, 4bブロック)群とはそれぞれ同一世帯が一定領域を断続的に利用した結果と解することができよう。そうであるとすれば、各グループに対してこそ第Ⅰ・Ⅱ期と同じ意味での世帯ユニットの名を付与することができよう。1群を第6, 2群を第7ユニットとする由縁である。第6ユニットは200㎡, 第7ユニットも200㎡の広がりを持つ。

この他、第Ⅲ期と第Ⅰ・Ⅱ期の石器群の間において、所属が不明瞭であった2E区と2F区東半の遺構群についても、隣接して検出された土坑内の出土遺物や礫群・土坑の配列の共通性などから第Ⅲ期に含め、それぞれをユニットを構成する遺構と考えたい。その結果、さらに1つのユニットが追加されることになった。

2E区遺構群は、第23ブロック・散漫分布域iと第1礫群・第1・2・3配石、第10号土坑から成る。2F区東半の遺構群はブロックと認定されていないが数点分布する石器と礫群・配石・土坑で構成される。この両者は、遺構の構成・分布等に著しい共通性がある。また、遺構群が他から隔離されているために、これまで判然としなかった土坑と他の遺構とのセット関係が明瞭に把握できる。これらと他の第Ⅲ期のユニットを比較すると、土坑の存在と石器群の乏しさという点で大きく性格を異にする。石器が乏しいために他のブロックとの関係は不明であるが、2F区東半遺構群を構成する第3礫群と第6ユニット中の第4礫群には接合関係が認

められており、少なくとも両者はほぼ同時に残された可能性が高い。

これらが時期の断続も含めてほぼ同時に残されたとすれば、他のユニットとの構成上の違いはどのように考えられるであろうか。選択肢としては、①世帯ユニットあるいは集落に含まれる特定の機能空間・②特定の役割りを持つ世帯ユニット・③時期・集団を異にする人々により残されたものの三つがであろうか。この中で、③の可能性は遺構群の構成要素の比較から乏しいように考える。②では土坑と石器分布の少さが同時に説明できるような特別な役割を、世帯レベルで付与しなければならなくなる。土坑についてはすでに述べたように、構築物としての完成度、掘削に推定される投下労働量の大きさ、貯蔵穴としての可能性等から、居住期間の延長と結び付く要素である。ところが一方では、こうした遺構を含む遺構群に限って居住期間の短かさと符合しかねない石器群が極端に乏しいという矛盾した現象が認められるのである。こうした遺構群内で解消できない矛盾も、①の可能性としてであればより容易に解釈し得る。すなわち2F区東半の遺構群は、第6ユニットの一部として土坑に関わる機能空間を占めていたと考えることができよう。第6ユニット内の各単一ブロックが累積的に残されていても、土坑という機能空間の配置のみは一定不変であったと考えることができよう。他方、2E区遺構群はいずれのユニットからも個立的である。これを第8ユニットとし巨大な擾乱のある3E区の方角に集落の連続する可能性を考えておきたい。

以上ユニットとしてくくられた遺構群、それらと関わりを持つと考えられた遺構・遺物分布以外に、散漫分布域e1・第12・57配石がある。これらはいずれも各ユニットの間において、所属を決定し得なかったものである。分布位置から、散漫分布域e1・第57配石は第Ⅱ期に、第19配石は第Ⅲ期に当ると考えられるが、ユニットに積極的に取り込むことは難しい。ここでは、いずれも検討から割愛したい。

2) 時期別の集落景観

第Ⅰ期 第1ユニットのみで構成される。ユニットはA類ブロック一つとC類ブロック二つに複数の礫群・配石を伴う。A類とB・C類の複数ブロックで構成されるユニットの解釈としては、A類ブロックを共同空間あるいは屋外における主たる作業場、B・C類ブロックを工作作業をあまり伴わない居住域のような消費空間とし、基本的には一世帯によって残されたものと考えたい。したがって複数のB・C類ブロックの存在は、回帰的生活を営んでいたであろう当時の人々の累積的生活を示すものと解したい。

このような視点に立つと、第1世帯ユニットは様々な機会に儀式的に利用されたとされる礫群の多さからも、一世帯から最大二世帯の人々によって複数回利用されたと見ることができよう。ブロック・礫群の配置から、居住域には西・南方の高所が利用され、屋外施設・共同空間として東方のやや低い所が選定されたようである。火処を特定する材料は欠いているが、利用空間の配置からは、B・C類ブロックに隣接した西側、すなわちA類ブロックの反対側を想定しておきたい。蔽石は共同空間のほぼ中央に分布している。

本ユニットにおいて、複数回居住のうちの1居住単位を示す可能性を持つものとして、南縁

部に位置する散漫分布域cと第18礫群・第27配石を指摘し得る。他のユニット構成要素とはやや隔れて分布し、石器は少ないながら施設面では安定した内容を持つ。石器の多少は居住期間の長短と結びつく可能性は高いが、他方では石器製作という工作作業の頻度と直結する問題でもある。この工作作業頻度に関する予測が立てられない現在、居住に伴う要件に当たると考えられる施設の充足度を、居住単位設定の一つの基準とすることも許されようかと考えられる⁴⁾。

第1期の世帯ユニットはわずかに1ヶ所確認されたに留まるが、集落単位としてはいかにも規模が小さいように思われる。第1ユニットのすぐ北方には基盤礫層にまで達する広大な攪乱が入っており、集落の広がり方がより北方に展開していた可能性を考えておきたい。

第II期 第2・3・4の計三つのユニットで構成される。石器群の分析では第3・4ユニットが抽出されていたに留まるが、礫群・配石等の情報を総合すると新たに第2ユニットを設定し、第3ユニットの広がりにも若干の変更を要した。

第2ユニットは、ナイフ形石器段階に属するものとして際立った特徴を持っている。それは圧倒的な礫群・配石の多さに対する石器群の貧弱さである。石器群では、わずかに散漫分布域d・e₄・e₅が重複するのみである。この石器群と礫群とのアンバランスについて、一つには本ユニットが台地縁に近いやや傾斜の強い位置にある事に注意する必要がある。土層断面図からも推察できるように、4F・G区東半部ではすでに第2b層は大きく流失していると考えられる。そのため石器群の多くが失われている可能性をも考えておかなければならない。ところが、一方でこれらの石器群の構成を見ると、量的な貧弱さにもかかわらず質的には比較的豊かであることに気が付く。その豊かさは、石器が人為的にかつ選択的に残されたことを示唆する可能性が強い。そうであるとすれば、石器の流失が考えられたとしても基本的な場の性格を変更するほどの分布上の歪は生じていないと考えた方がよからう。このように考えてくると、第2ユニットは全体として第1世帯ユニットや後述する第3・4世帯ユニットとは異なり、必ずしも通常の世帯を単位とした遺物分布を示していないように思える。全体では4点の取石を含んでいるが礫群に調理・祭祀的な性格が考えられるとすれば、本ユニットは単独世帯に帰属しないようなレベルでの非日常的行為の空間であった可能性がある。こうした性格の一端は礫群の分布結果にも現われている可能性がある。K2文化段階に属する数多くの礫群のうち「少重型」と分類されるものは本ユニットにまとまって分布するのみである。礫群の分析では各類型が連続する手順の中で理解できる可能性が指摘されているが、本質的な機能的な差も完全に否定された訳ではない。したがって、本ユニットの具体的性格としては、礫群を形成するに至る特定段階を処置する空間、あるいは石器ブロックに隣接する礫群とは本質的に異なる性格を帯びた礫群を処置する空間と考えることができる。

第3ユニットは、第IVブロック群と第五礫群群が合成された南半部と、一見独立しながら個体の共有関係から本ユニットに含められた第11ブロック周辺部とに大きく分けることができる。これらの構成は第1ユニットと通じる所が多く、第11ブロック周辺部は一居住単位と判断し得る。通常の発掘では、散漫な石器分布と配石が確認されたのみであるが、水洗選別によって石

器の細調整を行った痕跡とか赤化砂岩の集中部も検出されている。南半部は後述する第4ユニットに典型的に示されるように単一世帯の数回の回帰的居住の複合した結果を示すかと考えられる。

本ユニットには、これらに加えて単一の機能空間と考えられる部分がある。ユニット北端に位置する散漫分布域 e3 と第38配石周辺である。空間の機能的性格は、散漫分布域 e3 の石器組成から導き出されるもので、皮革処理場と考えられる。このような特殊な作業空間が単一世帯ユニットに帰属するか否かは問題であるが、分布上は一応本ユニットに含めて考えることができる。

さて本ユニットの空間配置を見てみると、これも第1ユニットに似る。第19ブロックという工作作業場を中心に、より消費空間的な第11・18・20ブロックが若干高い北・西・南に配されている。礫群は第19ブロックを中心に分布し、第18ブロックとのみ一部重複する。赤化砂岩の集中部は、水洗選別が行われた範囲で少なくとも5ヶ所検出されている。分布位置は、いずれも石器ブロック・礫群と隣接しているものの重複することはない。個々の石器ブロック・礫群との結びつきは、前述の第11ブロックと第19礫群を除き明瞭でない。第11ブロックでは北側、第19礫群でも北側に接して残されている。両者はセット関係が異っており、同じ赤化砂岩と言ってもその意味する所は異なっている可能性がある。しかしそのような中でも、工作作業空間に対しては主たる遺構である石器ブロック・礫群の逆の位置にある点は注目値する。

第4ユニットは第Ⅲブロック群と第Ⅳ礫群群によって構成される。本ユニットは南東側を大きく削られてはいるものの、累積的な世帯ユニットと一居住単位としての世帯ユニットの関係をも最も端的に捉え得るものとして重要である。事実関係については第5節に詳述してあるので重複を避けるが、その成果を再論すると、「第14・15・16ブロックはそれぞれ個別に第17ブロックと個体の共有関係を結んでいる。その共有関係は、工作作業を主体とする第17ブロックから各ブロックへ石器・素材等を供給するという形での相互補完的關係にあり、それぞれの関係を単位的世帯ユニットとして捉えることができる。各単位的世帯ユニットの關係は、当時の人々が回帰的・周期的な生活を営んでいたとの仮定に立つ時、同一世帯の複数回の回帰の結果残されたと考えられることができる。」というものであった。

これを極端に捉えようとするれば、本ユニットでは三つの単位的世帯ユニットがあるのであるから、三回の回帰があったと言うことにもなりかねない。しかし回帰毎に居住位置を変更したか否かについては十分見通しは得られていない。複数回の回帰によって一ブロックが残された可能性も十分考えられ、そのような意味からすれば、本節で設定する所の第4ユニットと「単位的世帯ユニット」も規模の大小以外には大きな違いはないことになる。そこでここでは直接の個体の共有関係は結んでいないものの、第17ブロックとの位置関係において他と共通する第22ブロックをも含めて第4世帯ユニットとしておきたい。

本ユニットの構成要素には、石器ブロック・礫群・配石・赤化砂岩集中部の他に、土坑と受熱石器を加えることができる。石器ブロックを主体にそれぞれの配置を見てみよう。礫群はそ

の多くが作業空間たる第17ブロックに重っており、第3ユニットと共通する。第14・16ブロックにはそれぞれ第29・32礫群が大きく複合しているが、いずれの礫群も「少軽型」に属しており残片と考えることができる。配石の分布は限定されている上に、特定の傾向は抽出できなかった。

赤化砂岩の集中部は、第6節で述べたように第14・15・16ブロックでは石器分布に隣接しつつも重複することはない。石器の分布する空間を意識しつつ営まれた火処の痕跡を示す可能性が強い。石器組成・第17ブロックとの個体の共有関係から第14・15・16ブロックについてはより消費・住居空間的な色彩が濃いと考えられるが、それぞれに火処を持つとすればその可能性はさらに高いものと言えよう。一方作業空間としての第17ブロック中にも集中部が認められるが、これらは石器分布と重複する例が多い。しかも第17ブロック中には多量の受熱石器も認められている。これらの事実は、先の回帰的居住パターンにおける第17ブロック空間の重複使用を示唆する可能性が高い。本来ならば分布を異にすると考えられる石器・赤化砂岩が度重なる同一空間の利用によって交錯し合い、受熱石器の大量分布を惹起したと考えられる。

土坑はユニット内に3基認められる。第14ブロックに1基、第17ブロックに2基分布する。第14ブロックでは石器分布の南西部に隣接するが、第17ブロックでは石器分布のはば中心部に位置する。この分布も先の赤化砂岩と同じ傾向を示しており、ユニットの形成経過を解釈するに当たっては同様の役割を果たすかと考えられる。しかし火処の場合は屋内あるいは住居出入口のそばと作業場の2ヶ所に設けられる可能性が十分考えられるが、土坑の場合はどうであろうか。土坑の機能の解明が不十分ではあるが、全体の分布傾向からして、より住居に隣接した位置に設けられた可能性が高い。そうであるとすれば第1・6号土坑のように大規模ブロックの中央に位置することはいかにも異質である。第17ブロックという大規模ブロックも、本来は放棄された第14・15・16ブロックのようなものが複合・累積し、さらにはそこが作業場として利用される中で形成された可能性もある。その一段階として土坑に隣接して住居が設定された時があったのであろう。第1節4項で示した第6号土坑とその上面の火処としての可能性、赤化砂岩・第30礫群の重複分布は、このような様々な過程の複合を物語るものと解される。

また、土坑が第15・16・22ブロックから欠落している点も注目される。各単位的世帯ユニットに必ず並設される性質のものではなかったようである。土坑の構造物としての完成度の高さと掘削の労力を勘案すると、第14ブロックに設けられた第7号土坑が他のブロックを残した段階にも継続利用された可能性もある。

以上をまとめると、第4世帯ユニットでも他と同様に東側に作業空間、北・西・南側に住居空間の配置を認めることができよう。厳密には東南方に擾乱があるために問題は残るが、4 I から3 I 区の一部に東側から浅谷が入る事を考えると、理解し易い空間配置と言える。

第II期に属するものとして、これらの他に散漫分布域 f・h がある。しかしこれらの間には大きな擾乱溝が介在し、しかもその中から検出された第2号土坑中に多量の砕片が含まれている等、情報の大幅な欠落が危惧される。加えてブロック・礫群の在り方も他のユニットと大い

に異なるために十分な解釈が行えなかった。いずれの散漫分布域も第4ユニットと個体の共有関係を持つが、それが第3・4ユニット間に見る世帯間の関係と同質のものであるのか、あるいは第4ユニットへの帰属を示すものか不明である。しかし、両散漫分布域に属するC類ブロックである第12・13・21ブロックは、いずれも石器組成上は特記するほどの偏りは認められず特定の機能を荷った空間と考えることは難しい。これらのC類ブロックをB類ブロックと類縁のものと考えることが許されるならば、攪乱域にA類ブロックの存在を想定することで「第5ユニット」の存在を認める事も可能であろう。

第Ⅱ期の遺構群は、以上の様に大きく三つのユニットと攪乱を考慮したプラス α としてまとめることができる。集落全体では、少なくとも $80 \times 30 = 2400 \text{ m}^2$ 以上の広がりを持っていたと考えられる。集落全体を俯瞰してみると、4 I・3 I区に入る東方からの浅谷に沿ってその北側に少なくとも二つ以上の世帯ユニット(第3・4ユニット+ α)が存在する。各世帯の空間配置は東側に作業場、西側に居住域を基本としており、東方に開いた集落と言える。各世帯は日常的な作業空間において世帯さらには集落構成員に関わる調理・儀式的な行為を行う(礫群の集中)とともに、集落全体に関わる祭祀的空間として東北方の台地縁部を特定している(第2ユニット)。第3ユニット北縁部には皮革処理といった特定の機能空間が位置するが、第3ユニット個有のものか集落全体に関わるものか定かでない。また、第Ⅱ期になると土坑が出現ようになる。これも台地の稜線に沿って特徴的な分布を示す。先にはこれらを第4ユニット内で解釈したが、他方では集落構成上の土坑を持つユニットと持たないユニットの意味、あるいは土坑のみが集落全体で共有された可能性など、不明な点が多い。

第Ⅲ期 第5～8の4つのユニットで構成されるが、第5ユニットと他との間には分布上も構造的にも差があると考えられるため、二者を大きく分けて検討する。

第5ユニットは、前述の如く石器組成・礫群の属性等においては第Ⅱ期と第Ⅲ期の様相が複合している可能性があった。しかし一方でこれらを一体と見る立場からユニットの抽出を行った結果、第5ユニットとして抱括的に扱った中に二つの異なるユニットが認められるに至ったが、それらが同一世帯の回帰を示すものか異なる世帯を示すものかは判断できなかった。

全体を石器から見ると、本ユニットはA類ブロック1、B類ブロック3、C類ブロック3で構成される。A類である第5ブロックとB類の第8ブロックが作業空間的である以外は概して消費空間的である。石器以外のユニット構成要素には礫群・配石・土坑・赤化砂岩集中部・受熱石器がある。礫群は第Ⅱ期と異なり、多くの場合石器ブロックと重複分布する。配石は礫群とは分布を違える例が多いが、石器ブロックに対してはその縁辺から隣接した位置に検出されることが多い。ほぼ全ての石器ブロックに伴っている。3基ある土坑のうち第4・9号はそれぞれ第9・8ブロックに隣接・重複する。第8号土坑のみは第6ブロックの北約2mに位置しており、他の遺構に比べ分布のずれが感じられる。赤化砂岩の集中部は、第4ユニット同様石器分布を意識するかのようにならずに位置を違えつつ、全ての石器ブロックに伴っている。ここで注目されるのは、工作場たる第5ブロックでも石器と赤化砂岩が分布を違えている点であ

る。第4ユニットでは工作場に限っては両者が重複する例が多かった。一方で、第4ユニット同様多量の受熱石器の分布が認められる。

このように、現象面でも第II期の世帯ユニット(第3・4ユニット)と比較する時、第5ユニットには多くの変化を看取することができる。最も大きな違いは、石器ブロックと礫群の重複分布、最大の工作空間たる第5ブロック中の赤化砂岩と受熱石器の在り方であろう。これらを、接合・個体別資料の共有関係を主たる指標として導き出された二つの異なるユニットの、第II期との構造的な違いという視点から検討してみると、世帯内における機能空間の配置・ブロックを単位とした石器の需給関係・集落への回帰性などの変化と考えられることができよう。後者について補足すると、本ユニットでは作業場的な第5・8ブロックから他ブロックへの石器の供給が定かではない。また、特に第5ブロック中の各種の要素が重複分布せず、全体の規模も小さいと言うことは、第II期ほど安定的な集落への回帰と機能空間配置の継承が行われていなかった可能性があろう。第5ユニットについては、多くの問題を含んでいるために具体的な空間配置等の検討は難しいが、少なくとも第II期に認められるユニット構成原理をそのまま適応して解釈することは困難と考えられる。

次に尖頭器北群を中心とする第6～8ユニットを見てみよう。

第6ユニットは三つのブロックを中心とする領域と第5号土坑を中心とする遺構群で構成される。三つのブロックのうち、P1ブロックのみは尖頭器製作の痕跡を留めず、礫群も持たず、最も居住空間の色彩が強い。他の2ブロックは等質的な内容を示しており、より工作作業空間的である。また土坑を中心とする領域は独自の機能空間を占めており、継続的に利用されたと考えられる。このように見ると、基本的には1ブロックに一つの単位的なユニットが認められるとしたが、P1ブロックは他の二つのブロックあるいはその一つと結びついて一つの単位的なユニットを形成すると考えた方がよい。ブロック相互の繋りを積極的に認め得るような確実なデータが認められないために安易な統合は避けるべきとも考えられるが、P1ブロックがより居住空間的、P2・3ブロックがより工作作業の痕跡を強く残す点と考慮すると、一帯により残された二つの異なる機能空間と見ることもできよう。

しかしここで注意すべきは、尖頭器北群で居住空間的ブロックはP1のみである点である。この事実をそのまま解釈しようとすれば、P1に住居を構えた人々によって他の全てのブロックが残されたと考えなければならなくなる。しかしこの仮定はブロック数・石器数の構成上のアンバランスが激しく、容易には認め難い。むしろブロックとして認定はされていないものの、すでにあるブロックの外により居住空間的なものの存在を想定した方が無理がなからう。このような仮の居住空間も含めて、第6ユニットは同一の世帯が回帰を契機として残した複数の単位的世帯ユニットの複合した世帯ユニットと考えることができよう。

第6ユニットの機能空間の配置は、北半は居住域、南半に作業場、東縁部に土坑となる。先述の如く、土坑のみは継続的に同じものが利用されていたと考えられる。作業空間には接するようして配石と礫群が配されており、調理と儀式的な空間の隣接が考えられる。また受熱石

器は各ブロックから出土しており、住居と作業場に隣接して複数の火処の存在が想定できよう。

第7ユニットは、二つの石器ブロックと礫群2、配石5で構成される。このうちP4aブロックの巨大さが他と較べ際立っているが、その原因は定かでない。質的には他のブロックと変わる所がない点は注目されよう。同質のものの累積した結果巨大化したと考えられよう。ユニットの構成は他と同じで、二つの同質のブロックから成る事を評価すれば、少なくとも同一世帯の二回以上の回帰によって形成されたと考えられよう。P4aブロックを中心とする単位的世帯ユニットについてのみ、規模が大きいだけに機能空間の配列を読み取ることができる。概要は第V章第1節2項での推定に符合する。すなわち、石器・赤化砂岩集中部・受熱石器の分布もブロック北側の1F19・20区に住居を想定することに矛盾はしない。住居に接して台石があり、そのすぐ南側には配石が分布する。配石の周辺には赤化砂岩の集中部と礫石も分布しており、火処を伴う調理空間の存在が推定できよう。この周囲にはさらに石器も最も稠密に分布しており、多くの活動の中心領域となっていたことが知られる。礫群はこうした領域のさらに南側に位置している。

第8ユニットは、すでに述べたように質的に限られた内容を示している可能性が強い。第6ユニットの土坑周辺の機能空間と酷似する分布状況を示す点を考慮すると、本ユニットも本来ならば他のブロックと組み合わさって初めて完全な世帯ユニットとしての形態を整えるものと考えられる。1ユニットを設けて分離したが、他の世帯ユニットとして性格付けされる一群とは異なるものと考えられる。全容を把握し得ない世帯ユニットとして、ここでは多くは扱わない。

第Ⅲ期に属するものとして、世帯ユニットを4つ抽出することができた。これらは大旨台地稜線部から西側緩斜面に分布している。北東部には大きな擾乱が入っており、集落全体としてはさらに広がる可能性がある。少なくとも $50 \times 30 = 1500$ ㎡以上の広がりを持つと考えられる。第Ⅲ期の世帯ユニットを構成するブロックには、第Ⅱ期に認められたような明瞭な性格的な違いは看取できなかった。潜在的には消費・住居空間と作業空間の分離が推定できるが、それがブロックとして顕在化することはほとんどない。世帯ユニットの構成を模式的に述べるならば、第Ⅱ期では複合し合う二つずつのブロックの組合せとして認識される単位的世帯ユニットの集合であったが、第Ⅲ期では個々のブロックとして認識される単位的世帯ユニットの集合であった。このためユニット内の機能空間の配置、引いては集落景観そのものも不明瞭となった。そのような中において、土坑の配置が集落東縁の高所に偏る点の特筆される。ユニット構成要素が最も豊かな第7ユニットのみが土坑を持たない点を考慮すると、土坑の持つ集落レベルでの公共性と高所という立地に対する強い規制が働いている可能性が考えられよう。この点は第Ⅱ期の土坑配置とも通じる特性と言えよう。第6・7ユニットの住居の配置は、作業空間の北側に位置している。火処は各ブロックに存在したと考えられるが、その一部は住居に隣接していたようである。調理空間は住居推定域を除く各ブロックに礫群の存在とともに推定し得るが、礫石は必ずしも全てに伴ってはいない。ブロックの配置からは、住居の前面に当る南側に配さ

れたようである。第5ユニットの構造が不明瞭ではあるが、第6・7ユニットの住居・調理空間・作業空間の配置から、南あるいは南西に開いた集落景観が想定されよう。

(山下, 保坂, 島立)

第Ⅶ章 ナイフ形石器文化（K3）

—第3層—

第1節 遺 構

1. 礫 群

1) 礫群の区分

ここでいう礫群とは、焼け礫を中心とした礫の群集をいう。群集とは感覚的な言葉であるが、非常に散漫でも他の場所と較べて焼け礫が多く集まっているように見える部分はなるべく礫群として区分した。本層には25基ある(第240図～第248図、別添第25図)。

ところで、第3層中には非焼け礫を中心とした礫の群集がある。一つは2F19区北東部にある非焼け礫7個、焼け礫1個からなる礫ブロックである(第248図下段)。もう一つは、3H12区にある非焼け礫65個、焼け礫3個からなる非焼け礫群である(第248図中段)。これらは、配石とも異なり1kg未満の小礫で構成される。礫の焼けは使用痕に準じて考えるべきであり、非焼け礫によって構成される群集は火熱にさらされないような環境で使用されたり、火を用いるような作業には使われなかったりしたものの可能性がある。礫群とは用途を異にする可能性がある。そこで前者を礫ブロック、後者を非焼け礫群とし、礫群とは区別した。その経緯や特徴については別項(10)非焼け礫群と礫ブロックの特徴]で詳述する。なお、R20は欠番である。また、本層の礫総数は5,530点である。

2) 礫群構成礫の平面分布・垂直分布および規模

礫群は、焼け礫を中心とした礫の群集であるが、礫群内の礫の分布のしかたはさまざまである。礫の分布のしかたは以下の三つに分類できる。

密集型—礫が密集していて輪郭が明瞭で、周辺に礫が分布しないもの。

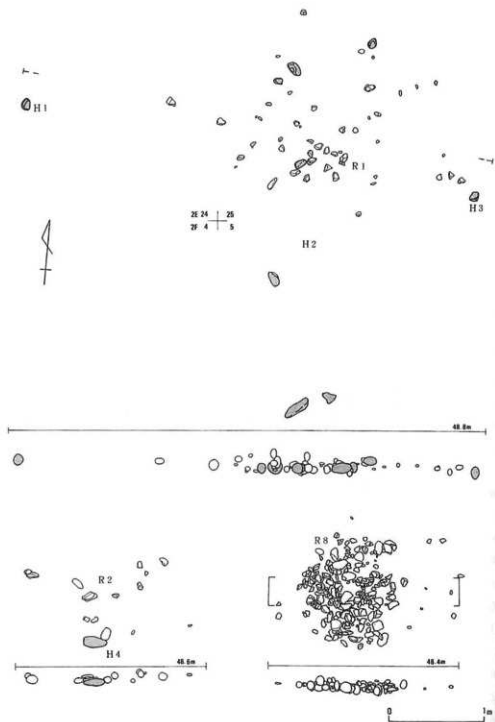
集中型—礫の集中する部分があり、さらにその周辺に散漫に礫の分布する部分があるもの。

分散型—礫の集中する部分が指摘できず、礫が分散して分布しているもの。

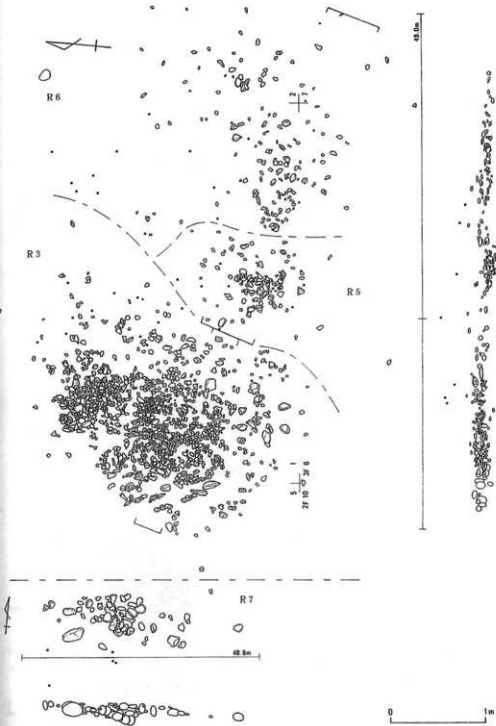
なお、K2文化に見られた配列型は認められない。

上記の分布型にあたる礫群は、密集型がR4・8・22の3基、集中型がR1・3・5・7・11・12・18・19・23・26の11基、分散型がR2・9・10・13・17・21・24・25の11基である。集中型、分散型が多くほぼ同数である。また、密集型は少ない。

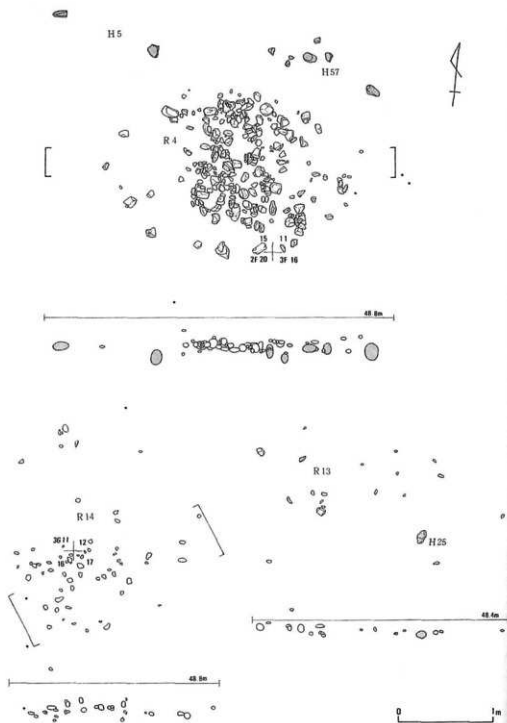
このように三つに分類したものの、それぞれ近似したものもある。R3・7のように集中型ながら密集型に近いもの。R26のように集中部の輪郭が非常に明瞭なものもある。また、R1のように集中型ながら分散型に近いもの。R14・17のように分散型ながら集中型に近いものがある。



第240図 中央区第3層ナイフ形石器群(K3)に伴う礫群(R1・2・8),
配石(H1~4)



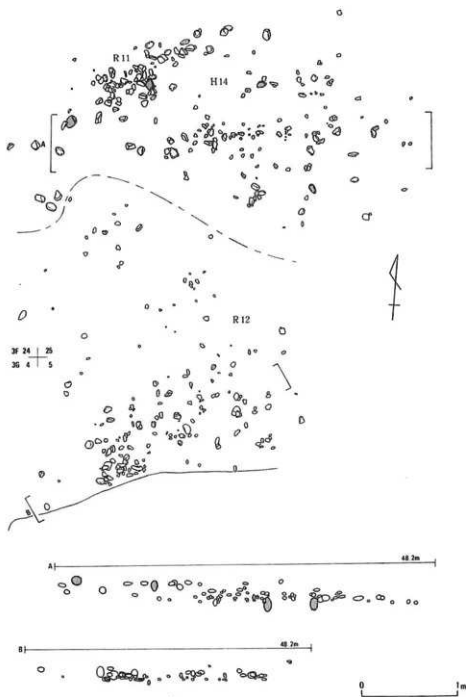
第241圖 K3に伴う機群(R3・5・6・7)



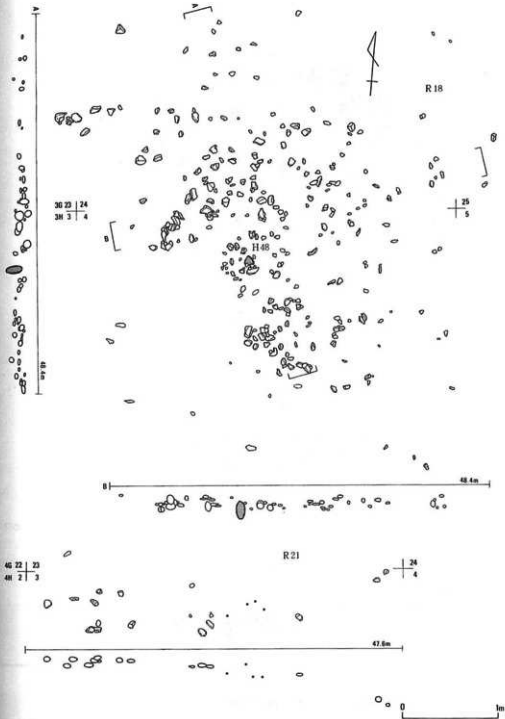
第242圖 K3に伴う礎群(R4・13・14), 配石(H5・25・57)



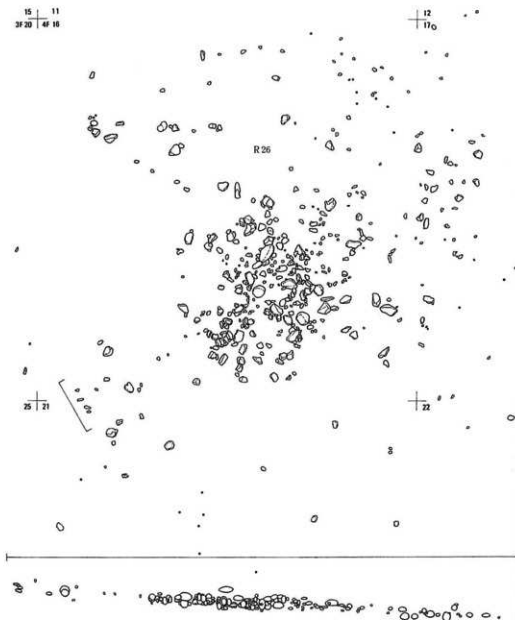
第243図 K3に伴う礫群(R9・10・16), 配石(H8~11・31)



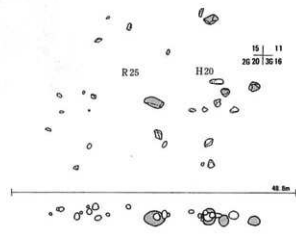
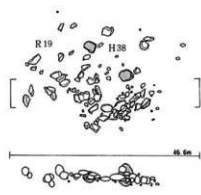
第244図 K3に伴う機群(R11・12), 配石(H14)



第245図 K3に伴う群(R18・21), 配石(H48)

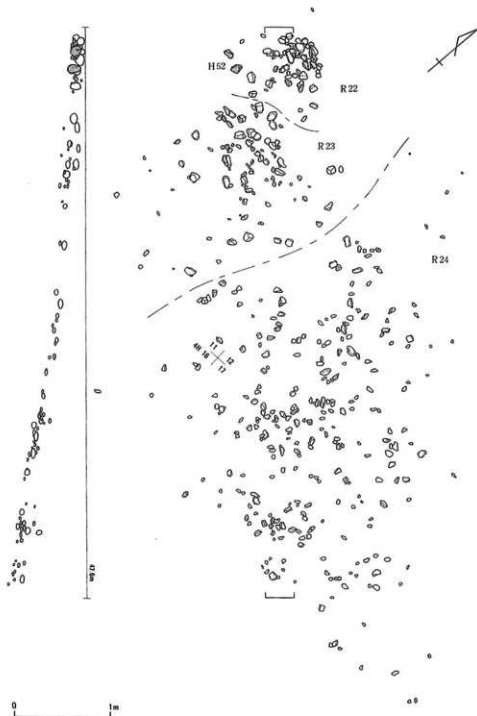


第246図 K3に伴う雑群(R19・25・26),

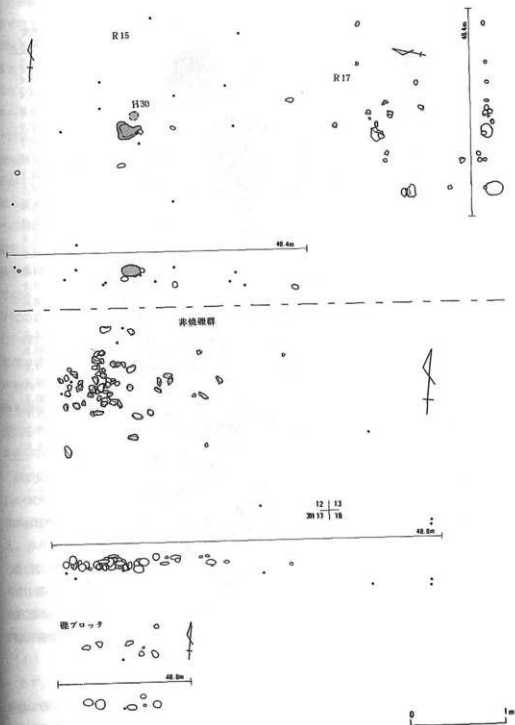


配石 (H20・38)





第247図 K3に伴う機群(R22・23・24), 配石(H52)



第248図 K3に伴う礫群(R15・17)、配石(H30)、非焼燬群、石ブロック

次に密度を見てみよう(第56表)。最も高密度な礫群はR3で1㎡あたり163.4個である。最も低いものはR15で3.2個である。10個の区間で集計してみると、0～9個が7基28%、10～19個が7基28%、20～29個が3基12%、30～39個1基4%、40～49個2基8%、50～59個2基8%、80～89個2基8%、160～169個1基4%である。56%が20個未満であるが、K2文化は20個未満のものが85%を占めるので、K3文化には高密度のものが多くと言える。

次に面積を見てみよう(第56表)。最も広いものがR26で32.92㎡、最も狭いものがR22の0.98㎡である。5㎡の区間で集計してみると、0～4.99㎡が14基56%、5～9.99㎡が7基28%、10～14.99㎡が2基8%、20～24.99㎡が1基4%、30～34.99㎡が1基4%である。10㎡未満のものが84%を占めるが、K2文化の場合も77%ではば同じである。

さて、垂直分布であるが、いずれの礫群でも礫はあるレベルに集中しているように見える。礫の垂直分布は当時の生活面の様子を示しているものと思われるが、地形がやや傾斜していたこと、大きな凹凸がなかったことが窺える。発掘時の所見でも掘り込みを伴うような礫群はなかった。

礫群の規模を示すものとして礫数を見てみたい(第56表)。最も多いものはR3の1,217個で、最も少ないものがR2の16個である。R3は本道跡で最も大規模な礫群である。50個の区間で集計してみると、0～49個が8基32%、50～99個が6基24%、100～299個の四つの区間はそれぞれ2基8%ずつ、他に309個、509個、1,217個の礫群がある。K2文化の場合50個未満が50%を占めるので、規模の大きい礫群がK3文化には多いと言える。

3) 礫の分類

礫は焼けと割れの二つの要素により、5種類に分類できる。非赤化完形礫—焼けていない完形礫、非赤化破損礫—焼けていない割れ礫、赤化完形礫—焼けた完形礫、全面赤化破損礫—割れ面、自然面ともに焼けた割れ礫、割れ面非赤化礫—割れ面の一部あるいは全てが焼けていない割れ礫の5種類である。それぞれの内訳は第57表の通りである。

第56表 第3層ナイフ形石器文化の礫群観察表

礫群番号	礫数	総重量(g)	平均重量(g)	面積(㎡)	密度(個/㎡)
R1	51	13,200	259	5.52	9.2
R2	16	3,771	236	1.54	10.4
R3	1,219	78,744	65	7.46	163.4
R4	282	80,531	286	4.80	58.8
R5	141	6,421	45	1.70	82.9
R6	187	9,955	53	12.48	16.2
R7	65	22,090	340	1.38	47.1
R8	212	60,133	284	2.38	89.1
R9	45	6,228	138	6.32	7.1
R10	44	3,046	69	2.78	15.8
R11	218	23,053	106	8.30	26.3
R12	183	11,450	63	7.68	23.8
R13	19	1,659	87	4.16	4.6
R14	66	3,779	57	4.20	15.7
R15	17	1,232	72	5.28	3.2
R16	67	4,707	70	3.60	18.6
R17	19	4,124	217	2.08	9.1
R18	305	33,753	111	20.42	14.9
R19	121	18,992	157	2.44	49.6
R21	24	2,618	109	5.44	4.4
R22	58	13,102	226	0.98	59.2
R23	92	14,566	158	3.04	30.3
R24	284	15,616	55	12.00	23.7
R25	23	3,848	167	3.20	7.2
R26	509	99,095	195	32.92	15.5

各礫群には非焼け礫が

第57表 第3層ナイフ形石器文化の礫群構成礫分類構成表

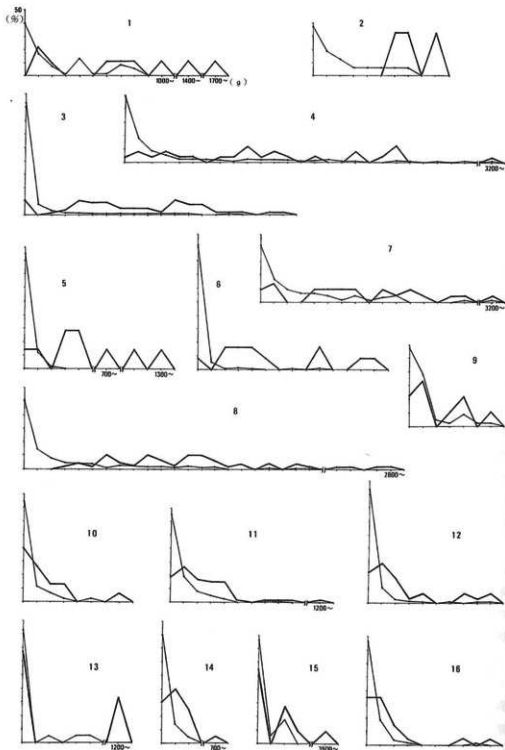
必ず含まれている。R15が最も多く42%、R22が最も少なく4%である。10%の区間で見てみると0~9%が6基24%、10~19%が13基52%、20~29%が1基4%、30~39%が4基16%、40~49%が1基4%である。非焼けの観察の確実な砂岩・泥岩だけで見てみると、最も多いのがやはりR15で42%、最も少ないのがR22の2%である。全くない礫群はない。また、非焼け礫はかなりのものが割れている。砂岩の場合も同様である。割れの要因を考える場合、十分考慮しなければならない。

礫群 番号	非赤化完形礫		非赤化破損礫		赤化完形礫		全面赤化破損礫		割れ面非赤化礫	
	個数	%	個数	%	個数	%	個数	%	個数	%
R1	7	14	11	22	0	0	3	6	30	58
R2	1	6	2	13	0	0	1	6	12	75
R3	7	1	134	11	5	1	53	4	1,020	83
R4	3	1	18	6	7	2	8	3	246	88
R5	3	2	14	10	0	0	4	3	120	85
R6	4	2	15	8	0	0	8	4	160	86
R7	5	8	5	8	6	9	3	5	46	70
R8	3	1	21	10	10	5	3	1	175	83
R9	0	0	3	7	2	4	3	7	37	82
R10	2	5	4	9	4	9	0	0	34	77
R11	12	6	16	7	21	10	10	5	159	72
R12	9	5	19	10	7	4	1	1	147	80
R13	0	0	6	32	1	5	0	0	12	63
R14	1	2	9	14	7	11	1	2	48	71
R15	3	18	4	24	3	18	1	6	6	34
R16	2	3	3	6	7	10	2	3	53	78
R17	0	0	1	5	0	0	0	0	18	95
R18	4	1	17	6	2	1	1	1	281	91
R19	17	14	18	15	21	17	1	1	64	53
R21	3	13	0	0	6	25	0	0	15	62
R22	1	2	1	2	2	3	0	0	54	93
R23	2	2	9	10	3	3	1	1	77	84
R24	7	3	26	9	2	1	0	0	249	87
R25	5	22	4	17	3	13	0	0	11	48
R26	23	5	56	11	18	4	8	2	404	78

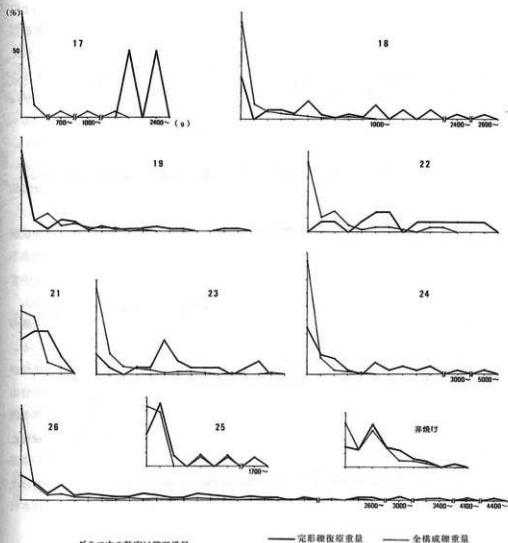
礫の中で最も多いのが割れ面非赤化礫である。最も多いのがR17の95%、最も少ないのがR15の34%である。大半は7割から8割の占有率である。一方、全面赤化破損礫や赤化完形礫は非常に少ない。全面赤化破損礫はいずれの礫群でも1割未満で、全く保有しない礫群も7基ある。赤化完形礫の場合、最も多いのがR21の25%で、10%台も5基あるが大半は1割未満である。全く保有しないものも5基ある。たいていは全面赤化破損礫より赤化完形礫の方が多くあるが、R3は例外的で赤化破損礫がかなり多くなっている。赤化完形礫は全体で137個、全面赤化破損礫は112個である。R3を除くと、前者が132個、後者が59個である。K3文化の礫群構成礫4,255個中、両者とも3%にすぎない。

4) 礫の重量

まず、各礫群の重量構成を見てみよう(第249・250図)。K3文化の礫群はいずれも100g未満の礫が最も多い。そして若干の凹凸があるものもあるが、重いものほど少なくなっている。K2文化や尖頭器文化に見られた100g未満以外の重量が最も多くあるものは、K3文化にはない。100g未満の礫の占有率は、最高がR6の92%、最低がR2の38%である。80~89%が6基と最も多いが、40~49%と70~79%が5基と次いで多く、60~69%も4基と多い。上限重量を



第240図 第3層ナイフ形石器文化の礫群の構成重量分布グラフ(1)



グラフ中の数字は礫群番号

—— 完形礫復原重量 - - - 全構成礫重量

第250図 第3層ナイフ形石器文化の礫群の構成礫重量分布グラフ(2)

見ると、最高がR26の4,100g、最低がR15の245gである。1,000g以上の礫を保有する礫群が8基もある。R3が8個で上限1,500g、R4が25個で上限3,200g、R7が5個で上限3,500g、R8が18個で上限2,100g、R17が2個で上限2,100g、R22が2個で上限1,060g、R23が2個で上限1,370g、R26が27個で上限4,100gである。これらはほとんど焼け礫である。非焼け礫はR3が1個、R4が3個、R7が2個、R8が5個、R26が7個である。1kg以上の構成礫89個中20%である。配石構成礫115個中、焼け礫は23個20%なのでちょうど逆転している。また、礫群内にある1kg以上の礫は他の構成礫と混然一体となっている。

この他の礫群の上限重量は、100～399gが4基、400～699gが5基、700～999gが8基と重いものほど多い。

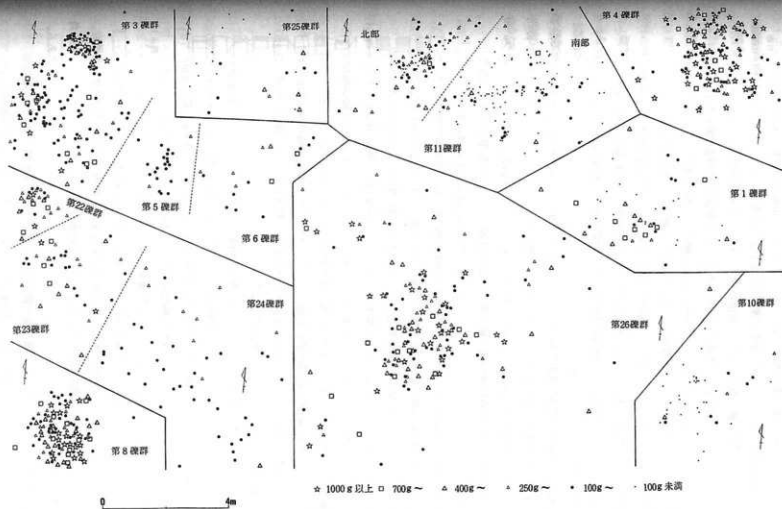
次に非焼け礫と焼け礫の重量の違いを見てみよう。100g以上の重量で対比する。100g以上の礫は1,040個あるが、このうち非焼け礫は122個12%を占める。そこで、100gの区間の階級ごとに、その区間の礫の総数に対して非焼け礫がどれくらいあるかを検討し、全体の割合と対比してみよう。100～199gでは非焼け礫が47個あり、この階級の総数496個に対し9%である。200～299gでは20個10%である。300～399gで13個12%、400～499gで15個18%、500～599gで5個11%、600～699gで5個16%、700～799gで7個32%、800～899gで2個7%、900～999gで8個33%である。全体で見た場合の割合12%に対し、700g台や900g台は30%強と多い。しかし、おおむね全体で見た場合と大差がない。ある重量のものは故意に焼かれなかったという状況はないようである。1,000g以上の場合も、非焼け礫の占有率は20%であり、1000g未満の場合と大差がないとした。

次に、重量別の礫分布状況を検討したい。全体の7割にあたる18基は、全体の礫の分布状況と同様に各重量別の礫も分布していた。これらを均等型とする。しかし、全体の3割に当たる7基は、ある重量のものが偏って分布している。これらには、100g以上の礫がある部分に集中する偏在型と、非常に重い礫が他の礫の集まりから分離している分離型とがある(第251図)。偏在型にはR1・11・26がある。R1では、礫の集中部に400g以上の礫が集中し、400g未満の礫は礫群全体に分布する。R11では、250g以上の礫が北西部の礫の集中部に集中分布している。ただし、接合関係が礫の集中部と散漫分布部分とで分離しており、それぞれ別礫群の可能性がある。そうした場合、両者は均等型となる。R26では、礫の集中部に400g以上の礫が集中分布する。分離型にはR3・8・10・25がある。R3では、400g以上の礫が分離し、400g未満の礫で構成される礫の集中部を取り囲むようにしてある。R8では、700g以上の礫が礫群北縁部と南縁部とに分離し、中央部には700g未満の礫が集中分布する。R10では、100g以上の礫が東部に分離し、500g台の礫が礫群縁部に位置している。R25では、100g未満の礫が西側に400g以上の礫が東側に分離している。なお、R22・23・24は接合関係から二つの礫群に分離・統合される可能性があるが、そうすると偏在型となる。

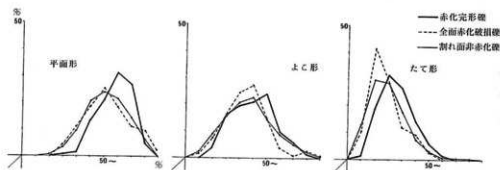
次に完形礫復原重量を見てみよう(第328・329図)。分布型を見ると、全構成礫のように100g未満の重量が極度に多いという傾向はない。R10・13・15・16・18・19・24・26で100g未満の重量が最も多いが、最も多くてもR15・19の55%である。また、100g未満に分布が見られないものもある。そして、ある重量に極度に集中してあるという状況は少なく、全体に分散している。また、分布幅が非常に広い。上限重量を見てみるとR21の300g台から、R23・24の5,000g台まで様々である。上限重量が1,000gを越えるものは18基あり、全体の72%にあたる。K2文化の礫群の中には比較的多かった上限重量500g未満の礫群はR21だけである。完形礫の選択規準がまちまちで礫群相互にかなり違っている可能性がある。

5) 礫の形

礫の平面型、よこ形、たて形を礫群構成礫全体を対象に、赤化完形礫、全面赤化破損礫、割れ面非赤化礫別に集計した(第252図)。それぞれの形についてはK2文化の礫群の項を参照さ



第251図 第3層ナイフ形石器文化の礫群の重量別礫分布図 第3・4・5・6・8・22・23・24・26礫群は100g未満を省略

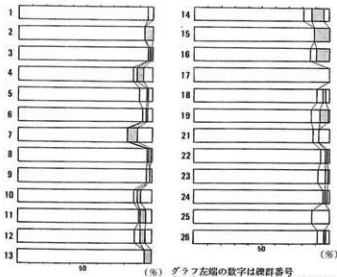


第252図 第3層ナイフ形石器文化の全群構成礫形分布グラフ

れたい。平面形では、赤化完形礫のピークが60～69%にあるのに対し、他は50～59%にある。よこ形では、赤化完形礫のピークが50～59%にあるのに対し、他は40～49%にある。たて形では、赤化完形礫のピークが20～29%にあるのに対し、他は10～19%にある。三つの形で、赤化完形礫と他の二者とで10%の違いがある。これはおそらく完形礫と破損礫の違いであろう。完形礫が割れるとより細長く扁平になるものと考えられる。

6) 礫の石質

次に礫群の石質構成を見
てみよう(第253図)。砂
岩が圧倒的に多い。最も多
いのがR17で100%, 最も
低いのがR14で80%である。
9割以上のものが16基64%
を占める。次いでチャート
と花崗岩が多い。チャート
は最も多いのがR25で13%,
全く含まないものはR7・
13・15・17の4基である。
5%未満のものが15基と大
半を占める。花崗岩は最も
多いのがR15で12%, 全く
含まないものはR1・9・



第253図 第3層ナイフ形石器文化の礫群の石質組成グラフ

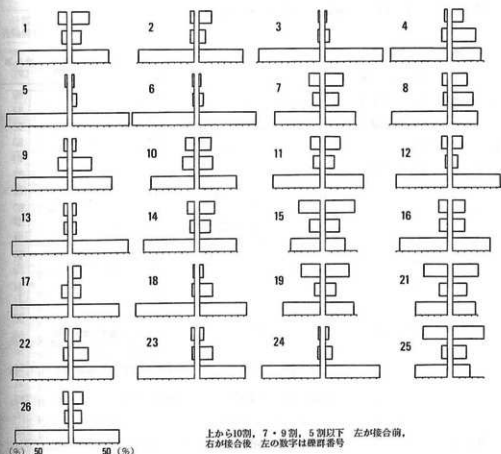
17・21・25の5基である。5%未満のものが14基ある。その他の石質には泥岩、凝灰角礫岩、礫岩、石英、片岩などがある。泥岩はR4～7・10・11・14・19・21・24・26にある。凝灰角礫岩はR3・4・8・11・18・21～24にある。礫岩はR4にある。石英はR7・9・26にある。片岩はR8・12・26にある。また、石質不明の礫がR3～7・10～12に認められた。

7) 礫の完形度

次に礫の完形度を見てみよう(第254図)。

接合前の場合、いずれも5割以下が最も多い。大きいものほど少ないものは8基、7・9割と10割の比率が同じもの2基、10割の比率が2番目に多いもの15基である。5割以下の占有率は、最も多いのがR5の98%、最も少ないのがR15の47%である。80%台が9基で最も多く、次いで90%が7基あり、両者が大半を占める。7・9割の占有率は、最も多いのがR10・15の18%、最も少ないのがR5の0%である。10%未満に18基、10%台に7基ある。10割の占有率は、最も多いのがR25で39%、最も少ないのがR17で0%である。10%未満に15基、10%台に6基あるが、30%台にも4基ある。

接合後の場合、10割の占有率が最も多いものが3基ある。いずれも5割以下が2番目に多い。他は接合前と同じで、大きいものほど少ないもの12基、9割と10割の占有率が同じもの3基、10割の占有率が2番目に多いもの7基である。接合前と較べ10割の占有率が2番目に多いものが少ない。5割以下の占有率は、最も多いものがR3・6の91%、最も少ないものがR25の28



第254図 第3層ナイフ形石器文化の礫群構成礫完形度グラフ

％である。70％台が6基と最も多いが、60％台、40％台が4基、50％台、80％台が3基と全体に分散している。7・9割の占有率は、最も多いものがR4の38％、最も少ないものがR13の6％である。20％台が9基、10％台が8基と大半がこの占有率の中に入る。10割の占有率は、最も多いものがR25の50％、最も少ないものがR6の3％である。10％未満が8基、20％台が7基、10％台が6基である。接合後、10割の礫の実数が増えたものは17基ある。しかし、全ての構成礫が10割に復旧した礫群は皆無である。

8) 礫の接合関係

まず、礫群内の接合関係を検討したい。各礫群の接合率を見てもよう(第58表)。接合率は、割れ礫に対する接合礫(接合個体を構成する個々の礫)の割合である。各礫群の接合礫には、外部の礫と接合したものも加えたが、この場合礫群内のもののみ数に入れた。最も接合率の高いものはR4の83％である。最も低いものはR21の27％である。50％台が6基、60％台が5基、40％、30％台が4基とかなり分散している。K2文化の場合、5割以上の接合率のものは16％ほどであったが、K3文化の場合、16基64％もある。

次に、接合礫の分布状況を見てもよう。接合礫の分布は、礫全体の分布とはほぼ同じである。平面分布類型別に見てみると、密集型では全体にまんべんなく分布し、各接合個体は混然一体となっている。重量別礫分布が分離型であったR8においても同様で、重い礫が分離している部分と他の部分との接合関係は密である。集中型については、礫集中部に接合関係が収束するように見える。分散型の場合、全体に接合個体の数が少ないため特徴が捉みづらいが、R16など全体に分散している。

ところで、重量別礫分布が分離型のものでR3・8・10は重い礫の分離部分とその他の部分とは接合関係が見られるが、R25では分離部分の重い礫の接合関係がない。また、R19は分離型とはしなかったものの4個ある700g以上の礫が全て礫の分散分布する部分にある。これらのうち3個が接合礫であるが、いずれも礫の集中部とは関係を持っていない。また、礫の集中部では短距離接合が多く孤立的であり、接合関係が北部の礫の分散分布部分と集中部とで分離しているように見える。また、偏在型のR26では北部にある1kg以上の礫5個のうち3個が接合礫であるが、いずれも礫の主な分布部分から孤立している。これらの状況は、重い礫が他の礫と別の扱いを受けた可能性を示しているのかもしれない。

また、一つの礫群としたが、接合関係から二つに分かれる

第58表 第3層ナイフ形石器文化の礫群構成接合関係表

礫群番号	接合個体数	接合礫数	接合率(%)
R1	12	35	80
R2	5	11	73
R3	142	617	51
R4	47	218	83
R5	37	89	64
R6	30	67	37
R7	13	35	65
R8	31	160	80
R9	10	23	53
R10	6	13	34
R11	40	86	46
R12	35	98	59
R13	4	8	44
R14	13	24	41
R15	1	5	36
R16	12	29	50
R17	4	11	58
R18	45	183	61
R19	16	34	41
R21	2	4	27
R22	13	33	60
R23	24	54	62
R24	36	86	31
R25	4	11	73
R26	69	235	50

礫群がある。R11で、北半部と南半部とに分かれる。北半部は南半部に較べ重い礫が多く、密度が高い。また後に述べるが、南半部のみR26と接合関係を持つ。両者は別々の礫群と考えるべきであろう。

次に各接合個体を2個ずつの接合関係に分解し、接合距離と角度について見てみよう。まず接合距離であるが、20cmの区間で礫群別に集計した(第59表)。平面分布類型の密集型、集中型、分散型の順に示した。密集型の場合、20cm未満のものが非常に多く、距離の長いものほど少ない。同様な傾向は、密集型に近いR3でも見られる。集中型では20cm以上の階級に最も多い区間があるものが多い。さらに、その階級に極度に集中するのではなく、全体に分散している。分散型も集中型と同様な傾向である。こうした在り方は、接合距離が礫の平面分布の在り方と関連することを窺わせる。また、20cm未満の関係の在り方に注目すべきである。非常に短い接合関係は自然に割れたものと思われがちであるが密集型では多く、その他では少ない様子からすれば、一概に自然のものと思断することはできない。密集型の礫群に、こうした関係を多

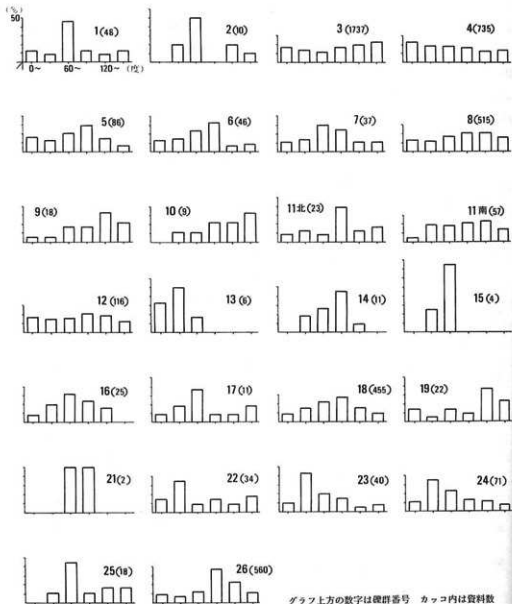
第59表 第3層ナイフ形石器文化の礫群内礫接合距離表

分類	礫群 番号	接合距離 (cm)															
		0	20	40	60	80	100	120	140	160	180	200	220	240	260	280	300 ~
密集型	R 4	267	158	131	62	30	36	15	15			2					
	R 8	237	121	74	42	23	13	4	3								
	R22	26	4					3	1								
集中型	R 3	535	323	264	158	136	110	78	58	40	28	6	1			1	
	R26	61	69	67	78	48	43	36	23	20	26	22	9	3	9	6	※
	R18	48	55	76	62	58	50	39	21	14	10	5	11	2	2	1	320~1
	R 5	45	15	16	6	2	4	2									
	R12	28	32	11	16	11	6	6	1	1	2			1	1		
	R 6	11	9	6	2	11	5	2									
	R23	11	3	2	4	4	2	4	3	1		2					300~1, 320~1, 460~1
	R11南	6	5	12	15	5	6	4	2								
	R11北	7	8	2	1	5										1	
	R19	15	2	4	2												
	R 7	10	16	11													
R 1	4	6	7	6	5	5	6	6	1		1					1	
分散型	R24	3	8	7	14	5	11	8	2	3	3	2	2	1			300~2,
	R14	3	3	3	2												
	R16	10	7	3	4	1											
	R 9	2	2	4	3	3	1	1									
	R10	4	2	2													
	R 2	3	1	1	5												
	R25	1	1	4	1	3	2	2	2	1	1						
	R17	2	7	1	1												
	R13	2	1	1	1	1											
	R21		1						1								
R15	1		3		2												

※ 300~5, 320~5, 340~4, 360~4, 380~2, 400~1, 420~1, 460~1, 620~1, 760~1, 940~1, 1,100~1。

く出現せしめる要因が加わっていることを考えるべきである。

次に角度であるが、各礫群ごとに30°の区間で集計した(第255図、角度の計測法についてはK2文化の礫群の項参照)。いずれの礫群でも比較的高率の階級がある。最も低いものはR12の90~119°の21%、最も高いものはR15の60~89°の75%である。R15は資料数が4個と少ない。20個以上の資料数のもので見ると、R1の60~89°の46%が最も高い。他はほとんど20~30%台である。他の階級を見てみると、R3・4・7・8・12はいずれも10%台で最も高



第255図 第3層ナイフ形石器文化の礫群内接合角度グラフ

い階級が20%台である。他の礫群では、10%未満の階級があり、最も高い階級も30%台以上である。後者は接合関係に指向性があると考えられる。指向性のないものは密集型か、かなり高密度の礫群である。なお、R18は指向性のないものに加えるべきであろう。つまり、密集型の礫群は接合関係に指向性がなく(R22は例外である)短距離接合が特に多いが、集中型や分散型の大半は接合関係に指向性があり長距離接合が多い。特に集中型は、礫集中部に接合関係が収束する。

次に礫群間接合について見てみよう(別添第26図)。R2とR7とで1個体、R11とR18とで1個体である。前者は約17m、後者は約23mとかなり離れた礫群同志の接合である。他はみな隣接する礫群同志の接合である。R17とR18とで1個体あるが、R17の南縁部との接合であり、R18の礫がR17の内縁部にまで達しているとも見ることができる。R3・5・6は相互に接合関係が密である。R3とR5とで17個体、R3とR6とで7個体、R5とR6とで7個体、R3・5・6の三者にまたがる接合個体も1個体ある。R11とR26とで5個体ある。注目すべきは、R11の中で、R18と接合関係がある個体はR11北部¹⁾あり、R26と接合関係がある個体は全てR11南部にあることである。R22・23・24も相互に接合関係が密である。R22とR23とで2個体、R22とR24とで1個体、R23とR24とで12個体、R22・23・24の三者にまたがる接合個体が2個体ある。R3・5・6やR22・23・24のように密な関係を持つものはK2文化や尖頭器文化には存在しない。そこで、もう少し詳しくこの関係を見てみよう。

R3・5・6の関係から見てみよう。接合個体数について個々に見ると、R3は内部で完結する接合個体が117個体、R5と関係を持つもの18個体、R6と関係を持つもの8個体である。同様にR5は内部で12個体、R3と18個体、R6と8個体である。R6は内部で15個体、R3とR5とそれぞれ8個体である。R3にしてみれば、R5・6との関係より内部で完結するものの方が圧倒的に多い。少ないながらもR5との結び付きが強い。R5にしてみると、内部よりもR3との結び付きの方が強い。R6との結び付きも、内部のものと比べればかなり強いと言える。R6の場合、内部の方が他との関係より強いが、やはりかなり内部の数に近い。R3とR5とは同等な強さの結び付きである。

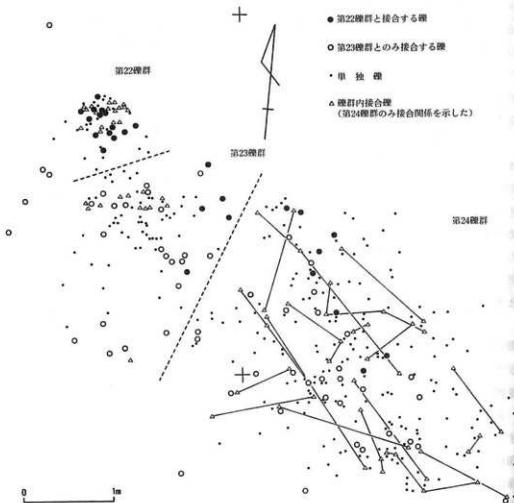
つぎに接合礫の数について見てみよう。R3・5・6のそれぞれと関係する接合個体の接合礫の数の総計を見てみる。R3とR5の場合、R3側に95個、R5側に36個である。R3とR6の場合、R3側に35個、R6側に9個である。R5とR6の場合、R5側に19個、R6側に9個である。R3とR5、R6のいずれの関係でも、圧倒的にR3側に多くの接合礫がある。

R22・23・24について見てみよう。接合個体数について個々に見ると、R22では内部で完結するもの8個体、R23と関係するもの4個体、R24と関係するもの3個体である。R23では内部が8個体、R22とは4個体、R24とは14個体である。R24では内部が21個体、R22とは3個体、R23とは14個体である。R22・24は内部で完結するものが多い。R23はR24と関係を持つものが内部よりかなり多い。R24はR23との結び付きがR22より強い。R22はR23・24とはほぼ同等の強さの結び付きである。

接合礫数を見ると、R22・23ではR22内に11個、R23内に4個である。R22・24ではR22内に9個、R24内に8個である。R23・24ではR23内に23個、R24内に30個である。R22とR23との関係では、接合礫が圧倒的にR22側に多いが、他の関係ではほぼ同程度ずつである。

ところで、R22・23・24の接合個体の分布状況を見てみると(第256図)、R22と関係する個体は、R23・24の北部にのみ分布しているのがわかる。R23ではその北部はR22と関係する礫のみがあり、完全に二分する。R24では、R22関係の礫が北部に帯状に分布している。また、この部分の接合個体は、南部とあまり関係を持たず、R23と関係する個体もあまり分布せず独立しているように見える。R24もR22と関係する北部とR23と関係する南部とに分離できるかもしれない。

次に対配石の接合関係であるが、R1とH3、R14とH29、R15とH30、R19とH38、R25とH20との間で1個体ずつ見られる。いずれも近接するもの同志の接合である。



第256図 第3層ナイフ形石器文化の第22・23・24礫群の接合礫分布図

群外との接合関係では、R3が4個体(以下個体略)、R4が5、R6が2、R5が2、R9が1、R10が1、R11が5、R12が3、R19が2、R26が1である。このうちR9の個体は約8mの長距離接合である。他は全て隣接するグリッドとの接合関係である。

次に接合面の焼けについて見てみよう。まず非焼け礫同志の接合であるが、R2・7間の接合の1個体、R3に10、R4に2、R5に1、R8に2、R11に1、R12に2、R13に1、R14に1、R15に1、R18に2、R19に1、R26に5である。このうち非焼けの観察が明確な砂岩は、R3に8、R4に1、R8に1、R12に1、R13に1、R14に1、R15に1、R18に1、R19に1、R26に4である。砂岩のものに限って最大接合距離を見ると、R3が3・4・21・26・38・56・58・110cm、R4が外部の礫との接合で398cm、最も近いものは195cm、R8が45cm、R12が140cm、R13が90cm、R14が152cm、R15が84cm、R18が54cm、R19が外部の礫との接合で198cm内部では58cm、R26が26・28・74・210cmである。R3に短いものが多いが、全体的に見て焼け礫と同様に動いているものと見てよいであろう。

焼け礫同志の接合では、非焼け礫の割れ面同志の接合、非焼けと焼けの割れ面の接合、焼けの割れ面同志の接合の三者がある。非焼けと焼けの割れ面の接合を含む個体は、R1が2個体、R3が6個体、R5が3個体、R6が1個体、R7が1個体、R8が1個体、R11が2個体、R26が1個体である。この中には礫群間接合も含まれている。R3・5間が2個体、R3・5・6間が1個体、R11・26間が1個体である。詳しく見てみよう。R3・5間の1個体は、R3に全面赤化破損礫1個があり、それにR3内の割れ面非赤化礫4個とR5の割れ面非赤化礫3個が接合している。もう1個体は、R3の8個とR5の2個の礫が非焼けの割れ面同志の接合関係にあり、その一部にある焼けた割れ面とR5内の残りの1個の非焼け割れ面が接合している。R3・5・6の関係では、R3とR6に1個ずつ全面赤化破損礫があり、それにR5の割れ面非赤化礫4個とR3の割れ面非赤化礫1個の非焼け割れ面が接合している。R11・26間では、R11の全面赤化破損礫1個に、R26の割れ面非赤化礫4個の非焼け割れ面が接合している。

焼けた割れ面同志の接合は、R1に1個体、R3に4個体、R4に1個体、R6に2個体ある。このうち礫群間接合の個体は、R3・6間の1個体である。

以上の他は全て非焼けの割れ面同志の接合で、圧倒的にこれが多い。上述した非焼けの割れ面同志以外の接合関係の個体も、この圧倒的な多さからすれば、アクシデンタルなものも可能性が強いと思われる。R3・5・6の接合個体の中で、焼けた割れ面と非焼け割れ面の接合関係の個体の占める割合が比較的高いように思われるが、それでも三者に関係する32個体のうち3個体9%にすぎない。

9) 礫の付着物

光沢がなくうっすらと付着したスス状付着物と、やや光沢があり非常に明確なタール状付着物とがある。スス状付着物は、R3に3個、R4に19個、R7に2個、R8に2個、R9に1個、R11に4個、R18に1個、R19に1個、R23に1個見られる。タール状付着物は、R1に1個、R3に7個、R4に4個、R7に6個、R8に7個、R9に1個、R11に8個、R14に

1個, R17に2個, R18に4個, R21に1個, R25に1個, R26に5個である。

10) 礫群相互, 配石およびブロックとの位置関係

中央区全体を俯瞰してみると, 礫群がいくつか近接して群を形成しているように見える部分がある(別添第25図)。R3・5・6・7・8を第一礫群群, R10・11・12・13・26を第二礫群群, R14・16・25を第三礫群群, R15・17・18を第四礫群群, R22・23・24を第五礫群群とする。礫群の周辺をいくつかの配石が取り囲むようにしてある部分がある。R1とH1・2・3, R4とH5・6・7・57, R9とH8・9・10, R19とH36・37・38・39, R25とH20・55・56である。これらのうち, R1・4・9と配石の群は第一礫群群を取り囲むようにしてあり, さらに大きな一つの群を形成しているように見える。R25と配石の群は, 第三礫群群の中にある。以上には全く組みしない礫群がある。R2・21である。

次にブロックとの位置関係を見てみよう。第2ブロックとR3・4・5が部分的に重なるが, 石器の量は少なく主たる分布域とは重ならない。第4・5ブロックとR26が重なる。しかし, 第4ブロックはR26の北縁部以北に, 第5ブロックは南縁部以南にあり, 主たる分布域はずれる。第6ブロックとR11・12とが重なる。しかし, 石器の分布は微妙に礫群からずれており, 両者が隣接しつつも重複分布はしない一つの典型例である。第8ブロックとR14が近接している。石器の非常に高密度な分布部分がR14のすぐ北側にあるが, 両者は重ならない。第9ブロックとR15が重なるが, 石器の分布は西方にずれ数も少ない。第10ブロックとR18と重なるが, 数は非常に少ない。

ブロック群や散漫分布域と礫群との関係を見てみよう。第1ブロック群と第一礫群群およびその周辺の礫群・配石群とが重なっている。R1・2は散漫分布域aと重なっているが, これらも含めて一つの大きな群を構成しているものと考えたい。第IIブロック群と第二礫群群とが重なる。第IIIブロック群および散漫分布域cとが第三礫群群と重なる。第IVブロック群と第四礫群群とが重なる。散漫分布域eとR21が重なる。散漫分布域fと第五礫群群とが重なる。R19と配石との群の周辺には全く石器が分布していない。以上のように, 礫群とブロックとは全く重なることはないが, 近接して位置していることが多い。さらに礫群群とブロック群とはよく対応していることが窺えた。

11) 礫ブロックと非焼け礫群の特徴

K3文化には主に非焼け礫で構成される礫の群集がある。これらを礫群と同様に扱うことはできない。まず, 礫ブロックを見てみよう。構成礫は8個で, 内1gの小礫1個が焼けている。非赤化完形礫4個で183gから292g, 非赤化破損礫3個で3gから110gである。内2個が接合して完形度9割, 200gの礫に復旧した。200g前後の礫を意図的に集めたものと思われる。この礫ブロックは第1ブロックと重なるが, 他の礫群の在り方とは違って石器分布の中心と全く重なっている。石器も含めた道具の製作に関連して集められた礫と考え得る。

非焼け礫群は, 平面分布は礫群と同じである。集中型にあてはめられる。構成礫群68個, 非赤化完形礫36個, 非赤化破損礫29個で, 焼け礫は割れ面非赤化礫3個にすぎない。密度8.9個,

面積7.6㎡である。重量は、100g未満が32%と礫群で最低のR2の38%より低い。上限重量610gで、重量別礫分布は均等型である。石質は、砂岩85%、チャート10%、花崗岩5%、凝灰角礫岩2%である。完形度は、接合前が5割以下24個35%、7・9割8個12%、10割36個53%、接合後が5割以下16個25%、7・9割9個15%、10割37個60%である。5割以下の占有率は礫群の最低R15の47%より低く、10割の占有率は礫群の最高R25の39%より高い。接合後も同様である。接合個体は6個体あり、いずれも2個の接合礫で構成されている。いずれも接合距離は20cm未満の短距離接合である。非焼け礫群は、他の礫群や配石、ブロックとは全く関係を持たず、孤立した存在である。

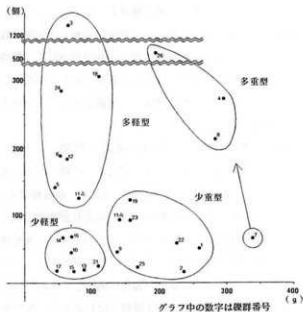
12) まとめ

以上の検討結果をまとめながら礫群の使用用途の問題や集落景観復原の問題に迫りたい。K2文化の礫群同様、使用過程復原をまず目標とし、K2文化と同じ手法で推論を進めたい。

礫群の分類

まず、平均重量と構成礫数の関係を見てみよう(第257図)。グラフの中にはいくつかまとまりがあるが、ここでは第257図のように四つに区分した。R10・13・14・15・16・17・21を少礫数軽重量型(少軽型と略す)とする。R3・5・6・11南・12・18・24を多礫数軽重量型(多軽型)とする。R1・2・9・11北・19・22・23・25を小礫数重重量型(少重型)とする。R4・7・8・26を多礫数重重量型(多重型)とする。R7はグラフ中の位置では少軽型になるが、半分以上を攪乱で失われていると思われるので多重型に加えた。なお、各分類の範囲はK2文化とはやや異なる。K2文化と同様に分類した場合にはR9・11北が少軽型に、R19が多重型となる。

次にそれぞれの類型と他の属性との関わりを見てみよう(第60表)。ここでは9の属性について検討する。平面分布類型では、多重型は密集型か集中型いずれかである。少軽型では三者ともみられる。密集型はこの両者にしかない。多軽型は集中型が圧倒的に多い。少軽型は分散型ばかりである。K2文化と較べると、少軽型に分散型がやや多い点、多重型に集中型が見られる点、少軽型に集中型がない点が違っているが、大局的には近似する。密度の区分は53.4個をその幅とした。3.2個(R15)から56.5個を低、56.6個から109.9



第257図 第3層ナイフ形石器文化の礫群の平均重量-構成礫数関係グラフ

第60表 第3層ナイフ形石器文化の礫群類型と他の属性対照表

分類	礫群番号	平面分布	密度	面積	重量区域	重量別平面分布	完形礫平均重量	10割占有率	5割以下占有率	接合率
多重型	R 4	密集	中	狭	A	均	中	低	高	高
	R 7	密集	低 [○]	狭	A	均	中	中	中	高
	R 8	密集	中	狭	A	分	重	低	高	高
	R 26	密集	低 [○]	広	A	偏	重	低	高	中
少重型	R 1	集分	低	狭 [○]	B	偏	中	中	高	高
	R 2	集分	低 [○]	狭	B	均	中	低	中	高
	R 9	集分	低	狭 [○]	B	均	軽	低	高	中
	R 19	集分	低 [○]	狭	B	均	軽	高	低	低
	R 1比	集分	低 [○]	狭	B	均	軽	高	低	中
	R 22	密集	中	狭	B	均	重	低	高	中
	R 23	集分	低 [○]	狭	B	均	中	低	高	中
	R 25	集分	低	狭	B	分	軽	高	低	高
	多重型	R 3	集分	高	狭 [○]	C	分	中	高	中
R 5		集分	中	狭	C	均	中	低	高	中
R 6		集分	低 [○]	中	C	均	中	低	高	低
R 1南		集分	低 [○]	狭 [○]	C	均	軽	低	高	中
R 12		集分	低 [○]	狭 [○]	C	均	軽	低	高	中
R 18		集分	低 [○]	中	C	均	中	低	高	中
R 24		集分	低 [○]	中	C	均	軽	低	高	低
少軽型	R 10	分	低 [○]	狭	C	分	軽	中	中	低
	R 13	分	低	狭	C	均	軽	低	高	低
	R 14	分	低	狭	C	均	軽	低	中	低
	R 15	分	低 [○]	狭 [○]	C	均	軽	高	低	低
	R 16	分	低 [○]	狭	C	均	軽	中	中	中
	R 17	分	低	狭	C	均	率	低	高	中
	R 21	分	低	狭 [○]	C	均	軽	高	低	低

似する。

次に重量区域の区分であるが、上限重量と100g未満の礫の占有率を用いて第61表のように区分した。多重型と他の礫群とは上限重量で大きく相違する。攪乱でかなりの構成礫を失ったR 7も多重型のA区域に入っている。多重型の礫群は密集するものが多く、中が均質であるので、一部が失われてもR 7のように残った部分だけで全体の特徴が把握できたものと思われる。少重型はそれだけの区域を構成しているが、多軽型・少軽型は混ざりあっている。ただし、多軽型は上限重量が重い方に多く、少軽型は軽い方に多い。R 17は少軽型でありながら上限重量がかなり重い。1,000g以上の礫2個を含むがこれを除くと上限重量182gである。1,000g以上の礫は他の構成礫とかなり接合する。いずれも焼け礫であるが、こうした在り方からすれば、配石の可能性もあり得る。さて、以上のように、平均重量と構成礫数を用いての分類は、礫群構成礫の重量の在り方をよく反映していると言することができる。

重量別礫分布では、四者にそれぞれ1基ずつの分離型が見られる。偏在型は多重型・少重型に1基ずつある。K 2文化では多軽型に偏在型が多く、多重型・少重型にはなかったのなか

個を中、110.0個から163.4個(R 3)を高くした。最高のR 3の密度が格段に高い数値のため、ほとんど低くなってしまった。そこで低のうち10個以上に○印を付し、補助とする。少軽型には高密度のものが少ない。多重型・多軽型は比較的高密度のものが多く、面積は10.65㎡を区分幅とした。0.98㎡(R 22)から11.62㎡を狭、11.63㎡から22.27㎡を中、22.28㎡から32.92㎡(R 26)を広とした。やはりR 26の面積が格段に広いので、狭のうち5㎡以上に○印を付し補助とする。多軽型に比較的面積の広いものが多い。K 2文化と近

第61表 第3層ナイフ形石器文化の礫群重量区域区分表

		A 区 域				C 区 域				
上 限 重 量	2100～		R 4 R 7	R 8	R 26	R 17				
	1800～									
	1500～					R 3				
	1200～		B 区 域			R 23				
	900～				R 22	R 19	R 18	R 12	R 6	
	600～		R 2	R 1 R 11北 R 25	R 9		R 11南 R 16			
	300～			R 21			R 10	R 5 R 13 R 24		
	0～						R 15 R 17	R 14		
	g %	0～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	70～	80～
100g未満の占有率										

り違っている。K3文化は偏在型自体少ない。完形復原重量についてはK2文化のように上限重量については検討せず、平均重量のみ見てみた。区分幅は358gである。180g(R14)から537gを軽、538gから895gを中、896gから1,254g(R8)を重とした。なお、R17は3個体ある資料全てが2,000g以上という特異な礫群である。先述したように礫群の可能性もあり、区分から除外した。多重型は重か中ばかりである。少重型・多軽型は中が目立つ。少軽型は軽ばかりである。K2文化の場合、少重型で重が多く、少軽型にも重や中がいくつかあった点や様相を異にする。

接合前の完形度10割の占有率は、13%を区分とした。0%(R17)から12%を低、13%から25%を中、26%から39%(R25)を高とした。高は少重型・少軽型にしかない。多軽型は低ばかりである。同じく完形度5割以下の占有率は、17%を区分幅とした。47%(R15)から63%を低、64%から80%を中、81%から98%を高とした。低・中は少重型・少軽型で目立つ。10割の占有率と考え合わせると、少重型・少軽型には完形度の大きいものが多い礫群が目立つ。K2文化の場合、多重型もそうした礫群であり、少軽型はそうした礫群が少なかった。接合率は19%を区分幅とした。27%(R27)から45%を低、46%から64%を中、65%から83%(R4)を高とした。高は多重型・少重型にしかなく、両者はかなり接合率が高い。多軽型は中が多く、少軽型は低が多い。K2文化とほぼ同様である。

礫の欠落

礫群の礫は接合の後も完形に復旧しなかったり、接合しないもののがかなりあるなど、遺跡内には存在しない欠落した礫が多量にあるものと思われる。その量によっては、残存する礫群の在り方に大きく影響していることもあり得る。以上のように分類した礫群の意味を考える前に、欠落礫の在り方について検討しておきたい。各礫群の欠落礫推定総重量をK2文化と同様な方法で推定した(第62表)。この重量が各礫群の総重量の何倍あるかについても第62表に示した。この推定は一つの目安にすぎないが、これに従えば、R3のように200kgもの礫が欠落しているものやR15・25のように1kgほどのものもある。残存する礫群の0.3倍(R4・25)から4.1倍(R24)までである。分類別に見ると、多重型・少重型は1.0倍以下のものがほとんどであるが、多軽型は2倍、3倍のものが目立つ。少軽型は1倍から2倍の間のものばかりである。

以上の推定に従えば、遺跡に残存する礫群以上の礫が欠落していて、さらにその欠落礫の量は礫群分類と対応している。残存する礫群は、欠落礫の在り方に大きく影響されていると見るべきである。そこで、各類型ごとに欠落礫の在り方を推定してみよう。

多重型は欠落礫の量が少ない。失われた礫が少ないので接合率も高くなっている。完形度が小さいものが多いが、この型の礫群に限って、接合後5割以下のものがかなり少なくなる。R

26以外は全て40%台で低い順から見ると4位から6位に位置する。10割の占有率は中か低程度であるが、多軽型の在り方とは相違する。後にも述べるが、故意に礫を割るような行為がなされた可能性がある。そうした行為以前は、大きい礫が比較的多かったものと考えたい。そうすると、欠落した礫は完形度の小さい礫が多く、量が少なく、あまり接合しないような一群であるろう。

少重型には接合率が高く、欠落礫が少ないものが多い。しかし、完形度の小さいものが多い礫群が半数もあり、K2文化と相違する。R1・19・11北・25については完形度の大きい礫が多く、欠落礫についても多重型と同様な状況が考えられる。他の少重型のうちR2・22・23についてはより重量の重い礫が多くあり、接合率も高く欠落礫も少ない。欠落した礫は、やはり少量で接合率が低いが、重量については大きい礫が残存する礫群に多くあるものの、これらは完形度が小さいものが多い。これはおそらく、完形礫重量がK2文化に比べて非常に重いことが関係しているものと考えられる。大型の完形礫が多く焼かれ、それぞれの完形礫が割れて分裂す

第62表 第3層ナイフ形石器文化の礫群欠落礫推定総重量表

礫群番号	欠落礫総重量	対礫群総重量比
R 1	12,944 ^(a)	1.0 ^(個)
R 2	3,256	0.9
R 3	205,311	2.6
R 4	23,233	0.3
R 5	24,139	3.8
R 6	35,115	3.5
R 7	18,865	0.9
R 8	22,758	0.4
R 9	6,293	1.0
R10	4,572	1.5
R11北	10,735	0.8
R11南	34,342	3.4
R12	18,789	1.6
R13	2,153	1.3
R14	6,688	1.8
R15	1,067	0.9
R16	6,713	1.4
R17	5,867	1.4
R18	40,318	1.2
R19	33,519	1.8
R21	3,896	1.5
R22	12,890	1.0
R23	22,232	0.9
R24	63,788	4.1
R25	1,114	0.3
R26	97,626	1.0

る数も多いのではなかろうか。そうした割れ礫の中からより重量の重い大型の礫が選択的に取り出されたとしても完形度は小さいであろうし、かなり多く取り出され接合率がかなり高くなったとしても、復原する礫は完形度が小さいものであることも多くおこってくるはずである。したがって、R2・22・23は単に重量の重い礫が選択的に取り出された礫群と考え得る。そうすると欠落した礫は、重量は比較的軽いものが多く、接合率はやや高いものと思われる。量は少ないといっても、残存する礫群よりやや少ないかほぼ同量と推定されており、これに従えば十分に分割したとも考えられる。

多軽型は欠落礫が非常に多く、接合率は中程度が多い。完形度が小さいものが多い点がK2文化と大きく相違する。重量・完形度ともに小型の礫が多い点から、大型の礫を中心に多くの礫が欠落しているものと思われる。欠落礫は、おそらく多重型や少重型に近いものであろう。

少軽型は接合率は低いものの、欠落礫の量は多重型ほど多くはない。完形礫重量がいずれも軽い。しかし、R10・15・16・21のように完形度が大きいものが多い礫群が目立ち、K2文化と相違する。完形度の大きいものを多く選択的に取り出した可能性がある。そうすると欠落礫は完形度の小さいものが多くなるが、これは同じ少軽型のR13・14などにあてはめ得る。

以上のように、K3文化の礫群はK2文化と欠落礫の在り方が大きく相違し、礫群の在り方もかなり違っている。K2文化の場合、選択的分割行為と平等分割行為の両者が考えられたが、K3文化の場合、いずれも選択的分割行為のみが考え得る。また、K2文化では多重型・少重型と少軽型が表裏の関係にあると考えられたが、K3文化の場合、多重型・少重型と多軽型が表裏の関係にあるものと思われる。さらに、少軽型は完形礫重量が軽いという点で多重・少重・多軽型とは別種のものであり、少軽型内で表裏関係のものが見出し得る。

礫群の使用過程

使用過程についてはK2文化とほぼ同様な推定が可能である。礫を焼いた場については、欠落礫が多量にあることから遺跡外のある場所も考え得るが、遺跡で焼いたとすれば小礫が多量にある礫群のある場所であろう。ブロック形成と礫群形成の前後関係については、K2文化のように多量に礫群と重なる石器の分布が見られないので、推定はできない。焼く礫を使用する作業であるが、この中での礫の動きを推定する材料がいくつかある。重量別礫分布の分離型に見られるように、重い礫が礫群縁部に分離し軽い礫の集中部を構成する。重い礫が拡散し、軽い礫は拡散・集中するという動きが推定できる。また、偏在型や平面分布が集中型のものに見られるように、ある一定方向への拡散・集中という動きも推定できる。また、K3文化にはR3・5・6やR22・23・24のように非常に緊密な接合関係を持つ礫群がある。R3・5・6は、R3が内部で完結する接合個体が多かったが、R5・6は外部との接合個体が内部で完結するものと同量かそれ以上であった。三者は同じ多軽型礫群であり、他の特徴もよく似ている。違うのは量の差だけであるように見える。以上からして、遺跡内において分割が行われたものと推定する。ただし、1kg以上の礫など重い礫はR3に多いことから、これも選択的分割行為と考え得る。

R22・23・24の場合、R22・23北部・24北部とR23南部・24南部に接合関係が二分した。三者の特徴も、R22・23が少量型で重い礫が多いのに対し、R24は多軽型で軽い礫が多い。平面分布のR22が密集型、R23が集中型、R24が分散型と相違する。また完形礫重量も三者ともかなり差があるが、これはおそらくR22や23にはかなり重いものが集められていることに起因するものと思われる。R22・23北部・24北部とR23南部・24南部は、他の礫群では内部の接合関係が混然一体となっているという点からして、別々の行動によるものと考えられる。いずれも選択的分割行為によるものと推定するが、両者の行動が同時であったか、時間差を持っていたかは不明である。

以上のように、K3文化の場合、礫の集中・拡散・分離という行為の他に、遺跡内においても分割行為が行われていたと考えられる。

使用回数については、K2文化と同様である。非焼け礫同様に割れ、接合関係に見るように引き離され、焼け礫同様に扱われていること、割れ面非赤化礫が圧倒的に多いこと、非赤化の割れ面同志の接合が圧倒的に多いことなど、K2文化と同じ状況である。それに、礫群内の接合関係が混然一体であること、分離型の礫群の分離行為は、R3・8・10に見るように分離部分と他の部分の接合関係が密であることから一度の行為であると思われること、R22・23・24のように、一つの礫群のように見えるものも接合関係から二つに分離できることから、別々の行動は接合関係が混ざり合わないと考えられることなど、何度もくり返す集積行為を考えるには分が悪い材料も多い。以上の点から、K2文化同様、多量に礫を用い1回だけ焼き使用する作業を行ったと推定したい。

礫の割れについてかなり高率な割れが問題となるが、接合距離が20cm未満のもの出現率が非常に高いものとそうでないものがある点に着目したい。接合距離20cm未満のものは、常識的には自然に割れたものと思われがちであるが、自然的要因であるならばどの礫群も一率に出現してよいはずである。そうでないことは、20cm未満の中かなり人為的な割れが含まれていると判断できる。故意に加撃するような行為があったものと推定する。割れの要因として自然的なものを考えるばかりでなく、人為的なものも大きな要素として考えるべきである。

多量の礫が欠落しているが、礫群は1回のみ焼き使用されたこと、使用に際しては熱く焼けた礫が意味を持つと思われることから、多量の礫が礫群使用行動の一環として遺跡から遺跡へ、あるいは遺跡と遺跡外のある場所とを行き来するものと思われる。

礫の使用量については、多重・少重・多軽型と少軽型とは、完形礫重量が違う点から別種のものとしたが、両者は欠落礫を含めて考えてもかなり量に違いがあるものと思われる。したがって、使用量もかなり違いのある活動が行われたと考えられる。

礫群の使用過程はK2文化とはほぼ同様であろうが、一度に使用する礫の量が非常に多い点相違する。K2文化よりさらに多量の食物が一度に処理され食べられる活動があったものと思われる。

礫ブロックと非焼け礫群

K3文化には、非焼け礫によって構成される小礫の群集が2ヶ所ある。一つは礫数が少なく、200g前後の礫(ちょうど手のひらに入る程度の大きさ)を集めたもので、石器ブロックの中心に位置することから、石器や道具製作と関連したものと推定した。同ブロック中からは、槌石も1点出土している。

非焼け礫群は、平面分布や重量など礫群に似るが、完形礫が非常に多い点、焼け礫が数点しかないなど異なる点がある。非焼け礫が多く、礫をただ集めただけの群集にすぎないが、礫群との関連でその意味の推定も可能である。おそらく礫群のように焼かれて使用するために用意されたものであろうと推定する。何等かの理由で使用されず、ブロックとまったく関係も持たないように、日常生活もここでは展開されなかったものと思われる。もしこれが事実とするならば、焼こうとして集められた礫には当初から割れていたもののがかなりあると思われる。接合するものはいずれも20cm未満の距離にあり、礫群と大きく異なる。おそらくこれこそ自然に割れたものであろう。そうすると、持ち込まれた礫相互には接合関係はないことになる。これは礫群の礫に焼けた割れ面を持つものがあること、焼けた割れ面同志の接合がないことと符合する。

礫群から見た集落景観

K3文化の礫群は、K2文化同様一部の礫群を除いて礫群間の接合がほとんどなく、各々孤立的である。しかし、距離関係などから礫群群を区分することができた。第一礫群群はおそらく一体であろうR3・5・6と同じ多重型のR7・8で構成されている。その周辺をとりまくように、配石群と一体となったR1・4・9がある。これらに近接するR2も含め、これらは全て表裏一体と考えられた多重・少重・多軽型の礫群である。さらに、これらは第1ブロック群および散漫分布域aと重なる。これらはおそらく集落景観上ひとまとまりのユニットであると評価できる。

第二礫群群は、多重型1基、少重型1基、多軽型2基、少軽型2基で構成される。第三礫群群は少重型1基、少軽型2基で構成される。第四礫群群は多軽型1基、少軽型2基で構成される。この三者はいずれも少軽型を含んでいる。しかも、それぞれの少軽型礫群の位置は、三者が取り囲む空間の側に位置している。三者はそれぞれブロック群と重なっており、それゆえひとまとまりのユニットの名称を与え得るが、それぞれが一つの集落景観を構成していたのか三者が一つの集落を構成していたのか判断できない。

第五礫群群は、少重型2基と多軽型1基で構成されるが、それらは二つの礫群群に分離・統合できる。両者は別々の行動によるものであるが、同時が異時かは判断できない。これには散漫分布域fが重なる。それゆえ一つのユニットの名称を与え得ると評価する。この他、散漫分布域eと重なるR21、石器ブロックとは重ならないが、R19や非焼け礫群は、それぞれ単独ながらユニットの名称を与え得ると評価する。ただし、いずれの場合もそれぞれのユニットが一つの集落景観を構成していたのか、いくつかあるいは全てのユニットが一つの集落景観を構成

していたのかは、礫群側からは判断できない。

(保坂)

2. 礫群伴出木炭の樹種

静岡県の大野北遺跡第3層(約22,000年前)から発掘された木炭について樹種を識別した。試料は遺跡のうちの二つの場所から収集されたもので、一つは第3礫群(3R3)、他は第5礫群(3R5)(第241図)である。それぞれから各18点の木炭の薄片を採取した。試料を水洗したのち、セロイジン包埋、ミクロトームで木口、柁目、板目の三断面切片をとり、プレパラートにして顕微鏡観察により樹種を識別した。その結果、3R3からの試料では二葉松8点、コナラ属10点が、3R5では二葉松10点、コナラ属8点が検出された。両地点とも同じ樹種がほぼ均等に出現したが、現在でもこれら両樹種は、日本各地に分布するものである。

樹種識別の拠点となった顕微鏡観察の知見は以下の通りである。

二葉松 *Pinus* sp., *Diploxylon*, PINACEAE (マツ科)

垂直・水平樹脂道を有する。垂直樹脂道は単独で分布する(図版44-1・4)。放射組織の上下両縁には放射仮道管があり、内壁は鋸歯状に突起する。放射線細胞の分野壁孔は窓状で大きい(同2・5)。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を有するものは紡錘形になる(同3・6)。アカマツとクロマツとがこのような特徴を持つが、両種を識別することはできないので、二葉松とした。

コナラ属 *Quercus* sp., *Lepidobalanus*, Sect.

Prinus, FAGACEAE (ブナ科)

孔圏の道管は環孔状に配列し、孔圏外の道管は壁が薄く角張っており、集団をなして火炎状に配列している(同7・10)。放射組織は同性で(同8・11)、単列のものと、きわめて幅の広いものがあり、中間的な幅のものはない(同9・12)。これらの特徴を有する樹種はコナラかミズナラであるが、いずれであるかを判定することは炭材ではできないので、コナラ属とした。(林, 島地)

第63表 樹種同定表

試料No	第3礫群	第5礫群
1	二葉松	二葉松
2	コナラ属	コナラ属
3	二葉松	二葉松
4	コナラ属	コナラ属
5	二葉松	二葉松
6	コナラ属	コナラ属
7	二葉松	二葉松
8	二葉松	二葉松
9	コナラ属	コナラ属
10	二葉松	二葉松
11	コナラ属	コナラ属
12	コナラ属	コナラ属
13	コナラ属	二葉松
14	二葉松	二葉松
15	コナラ属	二葉松
16	コナラ属	コナラ属
17	コナラ属	二葉松
18	二葉松	コナラ属
二葉松	8	10
コナラ属	10	8

3. 配 石

1) 配石の区分

ここでいう配石とは、1kg以上の礫のうち礫群の礫と混然一体となっているもの以外のもの構成され、単独のものまたは複数の群を指す。ただし礫群構成礫に1kg以上のものがかなりあるので、次のような点に配慮し区分を行った。

周辺に配石がありそれらと連続的な分布状況を示すものは、礫群の中はかなり入り込んでい

ても配石と区分した。H2の一部やH14, H20, H38がそれである。礫群構成礫の重量ときわだった差のある礫は、礫群の中はかなり入り込んでいても配石と区分した。H30, H48がそれである。

こうした区分のしかたはK2文化のものをそのまま用いたものである。K3文化の場合礫群構成礫にかなりの量の1kg以上の礫があるが、配石構成礫には非焼け礫が多い点、比較的重い礫が多い点で違いがある。礫群構成礫の1kg以上の礫89個中、非焼け礫は18個、20%であるのに対し、配石構成礫115個中非焼け礫は92個、80%である。量的にちょうど逆転している。重量では、500gの区間でみた場合1,000~1,499gがいずれも最も多いが、その割合は礫群構成礫が66%に対し配石構成礫が40%である。また礫群構成礫は2,000~2,499gまでかなり分布しているが、それ以上は2個か1個であり、4,500g以上は接合個体も含めても存在しない。一方、配石構成礫は2,500g以上に30個、26%が分布し4,500g以上の礫も10個あり、最も重いものはH6の構成礫の11,450gである。

このように結果的にはあるが、K2文化の配石区分の経緯で示したのとはほぼ同様な状況がK3文化にもあると思われる。この区分の方法はK3文化でも有効であると考え得る。なお、K3文化の配石はH1からH57までの57基である(第64表、別添第25図、第240~248、258~265図)。

2) 規模と平面分布

まず配石構成礫の個数を見てみよう。単独のものが最も多く、34基、60%である。2個のものは11基、19%、3個のものは2基、3%、4個のものは4基、7%、5個のものは3基、5%である。その他、H29の6個、H2の7個、H46の9個がある。

配石構成礫の平面分布であるが、2個以上の配石について、構成礫の隔てる距離について見てみよう。各配石構成礫のうち、 n (構成礫数)-1番目までを、40cmの区間で集計してみた。全部で61の関係がある。0~39cmが11、40~79cmが14、80~119cmが21、120~159cmが11、160~199cmが3、200~239cmが1である。80~119cmの関係が最も多い。

3) 重量

最も軽いものはH53の1,005g、最も重いものはH6の11,450gである。500gの区間で集計してみると、1,000~1,499gが46個、40%、1,500~1,999gが25個、22%、2,000~2,499gが12個、10%、2,500~2,999gが9個、8%、3,000~3,499gが5個、4%、3,500~3,999gが3個、3%、4,000~4,499gが5個、4%、4,500~4,999gが6個、5%、5,000~5,499gが2個、2%である。他に6,400gが1個、11,450gが1個で1%ずつである。

次に複数の構成礫の配石で、ある特定の重量同志の組み合わせがあるかどうか見てみよう。1,000~1,999gの1,000g台の礫は、1,000g台の礫と14基、2,000g台と9基、3,000g台と4基、4,000g台と6基、5,000g台と2基の配石で組み合わせが見られる。また、6,400gと11,450gの礫とも組み合わせる。2,000g台の礫は、2,000g台と4基、3,000g台と1基、4,000g台と3基の配石で組み合わせが見られる。また、6,400gと11,450gの礫とも組み合わせる。3,000g台の礫

第64表 第3層ナイフ形石器文化の配石構成観察表

配石 番号	出土区	位置 (北から cm)	位置 (西から cm)	石質	分類	完形度	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
H 1	2 E 24	277	199	砂	B	7	1,170	11.6	11.0	7.1
H 2	2 E 25	212	164	砂	E	7	1,080	15.2	9.9	5.0
	2 E 25	238	82	砂	A	10	2,500	19.4	12.6	8.9
	2 E 25	252	65	花	A	10	1,230	13.5	9.4	6.5
	2 E 25	341	87	チ	A	10	1,630	13.3	11.3	7.4
	2 F 5	62	61	花	A	10	2,500	12.6	12.0	8.5
	2 F 5	185	121	砂	A	10	1,390	15.9	11.6	5.4
	2 F 5	196	87	片	A	10	4,000	29.5	12.2	8.3
H 3	2 E 25	376	271	砂	E	3	1,400	13.4	11.0	9.5
H 4	2 F 3	227	83	砂	A	10	4,650	26.5	12.0	7.4
H 5	2 F 15	188	273	砂	B	3	1,220	13.6	13.2	4.7
	2 F 15	149	177	砂	B	3	1,260	16.8	13.5	4.6
H 6	2 F 20	25	114	花	A	10	2,100	18.5	13.1	7.2
	2 F 20	62	206	砂	A	10	11,450	16.2	10.1	5.5
	2 F 20	112	177	砂	B	9	1,360	16.3	10.6	6.7
H 7	2 F 20	293	370	砂	A	10	2,500	18.5	12.7	8.6
	3 F 16	203	45	砂	A	10	2,000	17.2	11.6	8.0
H 8	3 F 8	190	185	砂	B	5	1,880	23.5	10.7	4.9
H 9	3 F 8	366	66	砂	B	7	1,880	21.2	11.6	7.7
	3 F 8	322	121	花	B	3	1,330	19.1	10.6	5.5
	3 F 8	329	148	花	A	10	2,900	16.8	16.2	9.5
	3 F 8	318	152	花	A	10	1,285	15.3	9.5	5.8
H 10	3 F 13	111	19	砂	B	5	1,120	14.4	9.8	6.2
	3 F 13	139	19	砂	B	5	1,480	15.3	9.5	6.8
	3 F 13	213	65	砂	A	10	1,515	12.6	12.3	8.3
	3 F 13	267	8	花	A	10	1,980	15.3	13.5	8.3
	3 F 13	293	35	砂	A	10	4,800	25.7	17.1	10.9
H 11	3 G 4	23	151	チ	A	10	1,540	16.1	9.3	8.2
H 12	3 F 14	380	299	砂	B	7	1,150	17.2	12.2	4.5
	3 F 14	300	262	砂	B	5	1,375	15.5	11.8	3.4
	3 F 14	196	198	砂	A	10	1,120	11.4	10.1	5.9
H 13	3 F 17	253	39	砂	A	10	1,710	14.0	13.5	7.2
H 14	3 F 25	163	35	砂	B	5	1,034	11.7	8.4	7.9
	3 F 25	122	116	砂	B	5	1,178	12.5	12.3	7.0
	3 F 25	228	291	砂	A	10	1,850	12.3	11.2	7.8
	3 F 25	120	234	砂	B	9	1,800	19.7	9.7	6.8
H 15	2 G 2	309	366	砂	B	9	2,500	16.8	12.2	8.7
H 16	2 G 6	19	157	砂	A	10	1,900	17.7	11.1	8.4
H 17	2 G 9	374	15	砂	A	10	1,260	13.4	10.9	6.8
	2 G 14	70	71	砂	A	10	1,030	16.3	7.0	6.7
H 18	2 G 10	270	266	砂	A	10	2,200	17.8	12.9	11.1
	2 G 10	344	281	砂	C	10	2,500	15.2	12.9	9.4
	2 G 10	373	162	砂	B	3	1,080	14.2	9.8	6.3

配石 番号	出土区	(北から cm)	(西から cm)	石質	分類	完形度	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
H18	2 G10	335	137	砂	E	9	3,000	18.6	12.7	10.5
H19	2 G15	181	63	砂	A	10	1,845	15.4	10.6	8.7
H20	2 G15	363	345	砂	C	10	2,300	18.7	14.1	8.3
	2 G20	40	360	砂	A	10	1,785	15.2	9.3	8.9
	2 G20	35	391	砂	B	7	1,080	13.0	9.6	8.0
	2 G20	52	285	砂	A	10	4,500	23.7	12.5	9.6
H21	2 G17	51	357	砂	B	9	1,125	13.9	11.5	5.4
	2 G18	26	110	砂	E	7	1,315	12.3	10.8	9.1
H22	2 G18	362	380	砂	C	10	2,000	19.1	10.4	8.0
	2 G19	365	68	花	B	7	1,310	16.9	9.7	6.3
H23	2 G21	57	37	砂	C	10	4,500	17.9	17.8	10.9
H24	2 G22	264	203	チ	B	9	1,125	14.1	9.9	4.8
H25	3 G3	207	156	砂	C	10	1,290	15.8	11.0	5.3
H26	3 G9	320	110	砂	A	10	3,600	19.8	14.6	9.4
H27	3 G12	134	200	砂	B	9	4,700	25.6	14.9	12.4
H28	3 G14	120	50	チ	A	10	3,600	18.4	15.3	8.6
H29	3 G11	354	154	砂	C	10	4,000	20.9	13.3	13.1
	3 G16	232	187	砂	A	10	1,632	13.8	11.8	7.6
	3 G16	193	233	砂	E	7	1,262	14.6	8.9	7.0
	3 G16	133	169	砂	C	10	4,500	19.8	14.0	9.8
	3 G16	68	224	チ	A	10	1,564	14.1	9.8	7.3
	3 G16	43	138	花	A	10	5,000	21.1	13.6	11.4
H30	3 G20	304	76	砂	B	7	3,200	21.1	17.2	7.1
H31	3 G21	315	353	砂	E	9	2,400	15.3	12.4	8.3
H32	3 G25	385	240	砂	C	10	1,840	17.8	13.4	5.6
H33	4 G6	184	126	砂	A	10	1,570	14.9	13.6	5.8
	4 G6	249	65	砂	B	9	3,300	17.8	13.0	9.8
H34	4 G18	159	34	砂	A	10	1,026	15.4	8.4	5.8
	4 G18	260	58	砂	B	3	1,048	14.7	9.9	9.3
	4 G22	41	391	砂	A	10	1,930	15.7	12.2	7.3
	4 G22	64	12	チ	A	10	2,200	15.5	14.1	7.2
	4 G22	22	72	花	A	10	1,457	13.4	12.8	6.8
H35	4 G19	331	115	花	B	9	1,626	22.0	11.3	5.0
H36	4 G25	267	302	砂	B	9	4,000	21.0	13.3	8.3
H37	5 G21	380	131	砂	C	10	3,700	20.5	14.5	8.6
	5 G21	278	65	砂	A	10	1,410	17.3	12.2	4.7
H38	5 G21	123	43	砂	E	9	1,470	16.5	10.5	5.0
	5 G21	153	80	砂	A	10	5,000	23.8	13.6	10.2
H39	5 G21	311	395	砂	A	10	2,500	17.8	12.3	7.5
H40	5 G16	135	395	砂	E	7	3,200	19.2	13.8	11.7
	5 G17	113	25	砂	A	10	1,255	14.2	9.5	6.5
H41	1 H24	255	223	花	A	10	4,000	20.6	15.5	10.0
	1 H24	247	199	砂	A	10	1,030	13.2	9.4	6.3
H42	2 H8	92	143	砂	A	10	1,880	16.0	12.8	7.3
H43	2 H15	392	257	砂	A	10	1,285	16.3	12.8	5.1

配石 番号	出土区	位置 (北から cm)	位置 (西から cm)	石質	分類	完形度	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
H44	2 H19	19	320	砂	C	10	2,500	18.2	13.0	7.2
H45	2 H19	375	256	砂	A	10	1,180	14.4	11.2	5.4
H46	3 H 2	350	288	砂	B	7	1,590	14.3	12.0	7.1
	3 H 2	315	285	砂	A	10	2,300	20.8	9.6	6.4
	3 H 2	162	244	砂	B	7	2,200	18.5	13.0	8.2
	3 H 3	314	299	砂	B	7	1,790	18.4	11.8	6.8
	3 H 3	377	38	砂	A	10	2,200	19.3	13.7	6.1
	3 H 3	291	13	砂	A	10	1,330	14.2	9.5	7.3
	3 H 8	12	286	砂	B	7	4,000	21.0	13.8	12.3
	3 H 8	73	50	砂	A	10	6,400	29.5	18.2	9.7
	3 H 8	157	185	砂	E	9	1,460	14.1	11.5	6.4
H47	3 H 9	350	230	花	A	10	1,040	12.7	9.6	6.1
H48	3 H 4	54	181	砂	C	10	3,300	21.6	13.2	8.0
H49	3 H18	21	372	砂	A	10	1,670	15.6	10.0	6.2
H50	4 H 7	273	13	花	A	10	2,200	17.8	13.5	7.1
H51	4 H 7	396	379	砂	A	10	1,285	15.1	9.4	5.8
H52	4 H11	154	192	砂	A	10	1,540	13.6	12.2	7.1
	4 H11	160	209	チ	A	10	1,270	13.8	10.5	6.2
H53	4 H19	18	19	砂	A	10	1,005	17.9	8.7	4.6
H54	4 H22	360	174	石	A	10	2,015	12.9	11.4	10.3
H55	2 G15	234	394	砂	E	9	1,080	16.0	9.2	5.9
H56	2 G19	304	386	砂	C	10	2,800	19.3	10.6	7.2
	2 G20	258	142	砂	C	10	1,570	14.9	13.0	5.6
	2 G20	270	157	砂	A	10	1,195	13.3	9.4	8.2
	2 G20	240	191	砂	A	10	1,505	13.7	12.2	7.0
	2 G20	165	215	砂	E	7	1,205	16.1	9.8	5.5
H57	3 F11	194	38	砂	E	7	1,440	18.0	10.2	7.9

凡例 砂一砂岩、花一花崗岩、チ一チャート、片一片岩、石一石英

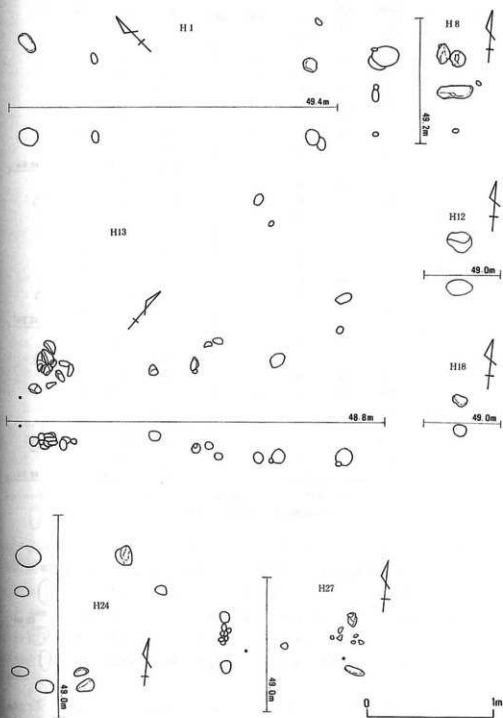
A一非赤化完形礫、B一非赤化破損礫、C一赤化完形礫、

D一全面赤化破損礫、E一割れ面非赤化礫

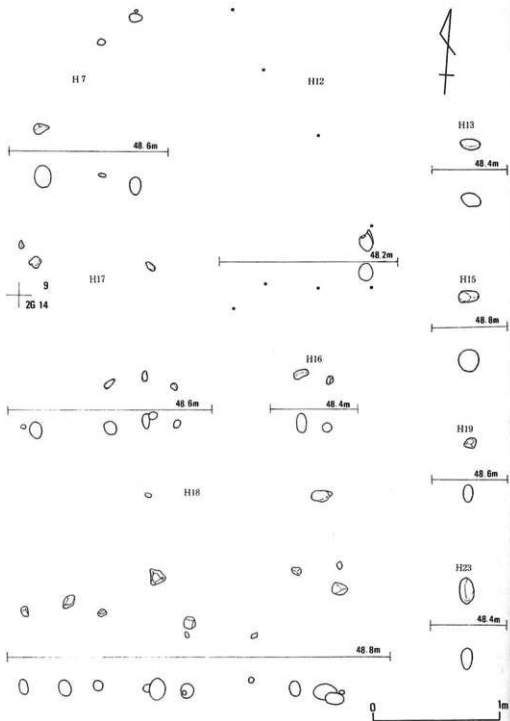
は、1,000g台と2,000g台とのみ組み合わせる。しかし、それは5基の配石で見られるのみである。4,000g台は3,000g台と組み合わせが見られない。1,000g、2,000g台で9基の配石と組み合わせる。さらに、4,000g台、5,000g台、6,000g台とそれぞれ1基の配石で組み合わせが見られる。5,000g台は、1,000g台と2基、4,000g台と1基の配石で組み合わせが見られるのみである。全体的に見て、数の多い1,000g台と組み合わせることが多い。3,000g台以上の礫が3,000g台の礫と組み合わせが見られない点が気にかかるが、3,000g台の礫のある複数構成礫の配石自体少ない。

次に単独の配石の重量を見てみよう。1,000g台が20基、2,000g台が6基、3,000g台が4基、4,000g台が4基である。5,000g台以上はない点、複数のものと異なるが、5,000g台の礫自体4点しかない。他の重量構成は全体で見た場合と大差ない。

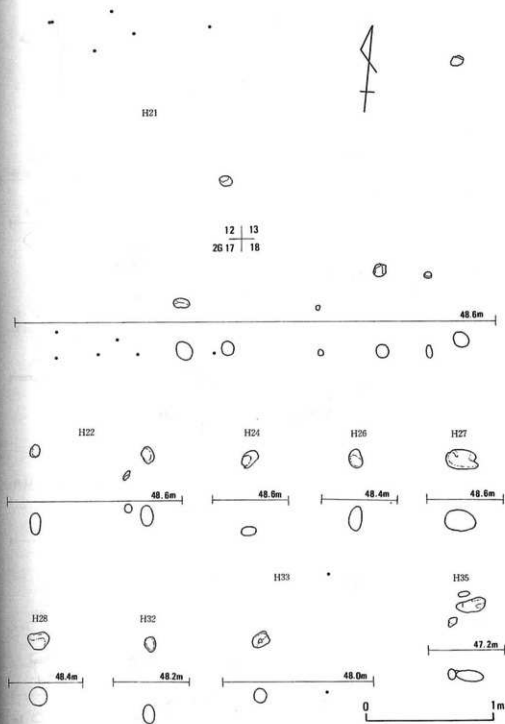
礫群周辺に分布したり、接したりする配石があるが、こうした配石の重量構成を見てみよう。



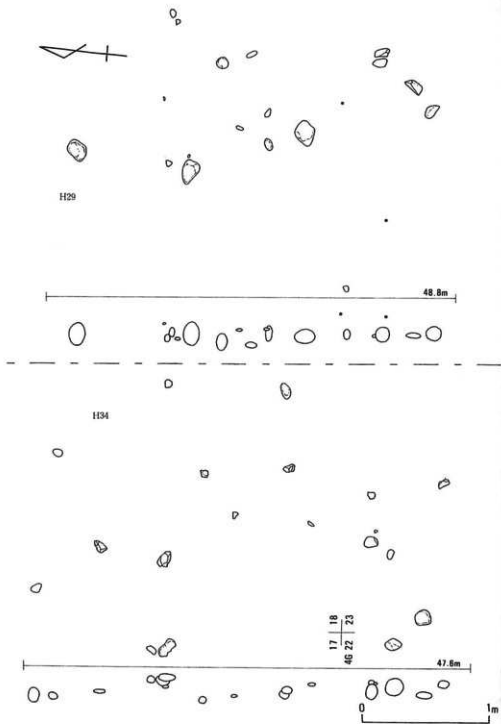
第258図 中央区第3層ナイフ形石器群(K3)に伴う配石(H1・8・12・13・18・24・27)



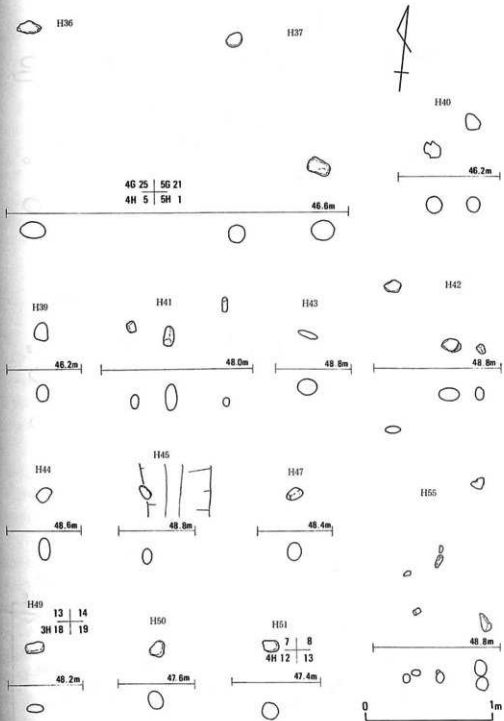
第259図 K3に伴う配石 (H7・12・13・15~19・23)



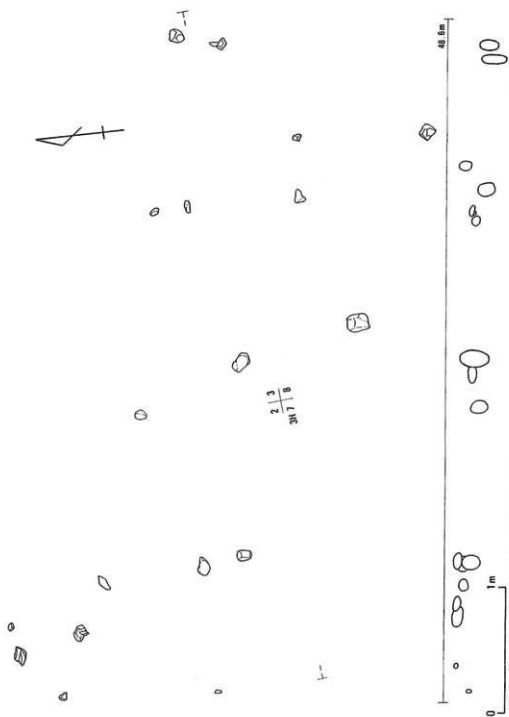
第260図 K3に伴う配石(H21・22・24・26・27・28・32・33・35)



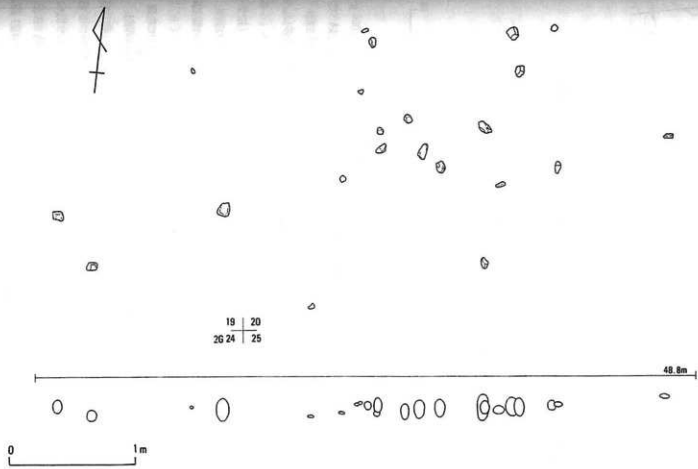
第261図 K3に伴う配石(H29・34)



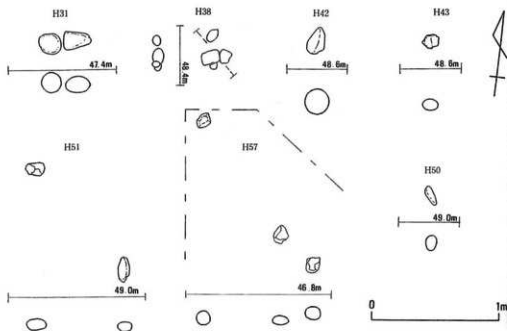
第262図 K3に伴う配石 (H36・37・39~45・47・49・50・51・55)



第263圖 K 3 (7件)之配石 (H46)



第264図 K3に伴う配石(H56)



第266図 K3に伴う配石(H31・38・42・43・50・51・57)

まったく単独で接している配石(H4・11・25・30・31・48)の場合、1,000g台が2個、2,000g台が1個、3,000g台が2個、4,000g台が1個である。複数の構成礫の配石や礫群をとりまいて群を形成するものは、1,000g台が33個、2,000g台が9個、3,000g台が3個、4,000g台が5個、5,000g台が1個で、11,450gの礫もある。全体で見た場合と同様に1000g台の礫が非常に多い。

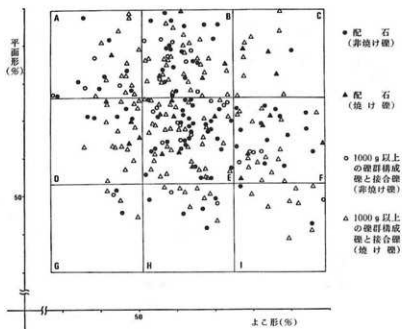
4) 形

配石構成礫の形を、平面形とよこ形を用いて検討したい(平面形とよこ形については、K2文化の礫群の礫の形の項参照)。平面形とよこ形の関係を見ることで、礫の立体形の在り方を見ることができる(第266図)。K2文化と同じ標準で9ヶ所の区域を設定し、立体形の量的な比較や他の属性との対比を行いたい。

まず区域ごとの量比を見てみよう。Aに9個8%, Bに27個23%, Cに4個4%, Dに8個7%, Eに37個32%, Fに23個20%, Gに2個2%, Hに5個4%がある。E区域に約4割、B区域に約3割が集まる。比率がやや違うが、K2文化のものと近似する。

複数の構成礫の配石で、立体形の組み合わせ状況を見てみよう。AはA~Fと、BはA・B・D~F・Hと、CはAと、DはA・B・E・F・Hと、EはA・B・D~F・Hと、FはA・B・D~F・Hと、HはB・D~Fと組み合わせられている。多い組み合わせをみるとBとE、BとFが8基で、EとE、EとFが7基で、BとBが6基で組み合わせを持つ。他は4基から1基で見られる組み合わせである。数が多いB・Eと組み合わせるものが多いが、他の形との組み合わせもかなり多い。

単独の配石の立体形は、Aが3、Bが8、Cが3、Dが3、Eが9、Fが4、Gが2、Hが



第266図 第3層ナイフ形石器文化の配石の平面形
—よこ形関係グラフと立体形区分

2である。やはりB・Eが多い。

礫群と近接するものうち単独のもの立体形は、A・B・D・E・F・Hに1個ずつ見られる。複数なのは、Aが3、Bが10、Cが1、Dが3、Eが20、Fが6、Gが1、Hが2である。数の多いEやBが目立つが、どの立体形も少ないながらある。

5) 石 質

砂岩が92個、花崗岩が15個、チャートが7個、片岩が1個、石英が1個である。K2文化の礫群の石質の項で示した通り、磐田原台地の礫層の礫群構成と大差ないものと思われる。

6) 焼けと割れ

礫の分類、完形度、接合関係などを検討し、配石構成礫の焼けや割れについて考えたい。

まず礫の分類であるが、非赤化完形礫60個、非赤化破損礫30個、赤化完形礫13個、割れ面非赤化礫12個がある。焼けた礫が全体の22%含まれている。焼けた礫のうち12個48%が礫群に近接した配石の構成礫であるが、礫群に近接した配石の構成礫自体が48個で42%であり、そう多い数ではない。焼けた礫の立体形を見てみると、Aが1個、Bが4個、Cが3個、Dが3個、Eが9個、Fが5個である。Eが最も多く、次いでF・Bが多い。全体で見た場合と傾向が似る。重量は、1,000g台が12個、2,000g台が6個、3,000g台が4個、4,000g台が3個である。これも全体で見た場合と傾向が似る。

次に完形度について見てみよう。非焼けの構成礫では、10割が46個67%、9割が9個10%、7割が10個11%、5割が6個7%、3割が5個5%である。焼けた構成礫では、10割が13個52

9, 9割が5個20%, 7割が6個24%, 3割が1個4%である。いずれも10割が過半数を占め、割れたものでも9・7割が多くある。こうした傾向は雑群には見られないものである。

次に接合関係を見てみよう(別添第26図)。配石内での構成礫同志の接合が三つの配石で見られる。H5の2個の構成礫と2F10区の小礫が接合して、完形度7割で3,100gの非赤化破損礫となった。H10の北端にある2個の構成礫が接合し、2,500gの非赤化破損礫となった。H14の構成礫のうちR11北部に近接する2個が接合し、2,000gの非赤化破損礫となった。配石間の接合が1個体ある。H8とH9の1,330gの構成礫が接合し、完形度9割で4,000gの非赤化破損礫となった。その他、配石周辺の小礫と接合するものも五つの配石で見られる。H9の1,880gの構成礫と近接する785gの礫が接合し、完形度9割に復旧した。H18の1,080gの構成礫と近接する15gの小礫が接合し、5割に復旧した。H29の1,262gの構成礫と近接する228gの礫が接合し、赤化完形礫に復旧した。H34の1,048gの構成礫と近接する82gの礫と接合し、3割に復旧した。H35の1,626gの構成礫が近接する39gと111gの礫と接合し、9割に復旧した。なお、H29の焼け礫は、非焼けの割れ面同志の接合である。雑群と接合関係を持つものは、H3とR1、H30とR15、H38とR19の各1個体である。H38とR19の接合関係では、1,470gの礫と10cm離れたR19の33gの礫の接合である。その場で割れたものと思われる。H30とR15では、3,200gの礫とその周辺に分散した31g、37g、45g、152gの小礫の接合である。その場で割れたとするにはやや距離がある。R15はこの接合関係以外には接合がない。H3とR1では、1,400gの礫と100g、750gの礫の接合関係である。R1の中にかかなり入り込んだ礫であり、割れた後に人為的に分離された可能性がある。なお、R15とH30の関係以外は焼け礫であるが、接合面が非焼けのもの同志の接合である。

以上のように、配石構成礫に関する接合関係は12個体と非常に少ない。割れた配石構成礫の多くは、割れた状態で遺跡に持ち込まれたのかもしれない。

7) 配石周辺の礫の特徴

配石周辺の小範囲に小礫がいくつか集まる場合がある。19基の配石の周辺で見られる。H2では17個の礫がある。591gが最も重く、13個が200g未満である。140gと21gの焼け礫がある。非焼け礫のうち13個は割れ礫である。接合関係が2個体ある。H6では4個である。400gから721gの礫で、全て非赤化完形礫である。H7では2個。いずれも200g以下で非赤化完形礫である。H9も2個。785gと11gで、いずれも非赤化破損礫である。H10は4個。600gの非赤化完形礫と200g未満の焼け礫3個である。H12は2個。250gの非赤化完形礫と5gの非赤化破損礫である。H16は260gの非赤化完形礫1個である。H17は4個。895gと79gの非赤化完形礫と460gの赤化完形礫、190gの非赤化破損礫である。H18は8個。全て非焼け礫で、830gの破損礫、655gと560gの完形礫の他は、220gから15gである。H21は10個。全て非焼け礫で、420gと240gの完形礫、635gから1gの破損礫である。H22は14個。583gから118gの赤化完形礫3個、25gの割れ面非赤化礫、440gと130gの非赤化完形礫、100g以下の非赤化破損礫5個である。H23は1個、73gの割れ面非赤化礫である。H29は14個。278gから128gの赤化完形礫3個、712gから

28gの割れ面非赤化礫3個、945gから113gの非赤化完形礫3個、213gから5gの非赤化破損礫5個である。H30は1個。930gの非赤化破損礫である。H34は14個。全て非焼け礫で475gから256gの完形礫3個、615gから16gの破損礫11個である。H35は2個。111gと39gの非赤化破損礫。H41は1個。345gの非赤化破損礫。H46は9個。全て非焼け礫で、180gから110gの完形礫3個、430gから22gの破損礫6個。H52は9個。605gから8gの非赤化破損礫である。この中に、R23・24と接合するものが2個あり、接合後3,500gの非赤化破損礫となった。

この他、いくつかのグリッドにまたがって広範囲に礫が分布する部分に接する配石がある。H5・57の北側に2F10・15、3F6・7・11区にまたがって45個の礫が分布する。非赤化完形礫が14個、490gから23g。非赤化破損礫が23個、495gから3g。赤化完形礫が3個、361gから50g。割れ面非赤化礫が5個、43gから7g。H37～39付近に5G16・21にまたがって73個の礫がある。非赤化完形礫が15個、968gから10g。非赤化破損礫が36個、58gから2g。赤化完形礫が7個、66gから25g。割れ面非赤化礫が15個、750gから1g。H42の北側に、2H2～4・7～9区にまたがって27個の礫がある。非赤化完形礫が5個。620gから115g。非赤化破損礫が13個、53gから3g。赤化完形礫が3個、735gから135g。割れ面非赤化礫6個、800gから1g。H45の周辺では、2H18～20・23～25にまたがって26個の礫がある。非赤化完形礫が9個、645gから15g。非赤化破損礫が10個、83gから2g。割れ面非赤化礫が7個、32gから6g。H49の周辺では、3H4・18・19にまたがって13個の礫がある。非赤化完形礫1個、8g。非赤化破損礫3個、180gから70g。割れ面非赤化礫9個、100gから9g。これらの礫の中には接合するものがあるが、接合後の重量が1kgを超えるものが2個体ある。H5・57北側に分布する礫9個とR4の礫2個が接合して、完形度9割で1,530gの非赤化破損礫となった。もう一つは、H37周辺の礫で、3個が接合して完形度9割で1,090gの割れ面非赤化礫となった。接合面がいずれも非焼けである。

以上のように、礫群とも配石とも区分できない小礫がかなり分布しているが、これらのなかには、配石や礫群と接合関係を持つものや接合して1kgを超える礫もある。これらは、本来配石構成礫や礫群構成礫であったものかもしれない。

8) 1kgを超える礫群構成礫と配石構成礫との違い

K3文化の礫群には、1kgを超える構成礫が多数含まれる。R3が8個、R4が25個、R7が5個、R8が18個、R17が2個、R22が2個、R23が2個、R26が27個である。接合後さらに数が増える。R2が1個、R3が17個、R4が34個、R5が1個、R6が1個、R7が6個、R8が28個、R11南部が1個、R15が1個、R17が3個、R18が8個、R19が5個、R22が3個、R23が3個、R24が3個、R25が1個、R26が41個となる。接合後の重量と立体形、礫分類、完形度を配石構成礫と比較してみよう。

まず重量であるが、1,000g台が117個で、接合個体(礫群間や対配石の接合関係も含まれる)も含めた1kg以上の礫群構成礫154個中76%を占める。配石は62%である。2,000g台は21個14%。3,000g台は、11個7%。4,000g台は、5個3%である。配石では5,000g台以上にも4個4

の礫がある。礫群構成礫は配石に較べ、より軽い礫が多い。

立体形を見てみよう(第266図)。Aは17個11%, Bは36個23%, Cは8個5%, Dは15個10%, Eは41個27%, Fは17個11%, Gは2個1%, Hは9個6%, Iは9個6%である。E・Fの数が配石より少ないが、おおまかにみて、配石とはほぼ同様な状況である。

礫の分類別に数を見てみると、非赤化完形礫14個9%, 非赤化破損礫9個6%, 赤化完形礫37個24%, 全面赤化破損礫3個2%, 割れ面非赤化礫91個59%である。非焼け礫は15%にすぎない。さらに割れた礫が非常に多い。配石では42個37%であったのに対し、65%もある。割れた礫の完形度を見てみると、焼け礫では、9割が60個、7割が18個、5割が11個、3割が2個である。非焼け礫では、9割が7個、7割が2個である。大きいものほど多い点は配石と共通する。

以上のように、礫群構成礫の1kg以上の礫は配石構成礫と比較すると、立体形は似た傾向であるが重量は軽いものが多い点、焼け礫が圧倒的に多い点、割れ礫が多い点が相違している。

9) 配石相互および礫群・ブロックとの位置関係

まず、礫群との位置関係であるが、22基が礫群に近接する。これらのうち14基は、礫群をとりまくようにして分布している。H2とR1, H5・6・7・57とR4, H8・9・10とR9, H20・55・56とR25, H36・37・38とR19である。その他、複数の構成礫で礫群に近接するもの、H14・52, 単独のものH4・11・25・30・31・48がある。

次に配石相互の位置関係であるが、いくつか群を形成するものがある。H17~22・29・55・56は一つの群を形成しているように見える。その東半ではH20・55・56のように礫群をとりまく配石群と多数の礫で構成されるH29がある。西半ではH17・21・22のように、構成礫2個の配石がある。H18は4個であるが、2個ずつの二つの配石とも見ることができる。一方、西半部の外側に、H15・16・23・24・42のように単独の配石がとりまくようにしてある。これらは一つの大きな配石群を形成していると見ることができる。また、H36・37・38の周辺にH39・40も一つの配石群と見ることができる。

ブロックとの位置関係を見ると、R1・4・9とそれをとりまく配石群、および第一礫群群が、第1ブロック群と重なる。近接する散漫分布域a・bを加え、これらの中に入るH1・3・4・12・13は一つの大きな遺構群の中に入ると見ることができる。R1~9, H1~10・12・13・57を第1遺構群としたい。第二礫群群内にはH11・14・25があり、これらは第IIブロック群と重なる。第2遺構群としたい。第三礫群群とH15~24・27・29・42・55・56は、第IIIブロック群と散漫分布域cと重なる。第3遺構群としたい。第四礫群群とH30・48は、第IVブロック群と重なる。第4遺構群としたい。R21とH34・35は、散漫分布域eに近接する。第5遺構群としたい。第五礫群群とH47・49~54は、散漫分布域fに近接する。第6遺構群としたい。この他、R19とH36~40は、石器との関連はないが一つの遺構群を形成しているように見える。第7遺構群としたい。H26・33・46は近接するいずれかの遺構群と関連しているものであろうが、限定できない。H41・43~45と非焼け礫群は、いずれの遺構群とも関連しないように見える。

10) まとめ

以上の検討結果をまとめると以下のごとくである。

1. K3文化の配石は、単独のものが6割を占める。複数の構成礫のものは、2個から9個で構成され、構成礫相互の隔てる距離は1m前後が比較的多い。
2. 重量は1,000g台が6割を占め、最も重いものは10kg強もある。単独の配石、複数の配石、礫群に近接する配石のそれぞれで見ても状況は同様である。
3. 立体形は、存在する立体形のうち、ほどほどに扁平で、平面形がほどほどに丸いものが最も多い。単独、複数、礫群に近接する各配石も、全体で見た場合と同様な状況である。
4. 石質は、磐田原台地の礫層の礫種構成を反映しているものと思われる。
5. 非焼け礫が約8割を占める。焼けた構成礫は、礫群に近接するものに多くあるような状況はなかった。完形礫が約6割を占める。割れた礫の一部は接合するものもあるが、大半は接合しない。割れた状態で持ち込まれたものもかなりあったものと思われる。
6. 27基の配石の周辺に、1kg未満の小礫の分布が見られる。非焼け礫が多い。礫群や配石と接合したり、接合後1kgを超えるものもある。これらは本来礫群や配石構成礫であったと思われるが、他の多くは人為的に何らかの目的で遺跡に持ち込まれたものかもしれない。
7. 礫群構成礫の中に1kgを超えるものがかなりある。配石構成礫と較べると、立体形では大差ないが、1,000g台の礫が特に多く、5,000g台以上がない点、焼け礫が圧倒的に多い点、割れ礫が多い点など配石と異なる。
8. 配石は礫群とともに遺構群を形成し、石器ブロックと対応関係にあるように思われる。

配石の用途について

配石構成礫全体で重量や立体形を見ると、あるものが特に多くある傾向がある。しかし、単独の配石、複数の配石構成礫の組み合わせ、礫群に近接する配石でそれぞれ検討しても全体で見た状況と大差がなく、用いられる礫の違いを見出し得ない。特に立体形は、礫群構成礫の1kgを超えるものとも大差がない。ある特定の立体形、重量のものが好まれたと判断するよりも、礫採集場所の状況が反映されていると考えた方が妥当と思われる。重量や立体形で配石を分類することは難しい。しかしその出土状況を見ると、礫群に近接するものとそうでないものがあり着目する必要がある。礫群に近接するものは、多数の配石構成礫が礫群をとりかこむようにしてあるものと1個程度のものが近接するものがある。前者は弧状に配列しているようにも見え、住居址の構造の一部とも考えられるかもしれない。しかし礫群との関連を考えることもできる。K3文化の礫群はかなりの量の1kg以上の礫を保有している。これらは焼け礫や割れ礫が多く、1,000g台の礫が配石より多い点が配石とは異なるが、礫群の礫と同じ用途でありながら別の役割の礫であり、礫群の礫とは分離しているものとも考えられる。ここでは後者の考えを支持しておきたい。

一方、礫群とは関連しない配石についてはその用途を限定することは非常に難しい。K2文化と比べ、K3文化は石器や剥片の量が非常に少ないが、それにもかかわらず配石の量はK2

文化以上である。配石を用いた活動は、石器を作ったり用いたりする活動とは切りはなして考えるべきかもしれない。しかしK2文化では多目的に用いられたのに対し、K3文化では目的が配石ごとに限定されていたので量が多くなったのかもしれない。また遺構群の評価によっても配石の見方が変わってくる。たとえば礫群主体の第1遺構群と配石主体の第3遺構群について、両者を別々の集落と見た場合、礫群と関連しない配石は集落の構成要素として必ず存在するものではないことになる。つまり、配石がなくとも生活できる期間があることになるのである。いずれであるか限定は難しい。

配石から見た集落景観

さて、次に配石から見た集落景観を考えてみたい。配石には礫群をとりまくようにして分布するもの、礫群に近接する個数の少ないもの、礫群とは関連しないもので配石群を形成するもの、これら以外のものなどがある。これらと礫群群や単独の礫群が関連して遺構群を形成していると見る事ができた。それぞれの遺構群と石器ブロック群や散漫分布域とはよく対応している。これらの遺構群が集落景観復原の際の単位となるものとする。これらの遺構群は、構成要素にかなりの違いがある。第1遺構群は、礫群群と周囲をとりまく配石のある礫群によって構成されている。第2遺構群は礫群群が主体である。第3遺構群は配石群が主体を占め、配石がとりまく礫群と少軽型の礫群によって構成される。第4遺構群は礫群群主体である。第5遺構群が礫群と配石、第6遺構群が配石がとりまく礫群、第7遺構群が礫群群と配石によって構成され、いずれも小規模である。これらは礫群の種類や規模もかなり違う。礫群群主体のK2文化とは大きく異なる。それぞれが一つの集落であったか、いくつかを組み合わさって一つの集落を構成していたのか、全てが一つの集落の構成要素なのか、決定する材料に欠ける。

一方、これらに対応する石器の量が、K2文化に比べて極度に少ない点に着目しなければならない。K2文化の石器製作・道具使用の在り方とK3文化のそれとが根本的に違うことも考えねばならないであろうが、石器の関係する活動の量と配石や礫群を用いた活動の量とは対応しないとも考え得る。今後、着目すべき現象である。 (保坂)

第2節 遺物

第65表 中央区第3層出土石器組成表

ナイフ 形石器	彫器	RF	敷石類	台石	石斧	UF	剥片	砕片	石核	計
13	3	13	12	4	1	68	178	245	9	546

第3層中からは1,377点の石器が発見されているが、うち546点が中央区に含まれる。中央区の内訳は第65表に示す通りである。分類規準は第2b層と同じである。

第66表 中央区第3層出土石器の石材

頁岩	凝灰岩	砂岩	チャート	黒曜石	計
502	20	18	5	1	546

石材は第66表に示したが、やはり頁岩が圧倒的に卓越している。

1. ナイフ形石器

第3層中からは、合計41点のナイフ形石器が発見されている。ここには9点のブランディングチップを含めており、これを除くと道具としての石器は32点しか見つかっていない(第68表)。この中には一組のⅡ種接合資料が含まれており、資料数は33点になる。形態分類は第2b層のナイフ形石器に従うが、資料数が少ないためか各類型内での済一性に乏しい。また資料数が少ないため、ここでは破損・使用痕の検討は省略する。

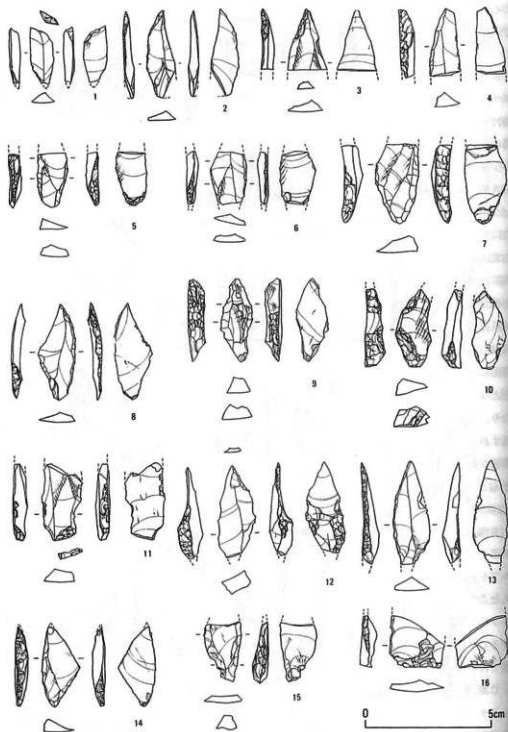
A類(第267図1~14) 14点が含まれる。A類の最大の指標である「二側縁にブランディングを持ち、かつ一側縁では先端から基部まで連続する」という特徴と先端が比較的尖鋭である以外には共通性に乏しい。基部については、第2b層のものほどは尖らず、数例であるがむしろ意図的に丸味を持たせたようなものも認められる(5・7・8)。刃部側のブランディングも第2b層に見るほどには先端方向に伸びず、身の $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ 位で止まる例が多い。ブランディングが伸びているという印象を与えるのは5・9のみである。10は調整剥片を利用している。右側縁基部近くにオーヴァーハング気味のブランディングを施すが、左側縁はほとんどかつての急斜な剥離痕を利用しており、最先端に腹面からの2枚の剥離面を留めるのみである。11の基部背面には、一見素材の頭部調整とも思える小剥離痕が並んでいる。ところがこの小剥離痕の打面となっている剥離面は実は素材の打面ではなく、左側縁のブランディング部分から打たれており、むしろ素材の打面部を取り去る役目を果している。この横方向からの剥離面を最大限評価すれば、本石器は彫器ということにもなりかねないが、その後さらにそれを打面とした小剥離痕が施されることや、ブランディング加工のあり方から、ナイフ形石器とした。これらのほとんどをA₁類に含めた。

14のみがA₂類である。典型的な形態を示している。

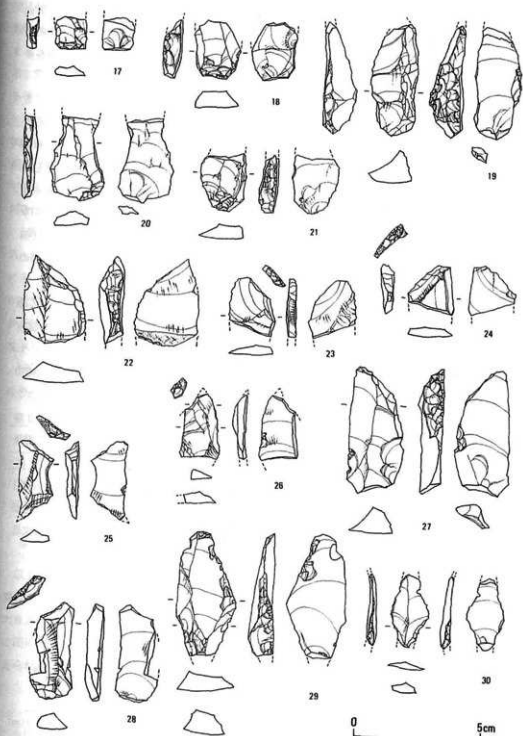
B類(第267図15~第268図22) 本類には8点含まれる。先端部を残す資料が少ないため明確ではないが、第2b層のものに比べ先端角がやや鈍いようである。18の折損面には明瞭なバルブを残している。それによると、ブランディングを施している際に加撃の失敗から石器が割れたことがわかる。概念的には第269図33~35の様なナイフ形石器の先端部をわずかに含むブランディングチップと同じように思えるが、本例の場合は破損の程度が激しく、残片を再加工することによって石器を製作するという発想が考え難く、調整の一環とは理解できない。第3層では、瀬戸内風のナイフ形石器は見られていない。

C類(第268図23~28) 6点含まれる。27・28の2点は素材の打面を大きく残し先端にブランディングを施す例である。27はB類との分類境界に近い資料である。腹面左側縁の剥離痕を背面のブランディングの続きと解釈すると、分類規準の身の $\frac{1}{3}$ のブランディングに近くなるが、わずかに及ばないと判断からC類に含めた。

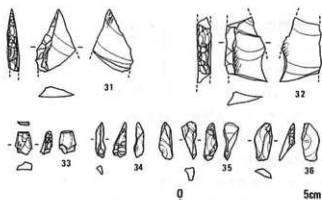
D類(第268図29・30) 2点含まれる。両側縁ともブランディングは身の半分足らずであ



第267図 第3層ナイフ形石器文化(K3)に属するナイフ形石器
(A₁類: 1~13, A₂類: 14, B類: 15・16)



第268図 K3に属するナイフ形石器(B類:17~22, C類:23~28, D類:29・30)



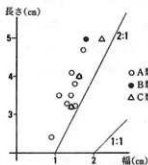
第269図 K3に属するナイフ形石器(形態不明:31・32)とブランティングチップ(33~36)

269図33~36) 9点含まれるが、全てを図示してはいない。33~35の3点はナイフ形石器の先端部が付いた資料である。

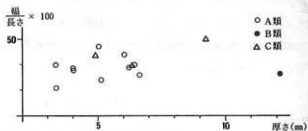
ナイフ形石器の各形態について、第2b層出土のものとの比較を中心に説明してきたが、この異同をより客観的に評価する材料として次に計測値に基づく類型A・B・Cの形態比較を試みたい。計測数が少ないために、統計値の信頼度が劣ることは否めない。

〔長・幅・厚〕 A・B類では長さは3~5cm、幅は1~2cmにほとんどが収まる(第270図)。長幅比が2:1より幅広い例は皆無である。第2b層では多くの分布が認められた長さ2~3cm、幅2~3cm、長幅比2:1~1:1といった資料はほぼ完全に脱落している。第3層でも5cm以上の例が増加するというわけではないので、全体としては第3層の方が細長く大きさの斉一性が強いと言える。

厚さは3~7mmの間に連続的に分布し、B・C類で各一点ずつやや厚い例がある(第271図)。B類はわずかに1例ではあるが、第2b層で認められた「細長いB類は厚手の例が多い」傾向と符合するものである。厚さでも、第2b層に認められた2~3mm間の資料は第3層では欠落している。



第270図 ナイフ形石器形態別長幅関係グラフ



第271図 ナイフ形石器形態別長幅比と厚さの関係グラフ

〔先端角〕 資料数はわずかであるが一応の傾向を捉えることができる(第272図)。A類

る。形状は相互に酷似するが、大きさに隔たりがある。共に使用痕と思われる微小剥落痕を多く持っている。

不明(第269図31・32) 2点ある。31は先端の鋭さからA類に入る可能性が高いが、B類の先端角に関する情報が乏しいため一応保留という意味で不明としておいた。

ブランティングチップ(第

では40~49°, C類では50~59°に分布のピークがある。B類には3点の資料が、40~69°の三つの階級に1点ずつ分布する。各類型の平均値はA:43°, B:55°, C:56°となる。資料数は少ないが、第2b層で得られた結果とほぼ対応する値を示しており、正値を得ていると考えられる。

〔刃部角〕 刃部角でも、資料数が少ないだけに、A類が30~49°の2階級に強いピークを示す以外に、これといった傾向は捉えられない(第273図)。ところが平均値を算出してみると、第2b層とほとんど同じ値を示すことがわかる。資料数は少ないが、やはり本質は把握し得ていると考えられる。

〔重量〕 A類で2g台に強いピークが現れる他、これと言った特徴はない。第2b層ではA類の最大のピークは1g台にあったが、すでに〔長・幅・厚〕の項で第3層のA類の方が大型に集中する傾向が認められており、重量でもこの傾向が反映したと解される。8gと10g台にあるB・C類は、ともに厚さのグラフでも突出した値を示していた資料である。

〔石材〕 黒曜石(9)と玉髄(22)が各1点含まれる以外は、全て頁岩である。第2b層と同様の一般的傾向として捉えられる。

第272表 ナイフ形石器の形態と素材

形態	素材	0~10°	10~20°	20~30°	30~40°	計
A	縦	10	2		1	13
	不定					
B	縦	5	1			6
	不定	1		1		2
C	縦	4	1			5
	不定					
計		20	1	3	1	26

縦:縦長剥片 不定:不定型剥片

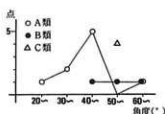
以上第3層のナイフ形石器は、基本的に第2b層と変わる所はない。わずかに形態別の量比で、第3層のA類が少ない点と〔長・幅・厚〕で触れたように第3層のナイフ形石器の方が細長く大きさの済一性が強い点で違いがある程度である。あまりにわずかの違いであるために、両者の間に明瞭な無遺物の間層がなければ、ナイフ形石器のみからは完全に同一の石器群として捉えられると考えられる。

(山下)

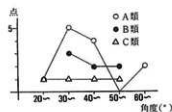
2. スクレイパー

合計5点出土している(第68表, 第274図)。第2b層の形態分類に従うと、総数こそ少ないがA・B1・B2の全種類を含んでいる。2のみ玉髄で他は全て頁岩である。

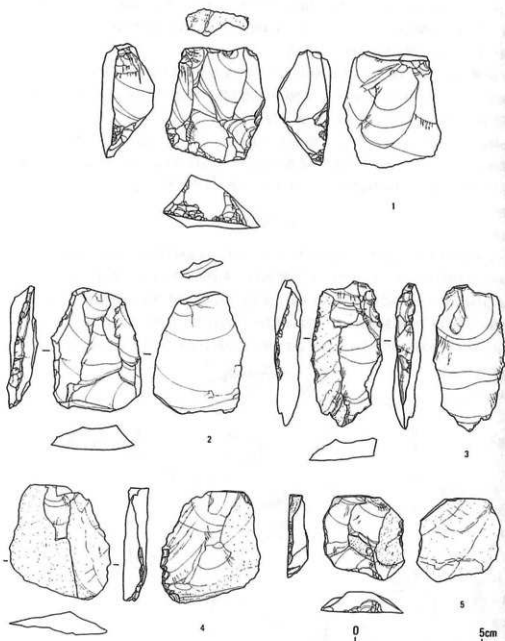
A類 1のみが本類に含まれる。自然面を打面にする厚手の剥片を素材とする。刃は、最初



第272図 ナイフ形石器形態別先端角分布グラフ



第273図 ナイフ形石器形態別刃部角分布グラフ



第274図 K3に属するスクレイパー（A類：1，B₁類：2～4，B₂類：5）

に大きな加工で概形を整え、それを補うように微細な調整を施して作り出している。刃部角は 62° である。素材中央に打面側から入る剥離面は、厚味を取るためにか刃部加工の後に施された可能性がある。

B₁類 3点含まれる(2～4)が刃部の形態に差が認められる。3と4はともに使用痕の発達したような刃部をしており、剥離痕に済一性を欠くとともに刃縁が細かな鋸歯状になって

いる。一方2は比較的大きな剥離で刃部が作り出されており、刃縁の鋸歯も大きい。素材は、2・3が整った縦長剥片であるのに対し、4は礫表を大きく残す不定形剥片である。4では、刃も背面からの加撃で腹面に作られている。

B₂類 5のみが含まれる。節理面に被れた不定形剥片を素材とする。左側縁と下縁に刃部を持ち、第2b層の第155図14と似る。左側縁の刃部は微小な剥離で、下縁はやや大きい剥離で整形されているが、いずれも加工が不揃いである。

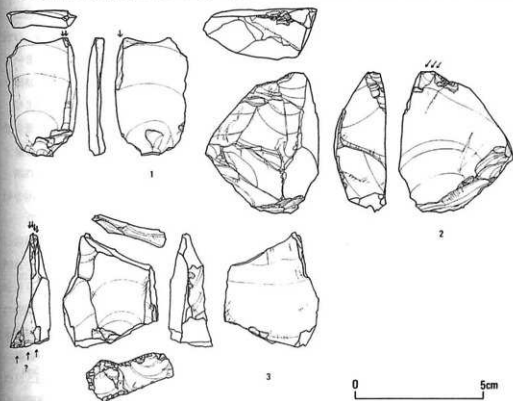
以上5点あるスクレイパーでも、定型的という印象を与えるのは1だけである。駿豆・三河・東海地方では、A Tを前後する時期の石器群はあまり知られていないが、南関東の該期の遺跡でも、少ないながら比較的安定してスクレイパーが伴うようである。(藤田)

3. 彫器

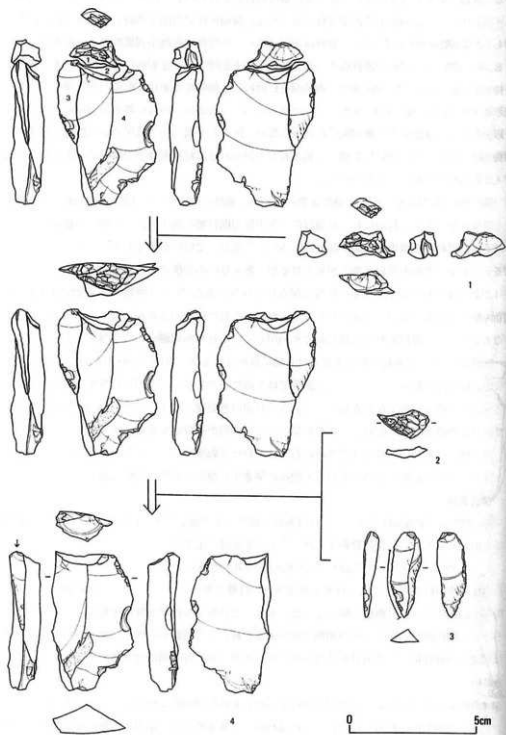
4点発見されている(第275・276図)。このうち1点は素材剥片から彫器を完成させるまでを、接合資料として見る事ができる(第276図)。個別に説明した後に接合資料に触れる。

1は薄手でやや幅の広い縦長剥片を素材とする。剥片の先端を背面から折り取り、折断面を打面に2回の彫刀面打撃を加える。刃部は素材の右側縁に作り出される。

2はある種の調整剥片と思われる厚手で大型の不定形剥片を素材とする。剥片の先端に腹面



第275図 K3に属する彫器



第276図 K3に属する彫器（接合資料）

から微細な調整を入念に施し、彫刀面打撃用の打面を作り出している。彫刀面は素材右側縁から腹面にかけて3回以上の加撃で作り出される。腹面には彫刀面に連続して、彫刀面打撃側から小さな剥離が施されているが、性格は不明である。使用痕状の微小剥落痕のようにも見える。

3は先端にかつての下設打面の一部を持ち、若干肥厚する不定形剥片を素材とする。素材の打撃部を腹面からの力で折り取り、折断面を打面にし左側縁に4条ほどの彫刀面打撃を加える。刃部は他の彫器に較べて細く鋭い。下端に残るかつての打面は、四周に細かな調整痕を持つが、背面側のものは腹面との新旧関係がわからない。図の左下隅の加工は明らかに腹面より新しい調整打であり、この調整打を切って施されたと思われる素材左側縁下の数枚の加工痕は、あるいは彫刀面の一つとも考えられる。

第276図の彫器は整った縦長剥片を素材とする。素材の打撃部を最終的には腹面からの加撃で取り去り、そこを打面にして左側縁に一条の彫刀面打撃を加える。この他、右側縁には使用によるとと思われる微小剥落痕が認められるが、上端近くで特に顕著である。また、下半部にはブランディング様の急斜な加工が見られるが、あまりに小規模である。

さて、以上の4点を第2b層の彫器に照らしてみると第275図1は明瞭に、第276図はようやくA類に含めることができようかと考えられる。これは典型的なA類に較べると大型で刃部も頑丈であるが、素材に整った縦長剥片を利用しているためか繊細な印象を与える。

第275図2・3は素材の利用方法ではB類に含められるが、刃部の作り出しはむしろA類に近い。彫刀面打撃を加えるための前調整では2点に差があるが、彫刀面打撃そのものでは共に2~3条の細かい加工が施されている。A・B類の折衷様式のようなのであるが、いずれとも大きく異なる特徴を有するため、これをC類として別の類型を設定することにする。

第3層には第2b層の様な剥片素材の石核はそれほど顕著でない。C類とB類の違いはこの様な背景とする技術体系の移り変わりと密接に関連する現象である可能性もある。

接合資料

第276図は、彫器が接合によってほぼ素材の段階にまで復原できた例である。以下に作業順序を示しておきたい。接合資料4点は、全て3F25区出土である。

①3F25A7-イ→②3F25A15→③3F25A6→④3F25A11

素材剥片の打面の部分1cm位を①背面からの打撃で取り除く。イ)続いて背面側からの連続的な小剥離によって打撃部を除去するとともに、全体をやや内湾気味に整形する。その整形面をさらに腹面側からの②一回の加撃で取り去る。続いて左側縁から③のスポールを取る。③には明瞭な刃毀れ状の小剥落痕が認められるが、スポールになる前に付されたものか否かはわからない。

接合によって知られるこの彫器製作の工程は、非常に組織的に見える。しかし他の例ではこれほど手順を踏んだものはないように思われる。基本的には、彫刀面打撃の前調整には折断と細調整加工があり、両者が任意に採用されたというのが実情であろう。(宮坂)

4. 蔽石類・台石

ここでとり扱う蔽石類には、蔽石・局部磨製礫・槌石を含んでいる。これらのうち蔽石と槌石に関しては、それぞれ用途を想定している。すなわち、蔽石は植物質食料の調理加工用具であり、槌石は石器あるいは骨角器などの製作用具であると考えている。局部磨製礫の用途については判断を保留しているが、これを含めた蔽石類全体の形態区分はすでに発表している¹⁾。

蔽石類は合計30点出土している。各類型ごとの点数と全体に占める割合を示すと、Ia類16点(53.4%)、II類1点(3.3%)、III類1点(3.3%)、IV類2点(6.7%)、VI類2点(6.7%)、VIIa類4点(13.3%)、VIIb類4点(13.3%)の内訳となる。

Ia類は最も多く5割強を占める(第277図~279図14)。自然礫の長軸に当る先端部にコックツと蔽かれた痕跡を留めるこの形態は、先土器時代における蔽石に最も多く見られるものである。使用部の蔽打の程度は様々であるが、概して軽微なものが多く。大きさ(長さ・幅・厚さ)、重量の平均値を示すと、長さ9.3cm、幅5.7cm、厚さ4.0cm、重量334gとなる。最も大きなもの(5)は長さ16.2cm、幅6.8cm、厚さ5.2cm、重量760gを測り、逆に最小のもの(8)は長さ6.4cm、幅4.4cm、厚さ2.9cm、重量117gという値を示す。石質はすべて砂岩である。

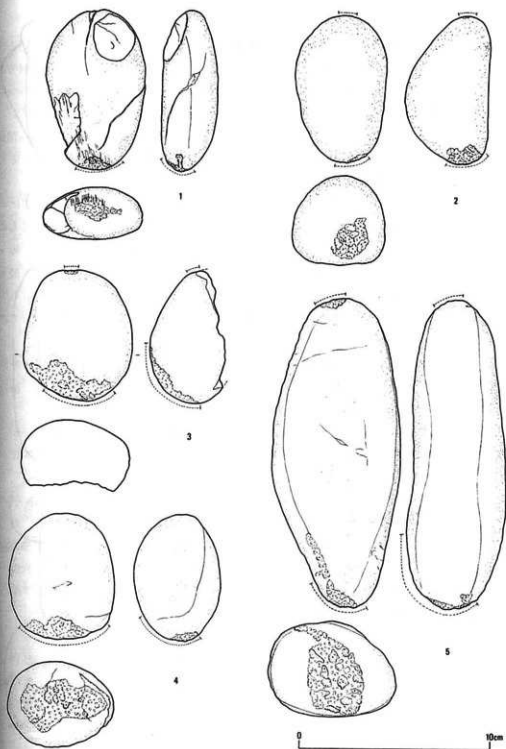
II類は1点のみである(第279図15)。長さ7.5cm、幅4.5cm、厚さ3.8cm、重量183gを測る。楕円形の礫の両先端部から側縁部にまで及ぶあばた状の蔽打痕が顕著に認められる。蔽打の程度は強く、带状に面がとれている使用部は全周をまわる。粒子の粗い砂岩製である。

III類も1点のみである(第279図17)。扁平な正円に近い礫を用い、長さ9cm、幅8.1cm、厚さ1.9cm、重量178gである。軽微な蔽打痕が側縁部にのみ残るが、平坦な面を形成するほど使用頻度は高くない。石材は硬質の砂岩である。

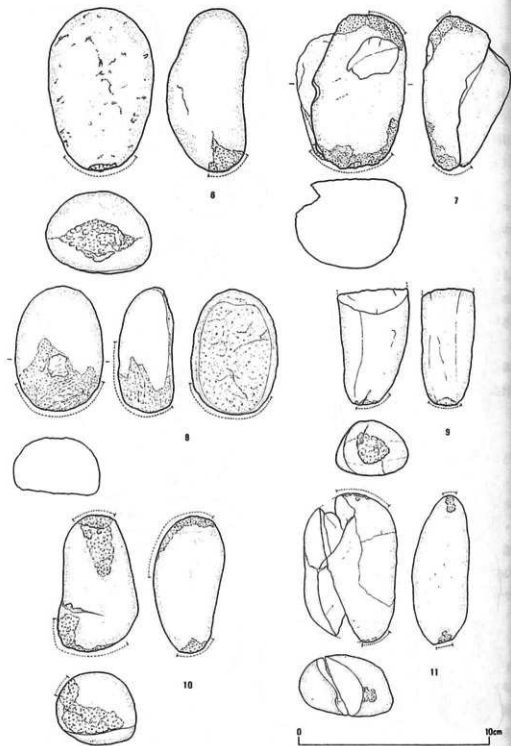
IV類は2点出土している(第279図16、第280図20)。16は長さ5.5cm、幅4.3cm、厚さ3.8cm、重量112gを測る。卵形の自然礫を素材とし、側縁全周にまわる带状の蔽打部と、表・裏面に蔽打による明確な凹み痕を有する資料である。側縁部もさることながら、両先端部の蔽打は特に激しい。蔽打による明確な凹みを持つものはこれ1点のみである。石材はやや軟質の砂岩を用いる。20は長さ9.9cm、幅6.1cm、厚さ4.1cm、重量235gである。不整形な扁平礫の両先端部と、一先端部から表面中央部にかけて細かな蔽打痕が観察される。石材は砂岩。

V類は出土していない。

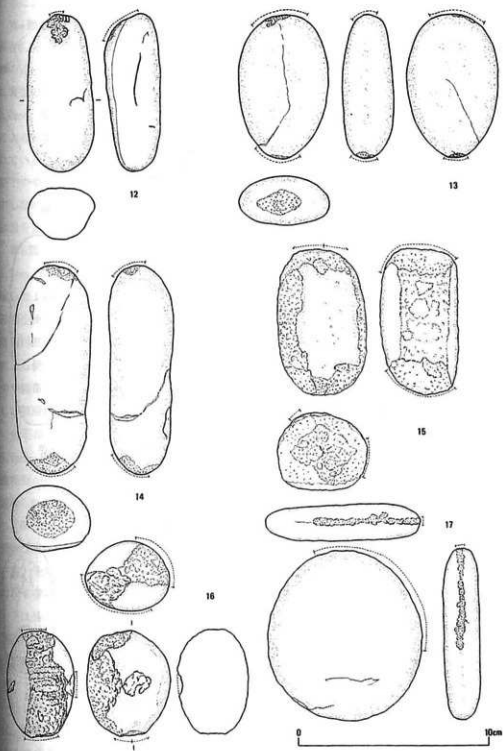
VI類は2点である(第280図18・19)。18は長さ9.3cm、幅7.1cm、厚さ2.6cm、重量217gである。扁平な礫の両先端部に磨れ面が観察される。磨れ面の状態は滑らかであるが、蔽打も併用されて若干荒れている。磨れ面は両先端部に表裏1面ずつの計2面で形成されている。面の大きさには差があり、磨れの程度はどの面も軽微なものと言える。石材は砂岩。19は長さ9.3cm、幅7.6cm、厚さ2.7cm、重量188gを測る。2点の接合資料で薄く半分と剥離している。平面的な磨れ面が片方先端部に2面認められる。もう一方の先端部には磨れ面は形成されず、



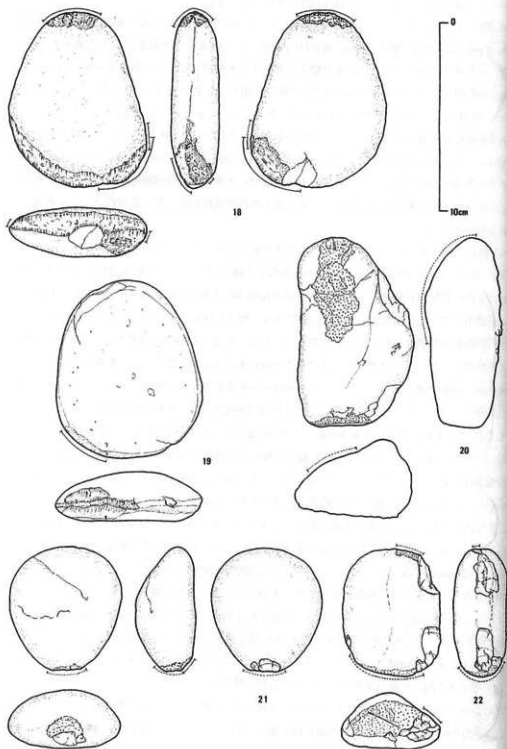
第277図 K3に属する礫石類(1a類)



第278圖 K3に属する蔽石類（Ia類）



第279圖 K3に属する燧石類 (Ia類:12~14, II類:15, III類:17, IV類:16)



第280圖 K3に關する敲石類 (IV類: 20, VI類: 18・19, VIIa類: 21・22)

打撃による割れ痕が存在する。石材は凝灰岩を使っている。

VIIa類は4点である。この内の3点を図化している(第280図21・22、第281図24)。21は長さ6.5cm、幅5.8cm、厚さ3.1cm、重量148gを測る。やや扁平で中央部にふくらみをもつ円礫の、一先端部のみあばた状の敲打痕と打撃による剥離痕を留める。剥離痕・敲打痕はともに軽度の使用を示す。きめの細かい硬質の砂岩を用いる。22は長さ6.7cm、幅5.1cm、厚さ2.9cm、重量120gである。角のない石輪形の自然礫を用い、両先端部から側縁部にかけて打撃による剥離痕が観察される。なお、一方の先端部にはあばた状の敲打痕もかなり明瞭に形成されている。砂岩を石材とする。24は長さ10.1cm、幅5.2cm、厚さ5.7cm、重量405gである。大型でやや先細りの礫を用い、この先細りの先端部分に大きな階段状剥離痕が認められる。礫の中心部に向う強い衝撃力によるものである、その他の部位にはまったく使用痕はない。硬質の砂岩を素材とする。

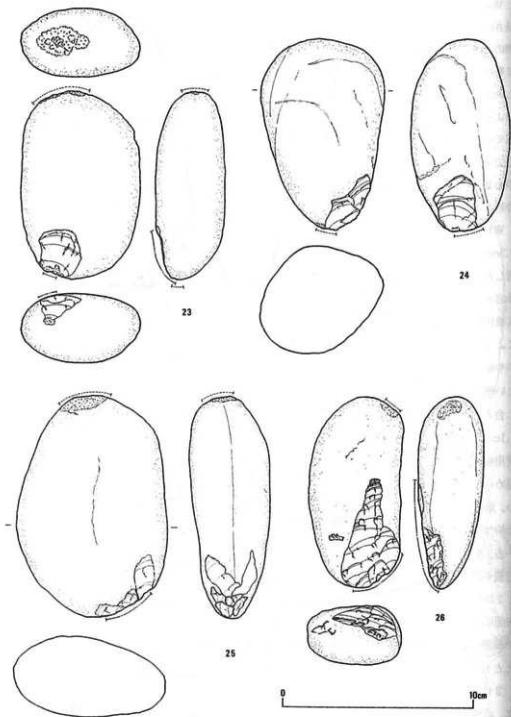
VIIb類も4点である。うち3点を図示した(第281図23・25・26)。23は長さ9.9cm、幅6.2cm、厚さ3.7cm、重量318gを測る。25と類似した礫を用い、片方の先端部のみ大きく剥離した1面の打撃痕が残存している。反対側の先端部には微かな敲打痕が認められる。硬質の砂岩を使用している。25は長さ11.7cm、幅7.9cm、厚さ4.4cm、重量494gを測る。大型で扁平な楕円形の礫の片側先端部に、互いに切り合った5～6面の剥離痕が観察される。激しい打撃による使用痕である。石材は砂岩。26は長さ10cm、幅4.9cm、厚さ3.4cm、重量213gである。やや細長い自然の礫を素材に、ごく軽微なあばた状の敲打痕のみで形成される一先端部と、激しい階段状剥離痕を生じているもう一方の先端部が観察される。石材は砂岩である。

台石は合計4点を数える(第282図1～第283図4)。1は長さ21.8cm、幅9.7cm、厚さ6.1cm、重量1.84kgである。細長くやや扁平な礫の表・裏面の中央部と片側先端部にそれぞれ使用痕が残存している。前者の使用痕はコッコツと連続して敲かれたものであり、あばた状に認められる。表面における敲打痕の範囲は裏面と比較して広く、およそ5×10cmの広がりをもつ。敲打痕はほぼ均質で、特に強く敲打してある部分は認められない。使用程度は軽いもので、面的な凹みもない。裏面の敲打痕は2ヶ所にまとまっており、いずれも使用状態は軽微である。一方、先端部は強く敲打された様で、打撃による階段状の剥離痕が認められる。あばた状の敲打痕も併存しているので、頻繁に使用されたものであろう。石材は砂岩。

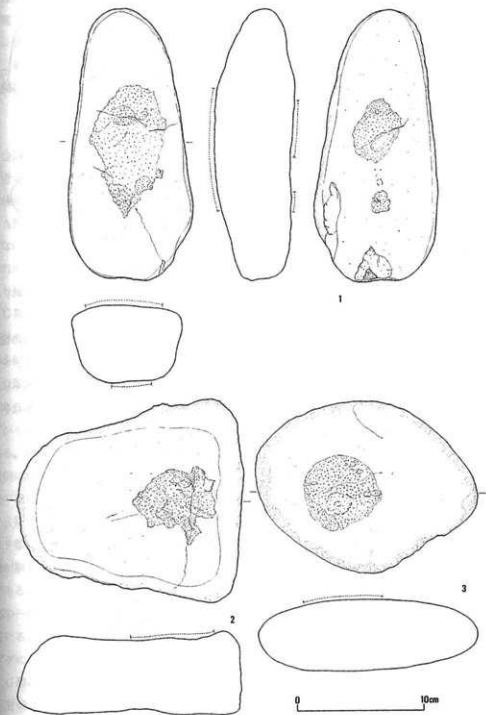
2は長さ18cm、幅15.9cm、厚さ6.5cm、重量3kgを測る。扁平な隅丸四辺形の礫を素材に、表面のみコッコツと敲打されたあばた状の潰れ痕が観察される。敲打部分は直径7cmくらいの範囲にまとまる。使用程度は弱いものであるが、部分的に強弱の差があり、あばた状の部分とともに小さく凹んだ部分も併存している。石材は砂岩。

3は長さ17.6cm、幅13.6cm、厚さ5.7cm、重量2.3kgである。扁平な自然礫の表面はほぼ中央に、直径約6cmの範囲であばた状の敲打痕が認められる。コッコツと連続して細かく敲かれたものであるが、使用程度は極めて軽微なものと言える。石材は砂岩。

4は長さ22cm、幅12.5cm、厚さ5.4cm、重量2.5kgを測る。扁平な楕円形の礫を用い、表面に



第281圖 K3に属する戴石類 (VIa類: 24, VIb類: 23・25・26)



第282図 K3に属する台石

のみあばた状の敲打痕を形成している。敲打部は礫の長軸方向に沿って中央に細長く形成されている。約3～5cmの幅で約16cmの長さに亘る範囲である。敲打によりほぼ円形に剥落した部分を除き、使用程度は軽微なものと言える。石材は砂岩。

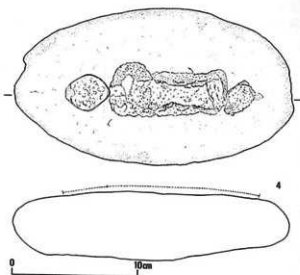
(黒坪)

5. 石斧

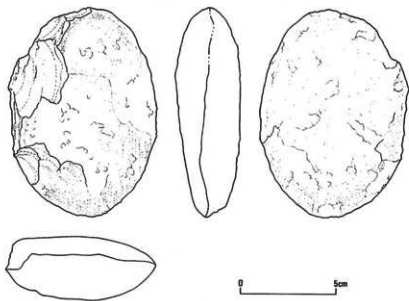
1点のみ出土している(第284図)。平面形はほぼ楕円形を呈する。長さ109cm, 幅76cm, 厚さ34mm, 重さ326g, 刃部角 88° を測る。調整剥

離は不明瞭で、加工方法はほとんどわからない。扁平で楕円形の礫の側縁部に稜が形成され、刃部周辺の作りもそれらしいために、石斧に分類されている。粗粒の砂岩製である。

背面左側縁上半部には、本例では最も明瞭な剥離による加工痕が数枚認められる。背面の他の部分は広く自然面に被れているように見える。しかしこの自然面は整った面にはならず、やや不自然とも思える。少なくとも5面以上の小さな切面で構成されている。観察上はそれらに差を見出すことはできないが、刃部周辺の作りを恣意的に見るならば、中央以下の何面かは研



第283図 K3に属する台石



第284図 K3に属する石斧

磨によって整形されている可能性もある。

腹面は一枚の大きな剥離面のようにも見えるが、曲率が大きく、微小な凸凹が著しいために剥離方向はわからない。腹面右側縁下部の刃部のそばでは、特に大きな曲面の変化が認められる。腹面の加工は、微小な凸凹の激しさから、たとえ一度は剥離という工程が関与したとしても、最終的には敲打による仕上げの可能性も考えられる。

側縁部を形成する稜線は、背面図の上端と左側縁の一部でのみ不明瞭になる。

6. RF

合計25点発見されている(第68表, 第285~287図)。第2b層の伝統と同じ延長線上にあると考えられるので、基本的にその分類に従って記述する。そこに連なっていないものについては後述する。

A類は3点出土している(第285図1~3)。いずれも断片であるため、素材の形状はわからない。1・2はあまりに小さい断片である。1mm以下で急角度の加工が連続している。3は、折れ面から加工が施されている。

B類は未発見である。

C類は4点ある(第285図4~7)。第2b層と異なり、挟りが並列するような例はない。素材も統一性を欠くようである。また、挟りが全体として第2b層より小規模である。4は加工部を除く全ての刃縁に、著しい刃毀れが認められる。

D類は5点ある(第285図8~12)。C類がそうであったように、やはり大きな加工が並列することは少ない。また、加工の大きさでも第2b層より若干優るようである。素材は、ほとんどが不定形剥片である。11は節理面で剥がれた剥片を素材とするが、背・腹面に三枚の加工がある。背面最終剥離が、腹面の一枚の加工を大きく削っている。10も類似した資料である。腹面に施された二枚の大きな加工の一枚を、背面に施された一枚が切っている。ともにD類本来の在り方とは異なっているが、個々の加工そのものの類似性から本類に含めた。

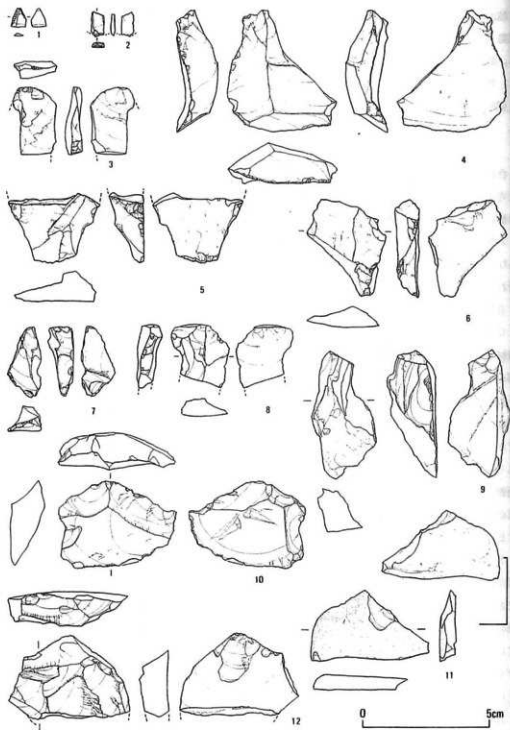
E類は未発見である。

F類には2点を含めた(第286図13・14)。第2b層での分類の規準に沿うと言うよりも、本類が削器に近縁であった点を考慮し、そのバリエーションの中で理解し得る可能性のあるものである。素材はいずれも不定形剥片である。13は背面から90°近い角度で加工されており、刃部の一部を除き折損している。14は剥片剥離工程最初の、背面全面に礫表を残す剥片を利用している。刃部は背腹両面から加工されており、刃を正面から見ると交互剥離されたようにジグザグになっている。

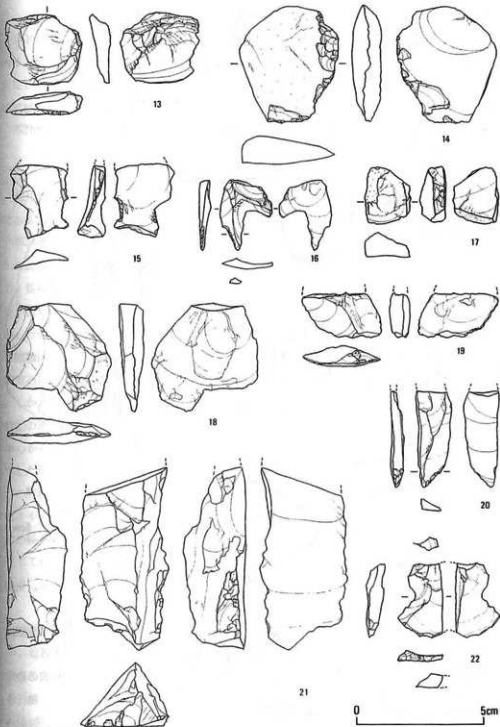
G類に属するものはない。

H類は3点である(第286図15~17)。微細な加工を鉤括弧のように施している。ブランティンクに近い例と、少し緩やかなものがある。素材はともにかなり歪んでいる。

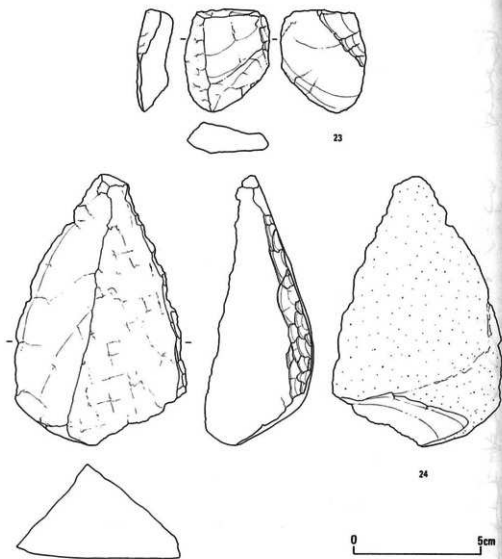
他の8点は独自の刃部を持つが、3点について説明する。



第285圖 K3に属するRF (A類: 1~3, C類: 4~7, D類: 8~12)



第286図 K3に属するRF (F類:13・14, H類:15~17, 形態不明:18~22)



第287図 K3に属するRF（形態不明）

20は整った縦長剥片の半欠したものを利用し、先端の両側縁に急角度の調整を加える。先端の尖鋭度に若干問題は残るが、錐の可能性が考えられる。

21は大型で厚手の剥片を利用し、その右側縁下半と下縁に調整を加える。調整部の平面観はジグザグで、一見するとC類に似るが、あまりにも規則性を欠き素材にも隔たりがある。

24は礫群構成礫の一つを素材としているようである。赤化して火ハネを伴う中粒砂岩の破片を利用している。割れ面と礫表の接する縁辺に礫表側からの調整を施し、幅10～15mm、奥行き5～7mmの剥離を連続的に行っている。素材・刃部ともにあまりに特異であるために、発掘時の損傷の可能性も検討してみたが否定的であった。

7. UF

UFは合計215点発見されている(第288図1～第295図62)。中央区に属するのは68点である。ほとんどが、わずかに微小剥落痕を残す資料である。第288図1は、これらの中で最も安定した剥落痕が連続する例で、RFに分類することもできる。調整剥離としては若干規則性に欠けるかという印象からUFに含めた。

第2b層に較べると、素材に縦長の整ったものが多いように思われる。

8. 剥片・碎片

剥片は679点、碎片は338点発見されている。中央区に属するのはそれぞれ178点・245点である。

第2b層と同じ処置をしてみると(第296図)、剥片について大きさの第一の中心は長さ2～3.5cm、幅1.5～3.5cmにあるが、長さ4～5cm、幅3～5cmにもまとまりのあることがわかる。長幅比は、やはり1:1よりわずかに縦長の傾向にある。一方、剥片背面の30%以上を礫表が占める例での長幅関係では、例数が少ないためにほとんど傾向を把握することはできないが、わずかに長さ4～5cm、幅3～4cmに多く分布するように思える。これらから導き出される結論は第2b層の場合と全く同じで、第3層でも長さ3～4cm、幅2.5～4cm位の剥片が目的物であったと推定することができようか。

しかし第3層の場合、第一の中心に較べた第二の中心がかなり集中度が高く、一方で礫表が背面の30%以上を占める剥片の第二の中心周辺への集中度はあまり強くない。このため第二の中心から、さらに大きい剥片側への連続も不整合な感が強い。すなわち、目的剥片の搬出を想定した部分以外でも、長・幅5cm以上になると急に資料数が減少するように思われる。この一つの解釈として、第2b層で前提とした大きなものから小さなものへの資料の漸増に無理があり、長さ4～5cm、幅3～5cm周辺の第二の中心は目的剥片の範囲にも入るのかもしれない。このため長・幅5cm前後では調整剥片と目的剥片が重複することにより、資料の急増という現象が生じている可能性がある。

9. 石核

石核は、合計41点である(第68表、第297図1～第300図21)。II種接合資料が1組あるため、資料数は42点である。このうち中央区に含まれるのは、わずかに9点に留まる。しかもそのうち2点が母岩である。このように資料数が少ないため、ここでは石核全体について第2b層の石核の分類に従って述べることにする。

A₁類は、わずかに1点のみである(第297図1)。単設打面で剥片剥離作業は正・背面で行われており、両側面には礫表を残す。打面・頭部調整は施さない。

A₂類が最も多く、合計16点である(第297図2～第298図10)。打面を頻繁に移動しながら